岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第282集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（平成９年度）

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（平成９年度）

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫だと言われております。この先人達が遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。また一方では、幹線道路網の整備など、社会資本を充実させていくことも行政上の重要な施策であります。このため、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和ということも、今日的な課題であります。

こうした見地から、財団法人岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターを創設以来、岩手県教育委員会文化課による発掘調査事業の調整と指導のもとに、道路建設などに関連して止むを得ず消滅していく遺跡についての発掘調査を実施し、発掘調査報告書として記録保存する措置をとってまいりました。今年度は、県内10市11町4村にわたる56遺跡の調査を実施しました。

調査した遺跡の時代は、縄文時代から近世までにわたっております。今年度の調査で注目されたものには、平泉町志羅山遺跡第66次調査で検出した池跡と推定される遺構があります。ここからは轡、馬骨、笹塔婆などの祭祀に関わる数々の遺物が出土しましたが、なかでも象嵌による鳳凰文を施した轡は他に例を見ない貴重な資料であります。

この発掘調査略報は、調査報告書の発刊に先立って、今年度に調査された56遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くの方々に活用され、埋蔵文化財へのご理解を一層深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご援助とご協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会やご教示を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝を申し上げます。

平成10年3月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　船　越　昭　治

目　次

平成９年度の調査結果について……２

Ⅰ．建設省・農水省関係

（１）志羅山遺跡第66次調査（平泉町）……５
（２）細田遺跡（一関市）……９
（３）川岸場Ⅱ遺跡（前沢町）……13
（４）長渡遺跡（玉山村）……17
（５）小長根Ⅱ遺跡（玉山村）……19
（６）衣関遺跡第５次調査（平泉町）……21
（７）萱中Ⅲ遺跡（大船渡市）……23
（８）房の沢Ⅳ遺跡（山田町）……27
（９）沢田１遺跡（山田町）……31
（10）屋前Ⅱ遺跡（胆沢町）……35
（11）オミ坂遺跡（盛岡市）……37

Ⅱ．公団関係

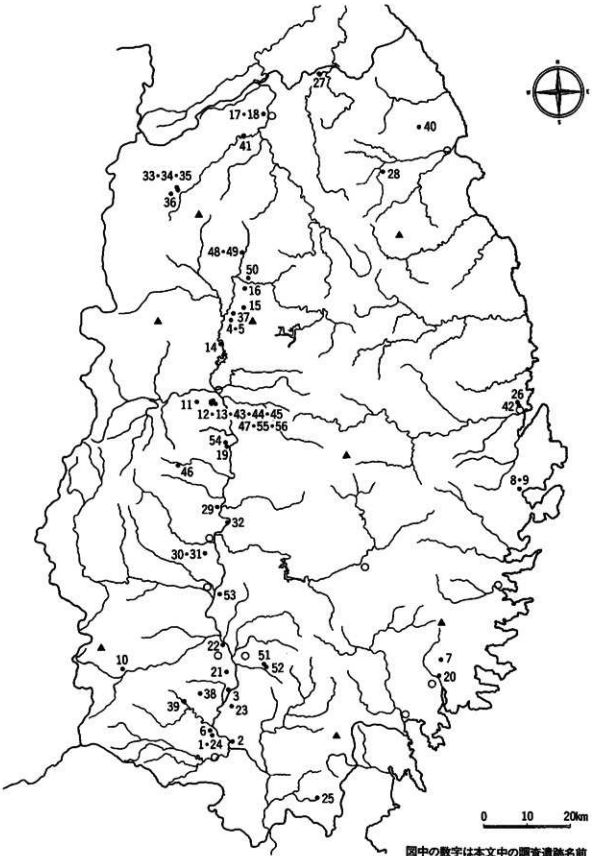
（12）本宮熊堂Ｂ遺跡第５次調査（盛岡市）……43
（13）台太郎遺跡第16次調査（盛岡市）……47
（14）野沢Ⅳ遺跡（滝沢村）……49
（15）芦名沢Ⅰ遺跡（玉山村）……53
（16）秋浦Ⅰ遺跡（岩手町）……57
（17）下村遺跡（二戸市）……61
（18）上村遺跡（二戸市）……65

Ⅲ．岩手県・市関係

（19）稲村Ⅱ遺跡（紫波町）……71
（20）長谷堂貝塚（大船渡市）……73
（21）北野Ⅳ遺跡（水沢市）……77
（22）佐野原遺跡（水沢市）……81
（23）西館遺跡（前沢町）……85
（24）志羅山遺跡第67次調査（平泉町）……89
（25）上野平遺跡（藤沢町）……93
（26）小平Ⅰ遺跡（宮古市）……97
（27）上尾田の館跡（軽米町）……101
（28）大平遺跡（山形村）……105
（29）小森林館跡（石鳥谷町）……109
（30）唐戸崎遺跡（北上市）……113
（31）唐戸崎Ⅱ遺跡（北上市）……115
（32）庫理遺跡（花巻市）……117
（33）谷地田Ⅰ遺跡（安代町）……121
（34）有矢野館跡（安代町）……125
（35）有矢野遺跡（安代町）……127
（36）横間Ⅱ遺跡（安代町）……129
（37）芋田Ⅱ遺跡（玉山村）……133
（38）板子沢遺跡（胆沢町）……137
（39）上寺田遺跡（衣川村）……141
（40）大戸Ⅰ遺跡（久慈市）……145
（41）大向上平遺跡（二戸市）……149
（42）山口館跡（宮古市）……153
（43）本宮熊堂Ｂ遺跡第４次調査（盛岡市）……157
（44）鬼柳Ａ遺跡第４次調査（盛岡市）……161
（45）台太郎遺跡第15次調査（盛岡市）……165

Ⅳ．本報告

（46）山王海館跡（紫波町）……171
（47）野古Ａ遺跡第10次調査（盛岡市）……183
（48）五日市遺跡（岩手町）……189
（49）土峰Ⅲ遺跡（岩手町）……189
（50）芦田内Ⅳ遺跡（岩手町）……195
（51）荒神社前遺跡（江刺市）……201
（52）大平古館跡（江刺市）……205
（53）館Ⅰ遺跡（北上市）……209
（54）北部山遺跡（矢巾町）……229
（55）稲荷遺跡第３次調査（盛岡市）……237
（56）野古Ａ遺跡第９次調査（盛岡市）……243



平成９年度調査遺跡位置

図中の数字は本文中の調査遺跡名前に付した（　）内の数字と一致する

平成９年度の調査結果について

平成９年度の調査は、当初 59 遺跡、159,928 m² でスタートしたが、最終的には 56 遺跡、156,513 m² を調査して終了した。３遺跡の減は委託者の設計変更等が原因である。当センターの調査遺跡数は平均すると年間 30 件程度で、今年の 56 遺跡は過去最大の件数となった。遺跡数増加の主な原因は、東北新幹線盛岡・八戸間建設、ウルグアイラウンド関連農業基盤整備、盛岡市盛南開発事業などである。

調査は、10 市 11 町４村に及び、検出された遺構の概数は縄文時代住居跡 236 棟、陥し穴 51 基、土壙約 700 基、弥生時代住居跡約 10 棟、古代竪穴住居跡約 198 棟、中世竪穴建物跡 30 棟等である。遺物の概数は、縄文土器大コンテナ約 1,000 箱、土師器・須恵器 80 箱、石器約 10,000 点等にのぼっている。

特徴的な遺跡を紹介すると、縄文時代では久慈市大芦Ⅰ遺跡（40）、安代町横間Ⅱ遺跡（36）、前沢町川岸場Ⅱ遺跡（３）、藤沢町上野平遺跡（25）で良好な遺物包含層を調査し、４遺跡で 700 箱以上の土器量となり、全遺跡の半数以上を占めている。山田町沢田Ⅰ遺跡（９）では前期の竪穴住居跡が大型住居を含めて 46 棟検出された。

弥生時代の遺構は二戸市上村遺跡（18）、玉山村長渡遺跡（４）、大船渡市長谷堂貝塚（20）、沢田Ⅰ遺跡で 20 数棟の住居跡が検出されているが、いずれも晩期終末から弥生時代初頭にかけての時期で、現段階では所属時代を明瞭にするには至っていない。

奈良・平安時代で特筆すべきは山田町厚の沢Ⅳ遺跡（８）の古墳群で、２年間の調査で周溝を巡らすもの 32 基、石組みを有するもの２基、土壙のみのもの７基が検出された。また、馬の墓壙４基も該期としては県内で初めて検出された。付近には製鉄・鍛冶遺構も確認されており三陸沿岸における古代の集落、墳墓、製鉄など大きな問題を提示することとなった。このほかに集落遺跡として、玉山村芋田Ⅱ遺跡（37）で 25 棟、盛岡市台太郎遺跡（45）で 67 棟の住居跡が検出された。台太郎遺跡は志波城跡に隣接しておりその関連性を明らかにすることが、今後の課題の一つである。花巻市庫理遺跡（32）の平安時代の住居からは土師器（器種不明）に鶴・波状・水草状の文様が線刻されたものが発見されている。

奥州藤原氏関連遺跡は昭和 63 年以降調査を実施しているが、平泉町志羅山遺跡第 66 次調査（１）で池跡と推定される遺構から鳳凰文を象嵌した轡、馬骨、笹塔婆など、祭祀に関連する貴重な遺構・遺物が発見された。特に象嵌を施した轡の類例は京都市法住寺殿跡から出土しているのみで、他に例を見ない資料である。

中世の遺構では、軽米町上尾田の館跡（27）、安代町谷池田Ⅰ遺跡（33）から計 28 棟の竪穴建物跡が、台太郎遺跡からは橋脚遺構を伴う環濠と共に７棟の掘立柱建物跡が検出されている。

以上、今年度の調査の概要を記したが、元より本略報は調査の概要をまとめたものであり、詳細については次年度以降刊行される本報告書を参考にしていただければ幸いである。なお、今年度は遺構・遺物の少ない遺跡もあり、これらの 11 遺跡についてはこの略報をもって本報告とする。

（調査課長　小田野哲憲）

Ⅰ．建設省・農水省関係

(1) 志羅山遺跡第 66 次調査

所　在　地	西磐井郡平泉町平泉字志羅山 20－6 ほか
委　託　者	建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
事　業　名	国道 4 号太田川橋梁改築
発掘調査期間	平成 9 年 4 月 7 日～8 月 31 日
調査対象面積	2,633 m²
発掘調査面積	1,891 m²
遺跡番号・略号	ＮＥ 76－1088・ＳＹ－97－66
調 査 担 当 者	羽柴直人・高橋実央・朝倉雄大
協　力　機　関	平泉町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 一関

1．遺跡の立地

志羅山遺跡は平泉市街の南側に位置している。今回の調査区は国道 4 号線の西側と東側に沿った南北に細長い形をしている。調査前は大部分が宅地として使用されていた。調査区の中程には西から東に流れる埋没沢が走っており、その埋没沢の南北にそれぞれ標高が高くなっていく地形である。

2．調査の概要

志羅山遺跡はこれまでも平泉町教育委員会と埋蔵文化財センターによって、様々な地点で緊急発掘調査がおこなわれており、今回の調査は第 66 次調査になる。今回の調査は太田川橋改修工事（一関遊水地事業の一環）に伴う国道 4 号線の改修工事にかかわるものであるため、調査は国道 4 号線の東西両脇を細長く掘る形であった。調査区の幅が狭い部分では 2 m ほどの部分もあり、面の調査というよりは線の調査に近いものであった。

＜掘立柱建物＞　柱穴が 440 個検出されており、多数の掘立柱建物が存在していたと考えられる。多くは 12 世紀に属すると考えられるが、所属時期が不明なものが多い。調査区の幅が狭いため建物のプランを知ることが不可能な場合が多く、今後まだ検討の余地が残されている建物が多い。

＜竪穴住居跡＞　1 棟検出されている。第 46 次調査で、東側半分が検出されている住居である。出土した土師器、須恵器から、9 世紀後半から 10 世紀前半の住居と考えられる。かまどは東側に造られている。

＜井戸状遺構＞　井戸状遺構は 12 世紀に属する可能性が高いものが 3 基検出されている。いずれも井戸枠を持たない素掘りの井戸である。漆器椀、青白磁の梅瓶などが出土した。

＜土坑＞　土坑は 36 基検出されている。多くの土坑は出土遺物から 12 世紀代の可能性が高い。だが今回の調査ではトイレ状土坑といわれる有機質分が多い特徴的な埋土の土坑は検出されていない。

＜溝＞　溝跡は 22 条検出されている。現在の道路で分断されていて、本来は同じ溝と考えられるものも、それぞれを 1 条に数えた。都市を区画すると思われる大規模な溝、道路の側溝と考えられる溝などがある。

＜塀跡＞　12 世紀に属すると思われる塀跡が 5 条検出されている。溝を掘った後に板状の木を打ち込んで塀を構築している。このうち 3 条は南北に走る道路側溝に沿って造られている。

＜特殊遺構＞　皿状のくぼみに焼土、炭化物が埋土中に多量にみられる遺構が、埋没沢を整地した上で13基集中して検出された。底面、側面がわずかに焼けているものもみられた。用途は不明である。

＜沢跡＞　調査区西側中央付近で2条の沢跡が検出された。調査区東側ではそれらが合流して1条になっている。現在の国道4号線の下で2つの沢が合流していると推測される。これらの沢は下部に十和田ａ火山灰が混入しており、12世紀段階では埋没がかなり進んだ状態であった。そのくぼみには人為的に盛られた整地層がみられ、その上に遺構が構築されていた。整地が行なわれたのは12世紀後半のことと思われる。

＜池跡＞　上記の埋没沢中に造成された池が2基ある。1基は沢の整地層と同じ土が底面、壁面に貼られており、沢跡の整地の際に同時に造成された池である。南北の幅約13ｍ、東西は検出された分が約6ｍでなお西側に続く。造成は12世紀の後半、廃絶は12世紀末頃と考えられる。現在のところ池跡の隣接地からは大規模な建物跡が検出されておらず、有力者の邸宅や、寺院に伴う池とは考え難い。よって本池は、都市全体の中での位置付けを考える必要があるかもしれない。この池跡からは多量の遺物が出土しているが、祭祀関係の遺物と思われるものもある。もう一つは整地層を掘りぬく形で池が造成されている。13世紀後半～14世紀前半の柔器系陶器の片口鉢片が出土しており、その時代の造成と思われる。

＜道路状遺構＞　第46次調査の検出の道路側溝がさらに北側につながることが確認された。第46次調査からさらに約50ｍ道路を延長することができる。道路側溝はややルーズな方位を示すが、路面全体としてはほぼ真北に走っていると推定される。この東側の道路側溝は、都市を区画すると思われる東西に走る大規模な溝にぶつかる形で終わっている。そしてさらに、この東西に走る大規模な溝の北側にも、しばらく間をおいて道路側溝と思われる溝が検出されている。この溝は約15°北から東に傾いており、大規模な東西の区画溝より北では道路の角度が変わっている可能性がある。だがこの溝に対になる溝は検出されておらず（調査区外に存在すると思われる。）、現在確実に道路側溝と断定することはできない。

＜出土遺物＞　9～10世紀の遺物には土師器、須恵器がある。12世紀に属する遺物はかわらけ（手づくね、ろくろ）、国産陶器（常滑、渥美、須恵器系）、中国産磁器（白磁、青磁、青白磁）、瓦（丸、平）、轡、矢尻、釘、銭（天聖元宝）、箸、陽物、笹塔婆、ものさし、へら状製品、漆器椀、漆器皿、鳴り鏑？、馬骨、馬歯がある。中世（13～16世紀）の遺物には柔器系陶器片口鉢、中国産染付、曲物、漆器皿、ざる、笹塔婆がある。近世の遺物は磁器（肥前産、東北産）、陶器（瀬戸・美濃産、大堀相馬産、在地産）、挽き臼がある。注目される遺物として、轡と笹塔婆についてふれる。轡は池跡から出土しており12世紀のものと考えられる。鍍板の部分には鳳凰の文様が描かれている。轡の本体は鉄で作られており、鍍板、引手の部分に象嵌、鍍金により文様が描きだされている。象嵌、鍍金に用いられた金属は金、銀、銅の存在が確認されている。製作技法については正式の分析結果を待たなければならないが、鉄地に文様の輪郭を刻み、その部分に銅を嵌め込み、さらにその文様部分を金、銀で鍍金する「鉄地銅象嵌金銀鍍金」と称される技法と考えられる。

笹塔婆の定義は難しいが、小型の細長い板状の頭部を山形、五輪塔状に刻んだ形態に仏の名や種字を書いたものである。用途は様々であるが、供養に用いられることが多いようである。

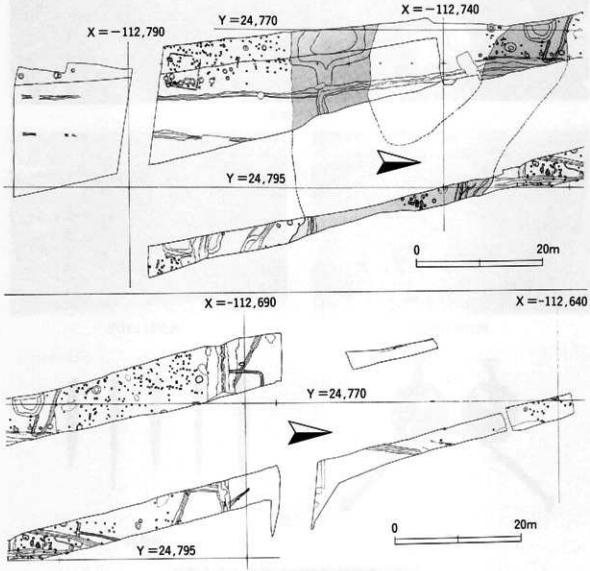
12世紀の池跡から笹塔婆は47本出土している。その多くは池跡の南側で出土しており、明らかな集中がみられる。書かれた文字は風化が著しく判読が難しいが「南无大吉祥天女」というように仏の名の上に「南无」を冠したものが多い。「无（む）」の字は「無」と同じ意味の字である。「南无大吉祥天女」の他に「南无毘沙門天」、「南无歓喜天」、「南无如意輪観音」、「南无無量寿如来」、「南无十四日普賢菩薩」、「南无十八日観世音菩薩」がある。これらの仏の功徳をみると、現世利益に関連するものが多い。普通、笹塔婆は供養、または逆修に用いられることが多いといわれるのであるが、この池跡から出土した笹塔婆は現世利益を願う行為の

過程で使用された可能性が高いようである。また「南无十四日普賢菩薩」、「南无十八日観世音菩薩」は他の笹塔婆より形も大きく、他とは異なった行為に用いられた可能性がある。この仏の上に記された日にちは「三十日秘仏」という考え方に基づいているようである。

3．まとめ

今回の調査で特筆すべき成果は、池跡から笹塔婆や樗など特異な遺物が集中して出土したことである。笹塔婆の出土点数47本はこれまで平泉遺跡群で出土した笹塔婆の総計より多い数である。また樗はその技法の精緻な点も注目される。出土状況から、この樗は、祭祀に関連した行為に使用されたと考えられる。よってこれらの笹塔婆、樗は12世紀の平泉人の精神生活を考える上で重要な資料になり得る。

また道路状遺構、都市を区画する溝の検出は奥州藤原氏の時代の「都市平泉」の構造を明らかにする作業に大きく寄与できる成果である。

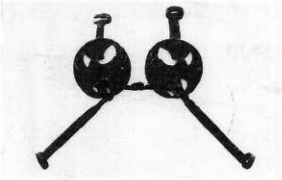


志羅山遺跡第66次調査遺構配置図

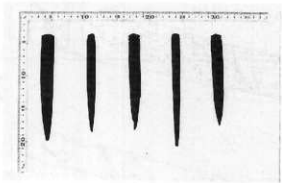
調査区遠景

掘立柱建物跡

馬骨出土状況



轡



笹塔婆

志羅山遺跡第66次検出遺構・出土遺物

(2) 細田遺跡

所　在　地　一関市舞川字細田 107－1ほか
委　託　者　建設省東北地方建設局
　　岩手工事事務所
事　業　名　一関避水地事業第3避水地管理用通路
発掘調査期間　平成9年6月17日～6月24日
　　平成9年9月29日～11月27日
調査対象面積　800 m²
発掘調査面積　800 m²
遺跡番号・略号　ＮＥ87－0170・ＨＤ－97
調査担当者　晴山雅光・菊池貴広
　　平澤里香・熊谷佳恵
協力機関　一関市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 一関

1．遺跡の立地

本遺跡は、一関駅から北北東に約5.0 km、東北新幹線の線路から東へ1.0 kmに位置し、北上川の左岸に形成発達した、緩やかな河岸段丘に立地している。北には観音山を望み、北東の山間部周辺には舞草神社があり、また舞草鍛冶跡があると言われている地域でもある。

調査区周辺の標高は20 m前後で北上川に近く、北上川の水位とあまり差がないことから、古くから支流の氾濫や増水があり、常に湧き水のある地域であったと思われる。また昭和33年頃の圃場整備により、大きく地形が改変されており、現在、周辺一帯は水田地帯となっている。

2．調査の概要

今回の調査では、旧河道部（流れの緩やかな沢であったと思われる）に堆積した遺物包含層が検出され、多くの遺物が出土した。遺物包含層の土量は、厚く堆積した所の面積が80 m²、最深1.2 mの厚さで、およそ48 m³と、地山斜面に30 cm幅で50 m²に堆積する包含層が15 m³の計63 m³であった。遺物包含層は、6層に細分され、黒色土と黒褐色土がほぼ交互に堆積しており、上から3～4番目の層に土器等の遺物が多くみられ、焼土と思われるブロックも、この層から検出された。

また、調査区内の古地形をみると、現用道路に沿って南東側は急激に落ち込み、砂礫などの堆積状況から旧河道部は北東から南西に流れていた沢で、北西側は道路によって地山が削られており、緩やかな斜面が続いていたと思われる。

＜検出遺構＞　調査区内からは今回、遺構らしい遺構はほとんど検出されなかった。

唯一、小さな柱穴状のピットが、トレンチにかかって2基検出されたが、位置からみて調査区外に伸びる旧沢跡への足場の杭ではないかと思われる。また、このピットは形成層位や埋土から、遺物包含層出土の遺物と同時代とみられる。

＜出土遺物＞　出土した遺物は、表土から遺物包含層まで、数時代の遺物が出土している。量的には、遺物包含層からの出土が大部分を占める。また、出土した遺物の中で木製品のほとんどが、遺物包含層に接して

いる沢跡と思われる砂礫層からの出土で、時代の特定については慎重な検討が必要である。

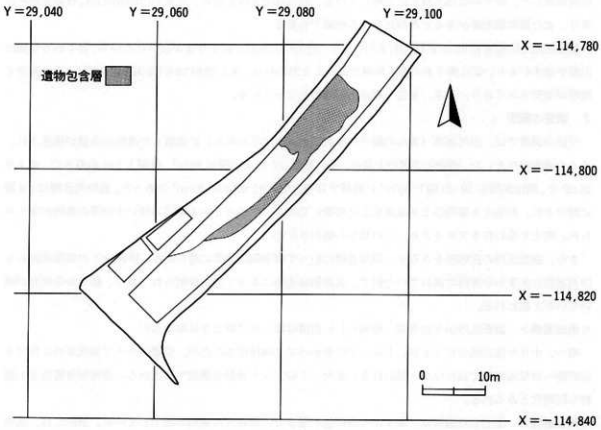
土器の特徴としては、縄文時代晩期から弥生時代の土器片（高台や脚付の浅鉢、深鉢、甕、壺など）が出土しており、総量は大のコンテナで35箱である。また石器としては、磨敲器類、磨製石斧片、石鏃、石錐、剝片石器などが180点余り出土しているが、これらの多くは破片である。その他、土偶などの土製品が22点、石製品が2点、骨の破片が10点、貝が1点、木の実など種子類が9点、出土している。遺物包含層以外からは、坏や碗と思われる土師器片が25点、甕や壺と思われる須恵器片が20点、陶磁器片が17点、時代判定の難しい木製品が7点、金属製品が2点出土している。

3．まとめ

今回の調査で、本遺跡は遺物の種類から、縄文時代晩期から弥生時代、平安時代、近現代の各時代にわたって人々の活動の痕跡を残す遺跡であることがわかった。遺構らしい遺構は検出されなかったが遺物の種類や量などから縄文時代晩期から弥生時代の生活跡を色濃く残す遺跡である。また、土師器や須恵器の時代と思われる遺構も確認することができなかった。

調査区周辺では、北上川の氾濫や度重なる支流の流れの変化により複雑な堆積を成しているが、木製品の出土した地点や層位などからみて、他の地点から流されてきたという可能性も考えられる。

最後に、遺物包含層から出土した遺物については、細かく層ごとに取り上げており、わずかながら今後、この時代の土器編年の確認資料になるものか検討しながら整理を進めていきたい。



細田遺跡遺構配置図

調査区遠景（南西側上空から）

調査区遠景（北東側から）

調査区遠景（南側から）

出土状況

出土状況

細田遺跡検出遺構・出土遺物 1

出土状況（土器）

出土状況（土器）

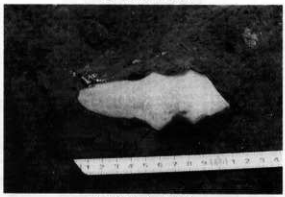
出土状況（土器）

出土状況（土偶・土器）

出土状況（土偶）

出土状況（土偶）

出土状況（土偶）

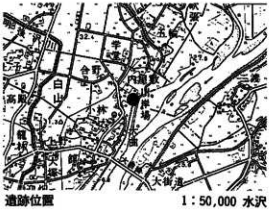


出土状況（石製品）

細田遺跡出土遺物 2

(3) 川岸場(かわぎしば)II遺跡

所在地	胆沢郡前沢町白山字川岸場35－2ほか
委託者	建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
事業名	北上川上流改修事業・白山地区築堤
発掘調査期間	平成9年7月7日～11月21日
調査対象面積	2,000 m²
発掘調査面積	2,000 m²
遺跡番号・略号	NE 47－0190・KKII－97
調査担当者	小山内透・七田芳直
協力機関	前沢町教育委員会



遺跡位置　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

川岸場II遺跡は東日本旅客鉄道前沢駅の北東約4.5 km、北上川の右岸に位置し、北上川縦谷平野に立地する。遺跡の標高は30 m前後、北上川との比高は約6 mで、現況は宅地と畑地である。本遺跡南西には昭和32年に発掘調査の行われた川岸場I遺跡が隣接している。

2．調査の概要

本遺跡は古くから縄文(晩期)・弥生時代の遺物が表採され、同期の良好な遺物包蔵地、また近世(17 C～)から現代まで続いた環濠屋敷(通称大室屋敷)、そして近世伊達藩のお蔵場跡として周知されているものである。調査は昨年度からの継続調査として行われ、今回の調査地は、お蔵場の中央を南北に縦断する範囲であり、調査区全域が縄文・弥生時代の遺物包蔵地となっていた。

今年度の調査で検出された遺構は、縄文時代では竪穴住居跡4棟、土坑20基、埋設土器10基、配石2基、遺物包蔵地(全域)、近世～近代では掘立柱建物跡6棟、竪穴状遺構1棟、土坑墓1基、堀跡1条、溝4条、道路状遺構？1カ所、畑跡？3カ所、焼土遺構5基、柱穴約250基、肥溜跡？1基、整地跡(全域)などである。

(1) 縄文時代の遺構

＜竪穴住居跡＞　竪穴住居跡の規模は、近世の削平整地により1棟は不明であるが、ほかは直径約3～4 mの円形で3棟は石組炉、1棟は地床炉である。

＜土坑＞　土坑は調査区北側の埋設土器と重複する範囲に分布する。平面形は円形と楕円形があり、円形は直径約1 m、楕円形は長軸約1.2 m、短軸約0.7 m前後である。

＜埋設土器＞　埋設土器は調査区北東部に集中して分布する。埋設状況は正立と倒立があるが、2基を除き近世の削平整地により破壊されて遺存状態は悪い。倒立の3基からはベンガラが検出され、数基の埋土中には骨片とおぼしきものが含まれていた。

＜遺物包含層＞　調査区のほぼ全域約1,400 m²の範囲が、厚さ30 cm～1 mの遺物包含層であったが、調査区北東部の約200 m²を除き、近世の整地により御蔵場内での移動があったものと思われる。

(2) 近世～近代の遺構

＜掘立柱建物跡＞ 建物跡は、掘立柱建物跡3棟・布掘り掘立柱建物跡3棟が検出された。4棟は桁行東西方向、2棟は南北方向である。桁・梁行とも柱間約1mの半間単位で柱穴が確認され、梁行は5～6m、桁行南北方向の1棟は全長約25mを測るが、他は調査区外にかかるため全容は不明である。確認できた範囲ではいずれも20m以上と推定される。

＜竪穴状遺構＞ 竪穴状遺構としたものは一辺約4mの方形で柱穴は検出されなかった。北側には隣接して肥溜跡と思われる径60cmほどの桶が埋設されていた。

＜堰跡・道路状遺構＞ 調査区南側で東西方向に走る薬研状の堰1条を検出した。規模は長さ約13m、開口部幅約2m、底部幅約0.5mを測る。位置関係から御蔵場の南側を区画するものと推定される。また、同方向西側には自然の沢跡が連続し、この南側緩斜面には斜面と直行して根太痕と思われる幅約20cm前後の浅い溝が等間隔で多数並ぶことから出入り口の道路状遺構と思われる。

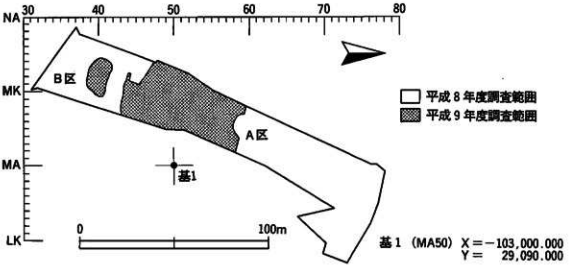
(3) 出土遺物

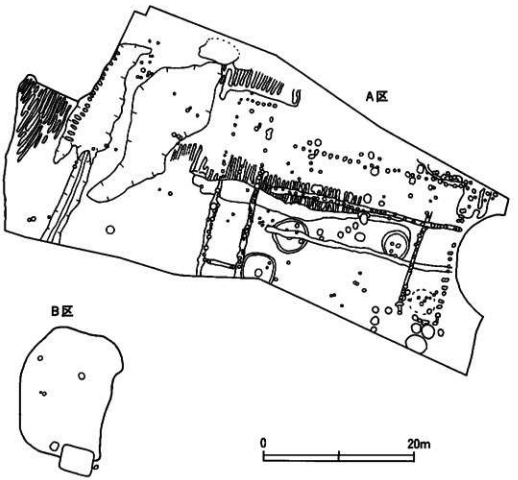
遺物は縄文（晩期中葉）～弥生時代初頭、古代、近世（17～19C）のものが出土した。縄文・弥生時代では土器が大コンテナ207箱、石器が中コンテナ27箱（尖頭器・石鏃・石匙・石錐・石篦・打製石斧・磨製石斧・環状石斧・磨石・凹石・敲石・石皿・砥石・石錘・蜂の巣石・コア・フレークなど）、土製品が小コンテナ1箱（土偶・円盤状・動物・土版・スタンプ状）、石製品が小コンテナ2箱（石剣・石棒・独鈷石・岩版・円盤状・小玉・管玉・勾玉など）である。近世では陶磁器類が大コンテナ2箱、金属製品（釘・古銭など）が34点、古代では摩滅した土師器と須恵器がわずかに出土した。

3．まとめ

今年度の調査は、昨年度の調査により確認された縄文時代晩期中葉から弥生時代初頭の遺物包含層と同期の遺構精査を主目的として行った。調査の結果、縄文時代晩期では集落の存在と墓域が確認されたが、弥生時代と特定できる遺構は検出されなかった。また調査区のほぼ全域を占めた遺物包含層は近世から近代にわたる度重なる造成整地により、高いところ（調査区東側）を削平し、低いところ（調査区西側）に埋め立てがなされており、プライマリーな状態で遺存している範囲は全体の約15％であることが判明した。さらに近世整地層の下位では伊達藩のお蔵跡と思われるより古い時期の掘立柱建物跡が検出され、今後の検討が必要ではあるが、御蔵場の構造のいくぶんかが把握できるものと思われる。

最後に2カ年にわたる調査では、近世伊達藩大肝入の屋敷構えとお蔵場の構造の一端ではあるが、県内では調査例の少ない近世民家等の事例と、縄文（晩期）～弥生時代の集落についての資料が追加されるという成果を収めることができたと思われる。





川岸場Ⅱ遺跡遺構配置図

遺跡全景

道路状遺構（近世）

竪穴住居跡（縄文晩期）

埋設土器

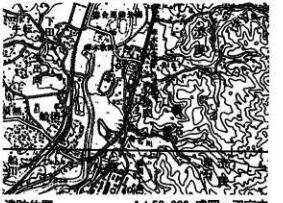
布掘り掘立柱建物跡

掘立柱建物跡

川岸場Ⅱ遺跡検出遺構

(4) 長渡（ながわたり）遺跡

所在地	岩手郡玉山村大字渋民字長渡72－2ほか
委託者	建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
事業名	国道4号改築渋民バイパス建設
発掘調査期間	平成9年10月1日～31日
調査対象面積	800 m²
発掘調査面積	800 m²
遺跡番号・略号	KE 67－2174・NW－97
調査担当者	岩渕　計・下田隆衛
協力機関	玉山村教育委員会



遺跡位置　1：50,000 盛岡・沼宮内

1．遺跡の立地

長渡遺跡は、東日本旅客鉄道渋民駅から北東に約1.8 km、石川啄木記念館の南東約500 mに位置し、北上川東岸に広がる丘陵の西側緩斜面に立地する。調査が開始されるまでは水田であり、調査区の南側と西側には沢が流れる。調査区は、水田造成時の削平・盛土によって、傾斜地が平坦地に改変されている。

2．調査の概要

長渡遺跡は平成8年度に調査を開始し、今年度は昨年度の調査区の北側を継続して調査した。検出した遺構は竪穴状遺構、土坑、焼土、柱穴状ピット、現代の排水路と思われる溝である。

＜竪穴状遺構＞　調査区北東部で1棟検出した。遺構の北側が、現代の排水路と思われる溝に切られていたため、南側半分しか確認できなかったが、概ね規模は3 m×3 mで、平面形は円形を呈する。柱穴を2基検出したが、炉は確認できなかった。時期は、出土遺物から縄文時代晩期と思われる。

＜土坑＞　調査区全体で5基検出した。そのうち調査区中央部の西側から検出した3基のうち、2基は平面形が円形を呈し、断面形がフラスコ形の土坑である。出土遺物から縄文時代後期と考えられる。もう1基の土坑からは炭化材が出土しており、確認層位から、近世以降現代のものと思われる。その他の土坑については遺物もなく不明な点が多い。

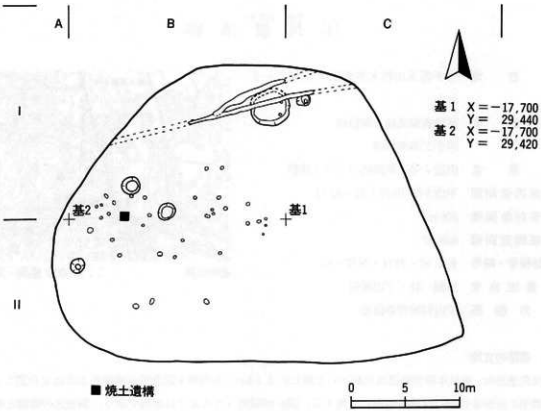
＜焼土遺構＞　調査区中央部の西側から1基検出した。時期は明らかではないが、検出状況を同じくして、焼土を囲むように柱穴状ピットが4基確認されており、柱穴状ピットとの関係が考えられる。

＜柱穴状ピット＞　前述の、焼土と係わると考えられる柱穴状ピット4基を含む、計37基を検出したが建物跡と確認できる柱穴列はなく、遺物もないことから時期は不明である。

＜出土遺物＞　縄文土器が小コンテナで1箱出土しており、縄文時代後・晩期の土器が主体である。石器は23点出土し、石鏃、不定形石器、磨製石斧などである。その他に土師器片、須恵器片が少量出土した。

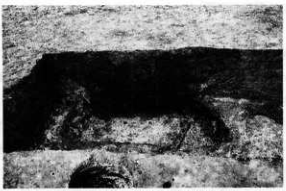
3．まとめ

今回の調査では、縄文時代後期、晩期から現代までの、人々の生活の痕跡が断片的に確認できた。今後は昨年度の調査の結果を含めて検討し、遺跡の性格を明らかにしていきたい。



長渡遺跡遺構配置図

竪穴状遺構（平面）



フラスコ形土坑（断面）

1

2

3

4

5

6

1～4　縄文土器
5　石鏃
6　磨製石斧

長渡遺跡検出遺構・出土遺物

(5) 小長根II遺跡

所　在　地　岩手郡玉山村大字渋民字越戸65－3
　　　　　　ほか
委　託　者　建設省東北地方局
　　　　　　岩手工事事務所
事　業　名　国道4号改築渋民バイパス建設
発掘調査期間　平成9年9月1日～30日
調査対象面積　900 m²
発掘調査面積　900 m²
遺跡番号・略号　KE 57－2142・KNNII－97
調査担当者　岩渕　計・下田隆衛
協力機関　玉山村教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 盛岡・沼宮内

1．遺跡の立地

小長根II遺跡は、東日本旅客鉄道渋民駅から北東に約1.75 km、石川啄木記念館の南東約450 m に位置し、北上川東岸の丘陵部の、南側に広がる斜面に立地している。標高は203～208 m である。遺跡の東側には沢が流れており、南側は水田に隣接している。調査開始前は畑、それ以前は水田として利用されており、戦後水田を造成した際に削平、盛土を行っており、原地形がかなり改変されていた。

2．調査の概要

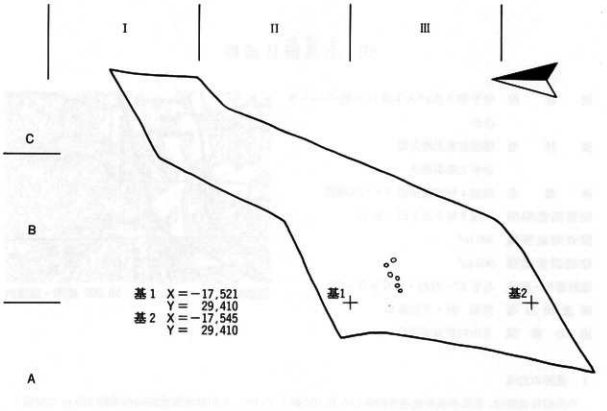
調査区北部は、水田造成時の削平がはげしく、遺構、遺物とも確認できなかった。また水田に隣接している調査区南部は、水田の造成以前には湿地であったらしく、遺構は確認できなかった。今回の調査では、調査区中央部から柱穴状ピットを6基検出した。

＜柱穴状ピット＞　上部が造成層のため、地山まで掘り下げて検出した。竪穴住居跡や掘立柱建物跡と確認できるものはなく、時代を特定できる遺物は出土していない。

＜出土遺物＞　主に調査区中央部から、縄文土器片、土師器片、須恵器片が小コンテナ1箱、石器が12点出土している。縄文土器は、早期、後期、晩期のものが出土しているが、早期中葉の土器が主体である。石器は、不定形な剝片石器と敲石が1点出土した。調査区南部からは坏、甕と思われる土師器片が出土しており、墨書がある土師器片も出土している。

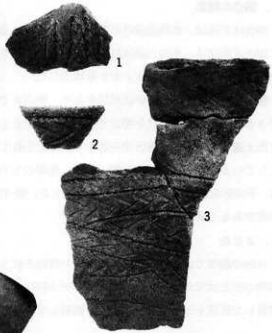
3．まとめ

今回の調査では、人々が生活していた痕跡を窺うことのできる、明確な遺構は確認できなかった。しかし遺物の出土状況から、縄文時代および平安時代の遺構が周辺に存在した可能性が考えられる。なお、今年度隣接した区域を玉山村教育委員会が調査しており、その結果と比較しながら、遺跡の性格等を検討したい。



小長根II遺跡遺構配置図

調査区中央部

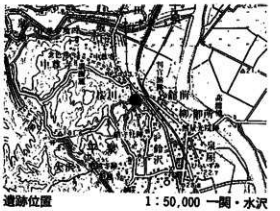


1～3 縄文土器（早期）
4 土師器甕
5 土師器坏

小長根II遺跡検出遺構・出土遺物

(6) 衣関（ころもぜき）遺跡第5次調査

所　在　地	西磐井郡平泉町平泉字衣関3－9ほか
委　託　者	建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
事　業　名	国道4号交通安全対策
発掘調査期間	平成9年9月1日～10月20日
調査対象面積	310 m²
発掘調査面積	310 m²
遺跡番号・略号	ＮＥ76－0051・ＫＳ97－5
調査担当者	羽柴直人・高橋実央
協力機関	平泉町教育委員会



遺跡位置

1．遺跡の立地

衣関遺跡は平泉市街のほぼ中央部に位置している。今回の調査区は、国道4号線の西側に沿った部分である。標高40mほどの高地の部分と、北側の高地下の部分の2カ所に調査区が分かれる。高地の部分は国道4号線により現在分断されているが、本来は東側の高館方面までつながる地形であった。また北側の高地の下部分は高地を削りとることによって作られた地形であり、本来は高地から続く傾斜地であったと推測される。

2．調査の概要

衣関遺跡の調査は今回が5次目である。高地部分では石敷遺構と塀跡、土坑、溝跡、若干の柱穴状の遺構が検出された。遺物は12世紀代のものがコンテナ2箱分出土した。北側では、削平のため遺構、遺物は全く検出されなかった。

＜石敷遺構＞　礫を敷いた遺構が検出されている。幅約90cmで径20cmほどの礫を敷いた部分とその両側に検出された分で（なお調査区外に続く）80cmほどの粘土と小礫の混じった部分が続く。長さは3m20cm分検出された。この石敷の軸は概ね東西の軸に沿っている。この石敷遺構の粘土混じり部分から、手づくねかわらけが出土しており12世紀後半の構築と考えられる。用途、性質は判断できない。

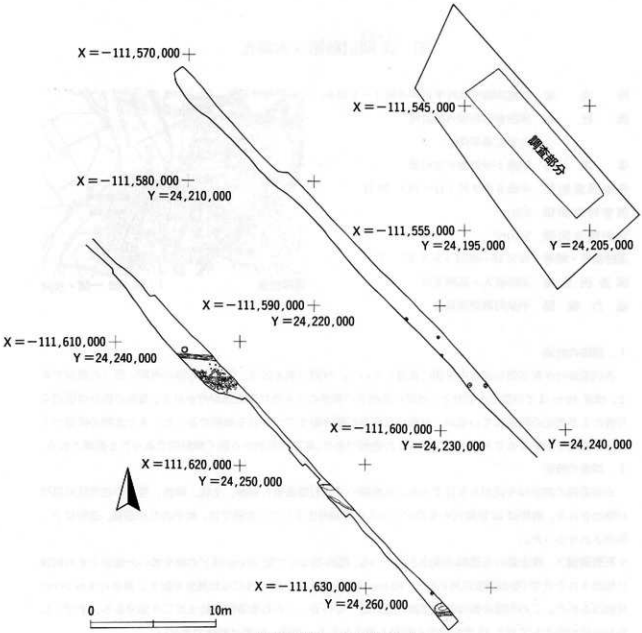
＜塀跡＞　石敷き遺構から約1m離れて検出された。軸方向は石敷遺構と同じであり、同時存在と考えられる。溝を掘りその中に板を立て土を埋めた構造である。

＜その他＞　土坑は1基、溝跡は2条検出されている。いずれも用途は不明である。

＜出土遺物＞　12世紀に属する遺物はコンテナで約2箱出土した。かわらけ（手づくね、ろくろ）、国産陶器（常滑、渥美、須恵器系）、中国産磁器（白磁）がある。

3．まとめ

今回の調査で特筆すべき成果は、石敷遺構とそれと同じ軸方向を持つ塀跡の検出である。石敷遺構はこれまでの平泉遺跡群の調査でもあまり類例のない遺構である。石敷遺構の用途は通路や、建物を区画する施設などの用途が考えられる。また石敷遺構と平行する形で塀跡が検出され、石敷遺構が塀に囲まれた施設であったことがわかる。



衣関遺跡第５次遺構配置図

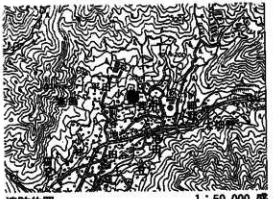
調査区近景

石敷遺構

衣関遺跡第５次検出遺構

(7) 萱中(かやなか)Ⅲ遺跡

所在地	大船渡市立根町字萱中163番ほか
委託者	建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
事業名	三陸縦貫自動車道・大船渡三陸道路建設
発掘調査期間	平成9年6月18日～10月3日
調査対象面積	4,600 m²
発掘調査面積	4,600 m²
遺跡番号・略号	NF 29－1103・KNⅢ－97
調査担当者	水戸口俊子・鈴木　聡
協力機関	大船渡市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 盛

1．遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道大船渡線盛駅より北東に約4.8 kmの位置にあり、北に毛無森山（785 m）東に今出山（756 m）、南には立根川が東から西へ流れている。遺跡は毛無森山の南側緩斜面上に立地し、西に立根川に注ぐ沢が流れている。標高は106 m～112mである。

周辺に野尻Ⅰ遺跡、萱中Ⅰ遺跡、細野遺跡、沼田遺跡などがある。野尻Ⅱ遺跡では昨年度大船渡市教育委員会により発掘調査が行われ、縄文時代後・晩期の遺構が検出されており、本遺跡出土遺物と同時期と思われる遺物も出土している。

本調査区の南側は、調査前に宅地であったところで、宅地にするために傾斜を削平・造成した後利用しており、現在は家屋の基礎が残っている。また調査区内の西側を生活用道路が南北に走っており、道路の東側についてはすでに旧地権者によって重機で土が削り取られており、一部土を盛っていたところもあった。それ以外の部分については現状は山林であり、かつては畑として利用していたところもあったようである。

2．調査の概要

本調査区で検出された遺構は、竪穴住居跡が2棟、竪穴状遺構が2棟、土坑が16基、焼土が2基、柱穴状ピットが9基であるが、これらは西側の調査区を縦断する市道の周辺に限られており、調査区東側については遺構もなく、遺物もほとんど出土していない。検出された遺構の時期は、遺物が伴った竪穴住居跡1棟は縄文時代晩期と考えられる。その他は遺物がほとんど伴わないため断定はできないが、周辺から出土した遺物から縄文時代晩期～弥生時代初頭にかけてと思われる。

＜竪穴住居跡＞　竪穴住居跡は2棟とも石囲炉を伴い、1棟は炉の中から土器が出土した。道路を挟んでそれぞれ1棟ずつ検出されたが、壁などの残存状態はあまり良くない。

道路東側から検出された住居跡は、径2.8 mの円形を呈しており、壁高は最大でも15 cmしか残っていない。炉は径50 cm程で10～20 cm大の礫を使用している。炉の中に焼土とともに土器が2個体重なった状態で出土した。そのうち上に重なっていた土器は高台部分だけで逆さの状態での出土で、埋土状況からあとから入り込んだものと考えられる。下に入っていた土器は、深鉢の胴下部～底部部分で大変もろい。上半分は

すでになかった。この遺構に伴う柱穴状ピットは検出されなかった。時期としては縄文時代晩期のものと思われる。

もう1棟の住居跡は、炉の径が75cmで25cm～50cm大の角礫の石囲炉を伴っている。壁は北側の一部しか残っていないが、前述の住居跡より規模は大きくなりそうである。柱穴状ピットは炉から1m程離れて2基検出されているが、いずれも浅くまた推定される住居の規模に比べ多少小さく感じられる。遺物は土器破片だけの出土である。

＜竪穴状遺構＞　2棟検出された。検出区域は道路西側で竪穴住居跡周辺である。北側の壁だけはっきりしている状態で、平面形全てを検出できなかった。炉石らしき礫が散らばっているが炉としての形になっておらず、また焼土や炭化物も検出されていない。土器は破片状態で検出面や埋土に割合多く出土しているが床直の遺物はない。柱穴状ピットが数基検出されているが、いずれも小ピットであり住居と断定できるような配置にもなっていない。重複している遺構の新旧関係については土層傾斜との関係から不明である。推定の規模は径3m前後である。

＜土坑＞　土坑は16基検出している。検出状況は、植林や重機による削平など攪乱の影響ではっきりしないものもある。焼土を精査している過程で検出することができた土坑が最も大きく、長径1m40cm、短径80cmの楕円形を呈している。深さは約50cmである。遺物は埋土中位より晩期の深鉢の破片が出土している。

＜焼土＞　検出された2基のうち1基は、検出面よりも15cm程度深いところでレンズ状に強く熱を受けた様子が見られた。また検出面や土の中に炉石のような礫が数個入り込んでおり炉の一部かとも思われ、土層堆積状態や焼土周辺の地山を観察したが、住居跡らしき形跡を見いだすには至らなかった。

＜柱穴状ピット＞　9基検出している。ただし掘立柱建物跡になるような配列は認められない。

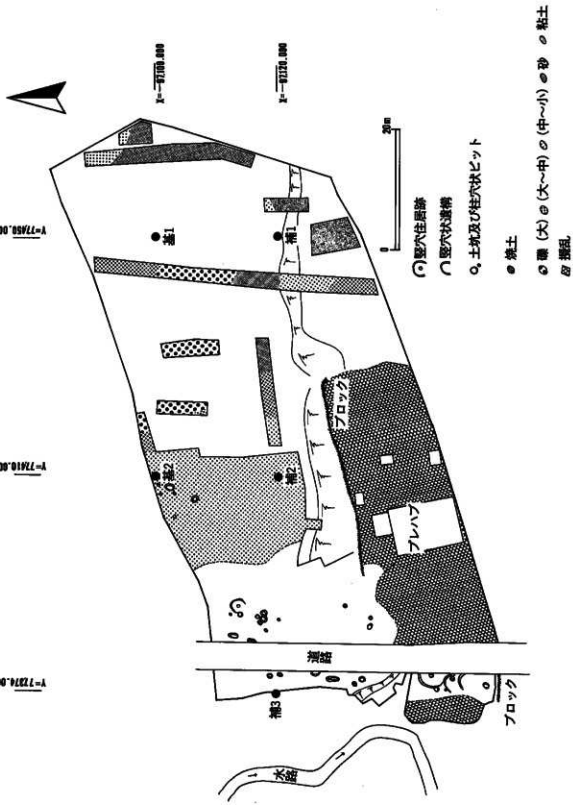
＜遺物＞　土器は大コンテナで7箱、石器が中1箱である。土器は縄文時代晩期～弥生時代で晩期後葉が中心である。完形品1点の他は一括で取り上げることができるようなものはなく、遺構の検出された範囲に散在している状態であった。遺構内出土土器は住居跡内の炉からの出土土器のみで、他は直接遺構に伴うような出土の仕方はしていない。土製品は土偶の破片が9点出土しているが、土器と同様遺構外からの出土である。石器は、石鏃、石斧等が少なく擦り石が多い。但し土器の出土数に対して石器の出土数は比較的少なく感じられる。

3．まとめ

今回の調査では、残存状態があまり良くなかったが、石囲炉を伴う竪穴住居跡2棟と竪穴状遺構2棟が検出された。このことからこの地が縄文時代晩期～弥生時代の集落跡であったことがわかった。

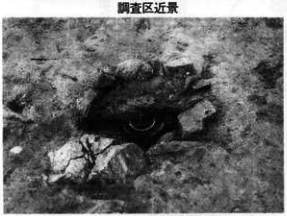
調査区東側においては数回にわたる土石流などで巨礫が拡がっているのに対し、中央から西側については礫も比較的小さく生活の場として利用しやすかったと思われる。

また調査区外の北側については土坑、集石らしきものがみられ、北側にさらに集落跡が拡がっていると思われる。


X=−87109.000
X=−87114.000
Y=77456.000
Y=77410.000
Y=77374.000
第1
第2
第3
第4
第5
第6
第7
第8
第9
第10
第11
第12
第13
第14
第15
第16
第17
第18
第19
第20
第21
第22
第23
第24
第25
第26
第27
第28
第29
第30
第31
第32
第33
第34
第35
第36
第37
第38
第39
第40

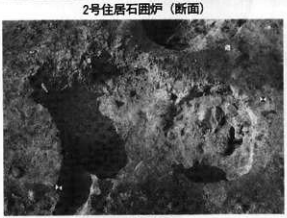
調査区近景

2号竪穴住居完掘



2号住居石囲炉（断面）

1号住居石囲炉



土坑完掘

焼土断面

礫出土状況

遺物出土状況

壹中Ⅲ遺跡検出遺構・出土遺物

(8) 房の沢IV遺跡

所　在　地　下閉伊郡山田町山田14地割103－1
委　託　者　建設省東北地方建設局
　　三陸国道工事事務所
事　業　名　三陸縦貫自動車道・山田道路建設
発掘調査期間　平成9年4月7日～7月4日
調査対象面積　2,300 m²
発掘調査面積　2,300 m²
遺跡番号・略号　LG 94－0050・BSIV－97
調査担当者　星　雅之・佐藤良和
協　力　機　関　山田町教育委員会

遺跡位置　1：50,000 大槌

1．遺跡の立地

房の沢IV遺跡はJR山田線陸中山田駅の北方約2 km付近に位置し、山田北小学校の北西側にある尾根の頂部から、尾根づたいに南側の山腹及び東側斜面にかけて広がっている。標高は35～57 mで、眼下には山田湾が眺望できる。遺跡の一部は山田北小学校の用地整備に伴い、V字状に切られている。遺跡の東側には縄文時代から古代の集落跡である沢田I遺跡が、その更に東には縄文時代から古代の住居跡や製鉄炉などが検出された沢田II遺跡がある。

2．調査の概要

今回の調査は調査区最南端の傾斜の緩やかなところと、尾根の頂部に近い北部の比較的平坦なところ、この平坦面の東側斜面である。検出した遺構は、北部平坦面と東側斜面から縄文時代の竪穴住居4棟、北部平坦面と南調査区からは古墳が12基、炭窯を5基検出している。また、北部平坦面では土壙墓が6基、東側斜面では縄文時代の陥し穴3基、馬骨が出土した土壙4基を検出している。これらの他は、縄文時代の埋設土器1基、古代の竪穴住居2棟、土坑5基、竪穴状遺構1基、焼土遺構2基を検出している。

(1) 縄文時代の遺構

＜竪穴住居＞　尾根の頂部に近い比較的平坦なところから4基検出されている。平面形は円形、楕円形状、六角形状を呈し、規模は4～6 m程で、石囲炉を持つ。比較的残存状況の良かった1棟については、炉2基と壁溝3条が検出され、最低2回の建て替えを行なっていることがわかる。また、埋土下部から床面にかけて炭化物が多量に出土していることから、焼失家屋と推定される。時期は4棟いずれも中期後葉から末葉（大木9～10式期）に相当する。

＜陥し穴＞　東側斜面から3基検出されている。平面形は溝状で、断面形はT字状を呈する。規模は長軸で2～2.5 m、短軸で0.4～0.6 m、深さ0.8～1 mである。2基については約3 mの間隔でほぼ並列気味に作られており、当時の獣道である可能性が高い。出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と推定される。

＜埋設土器＞　北部調査区南端から検出した。土器は2重に正立で埋設されている。時期は中期末葉（大木10式期）に相当する。

(2) 古代の遺構

＜古墳＞ 今回の調査では主体部の構造が確認された。南調査区で検出された古墳の主体部は、四辺の壁際にそれぞれ独立した溝をもち、そこに板をいれて木槨、木棺の様なものを作っているようである。長軸壁の板にほぞをつくり、そこに短軸壁の板を差し込んで固定する、組み合わせ型の木棺（木槨）である。これは実際に木棺（木槨）が出土したわけではなく、平面土層で確認されたものである。またこの古墳の墳丘下には２つの古墳が検出されている。土層断面をみると、古い古墳の周溝を埋めて自墳を作っているようである。したがって他墳の主体部を壊さずに取り込んで、自墳を大きくしている。また本古墳群は主体部を掘込んでから墳丘を盛る、東北南部以南ではみられないタイプのものである。

周溝は斜面の高いほうに巡らせているようである。今回の調査では、主体部の長軸よりも若干長い、直線的な周溝をもつものも確認されている。

遺物は主体部や周溝から土師器の坏、甕が、鉄製品では直刀、鉄鏃、錫釧、鏃などが出土している。昨年の調査でも玉類がわずか切子玉一点だったが、今回は勾玉を真似た石製装飾品が出土している。

＜土壙墓＞ ６基検出された。規模や長軸の方向に規則性はみられない。しかしながら古墳の主体部と同じ構造を示し、短軸壁に溝を有するものもある。遺物はほとんど出土していないが、１基から土師器が出土している。

＜馬墓＞ ４基検出されたがいずれもほぼ同じ規模を有している。長軸はほぼ東西を向き、同一等高線上に作られている。すべての土壙から歯骨が出土しており、歯は尾根の上方に前歯を向けて、土壙の東寄りから出土している。遺物は歯骨のみである。

＜土坑＞ 土壙墓や馬墓が検出された付近で検出している。土壙墓、馬墓の可能性が高いが、遺物が出土しなかったり、構造が若干異なったりすることから土坑とした。土壙墓や馬墓と同じ規模を有している。

＜竪穴住居＞ ２棟検出している。１棟は北部平坦面で検出し、堆土から須恵器の甕と思われる高台の付いた破片が出土している。もう１棟は東側斜面の傾斜の緩やかなところで検出、柱穴堆土から土師器の甕と思われる破片が出土している。

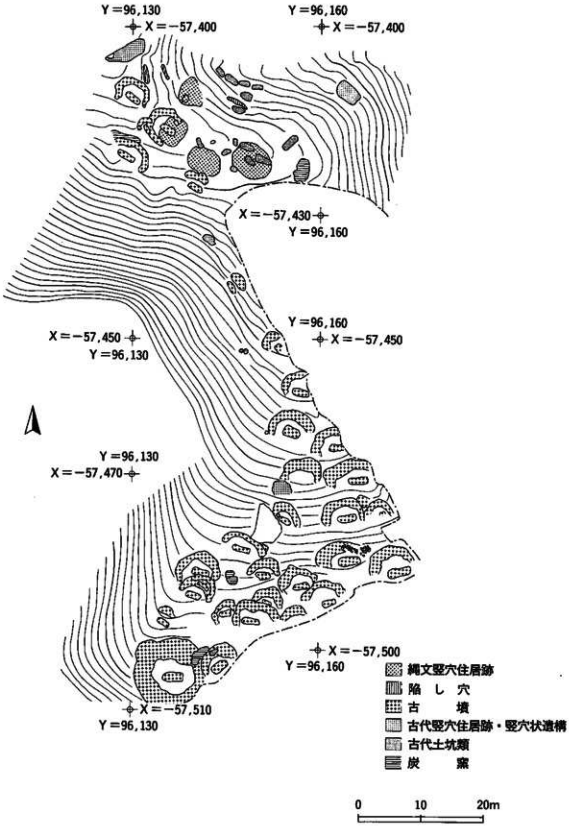
＜その他＞ 焼土遺構と竪穴状遺構が検出されている。出土遺物がないため、明確な時期はわからない。どちらも古墳群の検出面で検出している。

３．まとめ

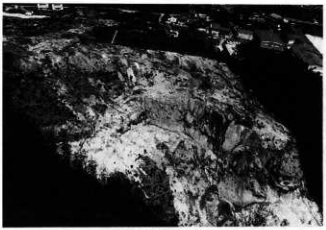
房の沢Ⅳ遺跡は縄文時代から古代にかけての複合遺跡だったことがわかった。

縄文時代においては、近隣の沢田Ⅰ遺跡及び沢田Ⅱ遺跡からも同時期の遺構が検出されていることから、広範囲に集落が分布する可能性があり、周辺の遺跡も含めて検討を行なっていきたい。

古墳群においては、主体部を掘ってから墳丘を盛るという北海道によくみられるものと同じ構造を示し、また主体部は組み合わせ型の木棺（木槨）が用いられていることがわかった。このような古墳は東北北部にみられ、土壙墓に系譜が求められるとされている。埋葬されていた人物は、在地のいわゆる蝦夷と呼ばれた人々だったであろう。



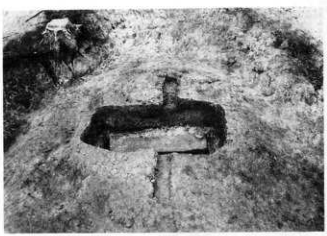
房の沢Ⅳ遺跡遺構配置図



房の沢Ⅳ遺跡全景

ＲＤ25馬墓

馬墓群



ＲＴ25古墳全景

ＲＤ09土壙墓

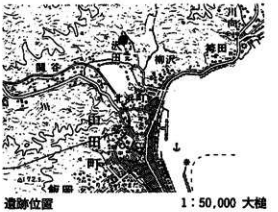
ＲＴ26古墳全景

ＲＡ01住居

房の沢Ⅳ遺跡遺構配置図

(9) 沢田（さわだ）Ⅰ遺跡

所　在　地　下閉伊郡山田町山田14地割10ほか
委　託　者　建設省東北地方建設局
　　三陸国道工事事務所
事　業　名　三陸縦貫自動車道・山田道路
発掘調査期間　平成9年4月7日～11月13日
調査対象面積　6,200 m²
調査終了面積　6,200 m²
遺跡番号・略号　ＬＧ94－0032・ＳＤＩ－97
調査担当者　千葉正彦・星　雅之
　　佐藤良和・川向聖子
協力機関　山田町教育委員会



遺跡位置

1．遺跡の立地

沢田Ⅰ遺跡はＪＲ山田線陸中山田駅の北方約2 kmに位置し、山田北小学校の北側から山田湾に向かって伸びる尾根の東側緩斜面から沢沿いにかけて広がっている。遺跡の標高は沢沿いの平坦地で15～20 m、斜面部で30 m前後である。遺跡の立地する尾根の頂部には7～8世紀の古墳群である房の沢Ⅳ遺跡が、沢を挟んで東側には中世城館である沢田館及び縄文時代中期から古代にかけての住居跡や古代の製鉄・鍛冶遺構が検出された沢田Ⅱ遺跡がある。

2．調査の概要

本遺跡は平成6年から調査が始まり、今年で4カ年目になる。今年度の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡80棟、弥生時代の竪穴住居跡8棟、古代の竪穴住居跡19棟、竪穴状遺構8棟、掘立柱建物跡1棟、土坑60基、焼土遺構3基、炭窯2基である。

遺構は主に平坦部全域で検出された。現況は宅地、水田、畑地、果樹園であり、旧地形がかなり改変されている。

＜縄文時代の竪穴住居跡＞　前期前葉の竪穴住居跡は、規模・形状の違いによって小型と大型の2つに分類できる。小型住居は平面形が隅丸方形または長方形基調で、住居中央に主柱穴、壁の周りに直径10 cmほどの壁柱穴が巡るものである。規模は長軸4～6 m、短軸4 mほどである。炉・焼土は見られなかった。残存状況の良好な数棟は中茱火山灰が厚く堆積しており、直下から土器が多数出土した。

大型住居は平面形は長方形、規模は短軸約4.5～5.5 m、長軸20 m以上と推定される。壁際には壁溝が巡り、中軸線を中心として対になるように柱が配置される。柱穴間隔は約1.7 mである。床面の中軸線上には地床炉と思われる一定の間隔を持つ焼土が並ぶ。壁溝が数条確認できた住居跡については数回の建て替えが行われているものと思われる。小型住居・大型住居とも、時期は出土した土器より前期前葉（大木1～2 a式期）と思われる。

中期の竪穴住居跡は平面形は円形または楕円形基調を主体とし、多角形状の住居も数棟ある。規模は円形及び多角形状の住居跡が4～5 m、楕円形の住居跡が8 mほどである。炉は石を長方形状に配置した石囲炉

と複式炉がある。時期は出土した土器から中期中葉～後葉（大木８ｂ～９式期）と思われる。

また中期中葉の住居跡からは底部穿孔の埋甕１基が検出されている。

＜弥生時代の竪穴住居跡＞　古代の竪穴住居跡との重複によって、遺構の一部しか把握できなかったものが多い。残存状態の良好な竪穴住居跡については、平面形は楕円形基調で、規模は5.7×4.9ｍ、埋土は黒色土シルトを主体とする。炉は石囲炉で、円形に石を配置している。時期は出土した土器から弥生時代初頭と思われる。

＜古代の竪穴住居跡＞　平面形はいずれも方形基調だが、規模は１辺４～６ｍと様々である。カマドの位置及び構築方法の違いによって３つに分類することができる。カマドが住居の西壁に作られ、くり貫き式の煙道を持つタイプが５棟。カマドが北壁に作られ、掘り込み式の煙道を持つタイプが13棟。北西方向にカマドが作られ、煙道を石で囲うタイプが１棟である。掘り込み式の煙道は不明瞭なものが多かったが、土師器の長胴甕を横位に据えて煙道を補強したと思われるものを１基検出した。

上記の違いは時期差による可能性が高く、北カマドの住居跡は奈良時代、西カマドの住居跡は平安時代、北西カマドの住居跡は両時代の過渡期につくられたものと思われる。

＜竪穴状遺構＞　平面形は不整な円形で、壁の立ち上がりが認められるものの、炉や柱穴等の施設を伴わない。出土遺物がないために時期等詳細は不明である。

＜掘立柱建物跡＞　２×２間のものを１棟検出した。伴出遺物がないために時期の特定はできないが、埋土の様相が新しいこと、古代の住居の埋土を切っていることから古代以降に構築された遺構と推定される。

＜土坑＞　平面形は円形または楕円形基調のものが主体だが、規模にはばらつきがある。時期・用途とも明確にはできなかったが、埋土の様相からほとんどが縄文時代に属するものと思われる。

＜焼土遺構＞　遺構に伴わない現地性の焼土である。いずれも焼成が悪い。平面形・規模とも様々である。時期は不明である。

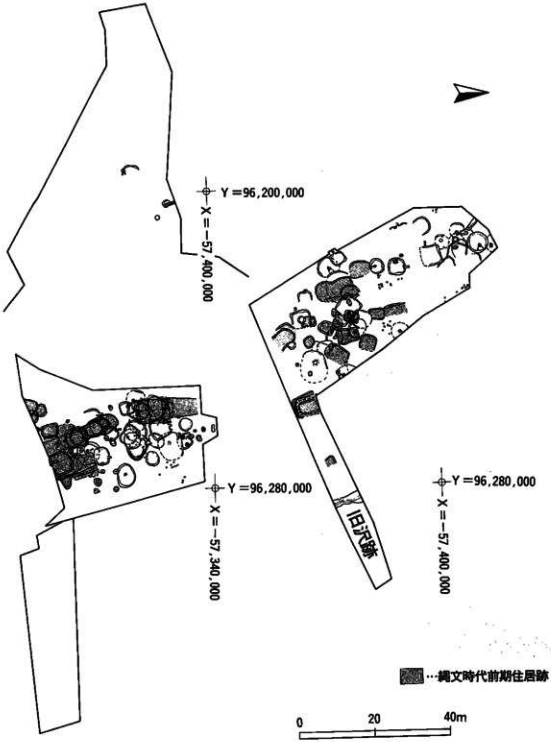
＜炭窯＞　調査区西側の斜面部で検出した。２基とも斜面下方が流失しており、平面形や規模は把握できなかった。付随施設及び伴出遺物がないため構築時期は不明である。

＜出土遺物＞　出土遺物は、土器が大コンテナで85箱、石器が約800点、土製品５点、石製品２点、鉄製品10点である。土器は縄文時代前期前葉が主体だが、縄文早期から平安時代まで幅広い時期にわたって出土している。石器は縄文～弥生時代の石槍・石鏃・石匙・磨石・石皿等が主だが、古代の住居跡からも磨石や砥石が出土している。土製品は円盤状土製品・紡錘車が、鉄製品は刀子・紡錘車・鉄鏃が出土している。

３．まとめ

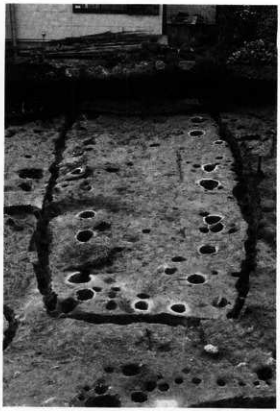
今回の調査によって、本遺跡は縄文時代前期から平安時代までの長期間にわたって断続的に集落が営まれていたことが明らかとなった。特に縄文時代前期前葉の竪穴住居群は、沿岸部における検出例は非常に少ないものである。大型住居と小型住居の占地、住居形態を考える上で貴重な資料となり得るものといえよう。

さらに、本遺跡で初めて弥生時代の竪穴住居跡を検出し、その存在を明らかにすることができた。こちらもまとまって検出された例は少なく、当該期の好資料を提示できるものと思われる。


Y＝96,200,000
X＝−57,400,000
Y＝96,280,000
X＝−57,340,000
Y＝96,280,000
X＝−57,400,000
旧沢跡
…縄文時代前期住居跡
0
20
40m

沢田Ⅰ遺跡遺構配置図

調査区全景〔下方が東〕



大型住居跡（縄文・前）

竪穴住居群（縄文・前）

壁溝がめぐる竪穴住居（縄文・中）

竪穴住居跡（弥生）

焼失した住居跡（奈良）

沢田Ⅰ遺跡・検出遺構

(10) 尿前（しとまえ）II 遺跡

所在地	胆沢郡胆沢町若柳字尿前8－1ほか
委託者	建設省東北地方建設局 胆沢ダム工事事務所
事業名	胆沢ダム建設
発掘調査期間	平成9年7月7日～11月5日
調査対象面積	16,300 m²
発掘調査面積	8,800 m²
遺跡番号・略号	ＮＥ21－2236・ＳＭII－97
調査担当者	酒井宗孝・布谷義彦
協力機関	胆沢町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 焼石岳

1．遺跡の立地

尿前II遺跡は、胆沢町役場の西約16 km に位置し、胆沢川左岸の崖錐性扇状地に立地している。調査区は、扇頂部及び扇央部に当たり標高は352～327 m で、東西両側と中央部は小規模な沢によって開析されている。

2．調査の概要

調査の便宜上中央部の沢を挟んで西側をＡ区、東側をＢ区と仮称した。今年度は両地区の粗掘り、Ｂ区東側の遺構検出、Ａ区の遺構検出及び精査を行った。今年度精査した遺構は、竪穴住居跡５棟、住居跡状遺構１棟、焼土遺構１基、土坑45基、集石遺構２基、剣片の集中区３か所等である。全て縄文時代の遺構で、尾根の鞍部から西側の斜面部分に分布している。出土遺物には縄文土器(前期、後期、晩期)、土製円盤、石器（石鏃・石匙・磨石・凹石）がある。

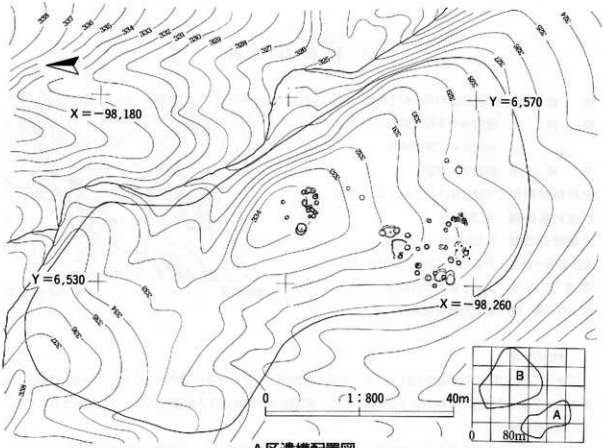
＜竪穴住居跡＞　時期別には出土した土器から後期中葉４棟、前期前葉１棟である。後期の住居跡の内２棟は、掘り込みが浅く、平面形および規模を把握することができなかった。いずれも石囲炉を持つ。他の２棟は直径が2.5 m 前後の不正な円形で、地床炉を持つ。前期の住居跡は直径2.5 m の不正な円形を呈し、炉は地床炉である。

＜土坑・集石遺構＞　遺物を伴わず時期が不明な土坑もあるが、前期～晩期までの幅を持つ。断面形の形態にはフラスコ形、バケツ形、皿形等があり、フラスコ形のものが多い。規模は総じて小型で、底部径が1.2 m を超えるものはない。なお、バケツ形や皿形を呈する土坑には、底面に５～15個の偏平な礫を伴うものが４基ある。

集石遺構のうち１基は、直径1.2 m、深さ40 cm の円形土坑内に60個以上の礫が密集した状態で集められていた。他の１基も下部から不正な楕円形の土坑が検出されている。

3．まとめ

尿前II遺跡は、前期前葉～晩期末葉にかけての集落跡であることが確認された。Ｂ区の調査結果を待たなければならないが、今回検出された遺構の規模や数、出土した遺物量から推定して、その活動は各時期とも長期間に亘るものではなかったと考えられる。



A区遺構配置図

遺跡全景

竪穴住居跡（前期）

竪穴住居跡（後期）

土坑からの土器出土状況

尿前II遺跡遺構配置図・検出遺構・出土遺物

(11) オミ坂遺跡

所在地	盛岡市上飯岡23地割75－4ほか
委託者	農林水産省東北農政局 山王海鹿妻農業水利事業所
事業名	国営盛岡南部農業水利事業 西部揚水機場及び西部用水路工事
発掘調査期間	平成9年4月11日～6月17日
調査対象面積	5,200 m²
発掘調査面積	5,200 m²
遺跡番号・略号	ＬＥ25－0233・OOS－97
調査担当者	金子佐知子・山口俊規
協力機関	盛岡市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 盛岡

1．遺跡の立地

本遺跡はＪＲ盛岡駅から南西に約4.8 km、盛岡市の南西にそびえる飯岡山の北麓に位置する。飯岡山は奥羽山系の東端にあたり、遺跡の北側は約3 km北を東流する雫石川が形成した低位段丘である。標高は141～174 mで、調査開始前は果樹園、山林、市道であった。

2．調査の概要

調査は便宜上、揚水機場建設部分で標高140 m程度の北麓末端に位置するＡ区と、標高が170 m前後の送水管埋設部分のＢ区に分けて行った。Ａ区は3,200 m²、Ｂ区は細くて長い調査区で幅が6～12 m、長さ202 m、面積2,000 m²である。

＜Ａ区＞　検出された遺構は縄文時代と推定される土坑4基、古代と推定される土坑1基、焼土遺構1基、新しいと思われる道の跡2条である。Ａ区は東側が埋没した谷となっており、谷筋に炭を含む黒色土や灰白色火山灰が堆積していた。

南側から縄文時代の土坑群が検出された。土坑は4基のうち2基がフラスコ状土坑、1基がピーカー状の土坑である。ピーカー状土坑は径が1.45×1.4 m、深さ1.04 mである。2基のフラスコ状土坑は径1.1×1.2 m、深さ1.1 mのものと径0.9×0.9 m、深さ0.43 mのものである。そのほか最も西寄りから検出された土坑は径1.0×0.8 m、深さ0.3 mで、堆土中から縄文土器片が多く出土している。土器片は立った状態のものが多く、土器埋設遺構かとも思われたが、土器の径が一周せず断片的に出土していることから土坑として扱っている。本遺構は縄文時代中期に属すると考えられる。

東側からは谷頭から炭を多く含む浅い土坑が1基検出された。規模は平面形で0.76×0.7 m、深さ13 cmである。この土坑は灰白色火山灰層より下位から検出されたもので、古代に属すると見られる。焼土遺構も谷筋から検出された。道の跡はおおむね東西方向に2条平行し、東端では交差して、山麓の縁辺部に沿うように検出された。西に向かって消失する。幅は25～80 cm、長さ12.5～13 mで硬く締まり、表面がやや酸化している。おそらく人が何度も通った際に踏みしめられて硬化し、表面に水分が溜って酸化したものと思われる。検出層位は表土下層であることから比較的新しいものと思われる。

＜B区＞ 縄文時代の土坑１基、焼土遺構２基、平安時代の住居跡１棟、古代の土坑１基、焼土群１、時代不明の土坑２基、地境と思われる溝３条、新しいと思われる道の跡３条が検出された。本区は小規模な２つの谷と崖錐状の地形、削平された平坦地の連続する地形である。

縄文時代の土坑は調査区東端から検出されたフラスコ状土坑である。埋土中から小さい剝片が多く出土している。焼土遺構は調査区中央と西側で検出された。中央の焼土遺構は崖錐状の地形で、斜面上方から流れ込んだ礫が多く堆積する層の上に形成されている。西側の焼土遺構は崖錐状の地形の縁辺部で、周辺から縄文時代後期の土器が多く出土する部分から検出されている。

平安時代の住居跡は西側の谷の谷頭付近に位置する。遺構の一部は調査区外に伸びている。一辺の長さは3.9 m、壁高は最大で 40 cm である。平面形はややゆがんだ隅丸方形を呈している。カマドは西側の壁にあり、煙道、煙り出しは削平されている。カマドの袖は角礫を組んで構築されている。焼土の形成は薄い。床面は平坦であるが、あまり堅く締まってはいない。柱穴は床面から３基、壁の外側から２基検出されている。埋土から土師器の高台付の椀の底部が出土した。

古代に属すると見られる土坑は東側の谷に向かう緩斜面で検出された。平面形は楕円形で、径は 1.14×1.2 m、深さ 44 cm を測る。埋土から十和田ａ降下火山灰と見られる灰白色火山灰が検出されている。

焼土群は東側の谷の斜面から谷底にかけて検出された。不整形の大小の焼土がいくつも重なって検出されている。焼土の形成は断面を観察すると３時期に区別できる。最も古い焼土は十和田ａ降下火山灰と見られる灰白色火山灰の直上に形成される。次の時期は火山灰から黒色土を挟んで５～６ cm 上に形成され、最も新しいものは火山灰の上に２層の黒色土を挟んで 10 cm ほど上位に形成されている。これらの焼土群の性格は不明であるが、沢筋に火入れなどの人為的な働きかけが 10 世紀から数回にわたって行われていたと推定される。

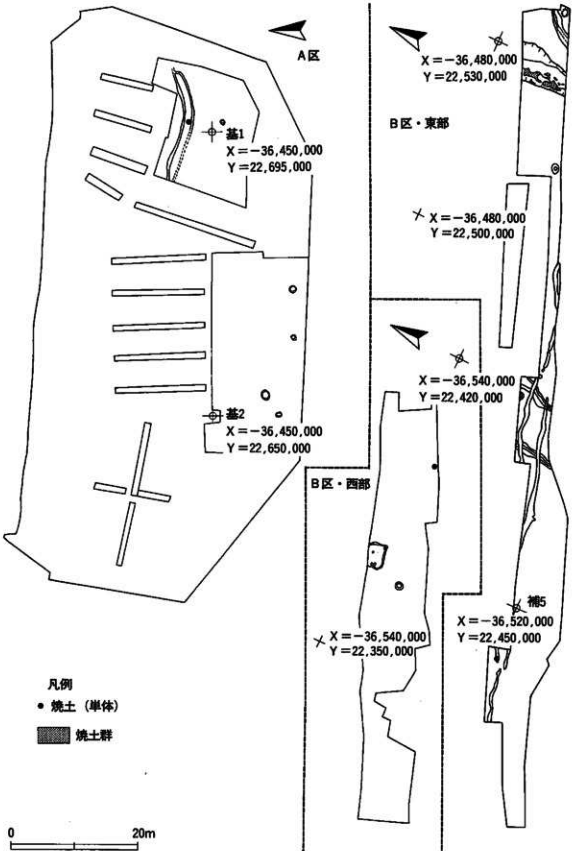
地境と思われる溝は調査区東半から３条検出されている。２条は南北方向に伸びているが東端の溝は北東方向である。西側の２条は交差する道の跡よりも古い。深さは 15～57 cm で、幅は 0.75～1.5 m である。いずれも両端は調査区外に伸びている。東端の溝は立ち上がりがごくゆるやかで、底面が締まりがあり、道の跡である可能性もある。

道の跡は調査区を斜めに縦断し、等高線におおむね沿うように検出された。踏みしめられたような堅く締まった部分が溝状に連なっている。表面には水分がたまったためか、褐鉄層が見られる。斜面部分にはすべり止めのためかと思われるピットが連続して検出された。これらの道の跡は表土下位から検出されていることから、ごく新しいものと推定される。

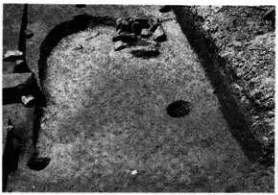
＜遺物＞ 今回の調査で出土した遺物は 2.5 箱（42×32×30 cm 大）で、遺構外出土の縄文土器片がほとんどである。Ｂ区のＤ～Ｆ、Ｊ、ＫグリットのⅠ層の最下位～Ⅱ層上面から最も多く出土している。次いで遺構外出土の剝片や石器が多い。そのほか縄文時代後期前葉に属すると見られる土偶、弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品、陶器がある。縄文土器は前期前葉、中期後葉、後期前葉のものが多い。弥生土器は弥生時代後半のものである。

３．まとめ

Ａ区では縄文時代の土坑群が検出されたことから、周辺に集落跡のある可能性がある。Ｂ区では斜面上方に縄文時代前期や後期の集落跡があるものと思われる。また、Ａ区Ｂ区ともに谷筋から焼土遺構群や炭粒の多く混入した層を検出したことは、人為的な火入れなどの行為を示す可能性がある。具体的な目的は不明であるが、古代から飯岡山に人の手が入り、おそらくは生産活動に利用されていたことを窺わせる。


A区
X＝−36,480,000
Y＝22,530,000
B区・東部
蓋1
X＝−36,450,000
Y＝22,695,000
X＝−36,480,000
Y＝22,500,000
X＝−36,540,000
Y＝22,420,000
蓋2
X＝−36,450,000
Y＝22,650,000
B区・西部
補5
X＝−36,520,000
Y＝22,450,000
X＝−36,540,000
Y＝22,350,000
凡例
● 焼土（単体）
焼土群
0
20m

オミ坂遺跡遺構配置図

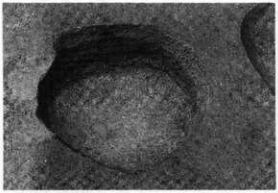


平安時代の住居跡

縄文時代のフラスコ状土坑

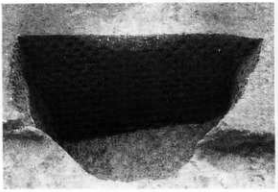
上の住居跡のカマド

溝（時期不明）



縄文時代の土坑

道の跡（時期不明だが新しい）



上の土坑断面

土器出土状況

オミ坂遺跡検出遺構・遺物出土状況

II. 公団関係

もとみやくまどう

(12) 本宮熊堂B遺跡第5次調査

所在地	盛岡市本宮字熊堂31－1ほか
委託者	地域振興整備公団
事業名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成9年8月18日～10月15日
調査対象面積	2,910 m²
発掘調査面積	2,910 m²
遺跡番号・略号	ＬＥ16－2118・ＯＫＯ－97
調査担当者	小笠原健一郎
協力機関	盛岡市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 盛岡・日詰

1．遺跡の立地

熊堂B遺跡は、東日本旅客鉄道(株)仙北町駅から西に約1.5 km に位置し、雫石川によって形成された標高124 m 前後の河岸段丘に立地している。調査区の現況は水田及び畑地である。調査区は、高低差約60 cm 程度の段丘崖に東西を挟まれており、それぞれに沿って水路が走っている。調査区は、盛岡市分の調査区に北西側と南東側を挟まれている。

本遺跡の西約2 km に志波城跡、西約0.8 km に鬼柳A遺跡、南西0.4 km に野古A遺跡がある。

2．調査の概要

(1) 検出された遺構

検出された遺構は、竪穴住居跡6棟、溝跡2条、土坑1基、柱穴状小土坑909基である。調査区は南西側と北東側が低地になっており南西側には厚いグライ化した粘土層の堆積が顕著であった。調査区南半分の検出面一帯には蒲穂の根茎根がみられ、調査区がかつて低湿地あるいは水辺であったことを示している。段丘下には湿地があり水田の耕作期間には、湧水が著しく検出も困難を極めた。また、北部は宅地に隣接し、表土が薄く河川氾濫によるものと思われる比較的新しい礫層が雫石川方向から堆積している。

このため住居跡は調査区中央を北西から南東に延びる微高地に沿って南部で124.0～124.1 m、北部で124.4～124.5 m の高さに造られている。

<竪穴住居跡>　竪穴住居跡は6棟検出された。平安時代初期と考えられるものが4棟、隅丸方形で規模3.2×3.2 m の奈良時代のものが1棟、遺物等がなく時代不明のものが2棟検出された。平面形は2.4×2.8 m のものが1棟検出された。

平安時代の1棟はほぼ方形で平面形は3.2×3.0 m で埋土中に十和田a降下火山灰が検出されたが、床面の明確な焼土・カマドは確認できなかった。他の3棟はほぼ方形で規模は最小2.8×2.6 m～最大3.7×3.6 m。掘り込み式の煙道やカマド・十和田a降下火山灰が検出された。

<溝跡>　調査区の北東側の低湿地に沿って西から東へ第4次調査区（盛岡市分）の調査区まで延びる溝1条、北部中央付近で1条検出された。北東側の溝跡からは、第4次調査区南端部床面で縄文土器片が2片、中央部付近から土師器片、石器2点が出土している。また、北部中央の溝跡は、埋土中に河川氾濫によるも

のと思われる顕著な礫層があり、南端部と西端部で溝跡は消滅し出土遺物もなく、いずれも時代不明である。

<土坑> 調査区中央の北東側溝跡付近で長径 2.86 m、短径 2.74 m のほぼ円形で、深さ 0.35 m の土坑 1 基が検出された。出土遺物もなく時代不明である。

(2) 出土遺物

竪穴住居跡から土師器・須恵器が中コンテナ 1 箱程度、溝跡付近から土師器数片、石器 2 点が出土している。

3．まとめ

熊堂B遺跡は、奈良時代から平安時代の人々が集落として利用されていた遺跡であることが確認された。また、竪穴住居跡は、調査区内の微高地に沿って位置しているなど、雫石川の影響を強く受けるこの地域の立地条件を顕著に反映している。遺構数に反して遺物量が少ない原因は、隣接する周辺遺跡の住居跡に比べ床面までの掘り込みが浅いことや北部調査区に広がる一連の礫層から考えれば、河川の氾濫等により削剥した可能性が高いと思われるが、何らかの人為的な理由によることも否定できず、判然としない。

調査区北東側の溝についても、付近から検出された鋸歯縁状石器や南端部（盛岡市分）床面の縄文土器片が出土しているが、右の原因や遺物の量から明確な時代の特定はできないと思われる。また付近で検出された土坑についても不明な点が多く、今後に研究整理を進めて行きたい。

土器出土状況

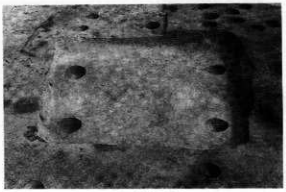
竪穴住居跡

土器出土状況

竪穴住居跡

本宮熊堂Ｂ遺跡検出遺構(1)

竪穴住居跡



竪穴住居跡

竪穴住居跡（奈良時代）

カマド袖部

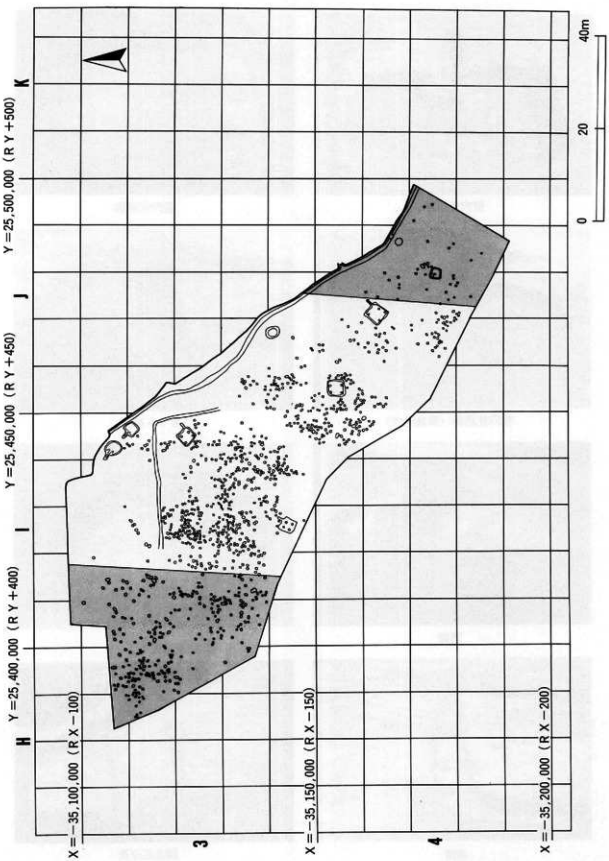
溝跡

土坑

溝跡

調査区全景

本宮熊堂Ｂ遺跡検出遺構(2)



本宮熊堂B遺跡（地域振興整備公団）遺構配置図

(13) 台太郎(だいたろう)遺跡第16次調査

所在地	盛岡市向中野字向中野36－1ほか
委託者	地域振興整備公団
事業名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成9年8月1日～8月29日
調査対象面積	790 m²
発掘調査面積	790 m²
遺跡番号・略号	ＬＥ16－2269・ＯＤＴ－97
調査担当者	松川由次
協力機関	盛岡市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 盛岡

1．遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の南西側約900 mに位置し、拝石川右岸の河岸段丘上に立地している。標高は120.3～121.6 mで、北緯39度40分、東経141度8分付近にあたる。調査区は台太郎遺跡第15次調査区の南側に隣接し、現状は畑地で占められている。

2．調査の概要

検出された遺構は、奈良時代の竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡3棟、土坑17基、堀1条、溝跡2条、柱穴列1条、柱穴状土坑165基等である。

＜竪穴住居跡＞　規模は3.6×3.3 mと5.4×5.2 mで、平面形は隅丸の長方形および方形を呈している。カマドは南東壁東側コーナー寄りと北西壁の中央部に設置されており、いずれもくり貫き式の煙道である。

＜掘立柱建物跡＞　3棟の規模は、桁行7間(15 m)×梁行2間(5.2 m)で北東と南西側に庇をもつ・桁行4間(8.8 m)×梁行1間(3.9 m)・桁行8間(1.59 m)×梁行1間(1.26 m)である。棟方向は北北西～南南東を示しており、遺構の切り合いと間尺から時期は中世以降と推測される。

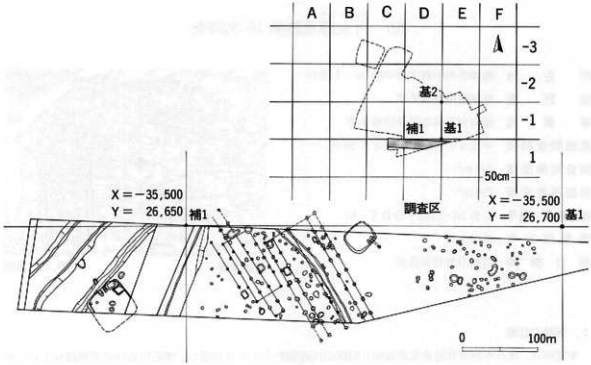
＜堀＞　堀(環濠)は北側の15次調査区から続くもので、規模は上幅4 m×下幅2.5 m、深さ80 cmである。調査区では北東～南西方向に15 m確認されている。南側の調査区域外に延びているために詳細は不明である。

＜溝跡＞　溝の規模は上幅1～1.4 m×下幅40 cm、深さ50～60 cmである。北東～南西と北西～南東方向に延びている。埋土から灰黄褐色の十和田a降下火山灰の堆積が確認され、時期は平安時代と推測される。

＜出土遺物＞　奈良時代のロクロ不使用の土師器(坏・甕・壺・甑)、平安時代のロクロ使用の土師器（坏・甕)・須恵器(坏・甕・長頸壺)等が出土している。また、中世以降の遺物は土坑から青磁茶碗の破片がある。

3．まとめ

調査区は幅12 m・長さ66 mと狭い範囲であったが、奈良・平安・中世の遺構と遺物が出土している。一部の遺構は、調査区域外に延びている事から全容が不明である。今回の調査で奈良時代から中世にいたる長い時期人々の生活を営んだ場であった事が確認され、地域における各時代の集落変遷を考える上での貴重な資料を提供している。



台太郎遺跡遺構配置図

奈良時代竪穴住居跡

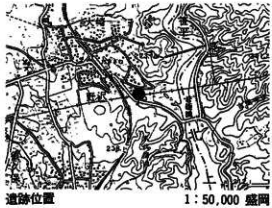
奈良時代竪穴住居跡

掘立柱建物跡

土器出土状況

(14) 野沢(のざわ)IV遺跡

所　在　地　岩手郡滝沢村字野沢62番19ほか
委　託　者　日本鉄道建設公団盛岡支社
事　業　名　東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間　平成9年4月9日～6月16日
調査対象面積　3,300 m²
発掘調査面積　3,300 m²
遺跡番号・略号　KE 76－1399・NZIV－97
調査担当者　工藤　徹・千葉和弘
協力機関　滝沢村教育委員会



遺跡位置

1．遺跡の立地

野沢IV遺跡は、岩手郡滝沢村字野沢地内に所在し、東日本旅客鉄道東北本線滝沢駅の南東約0.7 km、北上川西岸から0.5 km に位置し、北上川の西側に広がる丘陵の緩斜面から沢沿いにかけて立地する。調査区は、東西に約200 m、幅約8～28 m で、標高は約192～202 m を測り、北上川との比高は約20 m である。調査区の現況は山林・畑地・宅地である。本遺跡の北側には縄文時代の遺跡である野沢Ⅰ遺跡、野沢Ⅱ遺跡、野沢Ⅲ遺跡、西側の台地には野沢Ⅵ遺跡、野沢Ⅶ遺跡、狼久保Ⅰ遺跡、狼久保Ⅱ遺跡がある。

2．調査の概要

調査区は東西に細長く延びているが、東側及び東南端部では遺構・遺物は確認できなかった。遺構・遺物が多く確認されたのは、調査区西側と中央部で、遺物はⅠ層の下位及びⅡ層からの出土が多く、特にⅡC区の遺物包含層からはほぼ完形の注口土器や土偶及び石製品などが出土しており遺物量も多い。今回の調査では、竪穴住居跡3棟、土坑14基、柱穴状ピット13基、焼土遺構5基、集石遺構1基、配石遺構1基を検出し、遺物が集中する遺物包含層も確認した。遺物については、縄文土器、古代の北海道系土器と考えられる破片、石器、土製品、石製品、時代不明の金属製品などが出土した。

＜竪穴住居跡＞　調査区西側の緩やかな傾斜地で1棟、調査区中央の平坦部で2棟検出した。西側の傾斜地で検出された1号竪穴住居跡は、平面形がほぼ円形を呈しており、規模は直径約3.5 m、壁高は約20～80 cm、周溝は検出できなかった。床面はほぼ平坦で、中央には長方形の石囲炉が設けられている。石囲炉内には炭化物粒を含む橙色の焼土が広がるが、形状は不整形で厚さも薄い。柱穴は3基検出した。埋土は黒褐色土が主体で炭化物粒、黄橙色パミス粒を含む。埋土中から深鉢形土器や石匙、剥片石器が出土しており、遺物から推定し時期は縄文時代晩期に属するものと思われる。

調査区中央部で検出した2号竪穴住居跡及び3号竪穴住居跡は、共に平面形はほぼ円形で規模は直径約3～3.5 m、壁高約20～30 cm で、床面は3号竪穴住居跡で一部木根による攪乱がみられるが、2号及び3号竪穴住居跡とも平坦で中央に地床炉を持つ。焼土の広がりは一様ではなく、不整形を呈する。柱穴は2号竪穴住居跡から5基、3号竪穴住居跡から3基、それぞれ地床炉周辺から検出した。2号竪穴住居跡からの出土遺物は、深鉢形土器、石皿で遺物の特徴から時期は縄文時代後期と考えられる。3号竪穴住居跡からは土器

片3点が出土しているが、時期については特定できない。

＜土坑＞ 調査区全体で14基検出した。多くは竪穴住居跡周辺で確認している。規模・形状は開口部径約70～300 cm、底部径約30～220 cm、深さ約30～80 cmで、平面形は円形もしくは楕円形を呈し断面形はU字形、皿形、直円筒形に大別される。遺物の出土した土坑は6基である。14号土坑からはほぼ完形の鉢形土器が出土しており、土器の特徴から縄文時代晩期のものと考えられる。いずれの土坑についても用途・性格については不明である。

＜柱穴状ピット＞ 3号竪穴住居跡及び集石遺構の周辺で計13基検出した。規模は直径約20～40 cm、深さ約20～60 cmである。これらの配列からは竪穴住居跡の柱穴とは断定できず、用途については不明である。出土遺物もほとんどなくわずかに13基中1基から縄文土器片2点が出土した。

＜焼土遺構＞ 調査区西側で3基、中央部で2基検出した。焼土の形状・規模は様々で、最大のものは土器流れ込み付近に広がる2号焼土で、120×300 cm、層厚4～10 cm、最小のもので10×20 cm、層厚4 cmを測る。いずれも強く赤変しているが周囲からは明確な柱穴は検出されず、住居跡の床面と判断できる痕跡も確認していない。出土遺物もなく時期については特定できない。

＜集石遺構＞ 調査区西側の平坦部から1基検出した。長軸方向は南北にあり長さ約8 m、幅約4 mの楕円形を呈する範囲に、3～7.5 cmの破砕角礫を百数十個検出した。石の大きさにばらつきがあり選別した様子はみられず、分布状況にも特に規則性は認められない。集石の範囲内に焼土1基、柱穴状ピット2基と土器片の集中部を1カ所確認した。集石の下位から遺構は確認できなかった。

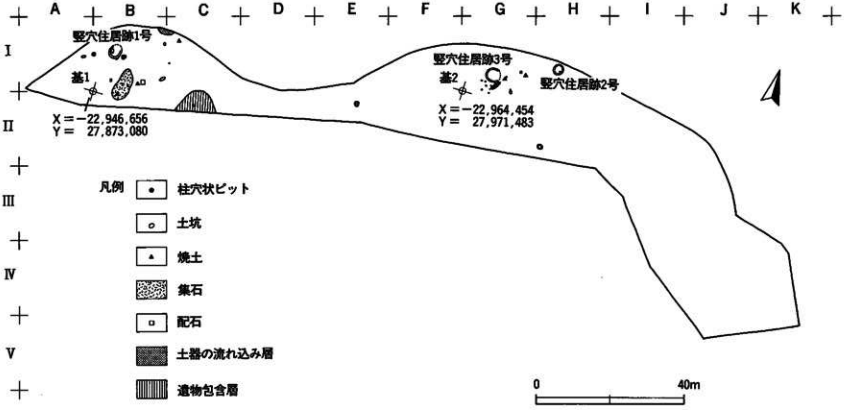
＜配石遺構＞ 調査区西側平坦部で1基検出した。石は東西方向を軸に1列に約1.8 mの長さにわたって配置されている。石の大きさは約15～20 cmで形状は一定していない。石の下位から土坑などは確認していない。

＜遺物包含層＞ ⅡC区で確認した。包含層の範囲はさらに調査区外の斜面上方にも続いているものと考えられる。包含層の色調は黒褐色を呈し、炭化物粒、焼土粒を少量含む。層厚は約30 cmで、縄文時代晩期を主体とする土器、石器、土製品、石製品を包含し、土坑1基を検出した。

＜出土遺物＞ 縄文時代の前期、後期、晩期の土器、古代の北海道系土器と考えられる破片1点、石器、土製品、石製品及び時期不明の鉄製品が2点出土している。縄文土器の出土量は大コンテナで14箱である。縄文時代晩期の土器が大半を占め、ごく僅かであるが前期、後期のものが出土している。器種は深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器、ミニチュア土器などがある。遺構内からの出土品は少なく、遺構外とりわけ遺物包含層からの出土が多い。石器類は300点余り出土しており、器種は石鏃、石錐、石匙、削掻器などの剥片石器と共に磨石、敲石、石斧などが出土している。土製品は土偶と土版で、計20点が出土している。石製品は石棒、石刀片、石皿、岩版が計6点出土している。これらの遺物の出土地点は遺物包含層と土器流れ込み地区を中心とした調査区西側に偏っている。

3．まとめ

今回の調査により本遺跡の性格・内容の一端が明らかになった。本遺跡で人間の生活が営まれた時代・時期は縄文時代前期から晩期にかけてであろうと考えられる。遺構・遺物の出土地点からみて後期の中心は調査区中央部の沢沿い、晩期の中心は調査区西側と考えられ、晩期の広がりはさらに調査区外へ延びていると考えられる。今後、この調査結果の整理・分析と周辺遺跡との比較・検討を進めることにより本遺跡の性格・内容をより明らかにしていきたい。


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
I
II
III
IV
V
竪穴住居跡1号
竪穴住居跡2号
竪穴住居跡3号
基1
基2
X＝－22,946,656
Y＝ 27,873,080
X＝－22,964,454
Y＝ 27,971,483
凡例
柱穴状ピット
土坑
焼土
集石
配石
土器の流れ込み層
遺物包含層
0
40m

野沢Ⅳ遺跡遺構配置図

調査区全景（北から）

1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡

土器出土状況

土器出土状況

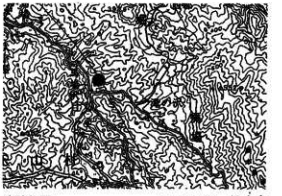
土偶出土状況

岩版出土状況

野沢Ⅳ遺跡検出遺構・出土遺物

(15) 芦名沢（あしなざわ）Ⅰ遺跡

所在地	岩手郡玉山村大字馬場字馬場平77番12ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成9年5月9日～9月30日
調査対象面積	3,780 m²
発掘調査面積	3,780 m²
遺跡番号・略号	KE 47－1348・AZⅠ－97
調査担当者	村上　拓・金子昭彦 古舘貞身・熊谷佳恵
協力機関	玉山村教育委員会



遺跡位置　　1：50,000　沼宮内

1．遺跡の立地

芦名沢Ⅰ遺跡は東日本旅客鉄道東北本線好摩駅の東方約2.8 km、姫神山麓から北西に流れ北上川に合流する芦名沢川の右岸に位置し、芦名沢川に向かって張り出す小さな尾根の間に形成された斜面上に立地する。調査区は宅地、畑地、牧草地として利用されており、一部に削平、撹乱を受けていた。

2．調査の概要

調査区内には層厚80～120 cmの厚い黒色土層が堆積している。起源・降下年代の異なる数種の火山砕屑物が混入しており、これを鍵とした分層が可能であった。これらの火山砕屑物を手がかりとして、遺構の検出・精査・所属時期の推定を行なった。

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡9棟、掘立柱建物跡1棟、土坑12基、焼土2基、畝状遺構（畑跡？）である。

＜竪穴住居跡＞　全9棟のうち6棟が平安時代（9世紀後半～10世紀）、3棟が縄文時代前期に位置づけられる。

平安時代の住居跡はいずれも一辺5 m前後の方形を呈する。ほとんどが基盤粘土層を掘りこまず黒色土層中で完結するため、柱穴、壁溝は不明瞭で確認できなかったものが多い。床面は堅く締まる箇所が部分的にみられるが、粘土などを用いた意図的な貼床は観察されない。カマドは壁際に設けられ、掘りこみ式とみられる1.0～1.5 mほどの煙道部と、小ピット状の煙出し部をもつ。カマドが設けられる方向は、東壁（3棟）・北壁（2棟）・西壁（1棟）である。カマド近くの壁際には貯蔵穴とみられる土坑が1～3基設けられている。鍛冶炉とみられる焼けた小ピットをもつ住居もあり、そのうち1棟では雁股鏃が炉内に据えられたように出土している。このほかにも住居内からは刀子・鉄鏃・釘などの鉄製品が比較的多く出土している。

東壁にカマドをもつ住居跡のうち2棟では、十和田aテフラ類似の灰白色火山灰が廃絶後の埋没過程で流れ込んでいるのに対し、北壁にカマドをもつものではこの火山灰をカマドの構築材として利用しており、火山灰の降下を挟んで両者の間に時間差があることを示唆している。また東壁にカマドをもつ住居では、床面直上に住居の構築材とみられる炭化材と焼土が広がり、さらにその上にのる灰白色火山灰の一部も赤変して

いることから、火山灰の降下・流入と住居の廃絶とが時間的に近接していることを示しており、興味深い状況が観察された。

縄文時代の住居跡は縄文時代後期頃に降下したとみられている黄橙色パミスを含む層よりもさらに下位の層中で検出された。2棟は隅丸長方形を呈するものとみられ、うち1棟は長軸上の壁際に比較的大きい柱穴をもつ。中央部には地床炉が設けられ、床面はこの炉を中心に擂鉢状に傾斜している。撚糸文を施文される土器に加え、同一母岩のものとみられる剝片が多数出土した。床面から中位にかけての埋土には基盤粘土層のブロックが投げ込まれていることから、他の遺構の築造にともなって人為的に埋められたものらしい。

＜掘立柱建物跡＞　斜面を削平して設けた平場につくられている。柱間寸法は170～225 cm、柱穴径は30 cm前後、深さは65～85 cmである。平安時代の住居跡の一つに重複してこれよりは新しく、また、後述する「畝状遺構」の畝間にみられる暗灰色火山灰に覆われている。現段階では暗灰色火山灰の降下年代が不明で、柱穴からの出土遺物もないため、遺構の時期も現段階では不明とせざるを得ない。

＜土坑＞　平安時代に属する土坑は7基あり、底面に焼土と炭化物が広がるものが多い。このうち1基では中央に扁平な花崗岩が据えられ、その周囲からフイゴの羽口・鉱滓が溶着した土師器片が出土していることから、鍛冶関連の遺構と推定される。

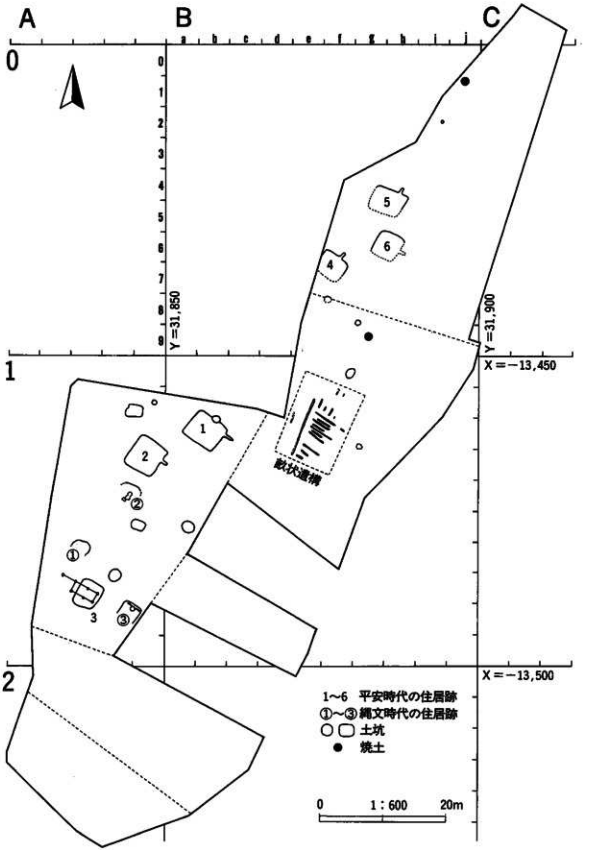
縄文時代のものとみられる土坑は3基で、このうち上述の住居跡と同様の面で検出された1基は、隅丸長方形を呈し平坦な床面をもっている。

＜畝状遺構＞　斜面に直交・平行して並列する複数の溝状の遺構を一括して「畝状遺構」とした。これらの溝はいわゆる「畝間」にあたるとみられ、粗粒で暗灰色の火山砕屑物と黄褐色で非常に細かい火山砕屑物が堆積して極めて明瞭な状態で検出された。しかしこれに伴う遺物はなく、火山砕屑物の時期も現段階では不明なため詳細な検討は火山灰分析の結果を待って行ないたい。

＜出土遺物＞　縄文時代早期～晩期の土器・石器、平安時代（9世紀後半～10世紀）の土師器・須恵器・各種鉄製品、近世陶磁器片が出土している。縄文時代では前期の土器が主体となる。また平安時代の遺物の大半は住居跡から出土しており、土師器に比べ須恵器が非常に少ない。

3．まとめ

調査の結果、調査区とその周辺は縄文時代から現代に至るまで断続的に人間に利用されてきたことが判明した。特に縄文時代前期と平安時代の一時期には複数の住居を設けて集落を形成し、日常生活の中心的な場として利用されていたようである。また、平安時代の一般的な集落から鍛冶の痕跡が検出されたことは当時の生産活動を復元するのに良好な資料となった。今後、火山砕屑物をはじめとする各種分析を待ってさらに検討を加え、より詳細な遺跡の復元につとめたい。



芦名沢Ⅰ遺跡遺構配置図

調査区全景（南東上空から）

平安時代の竪穴住居跡

雁股鏃出土状況

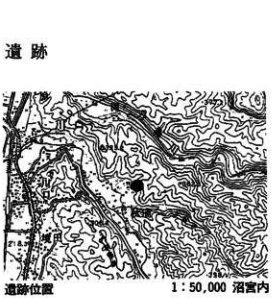
縄文時代の竪穴住居跡

畝状遺構

芦名沢Ⅰ遺跡検出遺構・遺物出土状況

(16) 秋浦（あきうら）Ⅰ遺跡

所在地	岩手郡岩手町大字川口第19地割字門前75－2ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成9年6月17日～11月14日
調査対象面積	5,000 m²
発掘調査面積	4,217 m²
遺跡番号・略号	ＫＥ38－0112・ＡＵＩ－97
調査担当者	古館貞身・柴田慈幸・鳥居達人 木戸口俊子・佐々木志麻
協力機関	岩手町教育委員会



1．遺跡の立地

秋浦Ⅰ遺跡はＪＲ東日本東北本線岩手川口駅より東1.6 km付近に位置し、西流して北上川に注ぐ古館川の右岸に形成された河岸段丘上に、南西に面して立地している。

遺跡の標高は250 m前後、古館川との比高は約20 mであり、今年度の調査区は南北に細長く、現況は水田と畑地になっている。

なお、本遺跡の南側には秋浦Ⅱ遺跡がある。

2．調査の概要

本遺跡は、元々は畑地であったが、昭和38年頃に大規模な開田事業が行われ、緩斜面及び沢状の地形が、南北に平らで、東西に段をなす田圃に造成された。その際、大量の遺物が収集されたと聞いていたため、浅い面での遺構検出はかなり難しいものと思われたが、場所によっては予想に反してかなりの数の遺構を検出し、また遺物も出土している。

調査区の北側は遺構、遺物とも疎らであるが、中央部より南側は住居跡、土坑の重複が著しい遺構密集区域であり、それに伴い遺物も多量に出土している。

調査により検出した遺構は下記のとおりであるが、それらは主に縄文時代中期の住居跡と土坑であり、他に土師器をともなう住居跡、集石、近世墓等がある。

＜竪穴住居跡＞　検出した住居跡は33棟である。そのうち縄文時代のもの30棟、他は平安時代のもの3棟である。

縄文時代の住居跡は調査区中央部から南側に密集しており、平面形はほとんどが円形もしくは楕円形である。最大で径約9 mをはかるものが3棟あり、いずれも壁高は90 cm～1 mで、壁溝をめぐらせ、しっかりした複式炉をもっており、大木系（8 b～9）の土器が出土している。

他の27棟は重複あるいは削平により全体形状について言及出来るものは少ないが、径ほぼ4～6 mのものが多く、複式炉をもつもの、石囲炉をもつものと様々である。

平安時代の竪穴住居跡については調査区の北側と中央部さらに南側の3カ所で1棟ずつ検出されたが、こ

のうちのカマド跡を検出できた2棟については、いずれも東壁にカマドが設けられている。

<土坑> 122基検出した。そのうちフラスコ状を呈するものは61基で、いずれも調査区南側の住居跡が密集している区域からの検出である。底部径で最大のものは2.4m、開口部径と底部径の比で最大のものは2.75倍（開口部径0.8m・底部径2.2m）、深さで最大のものは1.7mであるが、平均的な大きさは開口部径1m、底部径1.7m、深さ1.3m前後である。その他は円形及び不整円形の柱穴状土坑が多い。

土坑から出土した土器のうち完形に近いもののほとんどはフラスコ形土坑の中からの出土であり、大木系のキャリパー形深鉢形土器、円筒上層式深鉢形土器が出ている。

<炉跡> 12基検出した。削平や遺構の重複によるものと思われるが、いずれも周囲に住居跡としての床面や柱穴は確認できなかった。

<焼土遺構> 28基検出した。水田の耕作土を除去した時点で検出したものもあり、所属時期はかなり新しいものも含まれる。

炉跡と同じく現地性のものについては、周囲に住居跡としての痕跡を確認出来なかった。

<陥し穴状遺構> 遺構が集中している地点から北に約70m離れた所で、東西方向に並ぶかたちで2基検出した。間隔は約15m で、埋土中からの出土遺物はない。

<柱穴> 265基検出した。その中には、比較的新しい近世あるいは近現代のものもあるが、縄文時代の住居跡と同じ面で検出されたものが多数あり、これらの中には建物を構成するものもある。

また、径70～80cm、深さ100cm前後のものが数基あるが、これらにより掘立柱建物になる可能性があり、今後検討を要する。

<集石遺構> 5基検出した。いずれも不整形で、縄文時代のもの1基、平安時代のもの2基、時期不明のもの2基である。このうち平安時代のものはいずれも下に焼土を伴い、集石を構成している角礫も火熱をうけている。

<その他> 近世墓4基（うち1基は馬を葬ったものであった）と祠跡と思われる石組みを検出した。

<出土遺物> 縄文土器が大コンテナ79箱と圧倒的に多く、その時代、時期は縄文時代中期を挟んで前期後半から後期にかけての円筒下層式、円筒上層式、大木7a～10式、十腰内式などである。土師器・須恵器片は中コンテナ1箱、土製品は円盤状土製品96点、三角柱状土製品1点、斧状土製品9点他である。特に斧状土製品については複式炉をもつ大型住居に付随して出土している。

石器は礫石器・剝片石器併せて654点出土しており、特徴として磨製石斧が多いのが目に付く。

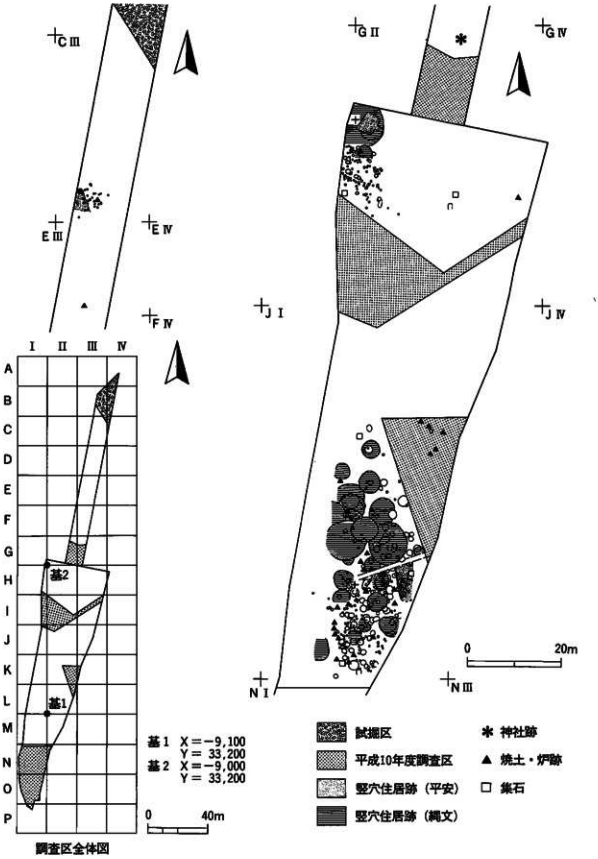
他に、近辺に近世墓や観音堂があったためか、古銭が59点出土しており、古くは中世にまで遡るものもある。

3．まとめ

今回の調査で、秋浦Ⅰ遺跡は主に縄文時代中期のかなり大規模な集落跡であり、また縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判明した。さらに調査区内で当時の沢状の地形を挟んで2カ所に縄文時代の居住域が分かれていることから、土地の使い分けが行われていた可能性がある。

今後大型の住居跡と土坑の関係、円筒上層式土器と大木系土器の関係等を検討していかなければならない。

なお、今年度の調査で終了したのは4,217m² で、未了となった部分は次年度以降の継続調査となった。



調査区全体図

秋浦Ⅰ遺跡遺構配置図

遺跡全景

縄文時代住居跡

遺物出土状況（土坑内）

斧状土製品出土状況

注口土器出土状況

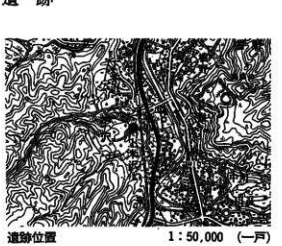
平安時代住居跡

平安時代の集石遺構

秋浦Ⅰ遺跡検出遺構・遺物出土状況

(17) 下村遺跡

所在地	二戸市米沢字上村20－1ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成9年7月1日～9月5日
調査対象面積	4,300 m²
発掘調査面積	4,300 m²
遺跡番号・略号	ＩＥ99－1393・ＳＭ－97
調査担当者	下田隆衛・岩渕　計 佐々木志麻
協力機関	二戸市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000　(一戸)

1．遺跡の立地

下村遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線斗米駅の南約500 m に位置しており、遺跡の標高は105 m～110m 前後である。本遺跡は、継続調査の2年次に当たり、今年度は昨年試掘した区域に新たな買収地を加えたＤ区の調査を行った。今年度の調査区は北側と南側に分かれている。北側調査区は、底辺約20 m、高さ約30 m の二等辺三角形の様な形状である。昨年度の試掘では集石遺構の様なものが確認されたが、更に試掘をして調査した結果遺構の存在は確認できなかった。南側調査区は、南北の長さが約70 m、東西の長さが約70 m の方形状である。南側調査区の北側は、沢の侵食によって遺構の存在を確認できず、また東側は線路工事の影響によって削平され遺構・遺物ともになかった。したがって、主に調査を行ったのは西側の約3,000 m² の区域である。本遺跡は、北側の沢により形成された河岸段丘上にあり、南側にも沢が流れている。そのため数回にわたって遺跡が水による侵食を受けている。また、主な調査区のほとんどは畑地で耕作による攪乱も多く受けている。現況は原野、畑地、果樹園である。

2．調査の概要

本遺跡は、便宜上Ａ区～Ｅ区の5つに分けているが、今回はＤ区について調査した結果のみを扱う。今年度検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、竪穴状遺構5基、掘立柱建物跡1棟、土坑12基、焼土遺構1基、溝1条、配石・集石遺構2基、柱穴状ピット及び柱穴263基（遺構にともなうものか検討中のものも含む。）などである。また、出土遺物は縄文時代の土器・石器類、近世の陶磁器類などである。

＜竪穴住居跡・竪穴状遺構＞　竪穴住居跡は、Ｄ区南側で1棟検出された。遺構の時期は、検出された遺物から縄文時代中期頃のものと考えられる。埋土と床面直上から多量の炭化物が出土しており、恐らく焼失住居跡であろう。5 m×4 m の楕円形を呈する。石囲い炉を中央からやや西側にもち、炉の内部には大型の土器の瓶を割って敷き詰めていた。竪穴状遺構は、Ｄ区南側で5基検出された。円形または楕円形を呈しており、果樹の根により壁の一部が壊されて不明瞭なものが多い。遺構の時期は、縄文時代後期以後のものが3基、前期頃のものが2基である。中でも縄文時代後期に属すと思われる遺構は、直径10 m の円形を呈している。中央に集石らしきものをもつが、それが炉であるか、それとも他の施設であるかは不明である。

＜掘立柱建物跡＞　掘立柱建物跡は、Ｄ区南側で検出された柱穴群の中から1棟見つかった。3間×2間よ

り大きな建物跡であると思われるが、近くにもう1棟存在する場合も考えられ、詳しくは現在調査中である。遺構の時期は、近くから出土した陶磁器により近世であることも考えられるが、詳細は不明である。

<土坑>　土坑は、D区南側で12基検出された。このうち、遺物等から時代の特定ができたものは、6基でいずれも縄文時代前期頃であると思われる。他の遺構の時期は、縄文時代中期から後期にかけてのものと推定されるが、詳細は不明である。用途については、縄文時代前期の土坑群から墓坑である可能性のあるものが1基検出されている。

<焼土遺構>　焼土遺構は、D区南側で1基検出された。詳細については不明だが、遺構が集中する区域から西側にも縄文時代頃の遺構が存在していたことが推測される。

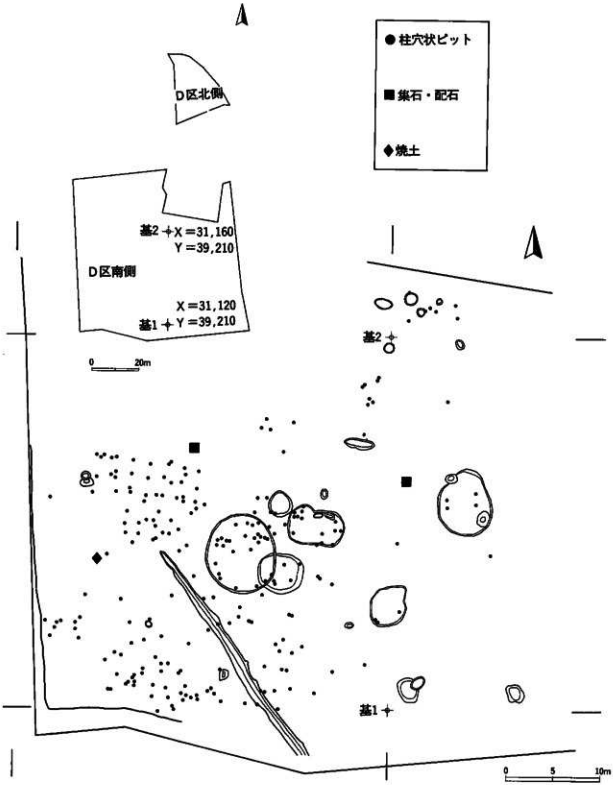
<溝跡>　溝跡は、D区南側で1条検出された。溝の長軸は約26m、短軸が約1mである。北側から南側に流れており、自然にできたものであると思われるが、畑地の施設であった可能性もある。遺物は、縄文時代中期以後のものや陶磁器類が出土している。

<配石・集石遺構>　配石遺構は、D区南側で1基検出された。石皿、台石と思われる石が半円状に並んでいるが、沢の侵食を受けた可能性もあり全容は不明である。遺構の時期は、縄文時代後期の遺構の検出面と同じであることから、同時期のものと推測される。集石遺構は、D区南側で1基検出された。遺構の時期は、縄文時代前期から中期にかけてと思われる。埋土の上層部分から貝の化石と凹石が出土しているが、詳細は不明である。

<出土遺物>　出土遺物は、土器・大コンテナ約3箱、石器・大コンテナ約1箱、陶磁器類3点、土師器5点、土製品10点などである。土器は、縄文時代中期以後のものが多いが、各時期にわたって出土している。昨年の調査でも、流れ込みによると思われる遺物が多数出土しており、調査区の西側の山の中腹に縄文時代の遺跡が存在していると推測される。

3．まとめ

本遺跡の特徴は、掘立柱建物跡などの近世の遺構が多数検出されたことであった。これによって、遺跡周辺の人々の生活の様子が、大分浮き彫りにされてきたようである。しかし、昨年度までの調査では縄文時代以前の遺構の存在が確認できず、周辺の遺跡との特異性のみが強調される結果となってしまっていた。だからこそ、今年度縄文時代の遺構の存在が確認できた意義は大きい。二戸市周辺の遺跡との比較検討を進めるに当たって、今年度調査して得られた資料が有効に活用されることを望む。


● 柱穴状ピット
■ 集石・配石
◆ 焼土
D区北側
D区南側
基2 X＝31,160
Y＝39,210
X＝31,120
基1 Y＝39,210
0 20m
基2
基1
0 5 10m

下村遺跡遺構配置図

調査区南側柱穴群

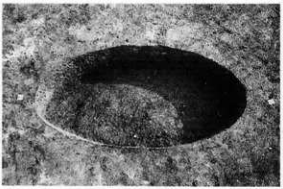
掘立柱建物跡

縄文中期竪穴住居跡

土器片を敷きつめた炉跡

土坑断面

土坑・遺物出土状況



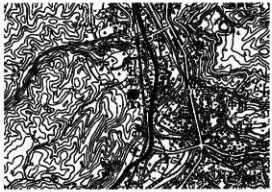
墓坑？

石斧出土状況

下村遺跡検出遺構

(18) 上村遺跡

所　在　地　二戸市米沢字上村139ほか
委　託　者　日本鉄道建設公団盛岡支社
事　業　名　東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間　平成9年4月9日～7月3日
調査対象面積　2,000 m²
発掘調査面積　2,000 m²
遺跡番号・略号　ＩＥ99－2320・UM－97
調査担当者　下田隆衛・岩渕　計
　　佐々木志麻
協力機関　二戸市教育委員会



遺跡位置　1：50,000（一戸）

1．遺跡の立地

上村遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線斗米駅の南約850 m に位置している。調査区は、方形状をしており南北の長さは約100 m、幅は約35 m である。南側（A区）は山林で、遺構の存在が確認できなかったため、試掘にて調査を終了している。また、北側（C区）は水田跡で、北側に沢が流れている。この沢は、東側に流れる馬淵川に流れ込んでおり、調査区の扇状地形を形成している。C区においても遺構の存在は確認できず、試掘にて調査を終了している。主な調査を行ったのは、調査区中央部（B区）で、現況は原野、畑地、果樹園である。遺跡の標高は105 m～108 m 前後だが、山林部では120 m を越える。

2．調査の概要

本遺跡は、便宜上A区～C区の3つに分けている。主な調査区であるB区は、沢の侵食を受けている北側と南側に分けられる。北側は、土層断面を観察すると少なくとも4回以上の水による侵食を受けており南部浮石の二次堆積層が厚く積もっている。今年度検出された遺構は、竪穴住居跡25棟、竪穴状遺構5基、掘立柱建物跡1棟、土坑47基、炉跡・焼土遺構7基、溝2条、配石・集石遺構5基、埋設土器10基、柱穴状ピット及び柱穴236基（遺構にともなうものか検討中のものも含む。）などである。また、出土遺物は弥生時代から縄文時代の土器・石器類、近世の陶磁器、古銭などである。なお、掘立柱建物の柱穴からは、僅かながら柱根も出土している。

＜竪穴住居跡・竪穴状遺構＞　竪穴住居跡は、B区から25棟検出された。遺構の時期は、検出された層位や遺物から縄文時代前期から弥生時代にかけてのものと考えられる。これらは、およそ次の形式に分類できる。円形を呈するものと隅丸方形及び楕円形を呈するものである。円形のものは直径3 m～4 m 程の小規模なものが多く、中央に石囲い炉をもつことから縄文時代後期以後の遺構であると考えられる。ただし、B区東側と南側で検出された遺構は比較的規模が大きく直径8 m を越えるものもある。これらは縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺構と思われるが、遺物の比較検討にまだ若干の時間を要するため時代の確定については本報告で述べるつもりである。隅丸方形及び楕円形のものは4～5 m×3～4 m 程の中規模のものが多い。縄文時代中期から後期にかけての遺構と考えられるが、南部浮石を含む層から検出された1棟は縄文時代前期のものである。壁の高さが1 m 程もあり、中央に地床炉の跡が見られる。竪穴状遺構は、B区中央部

で5基検出された。円形または楕円形を呈しており、住居跡とほぼ同様の規模である。しかし、柱穴配置は明確でなく、炉等の施設も見られない。時代は縄文時代中期に属するものが多いと思われるが、それぞれの遺構の関連性においては更に検討を加えたい。

＜掘立柱建物跡＞　掘立柱建物跡は、B区南西側で1棟検出された。全容については不明だが、調査区外の西側と北側に柱穴の列が伸びていると推測される。遺構の時期は、東側10mの地点で寛永通貨が出土していることから江戸時代であることも考えられるが、更に新しい時代のものである可能性が高い。

＜土坑＞　土坑は、B区で47基検出された。このうち、遺物等から時代の特定ができたものは、14基である。遺構の時期は、縄文時代中期から後期にかけてのものが多いが、更に新しい時期のものもあると思われる。用途についてはそのほとんどが不明である。

＜炉跡・焼土遺構＞　炉跡・焼土遺構は、B区7基（遺構にともなうものか検討中のものも含む。）検出された。遺構の時期は縄文時代中期以後のものである。遺物から時代を推測できるものは3基で、縄文時代中期頃と思われるものが1基と縄文時代後期から晩期にかけてと思われるものが2基である。そのうちの1基は土器埋設炉で、詳しくは現在調査中である。B区南側からは、比較的新しい時代のものが検出されている。

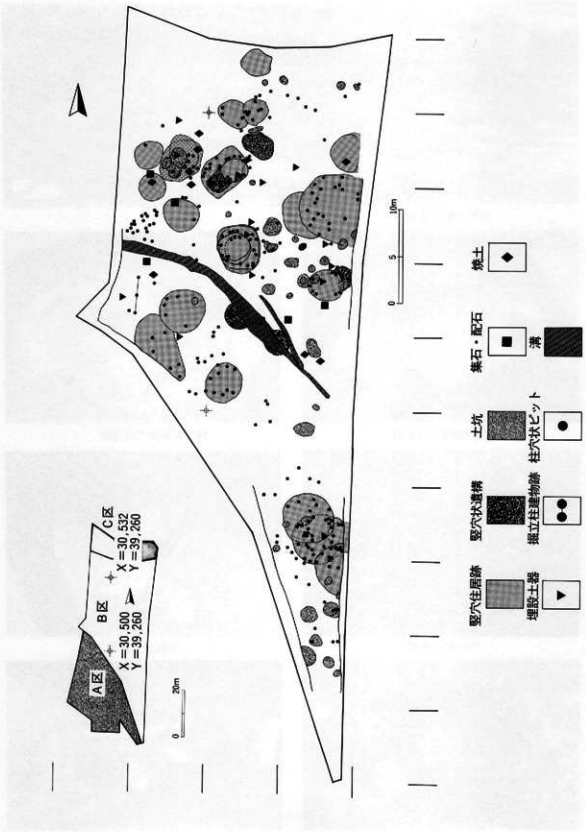
＜溝跡＞　溝跡は、B区中央部を横切る様に2条検出された。1条は長軸が約11m、短軸が最長で約0.8mである。もう1条はその支流と考えられ、長軸が約4m、短軸が約0.3mである。どちらも西側から南東方向に流れており、自然にできたものであると思われる。遺物は、縄文時代各時期にわたるものが出土しており、流れ込みによるものである。

＜配石・集石遺構＞　配石遺構は、B区で1基検出された。縄文時代後期の遺構の検出面に凹石や石皿などの石器が直径2m程の円周上に配置されたように見える。木の根により攪乱されているため不明確な部分もあるが、周囲の遺構との関連性も含め現在調査中である。集石遺構は、B区で3基検出された。遺構の時期は、縄文時代後期以後であると思われるが、詳細は不明である。

＜出土遺物＞　出土遺物は、土器・大コンテナ約28箱、石器・大コンテナ約11箱、陶磁器類8点、石製品4点、土製品22点、古銭1点などである。土器は、縄文時代中期の占める割合が高く、B区中央部の遺構と包含層から多数出土している。縄文時代の各時期のものが出土しているが、晩期から弥生時代にかけての特徴のある土器（大洞Ａ式～砂沢式）が出土しており、遺構との関連性を調査中である。

3．まとめ

本遺跡とその周辺には、弥生時代の集落跡が存在する可能性もあり、もしそれが明らかになれば縄文時代中期以後の人々の暮らしについて、時代を追って検証できるであろう。


A区
B区
C区
X=30,500
Y=39,260
X=30,532
Y=39,260
0
20m
0
5
10m
竪穴住居跡
竪穴状遺構
土坑
焼土
埋設土器
掘立柱建物跡
柱穴状ピット
集石・配石
溝

上村遺跡遺構配置図

大型の竪穴住居跡

縄文後期竪穴住居跡

縄文前期竪穴住居跡

円形配石遺構？

土器出土状況

土器出土状況

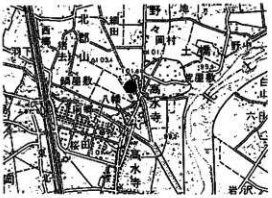
石棒出土状況

上村遺跡検出遺構

Ⅲ. 岩手県・市関係

(19) 稲村（いなむら）II 遺跡

所　在　地　紫波郡紫波町高水寺字稲村23－5ほか
委　託　者　岩手県盛岡地方振興局
事　業　名　中小河川岩崎川改修
発掘調査期間　平成9年8月5日～9月30日
調査対象面積　2,030 m²
発掘調査面積　2,030 m²
遺跡番号・略号　ＬＥ57－1039・ＩＭII－97
調査担当者　濱田　宏・平澤里香
協力機関　紫波町教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 日詰

1．遺跡の立地

稲村II遺跡は、ＪＲ東北本線古館駅の東北東約1.5 km付近の国道4号線にかかる三枚橋の西側に位置する。遺跡は、岩崎川と五内川に挟まれた場所にあって、岩崎川沿いの自然堤防状の微高地上に立地している。調査区内の標高は100.3～100.5 m とほぼ平坦な地形である。調査前の状況は、畑地および宅地で、一部は住宅移転後の荒地であった。

2．調査の概要

今年度の調査は昨年度からの継続調査で、調査面積は昨年の約3分の1である。調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構10基、奈良時代の竪穴住居跡10棟、土坑3基、墓壙1基、溝跡3条が確認された。

今年度も宅地開発に伴う、同じ稲村II遺跡の発掘調査が紫波町教育委員会によって継続して行われ、当センターと同様の遺構が検出されている。

＜陥し穴状遺構＞　検出された10基は、すべて溝状を呈する。規模は、長さが2.0 mほどの小型のもの1基、3.5～4.0 m程度のもの9基で、これらのうち4基は、遺構上部が宅地造成の際に削平されている。

＜竪穴住居跡＞　10棟すべてが奈良時代（8世紀代）の住居跡と思われる。平面形は、方形を呈するものがほとんどである。最大規模のものは一辺が9.0 m とかなり大型であるが、壁の高さは20 cm と浅い。この他は、一辺が3.0～5.0 m前後である。いずれもカマドを有するが、その設置される方向は、北・北西・西の3方向に分かれる。これが時期差を示すものかは今後検討したい。

＜土坑＞　検出された3基のうち、古代に属するものは2基で、1基は時期不明である。

＜墓壙＞　ガラス玉1個と土師器を伴う墓壙が1基確認された。規模は長軸2.0 m、短軸0.8 m で、主軸方向は南北方向から僅かに東に振れている。時期は住居跡とほぼ同じ8世紀代と考えられる。

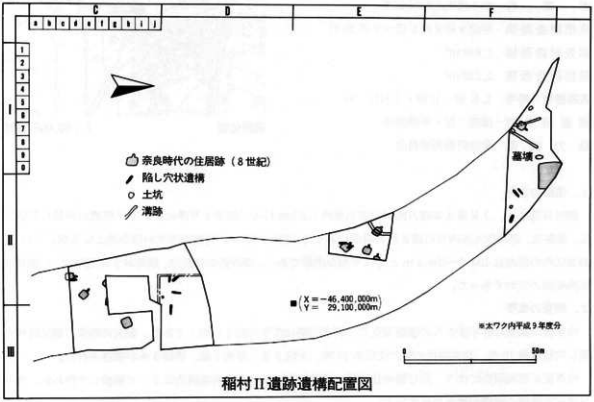
＜溝跡＞　3条検出されているが、いずれも時期は不明である。うち1条は住居跡と重複しているが、住居跡より新しい遺構である。

＜出土遺物＞　土器は、ロクロを使用していない土師器の坏・甕・壺・甑があわせて大コンテナ3箱分出土した。ほとんどは住居跡と墓壙から出土したものである。石器は、住居跡に伴う砥石がわずかにみられる程度で、その他には、釘・刀子・鋤先などの鉄製品や土製勾玉・土玉などの土製品、前述のガラス玉などが出

土している。

3．まとめ

今回の調査によって、本遺跡は昨年同様、縄文時代には動物の狩り場として、奈良時代には大集落として、人々の生活の場となっていたことが明らかとなった。特にも奈良時代には、一辺９ｍの大型住居や同じ時期のガラス玉や鉄斧といった副葬品を伴う墓壙がみつかったことで、集落内にかなりの有力者が存在していたことが予想される。



稲村Ⅱ遺跡遺構配置図

遺跡遠景

(20) 長谷堂貝塚（はせどうかいづか）

所在地	大船渡市猪川町字中井沢78番地2
委託者	岩手県大船渡地方振興局
事業名	県営長谷堂住宅（長谷堂アパート）建替
発掘調査期間	平成9年6月17日～11月14日
調査対象面積	2,700 m²
発掘調査面積	2,700 m²
遺跡番号・略号	ＮＦ39－1151・ＨＳＤ－97
調査担当者	金子昭彦・早坂　悟 鈴木　聡・中野敦夫
協力機関	大船渡市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 縮

1．遺跡の立地

長谷堂貝塚は、東日本旅客鉄道大船渡線盛駅の北東約1.2 km に位置する。現地形で海岸から約3 km ほど北側に位置し、大船渡湾周辺の貝塚の中で最も北側にある。砂礫段丘に立地し、崖錐堆積物に覆われ、西側に下がる斜面にある。標高は26 m 前後で、現況は宅地であった。

2．調査の概要

今回の調査は、昨年（調査面積550 m²）に引き続いて行われたもので、その周囲を調査した。検出された遺構は、竪穴住居跡17棟、掘立柱建物跡8棟、土坑217基、柱穴状土坑62基、土器埋設遺構3基、焼土3基などで、今年も貝層は検出されなかった。

今回の調査区は全て削平を受けているが、斜面上方の土を下方に押して平坦面を作っていることや慎重な工事が行われた部分もあって、その度合いは様々である。昨年の調査区を中心にすると、その北から西（以下、北西区と称す）は削平は浅く残りが良い。東側の狭い部分（以下北東区）も同様である。南側は何れも深く削平されているが、特に西半部（ここを南西区とし、残りを南東区と称す）の削平が著しい。遺構配置図の遺構の分布の多寡は、以上の削平の度合いにかなり左右されていることをお断りしておく。

＜竪穴住居跡＞　北西区の北部および北東区から、17棟検出された。何れも残りは非常に悪く、柱穴だけのものがほとんどで、炉跡が検出されたのは2棟のみである。時期を特定するのは難しいが、周囲から出土した土器などから、何れも縄文時代末～弥生時代初頭と思われる。なお、1棟は、土坑内から埋甕（壺）が検出された（上面は石の蓋で覆われていた）。

＜掘立柱建物跡＞　特に残りの悪い南西区を除いた部分から8棟検出した。土坑に含めた中にも掘立柱建物跡の柱穴と思われるものが多く含まれているが、建物跡を復元することはできなかった。六本柱六角形が3棟、六本柱長方形の可能性のあるものが1棟、四本柱四角形が4棟で、五本柱五角形が1棟あるが、六本柱六角形のうちの1つの柱穴が土坑の重複によってなくなってしまった可能性もある。出土遺物がほとんどないので時期の特定が難しいが、墓壙と重複するものは何れも墓壙より古く、埋土がフラスコ状土坑とよく似ていることから、フラスコ状土坑に近い時期と思われる。縄文時代（晩期末より古い）であることは確実で

ある。

<土坑> 217基検出した。これらは、平面形・規模、断面形、埋土の特徴、出土遺物、他の遺跡の調査例との比較から、墓墳と考えられるもの、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるもの、貯蔵穴と考えられるもの、その他不明のものの四つに分けられる。不明としたものも、特に変わった特徴を持つわけでなく、実際には上記のいずれかに含まれる可能性が高い。

墓墳と考えられるものは、約70基ある。掘り込みが浅いせいか、比較的残りの良い北西区の特に西寄りに多く検出された。重複が著しい。人骨が出土したのは3基、何れも残りは悪い。副葬品としてヒスイ玉が出土したのが2基、埋土上層から完形土器が出土した（供獻品と考えられる）のが2基、墓壙の壁の周りに礫を巡らしたものが約10基、ベンガラが埋土から出土したものが約30基ある。上面に一抱えもある礫を持つものも比較的多く見られたが、本来は全て持つのかも知れない（削平されたために、なくなった？）。また、ある墓壙は覆土中部に炭化材が全面に広がっており、さらに底面に砂利を敷き詰めて浅鉢形土器を伏せて載せ、その上にベンガラを多く振りかけている墓壙もあった。平面形は、楕円形～隅丸方形、規模は1.5×1m程度のものが多いが、円形のものや70cm程度の小さなものもあるようである。

柱穴と考えられるものは、約50基ある。特に削平が著しい南西区を除いた調査区全域から検出されている。出土遺物が少ないので時期にはっきりしない。

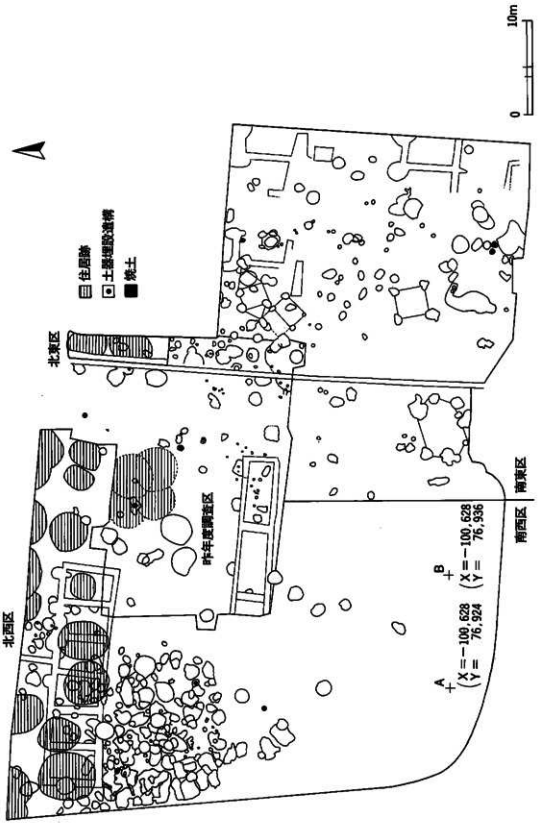
貯蔵穴と考えられるものは、16基ある。1基のみ異なる特徴（特に埋土）を持っており、規模が小さく底部付近から縄文時代晩期初頭の注口土器、石棒の破片等が出土し、南東区の東寄りに検出された。その他は皆類似しており、規模が大きく、ねっとりとした特徴的な埋土で、縄文時代中期前葉（大木7a式）の土器が出土する。深く掘り込んでいるせいか、調査区のほぼ全域から、散在する形で発見された。

<土器埋設遺構> 3基検出した。それぞれ離れているが何れも北西区の墓壙群のそばである。2基は土器より少し大きいだけの穴を掘り込んで埋設しているが、1基は通常の土坑中に埋設されていた。時期は、縄文時代晩期～弥生時代初頭である。

<出土遺物> 土器が大コンテナで約27箱、石器類が中コンテナで約25箱出土しているが、その2/3は盛土から出土したものである。土器は、縄文時代中期前葉、後期中葉、後期後葉、晩期初頭～前葉、晩期終末～弥生時代初頭のものがあるが、遺構から出土するのは、ほとんどが中期前葉と晩期末～弥生時代初頭のものである。石器は、獲器類などもあるが、大多数を占めるのは磨敲器類、打製石斧などの礫石器である。その他、土偶、装飾品などの土製品が約30点、石棒、装飾品などの石製品が約10点出土している。貝類、骨角器等は検出面以下からはほとんど全く出土しなかった。

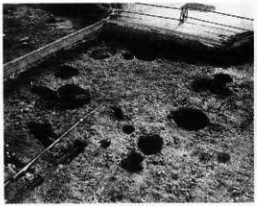
3．まとめ

昨年からの調査で、竪穴住居跡23棟、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡8棟、土坑248基、土器埋設遺構6基、焼土6基、集石遺構3基が検出された。焼土及び集石遺構は近世以降の可能性が高い。今回の調査区は、縄文時代中期以来、弥生時代に至るまで多くの時期に様々な使われ方をしてきたようであるが、削平されているため、その痕跡は少なく、推測するのは難しい。しかし、縄文時代末～弥生時代初頭の集落跡は、比較的多くの痕跡を残し、居住域と墓域の明確な区別、様々な埋葬法など、この地域の当時の暮らしを復元する上で重要な役割を果たすことと思われる。


住居跡
土器埋設遺構
焼土
北東区
北西区
南西区
南東区
昨年度調査区
A
(X = −100,628
Y = 76,924)
B
(X = −100,628
Y = 76,936)
0
10m

長谷堂貝塚遺構配置図

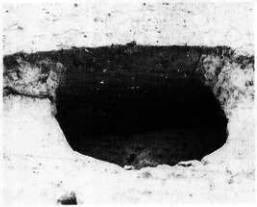
調査区の様子と土坑（墓壙を主とする）集中区（南から）



掘立柱建物跡

柱痕跡が見られる柱穴

配石を持つ墓壙



フラスコ形土坑

長谷堂貝塚検出遺構

(21) 北野（きたの）IV 遺跡

所　在　地　水沢市真城字北野21－1ほか
委　託　者　岩手県水沢地方振興局
事　業　名　県営北野住宅（北野アパート）建替
発掘調査期間　平成9年4月14日～6月17日
調査対象面積　3,600 m²
発掘調査面積　3,600 m²
遺跡番号・略号　NE 26－2359・KNIV－97
調査担当者　晴山雅光・菊池貴広
協力機関　水沢市教育委員会

遺跡位置　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

本遺跡は、水沢駅より南東約3.0 km、北上川より西へ約2.5 kmに位置し、県営北野団地内にあり、近隣には大手電気メーカー（日立）の工場用地が広がっている。

北上川の西岸に形成された水沢段丘にあり、標高が40 m前後で、河岸に向かってわずかに傾斜のある微高地に立地している。北側には寿安下堰が流れ、旧県営アパートが建設される以前は、調査区北半分はりんご畑、南半分は水田として利用されていたようである。

水沢市の北側には9世紀以降から朝廷の東北経営の拠点となった鎮守府、胆沢城跡があり、また調査区の北方500 mには、胆沢城の存在とほぼ同時期と思われる林前遺跡という水沢市で発掘調査した、平安時代の遺跡がある。

2．調査の概要

今回の調査は、平成8年度調査区に隣接する北側を引き続き調査したもので、現存住宅を一部取り囲む形で行なわれた。昨年度調査や試掘調査などから、縄文と平安の2面での検出が考えられたが、試掘の結果や地層がかなり改変されていることなどから、地山面での同時検出を行なった。その結果、地山面で、旧住宅に関わる攪乱や埋め戻し跡が不規則かつ全面にわたって点在しており、地層を大きく改変する風倒木のようなもの、住宅の基礎部分に黄褐色粘土を埋め戻したもの、砂利を埋め戻したもの、砂場であったもの、など様々であった。その面積をまとめると、おおよそ調査面積の3分の1強になるものと思われる。また、調査区一帯は住宅地であり、騒音や安全について周辺への配慮や、電流の流れる地下ケーブルなど、現況の保全に注意が必要な遺跡調査であった。

(1) 検出された遺構

今回の調査では、平安時代と思われる竪穴住居跡1棟、比較的新しい時代と思われる柱穴状ピットが92基、時代不明の土坑が14基、陥し穴状遺構が1基、溝状遺構が1条、井戸跡1基が検出された。

竪穴住居跡については、焼土やカマドの煙道と思われる平面プランから、わずかな立ち上がりをつないで検出したものである。柱穴状ピットの中には、須恵器片を底面近くに包含しているものもあり、埋土の様子から、大きく二分できる。土坑については、形状の不確定なものなども大きく含め、埋土などから大きく新

しいものと古いものに分けられるが、遺物をほとんど含んでいないことから時期の確定は難しいと思われる。

唯一、遺物を多く含んだ井戸跡は、人為的に埋め戻され、下層は粘土質の土を、上層には小石や土器片を多く含んだ土を埋め戻した形跡がある。また、その上には白色火山灰がレンズ状に自然堆積しており時代判定の鍵となりそうである。

(2) 出土遺物

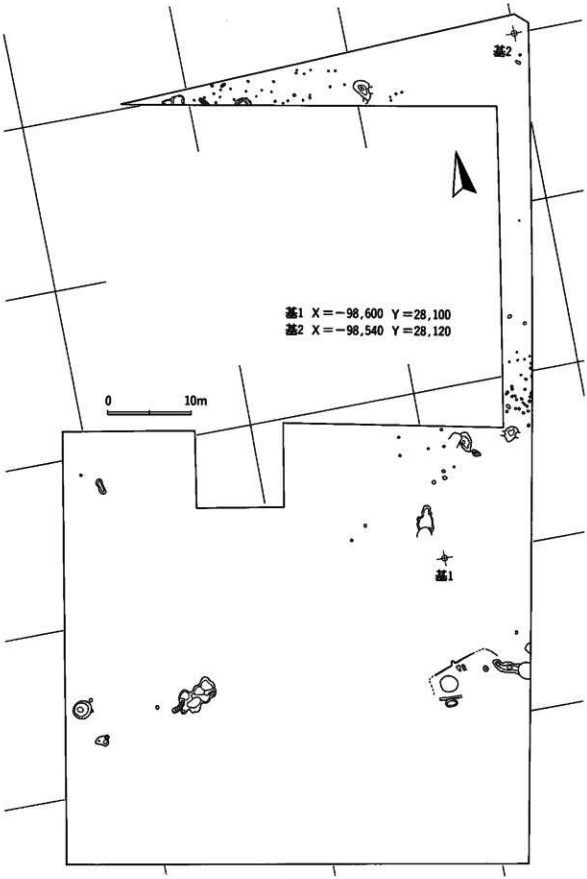
出土した遺物量は、遺構外では剝片石器が1点、縄文土器片が小1袋、土師器片が中1袋、須恵器が小1袋出土している。遺構内では石鏃2点(内1点は黒曜石)、土師器片が小コンテナ0.5箱、須恵器片が小のコンテナ1箱、井戸跡内から板状の一部炭化した木片が1点であるが、木片については形状、埋土状況から井戸枠とは考えにくい。また本遺跡出土遺物の大部分は井戸跡の埋土、上～中位層から出土したもので、磨滅の激しいものや、小さな破片が多く復元できるものは少ない。

その中でもわずかに復元されたものから、器種は土師器の坏、(内黒のものが多い)、長胴甕、須恵器の坏、壺などあることがわかった。須恵器においては、しっかりと還元炎焼成されたものと、されていないもの、また還元炎焼成途中のものがあった。

3．まとめ

縄文時代と平安時代の大きく離れた2つの時代の遺跡であり、当初から2面検出の是非を検討していたが試掘時点で、住宅によって地山面まで掘られ、地形の改変が著しく、地山直上の地層まで自然堆積か疑わしい所もあり、最終検出面（地山）で残されているものしか検出は不可能であった。結果的に出土した遺物は平安時代のものが大部分だが、検出した遺構の半分近くは形状、掘り方、埋土などから縄文時代のものではないかと思われる。が、伴出した遺物が少ないため明確ではない。

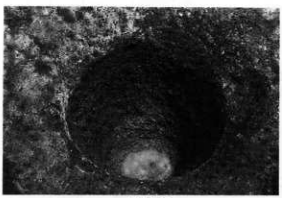
調査区全体をおおよそ総括してみると、北側半分は陥し穴状遺構などから縄文時代の狩猟場であり、また比較的新しい時代（近世～現代）の柱穴状ピットから最近の人々の痕跡をとどめる区域であったことがわかる。調査区南側は、土師器・須恵器の出土やカマド跡と思われる焼土、井戸跡などから平安時代の生活跡と思われるが、周辺遺跡との比較、とりわけ胆沢城跡出土の遺物との比較や、林前遺跡と遺跡としての性質を検討し、慎重に結論づけていきたい。



北野Ⅳ遺跡遺構配置図

調査区遠景

調査区遠景（南側から）



井戸跡

陥し穴状遺跡

カマド跡

遺物出土状況

1. 土師器(坏)
2～4. 須恵器(甕)
5. 石　　鏃

北野Ⅳ遺跡検出遺構・出土遺物

(22) 佐野原遺跡

所在地	水沢市佐倉河字佐野原35ほか
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	県道水沢・米里線道路改良事業
発掘調査期間	平成9年8月18日～10月31日
調査対象面積	2,500 m²
発掘調査面積	2,347 m²
遺跡番号・略号	ME 16－0365・SH－97
調査担当者	金子佐知子・山口俊規
協力機関	水沢市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

本遺跡はＪＲ東北本線水沢駅の北方約2.2 km に位置する。遺跡の東方約100 m には北上川が南流する。遺跡は胆沢扇状地の東端にあたり、低位段丘である水沢段丘の縁辺に立地している。標高は45～47 m である。調査開始前は畑、宅地、水田であった。国の史跡胆沢城跡は北方2.5 km の距離にある。

2．調査の概要

今回の調査で検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の竪穴住居跡5棟、住居状遺構1基、中世の竪穴建物跡2棟、土坑22基、炉跡1基、焼土遺構2基、溝2条、井戸跡1基、柱穴状土坑188基である。

＜竪穴住居跡・竪穴建物跡＞　縄文時代の竪穴住居跡は調査区の中央付近から検出された。遺構の東西は土坑にそれぞれ切られている。平面形は円形で、径は約3.5 m を測る。壁には壁溝が回り、溝の中から小柱穴が多数検出された。そのほかに床面には柱穴はない。炉は検出されなかった。埋土から縄文時代前期後葉の土器が出土している。

平安時代と思われる住居跡は調査区中央付近から5棟検出されている。ほとんどが調査区外に伸びており、1棟を除き全容は明らかでない。いくつかの住居跡は切り合っている。5Ｆ住居跡は煙道を除き全掘することができた。ややゆがんだ隅丸の方形で、一辺の長さは2.4×2.7 m を測る。遺構の上面はかなり削られているらしく、壁高は6 cm 程度である。カマドは東壁の南よりに検出された。円礫を組んで作られており、中央から土師器と須恵器の甕が底面を上にした状態で出土した。支脚として利用されていたものと考えられる。そのほか床面からは2基の柱穴が検出された。

中世の竪穴建物跡は調査区中央付近から2棟検出された。1棟は壁が削平されていて、平面形は不明である。壁溝から建物跡と判断した。一部残存する南側の壁は張り出している。規模は計測できる辺の長さが2.7 m で、柱穴は壁溝際に5基、床面に3基ある。東よりの床面に地床炉と思われる焼土が検出された。他の1棟は張り出しを持ち、隅丸方形を呈している。辺の長さは3.1×3.0 m、壁高は6～20 cm である。主に壁際に大小の柱穴がめぐる。張り出しは南側の壁にあり、ゆるやかに立ち上がる。どちらの建物跡からも建物に伴う遺物は出土していない。

＜土坑＞ 調査区の中央付近から多く検出されているが、調査区北端や南端からもいくつか検出されている。

縄文時代と考えられるものは1基で、小判形を呈し、径は1.3×0.8 m、深さは25 cmを測る。

平安時代と考えられる土坑は10基で調査区北端から南側まで広く検出されている。平面形は楕円形や隅丸長方形など多彩である。

用途が不明なものがほとんどであるが、いくつかは次のような検出状況である。

調査区中央付近で検出された土坑は埋土に焼土層があり、土器破片が多数出土した。土坑の平面形は小判形で、径は1.07×0.8 m、深さは12～17 cmを測る。土師器や須恵器の破片は焼土の中から上にかけて多数出土しており、焼土とともに廃棄された可能性が高い。

縄文時代の住居跡の東西から検出された土坑2基は一気に埋め戻したような埋土の状況から墓坑の可能性も考えられる。平面形は隅丸の長方形で長軸方向は南北である。規模は長辺が2.2～2.6 m、短辺が0.8～1.0 m、深さ15～26 cmを測る。

調査区の南西から検出された土坑は細長い長円形で、規模は3.2 m×1.0m、深さ24 cmを測る。埋土は黒褐色土が主体であるが、土坑中央の部分は壁に沿って円形に焼土が形成されており、この部分でのみ火が焚かれたことを示している。

＜炉跡＞ 調査区中央付近から検出された。平面形は円形の炉に円形の前庭部がついた8の字形で、規模は炉の部分が径70 cm、深さ17 cm、前庭部が径1.0×1.2 m、深さ19 cmである。炉の部分は壁面に焼土が形成されている。炉の底部と前庭部の一部には炭の粉の層が形成されている。また、前庭部の底には粘土が張られている。この炉の用途を示すような遺物は出土していない。

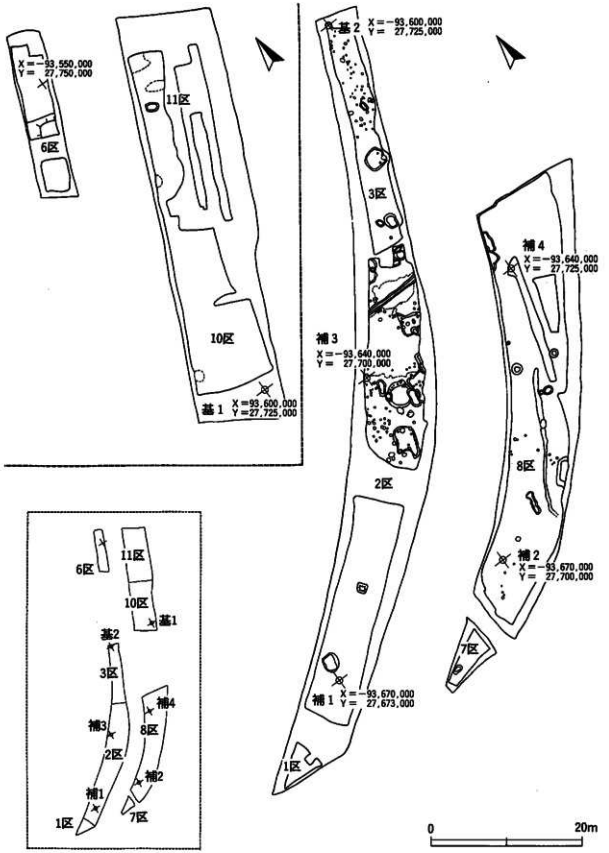
＜溝＞ 調査区中央から検出された。1条は南西から北東方向へ伸びる溝で長さ19.5 m、幅は50 cm前後、深さ10 cm前後である。他の1条は東西方向の溝で、検出部分の長さは8 m、両端は調査区外に伸びている。幅は約70 cm、深さ60 cmを測る。いずれも時期は不明である。

＜井戸＞ 調査区中央から検出された。円形を呈し、径は1.5 m、深さ2.5 mを測る。断面形は上端が開いた筒形である。底に4本の支柱を立て、その外側に横木を渡して井戸枠としている。埋土の状況から一気に埋め戻したようである。出土遺物は破片のみで、土師器、須恵器、13世紀に属すると思われる白磁があるが、遺構に伴う可能性は低い。

＜出土遺物＞ 今回の調査で出土した遺物は土器、石器合わせて3箱（33×42×30 cm）である。土器は平安時代の土師器、須恵器が最も多く、次いで縄文土器（前期、中期末、後期初頭、晩期）である。そのほか奈良時代後半～末に属すると思われる球胴壺の口縁部で、赤彩が施されているものや坏の破片、中世の青磁、近世の陶磁器がある。石器は石鏃や石匙のほか磨石類である。

3．まとめ

今回の調査で本遺跡は縄文時代、平安時代、中世に渡って集落が営まれていたことがわかった。周辺には奈良時代の住居なども存在すると思われる。遺構が多く検出される場所は各時代ともに共通している。段丘の縁辺部で、立地条件がすぐれていたのであろう。各時代の集落は主に西側に大きく広がると思われる。


X=−93,550,000
Y= 27,750,000
6区
11区
10区
基1
X=93,600,000
Y=27,725,000
基2
X=−93,600,000
Y= 27,725,000
3区
補3
X=−93,640,000
Y= 27,700,000
2区
補1
X=−93,670,000
Y= 27,673,000
1区
補4
X=−93,640,000
Y= 27,725,000
8区
補2
X=−93,670,000
Y= 27,700,000
7区
0
20m

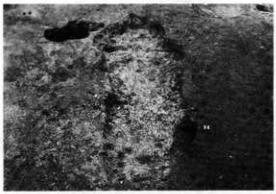
佐野原遺跡遺構配置図

縄文時代の竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡

中世の竪穴建物跡

平安時代の竪穴住居跡 カマド



土坑（平安時代）

土坑遺物出土状況（平安時代）

炉跡（時期不明）

井戸跡（中世以降）

佐野原遺跡検出遺構

(23) 西館跡（にしだてあと）

所在地	胆沢郡前沢町生母字西館46番地ほか
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	一般県道・前沢・東山線
発掘調査期間	平成9年8月1日～11月7日
調査対象面積	5,700 m²
発掘調査面積	4,720 m²
遺跡番号・略号	NE 57－0193　ND－97
調査担当者	菊池貴広・晴山愛光・村上　拓
協力機関	前沢町教育委員会

遺跡位置　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

本遺跡は、ＪＲ東日本東北本線前沢駅から東に約4.3 km、北上川から東へ約1.5 kmの、北上川左岸に発達した更新世段丘の一つに立地している。遺跡が立地する段丘は北東側と南西側を小河川によって区切られ、北西側は段丘崖となっている。また、段丘内で本年度調査区の北西側には沢を利用した堀跡が見られる。なお本年度の調査区の標高は高いところで標高約52 m、低いところで標高約47 mで、北上川との比高は、約27 m～約22 mである。調査区の現況は段々に造成された水田である。

2．調査の概要

本遺跡は、前沢町史（中巻）をひもとくと中世の守護大名葛西氏の家来である千葉民部氏が中世末期まで居城していたと言われている。葛西氏は豊臣秀吉の奥州仕置によって、1590年（天正18）に没落し、家来であった千葉民部氏も同じく没落し帰農したと言われている。その後、内崎越後守が城主になったと記されている館跡である。

調査は、調査区南東から北西にかけて順に行なった。調査区のＶＨ・ⅣＨの北西側・ⅣＧ北東側・ⅢＧ・ⅢＦ・ⅡＥ・ⅡＤは、水田造成層を剝がすと地山となり、中世の整地層は全く認められなかった。

調査の結果、ⅣＦ・ⅣＧ・ⅣＨの南側とＶＦ・ＶＧ・ＶＨの北側にかけて堀1条が、ⅢＤの北東部に土坑1基、同じくⅢＥの南西部から土坑1基がそれぞれ検出された。堀の時代は後述する出土遺物、伝承から中世の遺構と考えられる。土坑2基のうち1基は、出土遺物から近世末と考えられるものの、他の1基は時代を確定できる遺物が出土していないため時代時期は不明である。ＶＧの東部には、戦後に造成された池跡が検出された。

＜堀跡＞　東西にほぼ直線に50 mほど延びる堀で、堀の中央部から東側に向かうに従って上端がひろくなり、深さも深くなる特徴をもっている。上端は、最大幅約9 m、最小幅は約7 m。下端は、最大幅約1.5 m、最小幅は約0.7 m。深さは、最も深いところで約2.5 m、最も浅いところで約2 mである。堀の形状は、薬研堀である。埋土の上半部は、昭和20年代後半以降に水田造成された際の埋土であると思われる。堀からの出土遺物は、馬の歯7本、獣骨、瀬戸・美濃産陶器（17世紀）、肥前産磁器（18世紀）などが10数点が出土した。その他、高台の痕跡をもつ、素焼きの土器片1点、古銭5点が出土しており、古銭の内訳は熙寧元寶

1点、皇宋通寶1点、他の3点については、摩耗が著しく銭文が判別できない。

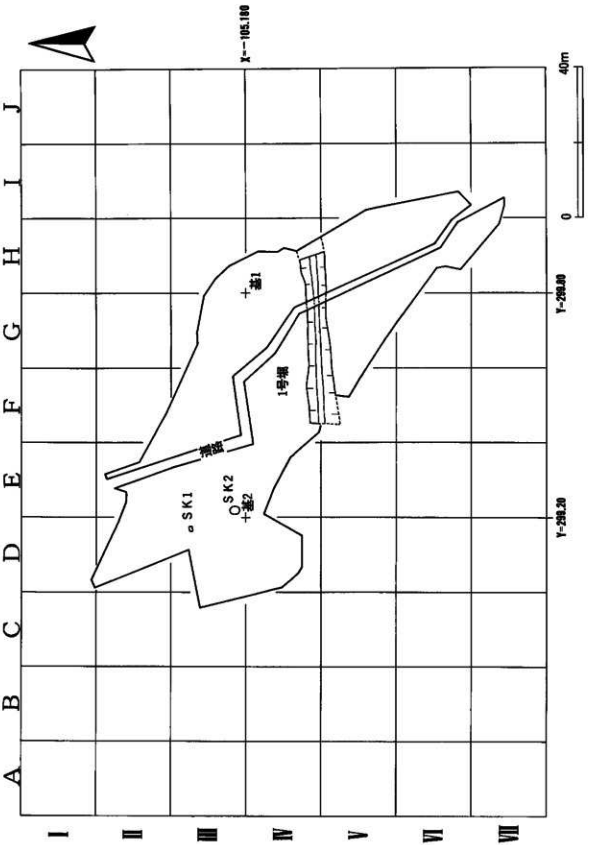
＜ＳＫ１土坑＞　平面形は、開口部は1.2ｍ×0.7mのほぼ長方形をなし、底面は0.9ｍ×0.6mを測り検出面からの深さは0.3ｍで底面は平坦である。出土遺物は、近世末の磁器片が数点出土した。

＜ＳＫ２土坑＞　平面形は、概ね円形を呈し規模は開口部径は約2.5ｍ×2.4m。底面径は1.2ｍ×1.2mである。検出面からの深さは0.8ｍである。形状は井戸の形態をしているが、井戸枠などの出土遺物はなく、桶の底の様なものが埋土下部から出土しているが、時代時期は不明である。

＜出土遺物＞　遺構外の出土遺物としては中世の磁器片が3点、近世の陶磁器片が約150点、銭文不明の古銭1点、石鏃1点、剝片5点、石臼下部片1点、土師器片1点、摩耗した土器片3点が出土している。中世の磁器片の種類は、白磁の水注1点(15世紀)、青磁が1点(15世紀)、明の染め付けの磁器が1点(16世紀)である。近世陶磁器片の産地は、瀬戸・美濃産（13～19世紀)、肥前産（17～19世紀）などである。

3．まとめ

今回の調査では、中世の館跡を調査することから、掘立柱建物跡、土塁、井戸跡、柵列跡等が検出されるものと想定し調査を行なったが、調査区の80％近くは自然地形を段々の水田に削平造成しており、昭和20年代後半以降、数回の改変が行なわれ、当初想定したような遺構は検出されなかった。しかし、東西に50ｍほどのびる堀が検出され、館跡の概況を知る一つの手がかりをつかむことができた。今後の調査でさらに、館跡の内容を明らかにしたいと考えている。なお遺構外遺物で、近世の陶磁器片が約150点ほど出土したことから、近世の民家等が存在したことも考えられる。


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
X=-105.100
Y=259.00
Y=258.20
0
40m
SK1
SK2
墓1
墓2
1号墳
横穴

西館跡遺構配置図

遺跡全景

堀中央 W→

堀東端 S→

堀西端 S→

1

2

3

4

5

6

9

7

8

10

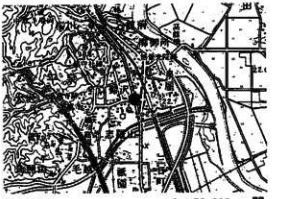
11

1．肥前産磁器皿
2．瀬戸・美濃産陶器
3．肥前産陶器碗
4．白磁水注片
5．青磁
6．明染付磁器
7．肥前産磁器皿
8．肥前産陶器碗
9．石鏃
10～11．古銭

西舘跡検出遺構・出土遺物

(24) 志羅山(しらやま)遺跡第 67 次調査

所　在　地	西磐井郡平泉町平泉字志羅山 8 番 22 ほか
委　託　者	岩手県一関地方振興局
事・業　名	都市計画街路
発掘調査期間	平成 9 年 7 月 1 日～10 月 31 日
調査対象面積	600 m²
発掘調査面積	550 m²
遺跡番号・略号	ＮＥ 76－1088・ＳＹ－97
調 査 担 当 者	朝倉雄大・高橋実央
協　力　機　関	平泉町教育委員会



1．遺跡の立地

志羅山遺跡は、平泉遺跡群平泉地区の南端に位置し、海抜 24～32 m の段丘上に広がる。東側に泉屋遺跡、西側に特別史跡毛越寺跡、北側に花立Ⅱ遺跡と白山社遺跡がある。遺跡周辺は、全体的に北西から南東方向に緩やかに傾斜している地形である。

現在の志羅山遺跡は、平泉町役場や平泉町保健センターをはじめとする公共施設のほか各種サービス業などが集まり、また宅地化も進んでいる地域である。

2．遺跡の概要

志羅山遺跡は、昭和 58 年度の第 1 次調査から数えて、平泉町教育委員会と当埋蔵文化財センターによって今年度までに 70 次を越す発掘調査が行われている。今回の調査は、平成 7 年度から実施している都市計画街路整備事業に係わる継続調査であり、平成 7 年度には第 47 次調査、平成 8 年度には第 56 次調査が行われている。今回の調査範囲は、国道 4 号と主要地方道平泉・厳美渓線の交差点付近を中心とした国道 4 号沿いである。調査区名は第 47 次、第 56 次調査に基づき命名した。

検出遺構は、掘立柱建物跡 7 棟、土坑 14 基、溝跡 10 条、堀跡 5 条、柱穴列 2 条、柱穴状小穴 213 基、井戸状遺構 1 基、整地跡 1 カ所である。また、国道 4 号と主要地方道平泉・厳美渓線との交差点付近から主に 12 世紀の遺物を主体とする遺物包含層も検出された。

＜掘立柱建物跡＞　12 世紀に属する可能性が高いと思われる建物跡が 7 棟検出された。各調査区の範囲が狭いこともあり、建物全体の規模や構造については不明な建物も多い。

1 区では、東西 3 間×南北 1 間以上の建物跡が検出された。65 区では、隣接の 66 区にまたがって東西 3 間×南北 2 間の母屋に東西両側に庇のつく建物跡と、東西 1 間以上×南北 2 間の母屋に西側に庇のつく建物跡が検出された。柱穴から中国産の白磁片が出土している。66 区では、65 区にまたがる建物跡に加え、東西 3 間×南北 2 間以上の建物跡と、東西 2 間×南北 2 間以上の母屋に東側に庇のつく建物跡が重複して検出された。68 区では、南側で東西 2 間以上×南北 4 間の建物跡が検出された。柱穴から常滑産や渥美産の国産陶器片が出土している。北側では、東西 3 間以上×南北 2 間の建物跡が検出された。

＜土坑＞　12 世紀に属する可能性が高いと思われる土坑は 14 基である。最も多くかわらけが出土したのは

68 区の 1 号土坑である。土坑の規模は調査区外に広がることと攪乱などにより不明である。深さは約 10～15 cm である。埋土から約 920 g のかわらけ片が出土している。完形品も埋土下部から出土している。

トイレ跡と思われる土坑は 2 基検出された。65 区 2 号土坑は、平面形はほぼ円形で、規模は 80×76 cm、深さは約 45 cm である。68 区 3 号土坑は、調査区西側に位置し、遺構の約 2 分の 1 程度が検出された。平面形は円形が予想される。深さは約 1 m である。どちらも有機質に富む埋土である。

＜溝跡＞ 12 世紀に属する可能性が高いと思われる溝跡は 7 条である。68 区では 4 条検出されたが、すべてほぼ東西方向に走る溝跡である。中央部に位置する 1 号溝は幅が約 70 cm、深さが約 40 cm ある。埋土中からかわらけ片の他、常滑産や渥美産の国産陶器片、中国産磁器片、モモの種などが出土している。南側で検出された 2 号溝は幅が約 2.2 m、深さは約 1.2 m の大溝である。埋土中からかわらけ片や折敷片などが出土している。1 号溝跡と 2 号溝跡の間にある 3 号溝と 4 号溝は、整地層の下位から検出された。3 号溝は幅が約 1.8 m、深さが約 80 cm あり、4 号溝は幅が約 25 cm、深さが約 20 cm ある。

＜塀跡＞ 供伴遺物が少なく時期の特定は難しいが、埋土の特徴等から検出された 5 条はすべて 12 世紀に属する可能性が高いと思われる。65 区の 1 号塀跡は、N-100°-E の軸線をもつ。布掘りの幅は約 40 cm、深さは約 40～50 cm あり、断面形はU字状を呈する。確認できた板痕跡は 9 枚あり、すべて軸線方向に沿ってほぼ隙間なく並んでいる。板は平均すると幅が約 20 cm、厚さが約 4 cm ある。65 区の 2 号塀跡と 3 号塀跡は直交するように検出された。新旧関係は 3 号塀跡の方が新しい。66 区東側で検出された 1 号塀跡と 2 号塀跡はほぼ並行するように検出された。軸線はそれぞれN-18°-E、N-14°-E である。

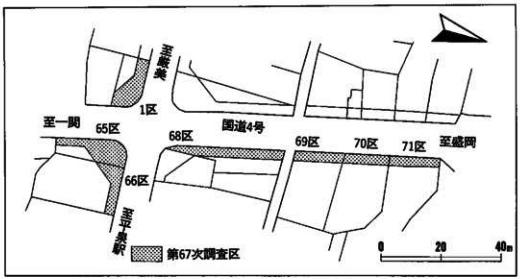
＜柱穴列＞ 69 区と 70 区で検出された。約 10 m の間隔をおいて東西方向にほぼ並行にのびている。検出された柱穴は 69 区が 5 基、70 区が 7 基である。この柱穴列は、第 56 次調査の国道 4 号を挟んだ西側においても検出されている遺構である。

＜遺物包含層＞ 1 区、65 区、68 区で検出された。層厚 5～20 cm の自然堆積層であり、これらの区域で検出された多くの遺構の上位に堆積している。主として摩滅したかわらけ片を含み、1 区では約 16.5 kg、65 区では約 20.7 kg、68 区では約 8.3 kg が出土した。堆積した時期は 12 世紀後半以降と思われる。

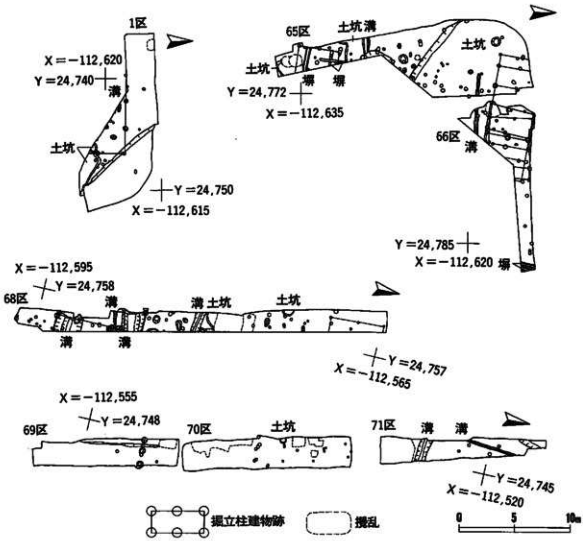
＜出土遺物＞ 最も多く出土しているのはかわらけである。ロクロかわらけに比べ手づくねかわらけが非常に多い。国産陶器は常滑産や渥美産の壺、甕の破片、中国産磁器では主に白磁の小破片が出土している。また木製品では漆塗り椀やちゅう木、石製品では砥石などが出土している。

3．まとめ

今回の調査では、12 世紀に属する可能性が高いと思われる掘立柱建物跡、土坑、溝跡、塀跡などが検出された。今回の調査結果に加え、第 47 次調査や第 56 次調査の調査成果、また平泉町教育委員会実施の発掘調査成果を踏まえ、分析・検討を行うことにより 12 世紀の「都市平泉」の様相がますます明らかになっていくものと思われる。

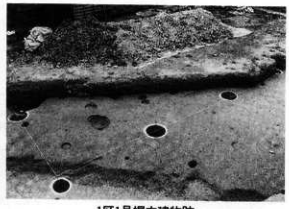


志羅山遺跡第67次調査区全体図

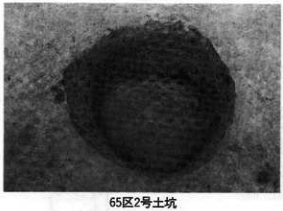


志羅山遺跡第67次調査遺構配置図

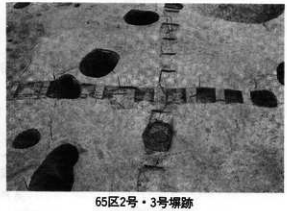
調査区近景



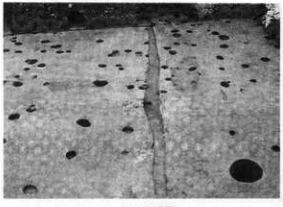
1区1号掘立建物跡



65区2号土坑

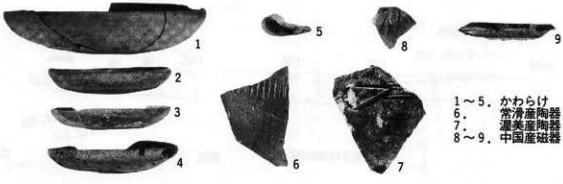


65区2号・3号堀跡



66区1号溝跡

68区2号溝跡



1～5．かわらけ
6．　常滑産陶器
7．　瀬美産陶器
8～9．中国産磁器

志羅山遺跡第67次調査検出遺構・出土遺物

(25) 上野平遺跡（うわのだいら）

所在地	東磐井郡藤沢町保呂羽字上野平33－1ほか
委託者	岩手県千厩地方振興局
事業名	緊急地方道路整備事業（藤沢・津谷川線）
発掘調査期間	平成9年4月8日～9月11日
調査対象面積	2,054 m²
発掘調査面積	2,054 m²
遺跡番号・略号	ＯＦ22－2019・ＵＮＤ－97
調査担当者	酒井宗孝・布谷義彦
協力機関	藤沢町教育委員会・藤沢町建設課

遺跡位置　　1：50,000 千厩

1．遺跡の立地

上野平遺跡は、藤沢町役場の南東約3.6 km に位置し、黄金山（482 m）から南西に延びる緩やかな尾根に立地している。調査区は、尾根の南西端部に当たり標高は194～200 m で、南側は西流する小さな沢に接する。現状は水田及び畑地である。

2．調査の概要

昨年度からの継続調査で、今年度は前年度の北東部地区が対象となった。2年間の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡9棟、掘立柱建物跡3棟、柱穴125基、柱穴状小土坑155基、土坑60基、埋設土器1基、炉跡・焼土遺構5基、集石遺構2基等で、全て縄文時代の遺構である。遺跡は全体に昭和30年代の開田工事によって地形が改変されており、上部が破壊された遺構も多かった。各種の遺構は、調査区西端から中央部にかけて集中する。なお、中央部から東側は緩い沢地形を呈し、この部分には遺物包含層が形成されていた。

＜竪穴住居跡＞　調査区の北側から中央部に分布するものは、削平のため壁が残存しているものは少ない。壁溝等から平面形が把握できるものには、円形、隅丸長方形（楕円形）、六角形があり、いずれも埋設土器を伴う複式炉を持つ。埋設土器は複数（最多で5基）検出される例が多く、同一範囲での住居の建て替えや炉の作り替えが頻繁に行われたものと考えられる。時期は埋設土器の特徴から中期後葉～末葉と考えられる。

南半部分を現道によって破壊され全体の形状は不明であるが、これらのうち最大の住居跡は、直径9 m前後の円形（楕円形？）を呈する。壁溝の検出状況から2～3回の建て替えが行われ、最終形で最大の規模となる。精査できた範囲からは、2基の複式炉が検出された。いずれも長さ3.2 m、最大幅1.7～1.9 m と大型で、新期のものは石囲部の西脇に中期末葉期の大型深鉢が斜位に、古期のものは石囲部のさらに内側に中期後葉期の深鉢が正位に埋設されていた。

＜掘立柱建物跡・柱穴＞　北側を除く遺構集中区のほぼ全域に分布する。いずれも大きな掘り方と柱痕跡を有する柱穴である。西端部と中央部の柱穴群は特に大型で、最大のものは掘り方の直径1.5 m、深さ1.2 m、柱痕跡の直径は60 cm の規模を持つ。また、ほとんどの柱穴の底面に、柱の重圧によると考えられる変色や硬化等の柱痕跡が認められた。配置に規則性が見られ、建物跡を構成する可能性があるものは西端部で2棟、

中央部東側で1棟が確認されている。西側の2棟は1間×2間の長方形建物跡で、重複関係にある。古期のものは桁行き7m、梁行4mで、桁側の柱間隔は3.5m前後、新期のものは桁行き6.5m、梁行き4mで、桁側の柱間隔は3～3.5mである。しかし、周辺部には規則的な配置が認められない柱穴が10数個存在することから、これら2棟だけを建物跡として分離してよいかどうか問題を残す。時期は隣接する住居跡との重複関係から推定して、中期末葉の遺構と考えられる。中央部の建物跡は南側を現道によって破壊されているが、梁行き側に棟持ち柱が張り出す形態となる可能性がある。桁行き方向の柱間隔は約4mである。時期を判断できる材料は乏しいが、重複する土坑との関係から中期末葉の遺構の可能性がある。

中央部西側と東端部に分布するものは、直径が70～90cmと上記の柱穴群に比べて規模が小型である。配置は未検討であるが、時期は住居跡との重複関係から推定して後期初頭の遺構と考えられる。なお、上部を削平された住居跡の柱穴を含む可能性がある。この他、径が30cm以下の柱穴状小土坑が遺構集中区のほぼ全域から検出されている。これらも上部が破壊された住居跡の柱穴の可能性が高い。

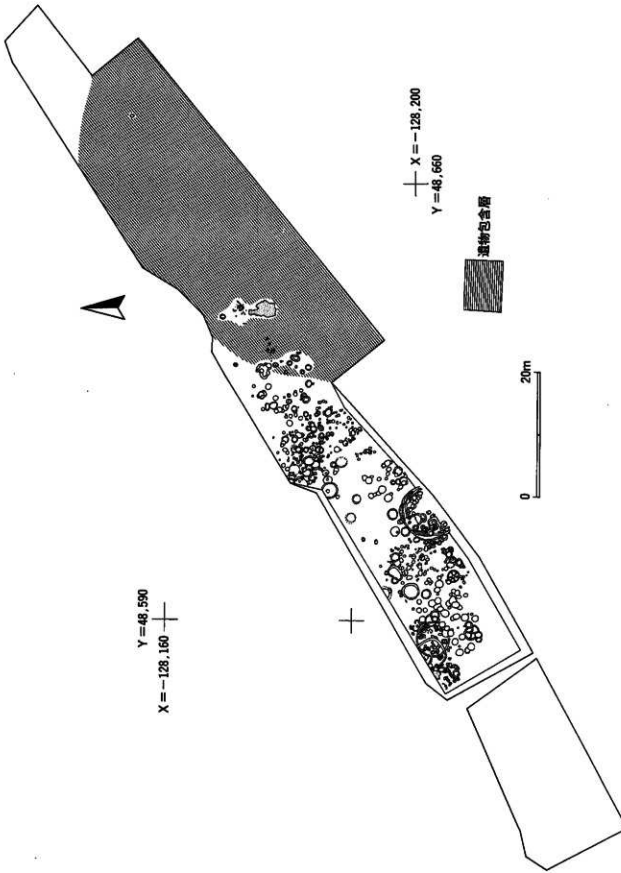
＜土坑＞ ほとんどのものが上部を削平されているが、断面形の形態によりフラスコ形、ピーカー形、皿形に分けられる。形態別ではフラスコ形のものが多く、底部径が1.5mを超す大型の土坑も多い。これらの中には底面に副穴を持つものが8基、放射状の溝を有するものが2基ある。また、昨年度精査したフラスコ形土坑には埋土の最下部に多数の石製小玉を伴うものがあり、墓壙として再利用されたと考えられる。なお、開口部径90cm、深さ36cmの小型のピーカー形土坑からは、多量の炭化した堅果類（クリ・クルミ・トチ）が出土した。個々の時期については未検討であるが、出土遺物や重複関係から中期後葉～後期初頭と考えられる。

＜遺物包含層＞ 調査区中央部から東端にかけての約1,000m²が遺物包含層となっていた。南東方向に緩く下がる斜面を利用した「捨て場」で、精査範囲での最大層厚は約1.5mに達する。多量の遺物と廃棄土から構成され、廃棄の単位が把握できる部分も多く、主に中期末葉から後期初頭にかけて北西側から形成されたものと考えられる。廃棄土中には長さ4.5m、幅2.5m、厚さ30cmにわたって異地性の焼土層の堆積が見られた。また、下部には安家（中掘）火山灰の堆積が確認されている。

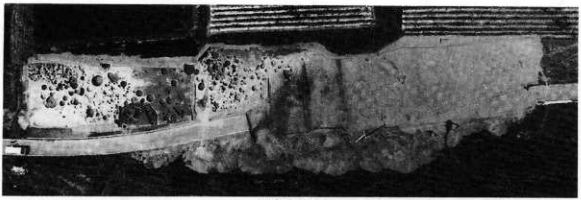
＜出土遺物＞ 遺物包含層を中心にコンテナ300箱分の遺物が出土した。縄文土器・土製品・石器・石製品・自然遺物がある。縄文土器は前期前葉～晩期後葉までの幅を持つが、遺跡の主体となる中期末葉～後期初頭の土器が9割を占める。土製品は土器片を加工した土製円盤が多く、500点以上が出土している。石器では石鏃・石匙・不定型石器・磨石・凹石・石棒等があり、石鏃の出土数は1,500点を超える。自然遺物としては焼けた獣骨片がある。各時期の包含層から出土したが、これも中期末葉～後期初頭の層からのものが多い。

3．まとめ

2年間の調査で、今回の調査区域は中期後葉～後期初頭にかけての居住域と「捨て場」であることが確認された。調査範囲は遺跡のごく一部分に過ぎず、遺跡の全容を推定するには資料不足であるが、掘立柱建物跡（柱穴群）の規模や大型住居跡の存在からみて該期の拠点的な集落跡であったと思われる。特にも、同一地区で作り替えられる遺構群の検討は、縄文人の生活形態解明の重要な課題であろう。また、包含層から得られた豊富な土器は、該期土器の編年研究のうえで好資料となるものと考えられる。



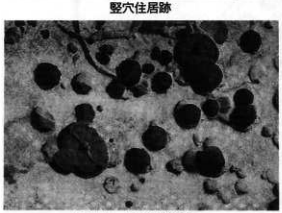
上野平遺跡遺構配置図



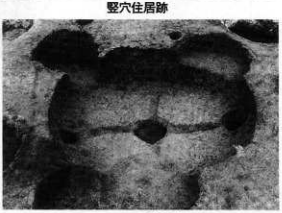
調査区全景

竪穴住居跡

竪穴住居跡



柱穴群・掘立柱建物跡



フラスコ形土坑

土器出土状況

土器出土状況

上野平遺跡検出遺構・出土遺物

(26) 小平（こだいら）Ⅰ遺跡

所　在　地　宮古市山口5丁目108番1ほか
委　託　者　岩手県宮古地方振興局
事　業　名　地方特定道路整備事業
発掘調査期間　平成9年4月8日～6月18日
調査対象面積　2,000 m²
発掘調査面積　2,000 m²
遺跡番号・略号　LG 23－1255・KDⅠ－97
調査担当者　溜　浩二郎・鳥居遠人
協力機関　宮古市教育委員会

遺跡位置　1：50,000 宮古

1．遺跡の立地

小平Ⅰ遺跡は、東日本旅客鉄道山田線宮古駅の北西約2.5 km に位置し、黒森山地を流れる山口川の左岸の小起伏地上に立地している。調査は昨年度2,400 m²、今年度2,000 m² が行われ、調査前の状況は畑地と山林である。

周辺には縄文時代の遺跡である小平Ⅱ遺跡・高根遺跡・半沢遺跡・赤畑遺跡があり、このうち高根遺跡に関しては1989年、1992年の2回にわたり宮古市教育委員会が調査を行ない、縄文時代中期の遺構・遺物を確認している。ほかには南北朝時代の遺跡である山口館跡遺跡、江戸時代中期～末期の黒森町遺跡などがある。

2．調査の概要

今年度調査したのは昨年度調査した部分を挟んだ東側1,380 m² と西側620 m² で、このうち西側は急斜面のため大部分の堆積土が流され、表土の下はわずかに黒褐色土が堆積するのみで風化花崗岩がむき出しになっている状況であった。このため遺構はなく、遺物の出土も極めて少ないものであった。東側の1,380 m² に関しては昨年度の調査区と同様に畑地の造成よる削平は受けてはいるが、多くの遺構が検出されている。

＜竪穴住居跡＞　今回の調査で19棟検出された。すべて縄文時代の人々が生活を営んだ住居の跡で時期的には縄文時代中期の中～末期にかけてのものが多い。住居跡の形状には円形、楕円形、隅丸方形状と様々あるが、最大のもので径730 cm×533cm あり、最小で296×250 cm である。また遺構内に石組炉・石囲炉をもつのは6棟、複式炉を有するものが4棟、土器が埋設されているものが2棟である。遺構の配置に関して規則性は認められないが、堆積花崗岩の影響で貼り床を施している住居跡や住居内の花崗岩を除去して建てているため同じ所に住居が重複している場合が多い。

＜土坑＞　調査区中央～南側を中心に19基検出された。出土遺物から縄文時代前期～中期のものが大半である。形状は円形ないし楕円形を呈し、最大で開口部径174×164 cm、最小で83×70 cm である。うち2基については竪穴住居跡の炉がその上に載っており、これと何らかの関連をもつ可能性も考えられる。

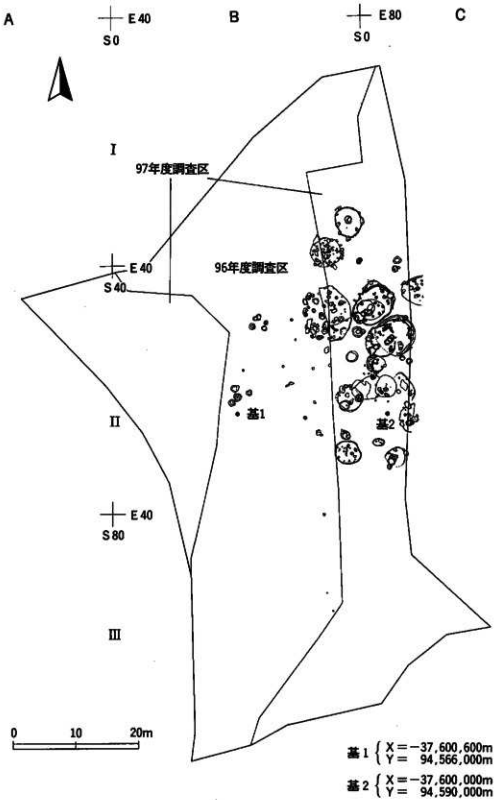
＜焼土・炉跡＞　今回の調査で4カ所から検出された。このうちいくつかは元来、住居跡内にあったもので畑地の造成などによって住居跡の形が失われ、炉跡だけが残存したと思われる。

＜出土遺物＞　今回の調査で縄文時代の土器片が大コンテナで28箱、石器が大コンテナで2箱出土してい

る。土器は深鉢形の土器を中心に縄文時代前期～後期にかけてのものが出土しているが、なかでも縄文時代中期中～末期の土器が顕著で、その多くは住居内から出土している。石器は石鏃、石匙、石錐、磨製石斧、磨石などで、特に石鏃や磨製石斧は住居内の床面直上からよく出土している。

3．まとめ

今回の調査で木遺跡が主に縄文時代中期後～末期を中心とした集落跡であることが確認された。また畑地の造成時に調査区の中央部以外はかなりの削平を受けたものと考えられるが、それでも多くの住居跡の痕跡が確認され、宮古市周辺の縄文時代中期～末期の様相を知る上での貴重な資料となった。また、調査されたのは小平Ⅰ遺跡の一部であり、残りの東側斜面部にも今回と同様に多くの遺構・遺物が包含されていると予想され、今後の調査で遺跡の全容が明らかになることであろう。


A
E 40
S 0
B
E 80
S 0
C
I
97年度調査区
E 40
S 40
96年度調査区
基1
基2
II
E 40
S 80
III
0
10
20m
基1 { X＝−37,600,600m
Y＝ 94,566,000m
基2 { X＝−37,600,000m
Y＝ 94,590,000m

小平Ⅰ遺跡遺構配置図

遺跡全景

縄文時代の住居跡

住居内複式炉

住居内出土の埋設土器

遺物出土状況（住居内）

小平Ⅰ遺跡検出遺構

(27) 上尾田の館跡

所　在　地	九戸郡軽米町大字軽米第19地割字尾田ほか
委　託　者	岩手県二戸地方振興局
事　業　名	市町村道整備代行
発掘調査期間	平成9年6月17日～9月22日
調査対象面積	2,500 m²
発掘調査面積	2,500 m²
遺跡番号・略号	ＩＦ62－2395・ＫＯＤ－97
調査担当者	工藤　徹・千葉和弘
協力機関	軽米町教育委員会

遺跡位置

1．遺跡の立地

上尾田の館跡は、八戸自動車道軽米インターチェンジの北北西約3 km、青森県との県境付近に位置している。西方から伸びる尾根突端部上の緩やかな傾斜地にあり、南斜面は断崖を呈し、東斜面下に瀬月内川が流れている。堀跡以外の遺構はすべて標高150 m より低い地点に検出されており、尾根下に広がる尾田集落との標高差は約30 m である。遺跡の現況は山林であり、一部畑地を含む。

2．調査の概要

堀跡については調査以前よりその痕跡が確認されており、遺跡が城館跡であることは知られていたが、竪穴建物を主体として構成される館跡であることは今回の発掘調査ではじめて明らかになった。検出・出土した遺構・遺物は、縄文時代から古代、中世、近世、近代まであるが、主体をなすものは16世紀末のそれらである。検出された遺構は、竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡9棟、土坑7基、陥し穴状遺構4基、焼土遺構5基、堀跡1条、炭窯跡2基、神社跡1棟などである。遺物については、縄文土器・石器、弥生土器、土師器、中近世の陶磁器、石製品、金属製品、銭貨などが出土した。

＜竪穴建物跡＞　出土した遺物から見て、いずれも16世紀末に属すると思われる。プランは方形または長方形を呈し、最も小さいもので2 m四方、最大のものは長軸8 m、短軸が6 m である。壁際に柱穴がならび、炉やカマドなどは備えていない。ただし、中央に焼面を有するものが2棟検出された。また、出入口部分と見られる張り出しを有するものは19棟中8棟である。

＜掘立柱建物跡＞　2棟は、いずれも斜面部を削平して平場を造成したうえに構築されている。それぞれが今回検出されたうちの最大竪穴建物跡を挟む形でその上段と下段とに築かれており、うち1棟（下段）はその竪穴建物に連続している。3棟とも覆土や柱穴の一つからほぼ同時期と思われる白磁片が出土していることから、これらの掘立柱建物と最大竪穴建物は同じ時期に存在したものと考えられる。また、平場造成部の床面や覆土からは、陶磁器片や北宋銭、鋳写しによると思われるピタ銭、鉄器類、貝類などが出土した。

＜土坑＞　7基の土坑が検出されたが、円もしくは楕円形のプランを呈し、いずれも用途不明である。なお、一つの土坑から獣骨が出土している。

＜陥し穴状遺構＞　4基ともプランは溝状を呈し、最も大きいもので長さ4 m、幅1 m、深さが1.5 m であ

る。遺物は出土しておらず、配列になんらの規則性も認められない。

<焼土遺構>　5基検出されたが、いずれも焼け土の赤変部分は比較的浅く、時期についても不明である。その多くは神社跡の周辺から検出されているため、神社祭祀（ドンド焼など）に伴って形成された焼土である可能性が高い。

<堀跡>　尾根を南北に切る堀の存在は、それが埋没しきっていなかったため以前から確認されていたが、今回の調査によって幅5 m、深さ2.5 mのものであることがわかった。形状は下半部分が急傾斜となる薬研堀であり、地形からして空堀であったと見られる。遺物は出土していない。また、堀に沿ってその東側を並行する土塁状の高まりが認められたが、柱穴は検出されず柵などは存在しなかったと見られる。

<炭窯跡>　調査区の南東端に、2基が縦列する形で検出された。無花果形および洋梨形を呈し、前者のほうが古い。いずれも床面は、炭によって黒く叩きしめられている。特に新しいほうは壁面に粘土が貼られ、それが焼けて赤変している。新しい炭窯の操業年代の下限は、地元民によれば昭和10年代という。炭焼の際に使用されたと思われるような鉈や楔が出土している。

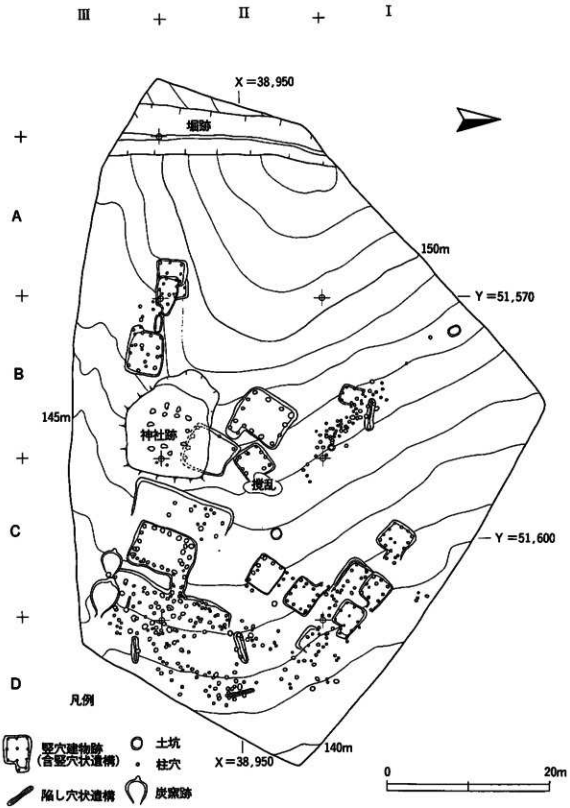
<神社跡>　かつて遺跡の北東斜面の下にあった熊野神社が尾根上に遷されたのは、明治の初年(1870年代)という。斜面を大きく削って造成された25 m²程の平場に、計13個の礎石が残っており、うち2個は元位置を移動していた。礎石の配置から見て三間四方に切妻屋根、向拝の付く流れ造であったと推定される。周辺から寛永通宝の鉄銭や十銭アルミ貨などの賽銭が出土している。なお、新たな熊野神社は明治以前の位置より幾分西側の場所に遷宮された。

<出土遺物>　館そのものにかかわると考えられる遺物としては、陶磁器や銭貨、石製品、鉄製品、銅製品などがある。陶器はその9割が瀬戸・美濃産で占められ、磁器はすべて中国産の白磁である。特に竪穴建物跡の覆土よりほぼ完形の美濃産陶器皿が出土した。銭貨は計150点余りが出土し、北宋銭の本銭も見られるが、特徴的なのは鋳写しによると思われる洪武通宝の粗悪なビタ銭が非常に多く含まれていることである。その他、銭名のない無文のビタ銭やリングのようなそれなども出土した。石製品としては石臼や砥石があり、製品ではないものの炭化物の付着した石などが出土した。金属製品としては鉄製の刀子や苧引鋸・釘・楔などが、また銅製の小柄・青金なども出土している。これらの他には、柱穴から炭化した穀物類が布の一部とともに出土している。

館に直接かかわらない遺物としては、縄文土器、弥生土器、土師器甕などが出土したが、至極微量である。

3．まとめ

軽米町内では、現段階で30カ所以上の城館跡が確認されており、そのなかには天正19年（1591）に滅んだ九戸政実の与党の居城という伝承を有するもの（軽米城、高家館、晴山館、円子館など）もあるが、上尾田の館については館主や存続年代に関する伝承等は確認されていない。しかし、出土遺物の年代から見て九戸政実の乱にかかわって廃絶した可能性は非常に高い。また、瀬月内川を挟んで遺跡と対峙する下尾田の館（通称「ふん館」）の存在があり、こちらのほうは二重の堀が巡らされた比較的広大な縄張りを有する城館跡である。こうした隣接地域の城館跡、あるいはより広汎に南部地方のそれらとの比較に視点を置けば、上尾田の館の性格や位置付けに関する理解がより一層深まるであろう。



上尾田の館跡遺構配置図

調査区全景（北東から）

大きな竪穴建物跡

竪穴建物跡（その1）

竪穴建物跡（その2）

堀跡

美濃産陶器皿出土状況

紐の残っている銭貨

小柄出土状況

上尾田の館跡検出遺構・出土遺物

(28) 大平（おおたい）遺跡

所　在　地　九戸郡山形村大字川井第4地割字外山34－8ほか
委　託　者　岩手県久慈地方振興局
事　業　名　地方特定道路整備
発掘調査期間　平成9年9月10日～10月29日
調査対象面積　1,800 m²
発掘調査面積　1,800 m²
遺跡番号・略号　ＪＦ46－0153・ＯＴ－97
調査担当者　工藤　徹・千葉和弘
協力機関　山形村教育委員会

遺跡位置　1：50,000 陸中関

1．遺跡の立地

大平遺跡は、九戸郡山形村大字川井地内に所在し、山形村役場の北東約2 kmの国道281号線の南側に位置し、久慈川の支流の川井川と遠別川の合流点近くの、遠別川東岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の背後は山地で、調査区は斜面に広がる南東部から中央の平坦部、そして緩やかな傾斜地の北部からなる。標高は約250～255 mを測り、遠別川との標高差は30 mである。遺跡の現況は山林で、周辺の地目は山林・水田である。本遺跡の周辺には、遠別川西岸の舌状の河岸段丘上に立地する、旧石器時代の遺跡である早坂平遺跡や遠別川流域の成谷遺跡、川井川の東岸に立地する縄文時代、奈良・平安時代の集落跡の高屋敷遺跡などがある。

2．調査の概要

調査区は、南方から連なる山麓の斜面から遠別川東岸へ広がっているが、調査区の南東部の斜面及び北部の緩やかな斜面ではⅠ層（褐色土）の下位は礫層となり、遺構・遺物とも確認されなかった。遺構・遺物を確認できたのは調査区中央の平坦部に限られる。遺物については、特に集中して出土した区域はない。基本土層はⅠ層よりⅥ層から成り、遺構・遺物が確認されたのはⅠ層直下及びⅡ層上部である。遺構の確認面であるⅡ層の色調は黄褐色を帯び、炭化物粒を含む区域や硬くしまった面もみられる。

今回の調査では、土坑3基、陥し穴状遺構3基が検出された。遺物については、土器片139点、石器類64点が出土した。遺物の特徴から推定し、時期は縄文時代早期と考えられる。なお、調査当初、旧石器の出土が予想されたが今回の発掘調査では確認できなかった。

＜土坑＞　3基検出された。1号土坑は調査区中央の北側平坦部、ⅢＢ04区のⅡ層で検出された。土坑の規模は開口部140×90 cm、底部64×50 cm、深さ38 cmで形態は楕円形を呈する。断面形はＵ字形で、底面は緩い船底状を呈しており、概ね平坦である。埋土は黄褐色土で上部、下部とも炭化物粒を僅かに含む。遺構内からの出土遺物はなく、詳細については不明であるが、検出面や周囲の出土遺物の特徴からみて縄文時代早期の遺構と考えられる。2号土坑は調査区中央の東端、ⅢＣ06区のⅡ層で検出された。なお遺構の一部は調査区外へ続いているものと考えられる。土坑の規模は開口部径180 cm、底部径150 cm、深さ86 cmで、形態はほぼ円形を呈する。断面形は円筒形で、底面は平坦で硬くしまっており、数個の角礫がみられたが、意

識的な配列状況は認められない。埋土上部は炭化物粒を僅かに含む黒褐色土、中部は炭化物粒を僅かに含む黄褐色土、下部は炭化物粒を含み、しまりのある褐色土によって構成されている。土坑内からは遺物は出土しておらず時期・性格についての判断は難しいが、検出面や周囲の出土遺物の特徴からみて時期は縄文時代早期と考えられる。3号土坑は調査区中央の平坦部、ⅢB 13 区のⅡ層で検出された。土坑の規模は開口部 64×38 cm、底部 32×18 cm、深さ 24 cm で形態は不整な楕円形を呈し、断面形は浅鉢形で底面は船底状を呈し硬くしまる。埋土は上部に明赤褐色の焼土粒と多量の炭化物粒を含む褐色土、下部は硬くしまりのある黄褐色土で構成される。土坑内からの遺物はないが周囲から縄文時代早期の土器片が出土しており、検出面からみて遺物とほぼ同時期の遺構と考えられる。

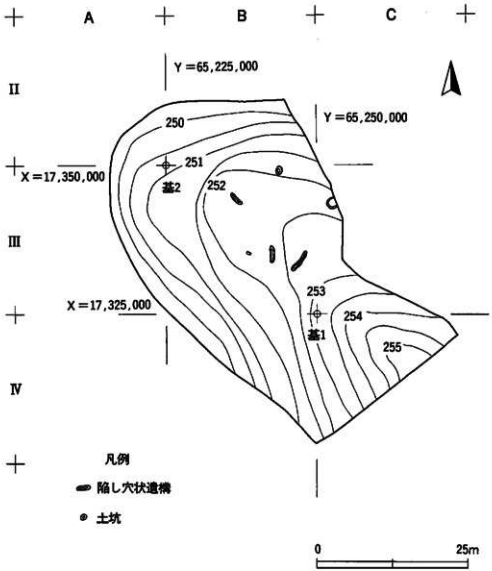
<陥し穴状遺構>　3基検出された。1号陥し穴状遺構は調査区中央の平坦部、ⅢB 20 区のⅡ層(黄褐色土)で検出された。遺構の規模は、開口部 363×40 cm、底部 356×10 cm、深さ 98 cm で、形態は溝状を呈し、横断面形はY字形で底面は硬くしまる。埋土上部は炭化物粒を僅かに含む褐色土で、以下は黄褐色土とにぶい黄褐色土で構成される。出土遺物はなく、副穴などの付属施設も確認されない。2号陥し穴状遺構は調査区中央の平坦部、ⅢB 08 区Ⅱ層（黄褐色土）で検出された。規模は開口部 226×60 cm、底部 188×20 cm、深さ 74 cm で、形態は溝状を呈し、横断面形はV字形を呈する。埋土は炭化物粒を含む明黄褐色土で、底面は硬くしまる。遺構内の北壁の下部に円礫1個が認められたが、出土遺物、付属施設とも確認されない。3号陥し穴状遺構は調査区中央の平坦部、ⅢB 14 区のⅡ層(黄褐色土)で検出された。規模は開口部 374×50 cm、底部 370×18 cm、深さ 82 cm、形態は溝状を呈し、横断面形はV字形で底面は硬くしまる。埋土上部は炭化物粒を含む褐色土、下部は黄褐色土で構成され、壁面は硬くしまる。出土遺物や付属施設は確認されない。

検出された3基の陥し穴状遺構の配列には特に規則性は認められない。時期についても断定はできない。

<出土遺物>　縄文時代早期と思われる土器片 139 点、石器類 64 点が出土している。特に集中して出土した区域はみられないが、出土した範囲は調査区中央の平坦部に限定される。遺物の出土層位はⅡ層(黄褐色土)である。土器は縄文時代早期に属するものと考えられる。いずれも小破片であり器形・形態が明瞭なものは少ないが、尖底土器の底部の破片5点が出土している。土器の色調はにぶい橙色、褐色などで胎土には繊維を含むが量的には土器により差がある。文様の特徴としては、貝殻条痕文、爪形の刺突文などが認められる。石器類は、剥片石器、石斧、磨石、凹石などが出土している。石器石材として黒色頁岩が確認されており、本遺跡の対岸北側にある早坂平遺跡（後期旧石器時代の遺跡）出土の黒色頁岩製石器と同質のものと考えられる。

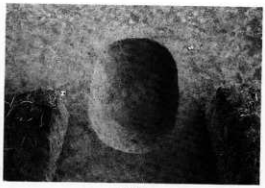
3．まとめ

今回の調査で確認した遺構・遺物は比較的少ないものであったが、人間の生活の営みの痕跡を認めることができた。時代・時期については前述のように縄文時代早期と考えられる。遺構・遺物の出土状況から推定し遺跡の主体が別の部分にあったとも考えられるが、これは今後の調査を待たねばならない。今後、この調査結果の整理・分析を進めるとともに、周辺の遺跡特に遠別川流域の遺跡との比較・検討を進めることにより本遺跡の性格・内容をより明らかにしていきたい。

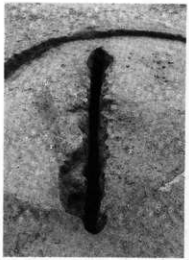

A
B
C
II
III
IV
Y＝65,225,000
Y＝65,250,000
X＝17,350,000
X＝17,325,000
250
251
252
253
254
255
基2
基1
凡例
陥し穴状遺構
土坑
0
25m

大平遺跡遺構配置図

調査区全景（北から）



土坑



陥し穴状遺構（その1）

陥し穴状遺構（その2）

陥し穴状遺構（その3）

1

3

6

2

4

5

7

8

1～6　縄文土器（早期）
7　擦切磨製石斧
8　石　鏃

大平遺跡検出遺構・出土遺物

(29) 小森林館跡（こもりばやしだてあと）

所在地	稗貫郡石鳥谷町小森林第2地割26番ほか
委託者	岩手県花巻地方振興局
事業名	ふるさと農道整備事業
発掘調査期間	平成9年4月14日～6月18日
調査対象面積	2,400 m²
発掘調査面積	2,400 m²
遺跡番号・略号	ME 06－0273・KMD－97
調査担当者	木戸口俊子・鈴木　聡
協力機関	石鳥谷町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 花巻

1．遺跡の立地

小森林館跡はＪＲ東日本旅客鉄道石鳥谷駅より南に4 km、二枚橋駅より北に1.8 km の位置にあり、国道4号石鳥谷バイパスと東北本線との間に挟まれ、北方に滝沢川が流れている。北上川を境にして東側は北上山地の西縁丘陵地域にあたり、西側では奥羽山脈から発した葛丸川、耳取川、豊沢川などの諸河川により形成された扇状地が広く発達している。この扇状地性台地の中位段丘である二枚橋段丘と呼ばれる段丘縁辺部に小森林館跡がある。

本遺跡は古くから文献資料にも記載されており、東西 300 m 南北 400 m ほどの規模を持ち、南と北に郭を有し土塁や堀が現存する周知の遺跡である。小森林氏の名は、永享8（1436）年の役に稗貫氏の従士として参戦した記事の中にあり、この頃には居住していたと考えられる。

小森林館跡の周辺の館跡としては、北西に寺林城、東方に黒沼館・関口館、南東に江曽館・柳館などがあり、石鳥谷町内では20カ所以上にのぼるが、その中でも小森林館跡の面積は広大なものである。

本遺跡については、昭和57年に国道4号石鳥谷バイパス関連事業として発掘調査が行われた。調査は館全体の東側一部のみの調査ということもあり、平安時代の竪穴住居址1棟、ピット4基のほかに、館の施設と考えられる遺構としては掘立柱建物跡と溝が検出されているが、時代決定の決め手となるような伴出遺物は得られていない。

今回の発掘の対象となった調査区はこの館跡の西端部にあたる。現況は山林・原野である。

2．調査の概要

調査区は、東西に細長い調査区で東側の区域については旧河川跡（沢）が調査区と交差する形で検出されたのみであった。調査区中央部～西側からは、縄文時代の陥し穴が2基、平安時代の焼土が2基、竪穴状遺構が1棟、時代不明の土坑が3基、溝1条、掘立柱建物状遺構が2棟、柱穴状ピットが10基、館跡の一部と見られる土塁1基、堀1条、新しい時期と思われる道路状遺構1カ所が検出されている。

＜陥し穴＞　調状の陥し穴が2基検出している。かなり削平を受けており、いずれも大変浅い。比較的残りの良いもので長軸2 m70cm、幅35 cm で深さは19 cm である。

＜焼土＞　2基検出されている。9世紀後半～10世紀前半と見られる土師器の長胴甕の破片が出土してい

る。

<竪穴状遺構> 検出できた平面形から方形を呈していると思われ、1辺が3 m 6 cm、深さは75 cmある。溝に切られているため溝よりも古いと考えられる。内黒の土師器坏、長胴甕、須恵器の甕の破片が出土しており、9世紀後半～10世紀前半のものと思われる。

<土坑> 3基検出されているが、植林等の攪乱などから不整形である。遺物はなく時代は不明である。

<溝> 東西に軸を持つ溝が1条検出されている。検出できた長さは9 m50cm、幅72～110 cm、深さは10 cmである。周辺からは土師器、須恵器の破片が多く出土している。当初、館に伴う施設と思われたが、その頃の遺物は全く出土していない。また大変浅く陥し穴同様削平されている。

<掘立柱建物状遺構> 2棟検出された。検出できた規模は1間(3 m40cm)×1間(4 m40cm)と2間(2 m90cm)×1間(4 m)であるがいずれも調査区外に遺構が伸びていると思われる。出土遺物はない。

<柱穴状ピット> 10基検出された。残存状態が比較的良く、直径20 cm～35cm、深さは20 cm～75cmある。共伴遺物はない。

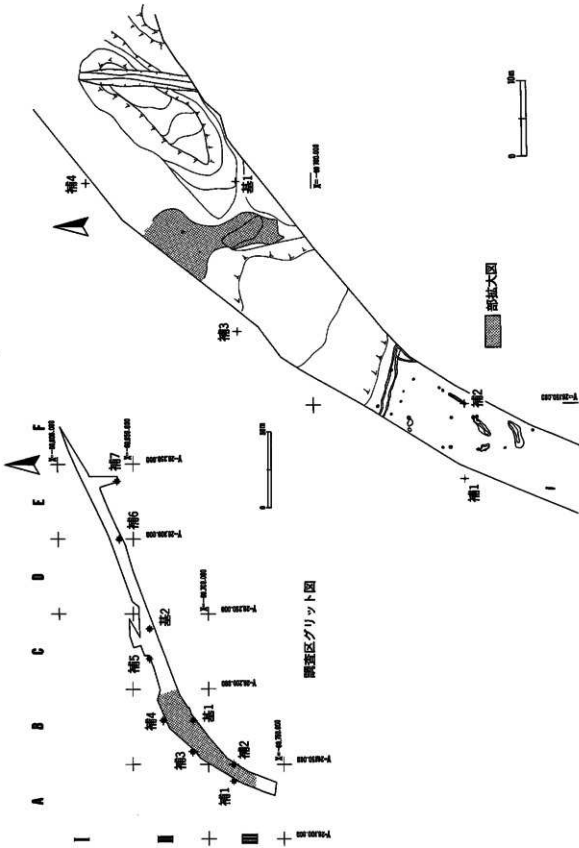
<土塁・堀> 調査区の中央部から検出されている。確認できた規模は実効堀幅が8 m20cm、垂直土塁壁高が2 m70cm、実効法高が7 m 2 cm、外壁垂直高が1 m25cm、外壁法高が1 m98cm、法高の角度は30度の傾きを持った薬研堀である。土塁の長さは18 m、堀の長さは14 mである。堀の方向としては北一南で川の方へ向いており、館の中心部より外側に土塁が位置している。

<道路状遺構> 調査区中央部で検出されている。遺構の性格は不明であるが、検出状況から見て道路状の施設の可能性がある。検出された規模は全長14 m幅3～9 mである。石は花崗岩で薄く平らなものを並べている。

<遺物> 出土した遺物は遺構外のものがほとんどである。土師器片と須恵器片が合わせて中コンテナ1箱弱、石器が10点である。器種としては土師器は坏・甕、須恵器は坏・甕・壺で、時期は9世紀後半～10世紀前半のものと見られる。溝周辺からの出土が多い。縄文土器はなく、また館に伴う時期の遺物も確認していない。

3．まとめ

今回の調査では、陥し穴や竪穴状遺構、土塁・堀などの検出により、小森林館跡が縄文時代、平安時代、中世にわたる時期の遺跡であることがわかった。平安時代の遺構については、土師器や須恵器などの遺物から前回調査が行われた時に検出された遺構や遺物とほぼ同時期の可能性が高い。館に伴うと見られる土塁・堀については、調査区域が館跡西側縁辺部ということもありごく一部しか検出できなかった。しかし、西側の土塁・堀は現存しておらず、今回の検出は一部ではあるが小森林館の西側の状況を知る上で貴重な資料となると思われる。



小森林館跡遺構配置図

小森林館跡全景

調査区近景

陥し穴完掘

溝完掘

竪穴状遺構完掘

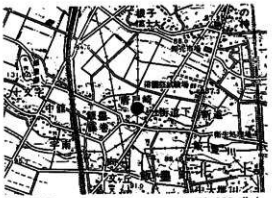
土塁・堀断面

土塁・堀完掘

小森林館跡検出遺構・出土遺物

(30) 唐戸崎遺跡

所在地	北上市飯豊23地割125－2ほか
委託者	岩手県花巻地方振興局
事業名	ふるさと農道緊急整備事業
発掘調査期間	平成9年4月11日～6月9日
調査対象面積	2,641 m²
発掘調査面積	2,641 m²
遺跡番号・略号	ＮＥ45－0352・ＫＴＺ－97
調査担当者	小山内透・七田芳直
協力機関	北上市教育委員会



遺跡位置　1：50,000 北上

1．遺跡の立地

唐戸崎遺跡は東日本旅客鉄道村崎野駅の北西約3.7 km、飯豊川の北側に位置し、飯豊川が形成した河岸段丘（村崎野段丘）上に立地する。遺跡の標高は約89.5 m である。本遺跡はすでに周知されており、北上市教育委員会により標示も設けられている。調査区の現況は道路であるが、遺跡全体は水田および宅地と畑地であり、造成による破壊が著しい。平成元年には、北上市教育委員会が今回の調査区の南側隣接地で遺跡の残存状況を確認するための分布調査を行っている。

2．調査の概要

現道（幅約5 m）下が大半を占める調査区内では上下水道によりおよそ2 m 幅で掘削破壊されており、遺構の遺存状態は全体的に良好ではなかった。今年度の調査で検出された遺構は、縄文時代の土坑類10基、古代の竪穴住居跡2棟、時期不明の堀跡1条、土坑1基、溝跡15条である。

＜竪穴住居跡＞　竪穴住居跡は調査区外にかかるか、掘削されて全容は不明であるが、確認された範囲では東西約4 m、南北約3.5 m の略方形と一辺約4.2 m の方形と推定され、カマドはいずれも南壁に付設されている。

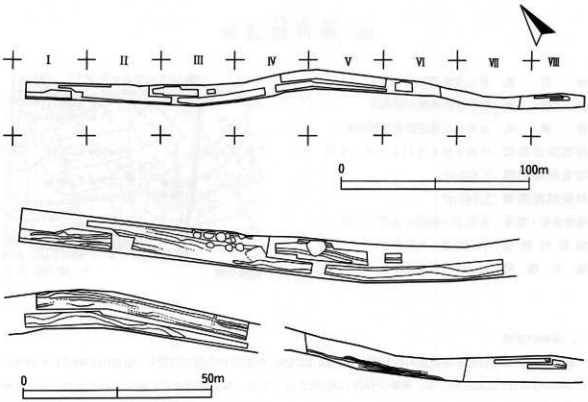
＜土坑＞　縄文時代の土坑はすべて直径1.5～2.7 m の円形を呈し、フラスコ状や底面に柱穴を有するものもある。いずれも上部が削平され、遺存状態はあまりよくない。

＜堀・溝跡＞　堀跡は開口部幅約1.5 m、底部幅約0.5 m、深さ約1 m、溝跡は幅約0.5 m を測り、いずれも走行する方向は現道とおおむね一致する。

＜出土遺物＞　遺物は縄文土器（中期）が大コンテナ3箱、石器が小コンテナ1箱、土師器と須恵器が中コンテナ1箱出土した。縄文時代の遺物はほとんどが遺構外、土師器と須恵器は遺構内からの出土である。

3．まとめ

今回の調査では、これまで縄文時代の遺跡としては台地南側縁辺部を主体として考えられていたが、その範囲はより北側まで広がりをもち、また古代の竪穴住居跡が検出され、同時期の集落であることが判明し、複合遺跡であることが確認された。



唐戸崎遺跡遺構配置図

唐戸崎遺跡全景

(31) 唐戸崎（からとざき）II遺跡

所　在　地　北上市飯豊5地割38－4ほか
委　託　者　岩手県花巻地方振興局
事　業　名　ふるさと農道緊急整備事業
発掘調査期間　平成9年6月10日～7月7日
調査対象面積　1,514 m²
発掘調査面積　1,514 m²
遺跡番号・略号　ＮＥ45－0357・ＫＴＺII－97
調査担当者　小山内透・七田芳直
協力機関　北上市教育委員会

遺跡位置　1：50,000 北上

1．遺跡の立地

唐戸崎遺跡は東日本旅客鉄道村崎野駅の北西約3.4 km、飯豊川の北側で唐戸崎遺跡の東側隣接地に位置し、飯豊川が形成した河岸段丘（村崎野段丘）上に立地する。遺跡の標高は約89.5 m である。

2．調査の概要

調査区は幅約3 m の現道部分とこの両側の拡幅部分が対象であったが、現道部分はそのほとんどが上下水道と重複して掘削破壊されていたため、実際の調査は拡幅部分について行った。調査の結果、検出された遺構は、縄文時代の陥し穴1基、古代の土坑類3基、時期不明の土坑4基、溝跡4条である。

＜陥し穴＞　長軸約3 m の溝状の1基が検出された。長軸方向はおよそ東西である。

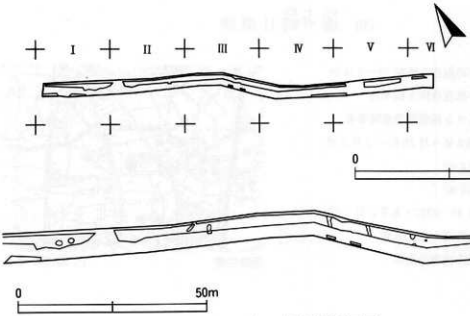
＜土坑＞　古代の土坑は、径約1.2 m の円形が1基と長軸約2 m の楕円形の2基を検出した。いずれも底面に現地性の焼土があり、堰土中には炭化物が多量に混じることから炭窯の可能性が高い。

＜溝跡＞　溝跡は3条が調査区と直行する方向、1条は現道と平行する方向に走行する。現道と平行する1条からは陶器の大甕の破片が出土したことから近世以降のものと思われる。

＜出土遺物＞　遺物は遺構内から土師器が小コンテナで1箱出土したほかは、遺構外から摩滅した縄文土器が若干と飯豊焼きと思われる近代陶器が中コンテナで2箱である。

3．まとめ

今回の調査では、縄文時代の陥し穴と古代の炭窯と思われる土坑が検出されたことから、縄文時代の狩猟場であったことが判明し、また周辺には古代の竪穴住居跡の存在する可能性が考えられる。



唐戸崎II遺跡遺構配置図

唐戸崎II遺跡全景

(32) 庫理遺跡

所　在　地　花巻市宮野目田力地内
委　託　者　岩手県花巻地方振興局
事　業　名　ほ場整備事業宮野目地区
発掘調査期間　平成9年5月16日～7月7日
調査対象面積　540 m²
発掘調査面積　540 m²
遺跡番号・略号　ME 17－1075・KR－97
調査担当者　大森博文・中村直美
協力機関　花巻市教育委員会

遺跡位置　1：50,000 花巻

1．遺跡の立地

遺跡は東北縦貫自動車道花巻インターチェンジから北西約5.3 kmに位置し、南流する北上川の右岸に形成された自然堤防上に立地している。遺跡の標高は約76 m、北上川との標高差は約4 mで、現況は道路および水田である。遺跡の南東約1.1 kmには下幅遺跡、南西約2.2 kmには似内遺跡がある。

2．調査の概要

検出した遺構は竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構1棟、土坑3基、陥し穴状遺構2基、溝跡1条、焼土遺構10基、柱穴状小ピット49基である。調査区は水田造成時の削平が深くまで及び、攪乱を受けている。
＜竪穴住居跡＞　調査区東側と南側から1棟ずつ計2棟を検出した。東側の1棟は表土除去後に焼土と黒褐色土の分布域として確認した。住居跡の西側は調査区域外にかかっており、全体の形状は不明であるが、平面形はほぼ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は残存する南北方向で750 cmを測る。埋土は黒褐色土と明赤褐焼土の混合土主体で構成され、全体に炭化物の小ブロックを少量含む。床面は埋土の状況からは判然としないが住居内から検出した土坑類の埋土が全て黒褐色土主体であることから推定して、明赤褐焼土の下位面と考えられる。壁高は残存する南壁で28 cm、北壁で40 cmを測る。東壁には煙道が2基並列して設けられている。2つの煙道の中間部にも煙道と考えられるような痕跡が認められたが、カマドに相当する部位が南北方向に走る現代の水路跡の為に攪乱を受け、欠失している為、新旧関係を含め詳細は不明である。この攪乱による欠失部と南側の煙道埋土の境から水鳥線刻土器が出土した。また、同住居跡の床面には土坑が19基掘削されており、住居の南壁の北側隅に当たる土坑から「和」の文字が書かれた墨書土器が出土した。

南側の1棟は水道管敷設域、及び調査区域外にかかっていたため、住居跡コーナー部分に当たると考えられる箇所を検出できたにとどまった。形状から住居跡と判断したが、方形の土坑になる可能性もある。
＜竪穴状遺跡＞　調査区北端部から焼土ブロックと炭化物による不整な方形を呈する分布域を検出した。西半部が調査区域外にかかり全体の規模は不明であるが、残存する南北方向で約411 cmを測る。検出した時点で床面であったと考えられ、壁の立ち上がりは残存しない。分布の範囲内で土坑および現地性の焼土が確認されたことから住居跡状遺構と認定したが、遺構ではない可能性もある。カマドは調査した範囲においては検出できなかった。埋土と考えられる黒褐色土と焼土ブロックの分布域中から耳皿が出土した。

＜土坑＞ 調査区中央部から3基を検出した。平面形は円形、楕円形を呈する。規模は最小のもので(52)×90 cm・深さ73 cm、最大のもので139×150 cm・深さ63 cmを測る。断面形は皿形を呈する。遺物が出土していないため、時期など詳細は不明である。

＜陥し穴状遺構＞ 調査区南東側から2基を検出した。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸310～320 cm、短軸45～60 cm、深さ74～80 cmを測る。断面形はV字状をなし、埋土は自然堆積の様相を呈する。時期決定できる遺物を欠き詳細は不明であるが、形状から縄文時代の遺構と考えられる。

＜溝跡＞ 調査区北端部から1条を検出した。溝は南北方向に延び、両端は調査区域外にかかる。規模は上端幅140～155 cm、下端幅30～50 cm、深さ93～100 cmで、検出した長さは310 cmを測る。溝跡の時期を決定できる遺物を欠き、形成・使用の時代、及び用途など詳細については不明である。

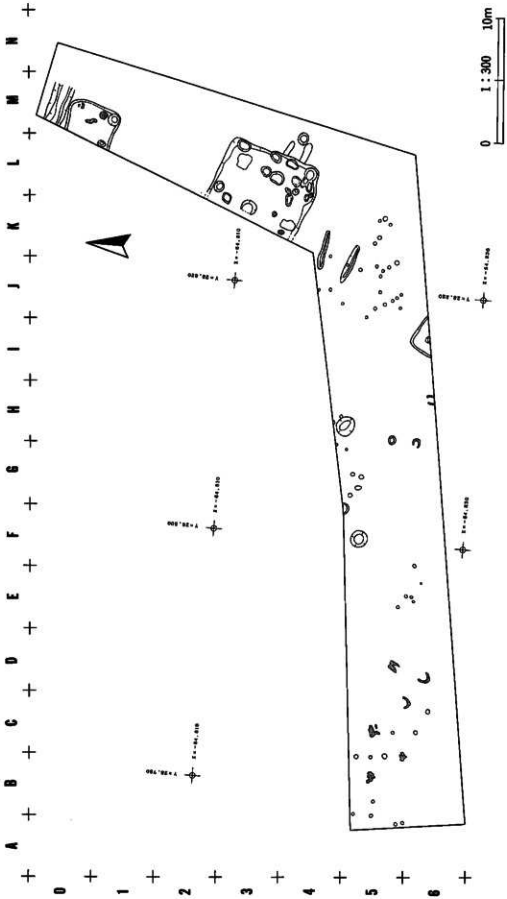
＜焼土遺構＞ 調査区西側と北側から焼土遺構を10基検出した。すべて現地性の焼土である。焼土は形状により2種類に分類される。ひとつは平面形が馬蹄形を呈する焼土で、焼土底面に土坑状の掘込み面を持つものである。規模は最小のもので60×65 cm・層厚4 cm、最大のもので78×115 cm・層厚9 cmを測る。埋土から遺物は出土しておらず、時期など詳細は不明である。もう一つは不整で平面的な焼土の広がりとして検出されるもので、底面に土坑等の施設を伴わないものである。規模は最小のもので40×60 cm・層厚7 cm、最大のもので45×98 cm・層厚9 cmを測る。埋土から遺物はほとんど出土しないが平安時代の遺物を伴うものが1基ある。2つのタイプの焼土遺構は位置的に近接しており、検出面も同一であることから同時期のものである可能性がある。

＜柱穴状小ピット＞ 調査区全域から49基を検出した。分布の集中は西～東側に認められるが、検出した範囲において建物を構成すると考えられるものはない。規模は径15～30 cm・深さ40 cm未満のものが殆どで、埋土は黒褐色土の単層で構成される。時期を決定できる遺物を欠き、形成の時期及び用途など詳細は不明である。

＜出土遺物＞ 大コンテナ6箱分の遺物が出土した。内訳は平安時代の土師器・須恵器と刀子1点である。遺構内からの出土がほとんどを占め、中では水鳥線刻土器・墨書土器を出土した1号竪穴住居跡からの出土量が特に多いものとなっている。器種は土師器坏・甕・耳皿・鉢、須恵器坏・甕・蓋があり、数量としては土師器が多い。

3．まとめ

庫理遺跡は北上川が大きく東に流路を変更する地点に位置する平安時代（9世紀後半）の遺跡である。調査の結果、焼土遺構は調査区西側に、竪穴住居跡は調査区東側に分布が集中して見られた。検出した遺構は少ないものであったが、竪穴住居跡から水鳥線刻土器が出土したことや住居内の土坑から墨書土器が出土した事より、該期の宮野目地区の様子を知る上で良好な資料を追加することができた。



庫理遺跡遺構配置図

平安時代住居跡

煙道底面土器出土状況

線刻土器出土状況

土坑内土器出土状況

土坑

焼土遺構

溝跡

庫理遺跡検出遺構・遺物

(33) 谷地田（やちだ）Ⅰ遺跡

所　在　地　二戸郡安代町字谷地田91番地40ほか
委　託　者　岩手県盛岡地方振興局
事　業　名　中山間地域総合整備事業
発掘調査期間　平成9年6月9日～9月8日
調査対象面積　2,400 m²
発掘調査面積　2,400 m²
遺跡番号・略号　ＪＥ54－1286・ＹＴＤＩ－97
調査担当者　杉沢昭太郎・山下浩幸
協力機関　安代町教育委員会

遺跡位置　1：50,000　荒屋

1．遺跡の立地

谷地田Ⅰ遺跡は、東日本旅客鉄道花輪線荒屋新町駅の北約2.5 km に位置している。馬場山などからなる馬場山山地（小起伏山地）の裾部に立地しており遺跡の標高は313～318 m で、北西から南東への緩斜面部分が遺跡の範囲と思われる。遺跡の東側には目名市沢が南流し、目名市沢と遺跡の比高差は約15 m、遺跡の現況は山林・畑地である。

2．調査の概要

発掘調査を実施した地点は、谷地田Ⅰ遺跡全体の中の東側半分にあたる。発掘の結果、縄文時代の竪穴住居跡9棟、平安時代の竪穴住居跡4棟、中世の竪穴遺構7棟、竪穴状遺構2棟、土坑61基、焼土9基、柱穴約456基などが検出された。

＜縄文時代の竪穴住居跡＞　縄文時代の住居は、発見された土器の特徴から縄文時代後期後～末葉のものと、中期後葉、そして前期のものとに大きく分けられる。縄文時代後期の住居は、直径3～4 m の円形のものが主体で、いずれも地床炉を持つ。最も大きな住居では壁に沿って小柱穴が規則的に並ぶ構造をしている。縄文時代中期の住居は、2棟確認されており、何れも複式炉を持つ。この住居に伴って大木9式と見られる土器や石皿などが出土している。縄文時代前期の住居は2棟が隣接して検出された。削平により壁の立ち上がりが把握できず平面形は判然としない。どちらの住居からも円筒下層a式土器が出土している。

＜平安時代の竪穴住居跡＞　4棟が検出された。一辺の長さが3～4 m で平面形は方形を呈し床面は貼床としていた。カマドは近年の耕作によって壊されており焼土が僅かに残っているに過ぎないが3棟は東壁に、1棟は南東壁にカマドを構築していたと思われる。

＜中世の竪穴建物跡＞　平面形が南北方向に長い長方形を呈し、出入り口の張り出しをもつものが3棟、一辺が2 m 程の方形を基調とした小型のものが6棟検出された。前者は壁に沿って柱穴を配するが後者の中には柱穴をもたないものも2棟確認されている。何れの竪穴建物跡も炉・焼土はなく、遺物も出土していない。

＜柱穴＞　調査区の中でも中央部分の比較的平坦な部分からおよそ456基の柱穴が検出された。これらの多くは掘立柱建物跡を構成すると思われる。柱穴からは銭（洪武通寶）が出土しており中世に属する建物の存在を想定することができる。3棟の建物跡を想定しているがまだ検討中の段階である。また、柱穴が密に分

布する状況から幾度かの建て替えが行われていたと考えられる。

<土坑> 61基が検出されているが、1基が中世、2基が平安時代、35基が縄文時代に属する遺構でそれ以外は群しい時期は不明である。中世の土坑は1.3×0.7ｍの隅丸長方形で中世の竪穴建物の中につくられたものである。平安時代の土坑は1.6×１ｍの隅丸長方形で2基が並んだ状態で検出された。縄文時代の土坑は平面形が円形で断面形がフラスコ状を呈している。規模は最大のもので直径約2.5ｍ、深さ約1.8ｍのものがあるが、直径1.5ｍ前後のものが最も多い。

縄文時代の土坑の中で3基だけ底面に壊れていない土器が置かれていた土坑が検出された。いずれの土器も縄文時代晩期の大洞Ｃ１式の台付鉢である。何れの土器もフラスコ土坑底面の北壁に伏せた状態で置かれていたが土器の中からは何も出土しなかった。これらの土坑の埋土は自然堆積であった。

<焼土> 検出された9基は何れも現地性の焼土である。縄文時代中期の土器を伴うものが2基確認された他は遺物を伴っていないため正確な時期は不明である。

<出土遺物> コンテナ10箱分の土器、石器･石製品、銭などが出土した。土器は、縄文土器が8箱と大半を占め、平安時代の土器（土師器・須恵器）は0.5箱と微量である。縄文時代の土器は前期のものが多く、中期・後期が次ぐ。晩期の土器は土坑に置かれていた台付鉢だけであった。

石器・石製品は、磨製石斧、磨石などの礫石器、石鏃、削器、石匙などの剥片石器の他に装身具として用いられたと思われる玉類なども出土している。

銭は3点出土しているが洪武通寶1点の他は状態がよくなくて文字が判然としない。

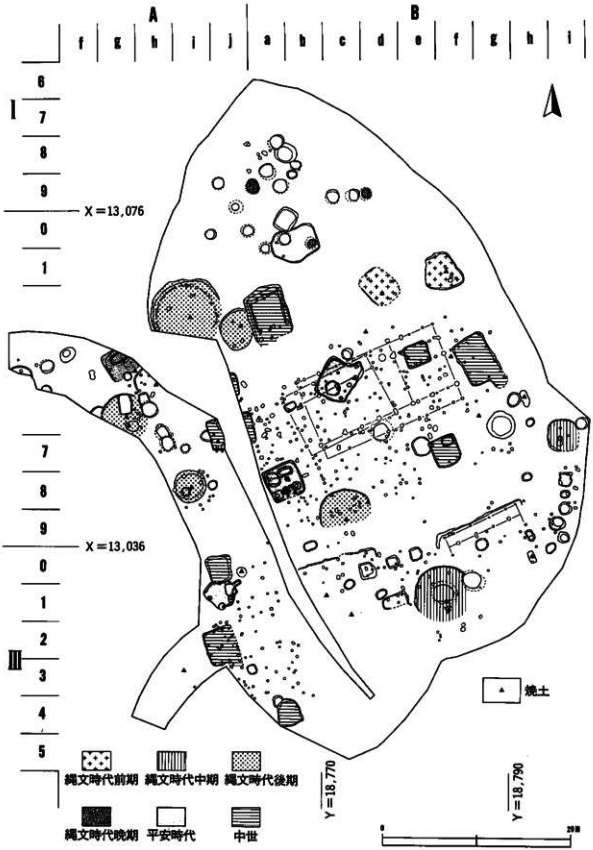
3．まとめ

今回の発掘調査によって谷地田Ｉ遺跡は縄文時代、古代(平安時代)、中世の人々の生活の跡を残した遺跡であることが明らかになった。

縄文時代の住居の位置を見ると、中期には調査区南東の台地の縁辺部付近に分布しているのに対し、後期の住居は調査区中央の比較的平坦な面から北側の緩斜面部にかかる部分、前期の住居は北東側の平坦面から緩斜面部に隣接して位置しており各時期の住居の占地に違いがみられる。加えて今回の調査区では晩期の土坑が確認されたものの住居は見つかっていないことなどから遺跡内での縄文時代各期における集落の在り方の違いが推測される。

平安期の安代町内の遺跡は、安比川流域の全域にあり、河川に沿う街道沿いに分布する傾向がある。本遺跡もこれにあてはまるもので秋田県鹿角地方へ通じる街道沿いの集落としての意味あいが強いと推測する。

中世に於いては実年代を示せる資料に乏しいが、掘立柱建物跡と竪穴建物跡によって集落を形成していたと考えられるし有矢野館や五日市館といった秋田県鹿角や浄法寺方面からの交通の要所に位置する城館に近接する集落として位置付けることができるのでないかと思われる。

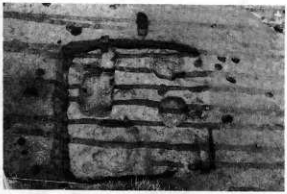


谷地田Ⅰ遺跡遺構配置図

遺跡全景

縄文時代中期の竪穴住居跡

縄文時代後期の竪穴住居跡



平安時代の竪穴住居跡

中世の竪穴建物跡

柱穴群

遺物出土状況（住居床面）

遺物出土状況（住居跡床面）

遺物出土状況（土坑底面）

谷地田Ⅰ遺跡検出遺構

(34) 有矢野館跡（ありやのだてあと）

所在地	二戸郡安代町字五日市35番地ほか
委託者	岩手県盛岡地方振興局
事業名	中山間地域総合整備事業
発掘調査期間	平成9年10月13日～11月21日
調査対象面積	1,200 m²
発掘調査面積	1,200 m²
遺跡番号・略号	ＪＥ54－2239・ＡＹＤ－97
調査担当者	杉沢昭太郎・山下浩幸
協力機関	安代町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000　荒屋

1．遺跡の立地

遺跡は目名市沢と安比川の合流点付近に形成された河岸段丘を利用して形成されている。段丘面は標高315～319 m と比較的平坦であるが、西側丘陵より流れ出る小規模な沢によって開折され、大きく二面に分割されている。中世に構築された館跡はこの自然の沢を利用しながら、一部人工的な開削を加え堀を作りだしている。これまで館の西端は判然としなかったが、事業予定地部分が一部傾斜変曲点を横断することから、この付近であることも予想されていた。調査区の現況は畑地及び山林である。

2．調査の概要

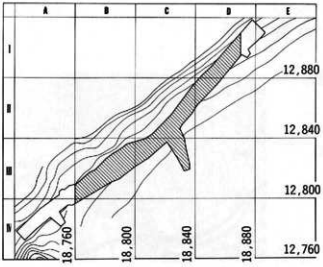
＜竪穴住居跡＞　平安時代の竪穴住居跡は8棟が検出されている。何れも平面形が隅丸方形を呈し底面には貼床を施しているが、カマドをもつものと確認されていないものとがある。カマドの方向は住居の北東壁につくられたものが2棟、南東壁につくられたものが1棟確認された。壁周溝をもつものも2棟検出している。そして住居間の重複も認められることから、最低2時期の変遷が推測される。この中で北東方向にカマドをもち壁際に柱穴列が巡る住居跡がある。一辺が6.5 m の方形プランで、カマドのほかに地床炉も確認されている。また出土遺物がないものの平面形態から中世の竪穴建物跡と思われるものも3棟検出されているほか規模の小さな竪穴状遺構も1棟検出された。

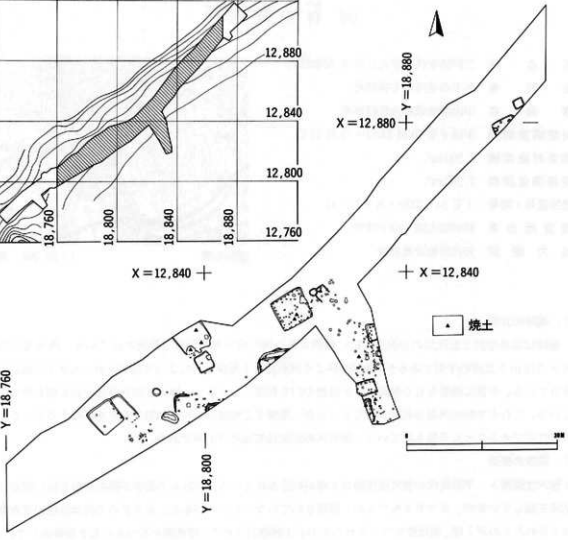
＜土坑＞　5基検出されている。平面形が円形を呈するものが3基、長円形・方形を呈するものが各1基である。いずれの土壙からも出土遺物はなく時期は判然としない。

＜出土遺物＞　検出された平安時代の竪穴住居跡からは土師器の甕の小破片が十数点と刀子が2点出土している。また表土中からは縄文時代前期・中期の土器片と石器が数点出土した。表採資料では鉄鏃・寛永通宝各1点がある。

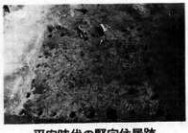
3．まとめ

本遺跡は中世城館及び縄文時代の遺跡として知られていたが発掘調査の結果、新たに平安時代（10世紀後半頃）の集落の存在も明らかになった。そしてその範囲は調査区の東側に続いていると思われる。また複数検出された中世と思われる柱穴群からは建物跡の存在も推測され竪穴住居と掘立柱建物跡とで集落が形成されていたことが想定できる。





遺跡遠景


平安時代の竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡

遺跡遠景

竪穴住居跡及び溝跡

柱穴群と竪穴住居跡

有矢野館跡遺構配置図・検出遺構

(35) 有矢野遺跡

所　在　地　二戸郡安代町字上の山78番地2ほか
委　託　者　岩手県盛岡地方振興局
事　業　名　中山間地域総合整備事業
発掘調査期間　平成9年9月9日～11月13日
調査対象面積　1,800 m²
発掘調査面積　1,800 m²
遺跡番号・略号　ＪＥ54－2266・ＡＹ－97
調査担当者　杉沢昭太郎・山下浩幸
協力機関　安代町教育委員会

遺跡位置　1：50,000　荒屋

1．遺跡の立地

有矢野遺跡はＪＲ花輪線荒屋新町駅の北1.8 kmに位置する。安比川の支流である打田内川と目名市沢に挟まれた安比川西岸の河岸段丘上に立地している。東側へ緩く傾斜しながら、西側丘陵より沢がいくつか形成され、また畑地として利用されているため人工的な起伏も認められる。加えて比較的標高の高い地点には大小の角礫が表土及び地山中に含まれていた。遺跡の現況は畑地・果樹園などである。

2．調査の概要

検出された遺構は竪穴住居2棟、土壙18基、焼土8基、埋設土器1、溝2条である。

＜竪穴住居＞　検出された2棟は共に削平によりプランは不明瞭である。出土遺物から縄文時代前期の遺構と思われる。

＜土壙＞　平面形は円形を呈するもの、隅丸方形、長円形を呈するものなどがある。ⅦＡ区の4基は縄文時代前期、ⅦＡ区で重複して検出された土坑群は時期不明の土取り穴と思われる。

＜焼土＞　何れも現地性焼土である。ⅥＡ・ⅧＡ区の焼土は平安時代。ⅦＡ・ⅨＡ区の焼土は遺物を伴わなかったが、検出面から縄文時代の遺構と思われる。

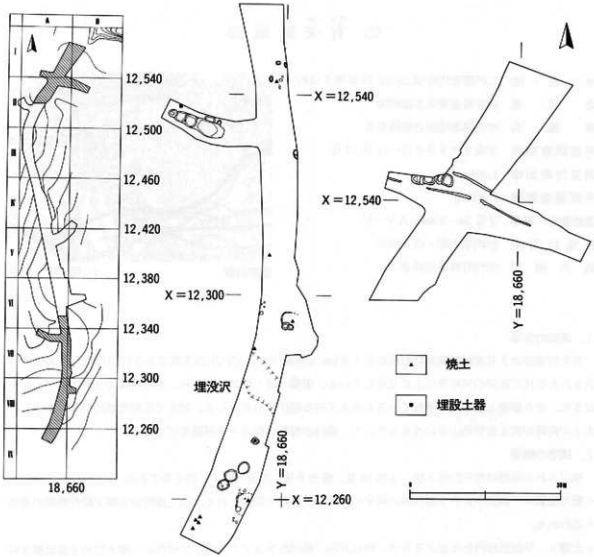
＜埋設土器＞　ⅦＡ区にて1基検出された。埋設されていた土器は縄文時代前期の円筒下層ｄ式の深鉢で器高は、40 cm位でほぼ正位に埋設されている。

＜溝跡＞　検出された2条は隣接し西北西―東南東方向に並行して延びている。規模は調査区内ではそれぞれ36 m、7 mを測るがどちらも調査区外へ延びている。出土遺物はなく詳細は不明である。

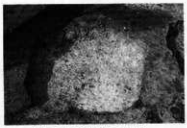
＜出土遺物＞　縄文時代の土器が大コンテナで9箱、石器が0.5箱、平安時代の土器が0.5箱程出土している。縄文土器の大半はⅧＡ区の埋没沢からの出土で前期（円筒下層ａ～ｄ式）のものがほとんどを占めるが弥生土器も若干みられる。その他金属製品では刀子が1点出土している。

3．まとめ

今回の調査区は有矢野遺跡全体の中では西端部を南北方向に調査したことになる。その結果縄文時代の遺構は、主に調査区から東側へ延びていることが明らかとなった。また平安時代の遺構・遺物も若干みられることから周辺に該期の集落が存在していた可能性が高いと思われる。



遺跡全景(1)


縄文時代前期の土坑

埋設土器

遺跡全景(2)

縄文時代前期の土坑

埋没沢

有矢野遺跡遺構配置図・検出遺構

(36) 横間（よこま）II 遺跡

所　在　地	二戸郡安代町字打田内 127 番地ほか
委　託　者	岩手県盛岡地方振興局
事　業　名	中山間地域総合整備事業
発掘調査期間	平成 9 年 4 月 15 日～6 月 6 日
発掘対象面積	1,400 m²
発掘調査面積	1,400 m²
遺跡番号・略号	ＪＥ 55－0033・ＹＭII－97
調査担当者	杉沢昭太郎・山下浩幸
協力機関	安代町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000　荒屋

1．遺跡の立地

横間II遺跡は、安代町役場の北西約 2.1 km、東日本旅客鉄道花輪線横間駅の周辺に位置している。曲田川の南岸に形成された河岸段丘上に立地しており、遺跡の標高は 323 m 前後で曲田川との比高差は 10～12 m である。遺跡の現況は畑地である。

2．調査の概要

検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡 2 棟、竪穴状遺構 2 棟、貯蔵穴 17 基、土坑 3 基、捨て場遺構 1 基である。

＜竪穴住居跡＞　竪穴住居跡は調査区の中央西側に 2 棟が隣接して検出された。西側の竪穴住居跡は地床炉と床面のみが検出された。壁は耕作によって失われているが平面形は床面の痕跡から円形を基調とすると思われる。規模は 5 ×5.5 m で住居内からは柱穴が 5 基検出された。床面は突き固められて非常に硬く構築されていた。柱穴から出土した土器から縄文時代前期の遺構と考えられます。

東側の竪穴住居は一部調査区外に延びている。平面形は円形を呈し、径約 4.6 m を測る。北側では竪穴状遺構と、南側では貯蔵穴と重複しており本遺構のほうが切られており旧い。地床炉が 4 基検出されており建て替えを行った可能性があるがそのプランは把握できなかった。埋土からは縄文時代中期の土器の破片が出土した他磨製石斧や石皿が出土している。

＜土坑類＞　貯蔵穴とした土坑は 17 基検出された。平面形は円形、断面形はフラスコ状を呈し、径 1～1.5 m、深さ 0.5～1.2 m を測る。分布をみると竪穴住居跡の東側に多くみられ、比較的隣接して構築されるという傾向がある。時期としては、出土した土器の細片から縄文時代前期から中期の遺構と考えられる。

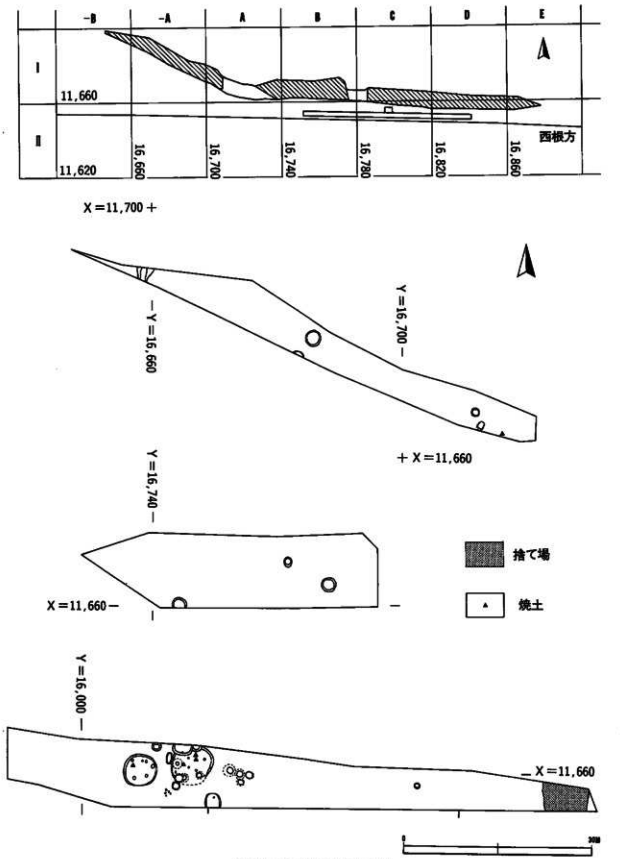
＜捨て場＞　調査区東端の小規模な埋没沢から多量の土器や石器が出土し、この沢を捨て場遺構とした。沢の規模は幅 4 ～5 m、深さは最大で 1.7～2 m、長さは調査区外に続くため詳細は不明であるが調査区内では南－北方向に約 4 m 程検出されている。遺物の出土状況をみると埋土の上位～中位にかけては細片での出土が目立ち、遺構の検出された沢の西側から多く出土する傾向があり沢の西側から廃棄されていたと予想される。埋土下位から沢の底面にかけては原形をほぼ留めた状態のもの、その場で押し潰された状態で出土する土器が多くみられ「捨て場」として利用されていた様子を良く保っていた。土器は縄文時代前期の円筒下

層a～b 2式頃のもので構成されている。石器では剝片等は多量に出土するのに対し剝片石器、礫石器が殆ど含まれないという傾向がみられる。

<出土遺物>　出土した遺物は、石器（石鏃・掻器・削器・石匙・石斧など）がおよそ200点、土器が80箱（45×35×30 cm）に及んでいる。縄文時代前期から中期、そして晩期にかけての時期のものが出土しているが、主体は捨て場から出土した縄文時代前期の土器（円筒下層a～b 2式頃）である。

4．まとめ

今回の調査によって、本遺跡は、縄文時代前期と中期において集落として利用されていた場所であったことが明らかになった。特に縄文時代前期の土器は捨て場を中心に多量に出土しており大きな集落がこの地にあった可能性が高いと思われ敖期の住居跡などは調査区外の南側に広がっていると考えられる。これまで安代町においては縄文時代前期の遺跡の発掘調査事例が少なかったので横間II遺跡出土の遺物はその時期を埋める資料といえる。



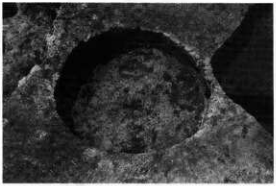
横間II遺跡遺構配置図

遺跡遠景

遺跡全景

縄文時代の竪穴住居跡

縄文時代の竪穴状遺構



土坑

縄文時代の捨て場(1)

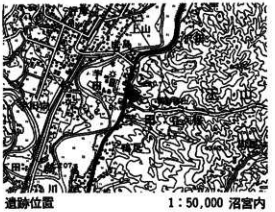
縄文時代の捨て場(2)

縄文時代の捨て場(3)

横間II遺跡検出遺構

(37) 芋田（いもだ）II遺跡

所在地	岩手郡玉山村大字芋田字芋田9番地ほか
委託者	岩手県盛岡地方振興局
事業名	広域農道整備事業
発掘調査期間	平成9年4月10日～8月4日
調査対象面積	4,000 m²
発掘調査面積	4,000 m²
遺跡番号・略号	KE 57－0201・IDII－97
調査担当者	早坂 悟・濱田 宏
協力機関	玉山村教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 沼宮内

1．遺跡の立地

芋田II遺跡は、JR東日本東北線好摩駅の南東約1 km、国道4号線芋田交差点のすぐ東側に位置し、北上川左岸の河岸段丘上に立地している。南側には小さな沢が流れ、西方約500 mにある北上川に注いでいる。遺跡の標高は198 mから204 mで、南西に向かって緩やかに傾斜している。調査前の状況は、畑地及び牧草地、一部道路である。

2．調査の概要

今年度の調査により、調査区北側の高位面と、南側低位面のともに比較的平坦な部分を中心に遺構が確認された。検出された遺構は、奈良時代の竪穴住居跡2棟、平安時代の竪穴住居跡19棟、住居状遺構4棟、土坑7基、焼土遺構5基である。

＜竪穴住居跡＞ 21棟の竪穴住居跡は、いずれも重複を避けるような形で検出された。出土した土師器等の遺物から、8世紀から10世紀初頭に存在していたと考えられる。また、多寡はあるものの灰白色火山灰を埋土中に含むものがほとんどであった。

平面形は、隅丸方形4棟、隅丸長方形2棟、隅丸台形1棟、方形3棟、長方形2棟、その他1棟である。調査区外に遺構が延びているため、部分的にしか形状を把握できないものが8棟あった。規模は、1辺の長さが3 m前後のものが10棟、約4 m～6 mのものが8棟、最大規模のものが8 m前後で、その他不明なものが2棟である。

カマドは、1棟の住居に1基のみ有するものと、複数有するものがあり、前者は、南東壁に作られたものが6棟、その他北東・東・西壁に作られたものがそれぞれ数棟あった。後者は、南東壁に2基作られたものが1棟、南壁、西壁に各1基有するものが1棟、南東壁に3基と北東壁に1基有するものが1棟である。どちらも、カマド本体の残存状況から同時使用ではなく作り替えられたものと考えられる。これらのカマドの方向の違いは、この集落内の住居群の時期差を考察する上で手がかりの一つになると思われる。カマドの特徴としては、本体の袖部の芯材に数個の礫を組んでいるものや煙出部に礫を巡らせているものがあること、煙道部から煙出部にかけて底面が緩やかに立ち上がるものがあることなどが挙げられる。

貯蔵穴と思われる土坑を有する住居跡は5棟6基で、位置はカマドの右脇2基、左側2基、両側が1例2

基である。

柱穴は、4本柱のものが5棟、4本柱と考えられるがそのうち数本しか検出されなかったものが6棟で、他は検出されなかった。4本柱は長方形の配置のものがほとんどであるが、不明瞭なものが1棟ある。

また、3棟の住居跡からは炭化材や焼土が検出された。いずれも焼失家屋である可能性が高い。うち1棟は炭化材が中央部から四隅に向かって広がっており、柱の焼け残りであると思われる。

この他、掘り炬燵状の掘込みがあるもの、出入り口用と思われる若干の張り出しのある住居跡がそれぞれ1棟ずつ検出された。

<住居状遺構> 竪穴住居ほどの規模をもつがカマドを持たないもので、調査区北側から2棟、南側から2棟検出された。平面形は隅丸方形で1辺の長さが3m前後のものが1棟、4m前後のものが2棟、5～6mのものが1棟である。うち1棟には床面に炉跡が2カ所あり、出土遺物としては鉄製品がある。周囲の竪穴住居跡と比較して全体に掘り込みが浅く床面の凹凸が少ない。

<土坑> 調査区北側から6基、東側から1基計7基検出された。北側の6基は、直径50cm～80cmほどの規模で、詳細な時期は不明だが、出土遺物から縄文時代に属するものも数基あると思われる。

東側の1基は1.2m×2.4mの隅丸長方形をなし、堆土から土師器や須恵器の破片とともに、碗の形をした鉄滓が出土した。性格は不明だが、形状から何らかの作業場であると考えられる。

<焼土> 幅が30～80cm前後、厚さ5～10cmの規模の小さなものが、北側から3基南側から2基計5基検出された。平面形は不整であり、時期は古代に属するものが4基、縄文に属するものが1基と思われる。いずれも焼成は良好である。

<出土遺物> コンテナ14箱分の土器・土製品、石器・石製品、鉄製品が出土している。土器のうちの9割が土師器で、残りが須恵器と縄文土器である。比較的須恵器の出土量が多い。土師器は坏・甕類が中心で、その他小型鉢や耳皿、把手付土器？などが出土している。須恵器は9棟の住居跡から出土しており、器種は坏・甕・大甕・壺である。縄文土器は後期初頭のものがほとんどで、前期・晩期のものはわずかにみられる程度である。

石器類は総数で19点と少なく、石斧が2点、石鏃が6点、擦器・削器が3点、石棒が2点、独鈷石が1点出土している。その他には、砥石が3点（いずれも住居内）、石皿が2点出土している。

鉄製品は、遺構外のものも合わせて13点出土し、刀子が4点、鉄鏃2点、その他釘等がみつかっている。

また、北海道で続縄文文化と呼ばれる時代の土器片（後北C_2-D式）が19点出土している。

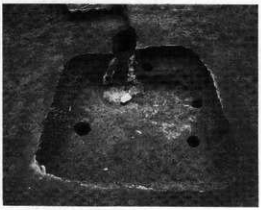
3．まとめ

今回の発掘調査の結果、芋田II遺跡は8世紀から10世紀初頭にかけての奈良時代・平安時代の集落跡であることが確認された。これらの住居跡は、出土遺物や住居の形態などから、集落を3つの時期に分けることができると考えられる。この他、カマドを4つ持つ住居跡から耳皿が4点出土するなど、特徴的な遺構もあることからも様々な考察が可能であるが、詳細については今後の検討課題としたい。

また、出土した後北C_2-D式の土器は、当時の岩手以北の地域との交流を考える上で貴重な資料の一つになると考えられる。

遺跡全景

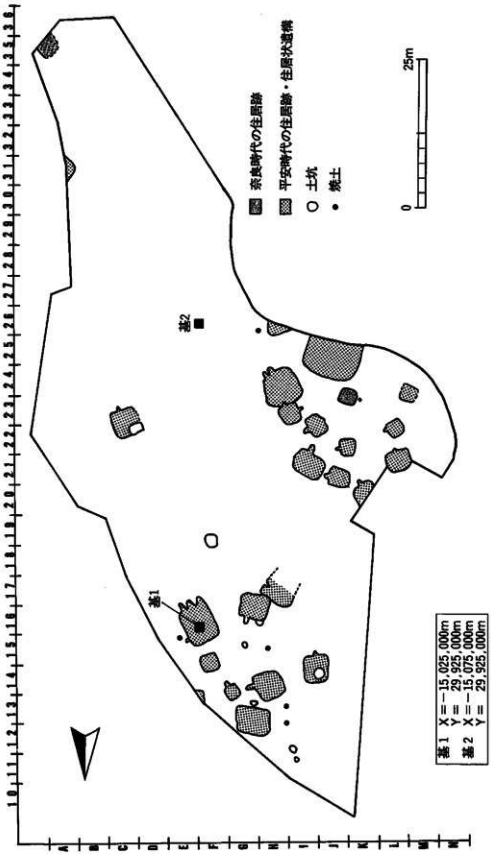
カマドを4つもつ住居跡と出土した耳皿



不規則に位置する柱穴を伴う住居跡

出入口と思われる張り出しのある住居跡

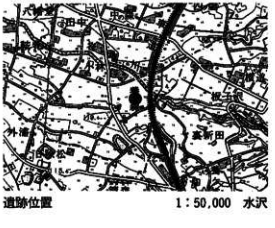
芋田II遺跡検出遺構・出土遺物


奈良時代の住居跡
平安時代の住居跡・住居状遺構
土坑
焼土
25m
0
基1 X＝−15,025.000m
Y＝ 29,925.000m
基2 X＝−15,075.000m
Y＝ 29,925.000m
基1
基2

芋田Ⅱ遺跡遺構配置図

(38) 板子沢遺跡

所　在　地　胆沢郡胆沢町小山字裟ヶ森193ほか
委　託　者　岩手県水沢地方振興局
事　業　名　担い手育成基盤整備事業・徳岡地区
発掘調査期間　平成9年4月10日～6月10日
調査対象面積　2,000 m²
発掘調査面積　2,000 m²
遺跡番号・略号　ＮＥ45－0065・ＩＫＺ－97
調査担当者　村上　拓・熊谷佳恵
協力機関　胆沢町教育委員会



遺跡位置　1：50,000　水沢

1．遺跡の立地

板子沢遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線前沢駅の北西約3.6 km に位置し、胆沢扇状地の南端近く、寿安堰にのぞむ南東緩斜面に立地する。遺跡の東側には東北自動車道が南北に走り、遺跡から南東約500 m のところには前沢サービスエリアがある。遺跡の標高は約90.0～88.2 m で、調査前は水田として利用されていた。

2．調査の概要

今回の調査では、近世農民の屋敷跡が見つかり、この屋敷を構成する建物跡等の諸施設の痕跡が検出された。また、18～19世紀の陶磁器をはじめ、当時用いられた様々な遺物も見つかった。

＜建物跡＞　調査区からは約180個の柱穴が検出され、次の8棟の建物跡が見つかっている。

・**母屋跡**　屋敷の中心となる母屋跡は計3棟である。調査区の東半部に1棟、西半部には2棟が重複した状態で検出された。いずれも東西方向に長軸をもち、南向きに正面をもつ建物であるとみられる。

・**小屋跡**　東半部の母屋の北側・東側からはそれぞれ1棟ずつの小屋跡が見つかった。また西半部の母屋の南東側からも掘りこみをもつ建物の跡が見つかっている。詳細な性格は不明であるが、母屋に付属する建物（小屋）であると考えられる。

・**厩跡**　母屋の東隣には、近接して厩が設けられている。東西の母屋に1棟ずつ計2棟が検出された。東側の母屋にともなう厩の掘りこみからは炭化した木材と焼けた壁土が出土しており、火災によって焼失したか、あるいは取り壊す際に焼かれている可能性がある。

＜井戸跡＞　母屋の北側に3基の井戸跡が検出された。いずれも人為的に埋められており、井戸の構築に用いられたとみられる大きな石がいくつも落ち込んでいる状態が確認された。

＜溝跡＞　調査区からは合計20条の溝跡が見つかっている。これらの溝はほぼ正確に東西・南北方向に走り、建物が検出された区域を区画している。また、西の母屋の裏手（北側）には溝と連続した深い掘りこみがあり、水をためて「洗い場」として使われた場所であると推定される。この付近からは農具などの刃物を研ぐのに用いられたと思われる砥石が多量に見つかっている。

＜池状遺構＞　調査区の南隅部では池状の遺構が検出された。この付近は屋敷の面よりも低く、溝の一部もこれに連続する。埋土からは陶磁器の破片や下駄などの木製品が出土している。池状の掘りこみ自体の性格

は不明であるが、砥石の出土が多いことから水場として利用されていたようである。

<塚>　近世屋敷が検出された調査区から南東に約100mのところに、「板子沢遺跡」の標柱が立つ塚があり、この精査を行なった。この塚は、古代の製鉄に伴う鉄滓が積み上げられたものである可能性が指摘されていたが、精査の結果、周辺一帯の土層の境界に自然に集積した鉄分の固まりが開田や耕作の際に掘り起こされ、数度にわたって積み上げられたものであることが判明した。塚の下部も精査を行なったが、遺物や構造物は検出されなかった。

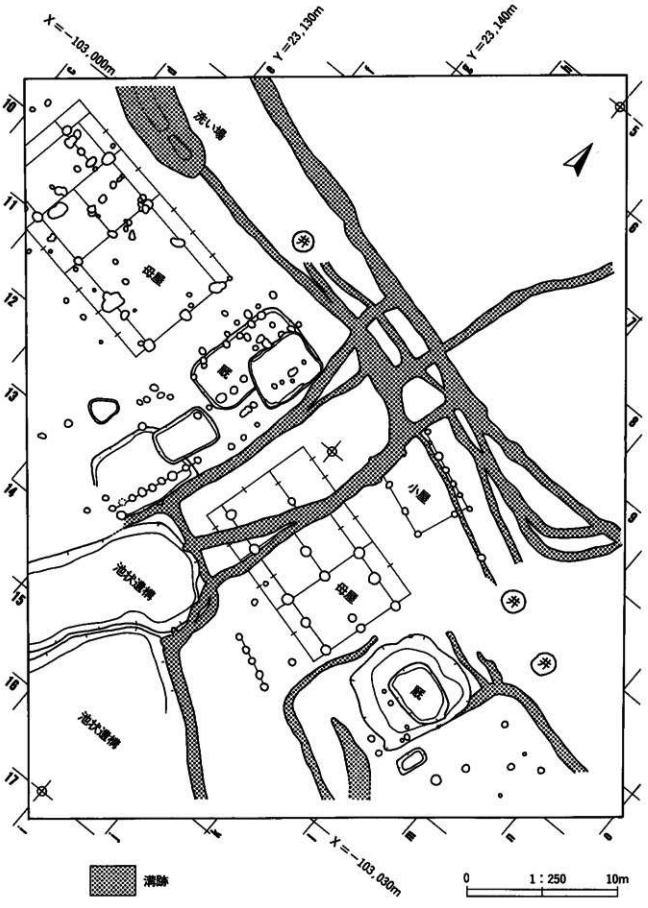
<出土遺物>　遺物の中心は近世陶磁器類で、碗・皿・鉢・擂り鉢など日常的な雑器が出土している。肥前・唐津・美濃産など当時一般的に流通したもののほかに、中国産のものもごく少数みられる。また、焼成段階で破損した粗質の陶器片が出土することから、遺跡の近くでも陶器類の生産が行なわれていた可能性がある。陶磁器以外の近世の遺物としては、キセル・釘などの金属製品、下駄、土製玩具のイノシシ、石臼、多量の砥石などが出土している。

またさらに古い時代の遺物として、縄文時代の石鏃・石匙や、平安時代のものとみられる布目のついた瓦片も出土している。

3．まとめ

今回の発掘調査の結果、調査区内には江戸時代の一般的な農民の屋敷があったことがわかった。また、縄文時代や平安時代の遺物も出土していることから、長い間に渡って断続的に人々に利用されてきた土地であることが判明した。

特に、近世農家の屋敷を構成する母屋・小屋・厩などの建物の配置、それを取り囲む溝など、屋敷の全体像が明確に把握されたことは大きな成果と言える。地元では、調査区付近に「キンジ屋敷」・「シンゾウ屋敷」という二つの屋敷があったという伝承があり、今回検出した二つの屋敷がこれらに相当するのかについては今後の検討課題としたい。


X=−103,000m
Y=23,130m
Y=23,140m
X=−103,030m
浅い場
段丘
段丘
小場
段丘
池状遺構
池状遺構
溝跡
0
1：250
10m

板子沢遺跡遺構配置図

調査区全景（南上空から）

小屋跡にともなう掘り込み

西側母屋裏手の「洗い場」

母屋の柱材と柱穴

井戸跡

板子沢遺跡検出遺構

(39) 上寺田遺跡

所在地	胆沢郡衣川村大字上衣川村字上寺田99－4
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	広域営農団地農道整備事業・胆沢南部地区
発掘調査期間	平成9年4月8日～5月15日
調査対象面積	442 m²
発掘調査面積	442 m²
遺跡番号・略号	ＮＥ54－0254・ＫＴＤ－97
調査担当者	中村直美・大森博文
協力機関	衣川村教育委員会

遺跡位置　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

上寺田遺跡は東北自動車道平泉前沢インターチェンジから北西約7.1 kmに位置し、南流する北股川の左岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約76～77 m、北股川との標高差は約26 mで、現況は水田である。

2．調査の概要

検出した遺構は、土坑8基・焼土遺構5基・集石遺構1基・埋設土器2基・柱穴状小ピット232基・溝跡1条である。水田造成工事による削平・撹乱が深くまで及んでおり、遺構の上部は消失している。

＜土坑＞　調査区全域から8基を検出した。平面形は円形のものが6基、楕円形のものが2基である。規模は70～100 cmのものが多く、最小のもので66×70 cm・深さ29 cm、最大のもので200×220 cm・深さ32 cmを測る。断面形は皿形、袋形を呈する。遺物はほとんど出土しないが縄文時代後期前葉の土器片を出土するものがある。また底面に礫を伴うものが2基ある。

＜焼土遺構＞　調査区北側から5基を検出した。すべて現地性の焼土である。焼土の形状や規模は様々で、最小のもので30×54 cm・層厚10 cm、最大のもので50×115 cm・層厚18 cmを測る。これらの焼土から遺物は出土しておらず、時期など詳細は不明であるが、周辺から縄文時代後期前葉の土器が出土していることや、検出層位から推定して縄文時代後期に比定されると考えられる。また、削平によりプランを確認できなかった住居跡に伴う炉跡の可能性がある。

＜集石遺構＞　調査区中央部で1基を検出した。14～28 cmの礫を数個楕円状に集めたような状態のものである。集石の下部に土坑等の施設は伴っていない。付近からは縄文時代後期前葉の土器片が出土しているが、時期を決定できるような遺物はなく、詳細は不明である。

＜埋設土器＞　調査区東側から1基、西側から1基の計2基を検出した。東側の埋設土器は口縁部の直径が27×37 cmの深鉢、西側の埋設土器は口縁部の直径が18×24 cmの深鉢である。共に口縁部と底部を欠いている。他の遺構との関連性など、詳細は不明であるが、住居跡に伴う埋設土器であった可能性もある。

＜柱穴群＞　調査区全域から柱穴及び柱穴状小ピットを含む232基を検出した。規模は様々であるが、径

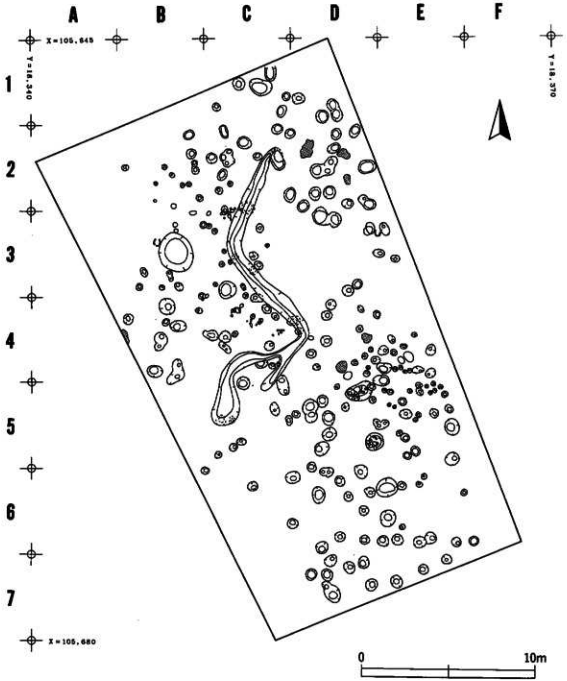
40〜50 cm、深さ 50〜80 cm 前後のものが多い。このうち深さ 1 m 以上の柱穴は北側に分布が集中している。平面形は円形や不整な楕円形を呈する。これらの柱穴のなかで最も深いものは 116 cm を測る。当時の構築面は更に上位であったことを考えると、柱穴の一部は削平によりプランを確認できなかった住居跡、及び建物跡を構成するものと考えられる。時期は出土遺物及び検出面から、縄文時代後期前葉のものと考えられる。

＜溝跡＞　調査区中央部で 1 条を検出した。規模は上端幅 30〜145 cm、下端幅 15〜95 cm、深さ 7.5〜23 cm で、全長は約 20.5 m に及ぶ。この溝の東側はさらに調査区域外に延びて行くものと思われる。溝跡の時期を決定するような遺物を伴わない為、形成・使用の時代、及び用途など詳細については不明である。

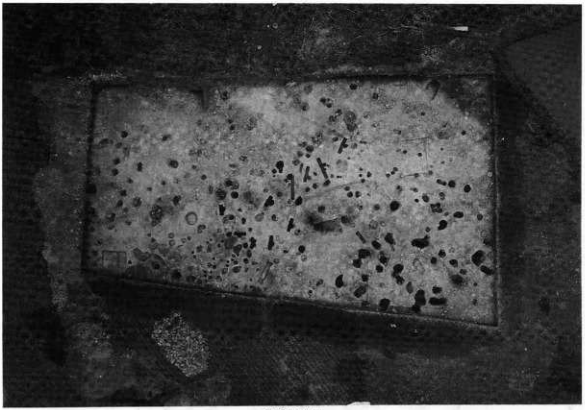
＜出土遺物＞　大コンテナ 3 箱分の遺物が出土した。内訳は土器・土製品・石器・石製品であるが、大半は縄文時代後期前葉の土器である。土製品は耳栓・円盤形土製品などが数点出土した。石器は磨製石斧・小形石斧などが出土している。

4．まとめ

今回の調査では、縄文時代後期と考えられる土坑・埋設土器・柱穴群等を検出したが、これらの遺構の中では柱穴及び柱穴状小ピットが 232 基と圧倒的に多いことを特徴としている。この柱穴及び柱穴状小ピットは水田造成時の削平・攪乱により、上部構造を欠失した竪穴住居跡や掘立柱式建物跡の柱穴であった可能性が高い。中でも深さ 1 m を超える柱穴については柱穴配置・構成等の検討はこれからであるが、柱穴・柱痕跡の規模から推定すると、大型の建物が存在したものと考えられる。なお、上寺田遺跡の発掘調査は平成 10 年度以降にも継続調査が予定されている。



上寺田遺跡遺構配置図



調査区全景

土坑

土器埋設遺構

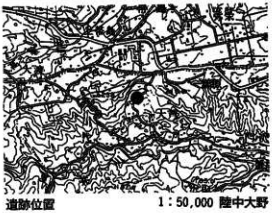
柱穴断面

溝跡断面

上寺田遺跡検出遺構

(40) 大芦（おおあし）Ⅰ遺跡

所在地	岩手県久慈市夏井町21－19ほか
委託者	岩手県久慈地方振興局
事業名	ふるさと農道整備事業
発掘調査期間	平成9年4月10日～9月10日
調査対象面積	3,120 m²
発掘調査面積	3,120 m²
遺跡番号・略号	ＪＥ18－0137・ＯＡＩ－97
調査担当者	高木　晃・鈴木浩二・中野敏夫
協力機関	久慈市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 陸中大野

1．遺跡の立地

大芦Ⅰ遺跡はＪＲ久慈駅の北西約8 km、夏井川の上流北岸の丘陵地に位置する。周辺は段丘崖が地滑りによって緩い傾斜となった斜面が広がる。調査区内でも複数地点で旧石器時代末～縄文早期前葉に比定される地滑りによる断層を検出している。遺跡は斜面上部の標高150～190 m に立地し、今回の調査は遺跡中央部に建設される道路の用地内について行った。なお、現在の道路との位置関係から調査区全体をA～K区の11区に区分している。

2．調査の概要

(1) 縄文時代の遺構

竪穴住居跡5棟、土坑14基、土器埋設遺構1基、捨て場1ケ所等を検出した。

＜竪穴住居跡＞　調査区北端のＪ区から縄文時代中期末の住居跡が2棟、重複した状態で検出されている。平面形は円形、規模は3～4 m 程でそれぞれ中央南寄りに石囲炉を持つ。H区では縄文時代晩期の住居跡が3棟検出されている。このうち2棟は重複関係にあり、いずれも平面形は円形、規模は4 m 前後で中央部に石囲炉がある。H区南端で検出された1棟では、炉の焼土の上に完形の壺形土器が横位の状態で出土した。土器は二次焼成を受けておらず、炉の廃絶時点で置かれたものと推測される。

＜捨て場＞　C区の現道下で検出した地滑りに寄って生じた幅20 m の凹地に、大量の縄文時代晩期の遺物を含む層が厚さ最大2 m で堆積している。この地点は昭和59年に水害による道路補修の事前調査の際、既に大規模な縄文時代晩期の遺物包含層として確認されていた部分である（『大芦遺跡発掘調査報告書』久慈市教育委員会1985）。捨て場全体の規模は不明だが、北西～南東方向に延びる細長い凹地だったと考えられる。包含層は色調や炭化物、焼土の混入具合により最大10層に細分可能である。今回の調査では範囲内の半月形の部分を2 m 毎に12区分し、各々細分した層毎に掘り下げた。遺物の密度は非常に高く土器・石器の他、各種土製品・石製品、シカ・イノシシ等の動物遺存体を含む。包含層の上部では大洞Ｃ1式、下部では大洞ＢＣ式が主体であり、長期間にわたり繰り返して廃棄された当時の残滓が包含層を形成したと考えられる。特筆される遺物に製塩土器と推測される無文粗製の尖底土器があり、復元された個体を含み破片数では300点を超える。一般的な粗製土器と比較し非常に薄手で二次焼成が顕著である。なお、この地点を捨て場にしてい

た集落の居住域は調査区内では検出していない。

(2) 近世の遺構

掘立柱建物跡3棟、製鉄関連遺構3基、墓壙13基、柱穴状ピット等を検出した。

<掘立柱建物跡> H区では桁行4間（8 m）、梁行1間（2.5 m）の建物を検出した。柱穴からの遺物の出土はないが、検出した区域から中国産染付を含む16世紀末頃の陶磁器片の出土があり、建物の年代もその頃に比定されると考えられる。

<製鉄関連遺構> 近世の製鉄関連遺構としては製鉄炉2基、鍛冶炉1基を検出した。製鉄炉はA区に位置し、2.5×1 mの楕円形に構築された掘り込み2基が間隔を置かず並列しており、斜面下方には前庭部状の竪穴状遺構が隣接している。掘り込みの内部は底面～壁面が強い焼成を受けるが還元面は見られない。2基とも褐色土で埋め戻されているが、製鉄炉地下構造の残存部分と判断される。

鍛冶炉はE区西端で検出した。2.5×1 mの楕円形を呈する掘り込みで周囲を大小の礫で囲った構造となる。底面が顕著な焼成を受けており上部は二次的な焼土で埋め戻されている。大鍛冶炉の可能性があるが確定できない。周辺斜面下方側を中心に1 t強の鍛冶滓、碗形滓、鍛造剥片、フイゴ羽口等の出土がある。両者とも出土した陶磁器片などから18世紀後半～19世紀前半の遺構と推測される。

<墓壙> A区・F区で近世後半の墓壙を13基検出した。形状は方形が主で、規模は径0.5 m～1.5m程になる。人骨は12体出土し、埋葬姿勢の判るものは仰臥屈葬である。遺体は乳幼児が半数を占める。副葬品として銭貨（新寛永、鉄銭）、陶器（小久慈焼壺）、煙管、鉈、包丁、鋏、漆器片、琥珀原石等が出土している。墓壙上部から鍔の出土も見られる。副葬品の年代より18世紀後半～19世紀前半にかけての墓壙と考えられる。

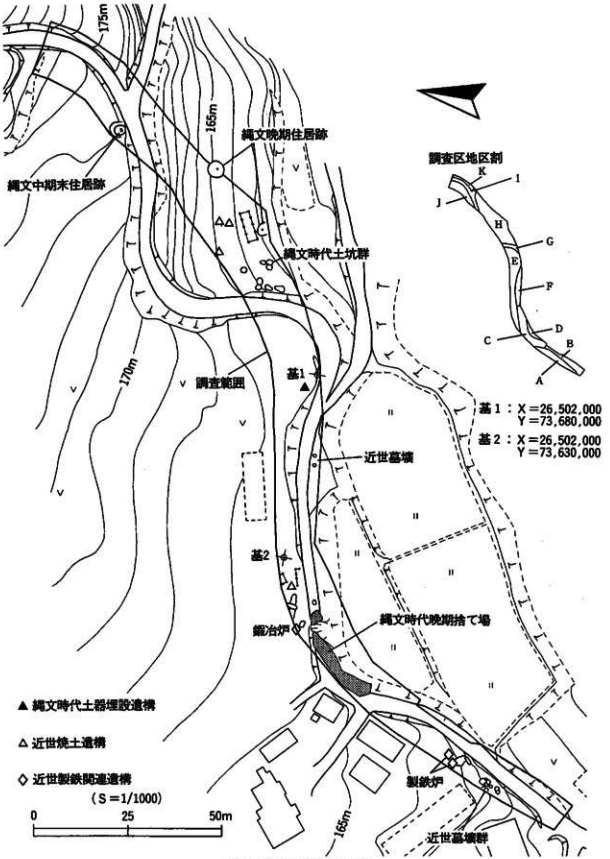
(3) 出土遺物

縄文時代の遺物はC区捨て場を中心に大コンテナ130箱程の出土がある。縄文土器は後・晩期の他早期中葉、前期初頭の破片を含む。石器は土器の量に比べ少ない。土製品・石製品では遮光器土偶、人面付中空土製品、イモガイ形土製品、耳飾、岩版等がある。弥生時代の遺構は確認していないが終末段階の土器がH区から少量出土している。中・近世の遺物は墓壙の他、各区のI層から陶磁器類、金属製品類、鉄滓、シカ・イノシシの骨等が出土している。

3、まとめ

今回の調査で大芦I遺跡は縄文時代の集落跡、近世の製鉄作業場等、長期間にわたって人々の生活の痕跡が残された場所であることが判明した。なかでも縄文時代晩期の捨て場は一部だけの調査だが、残存状況が良好で多量の遺物を層位毎に取り上げており、各種遺物の層位的変化を捉えることができる。また県内でも出土例の少ない製塩土器を一定量含むことから、現在の海岸線より約10 km内陸にある本遺跡で出土した背景を検討する必要がある。

近世の製鉄関連遺構は炉の性格に不明な点があり検討課題だが、久慈地方の近世製鉄業を探る上で貴重な資料になると考えられる。


175m
165m
170m
縄文晩期住居跡
縄文中期末住居跡
縄文時代土坑群
調査範囲
基1
基2
近世墓壊
鍛冶炉
縄文時代晩期捨て場
製鉄炉
近世墓壊群
調査区地区割
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
基1：X＝26,502,000
Y＝73,680,000
基2：X＝26,502,000
Y＝73,630,000
▲ 縄文時代土器埋設遺構
△ 近世焼土遺構
◇ 近世製鉄関連遺構
（S＝1/1000）
0
25
50m

大芦Ⅰ遺跡遺構配置図

調査区全景

縄文中期竪穴住居跡

縄文晩期捨て場

同左遺物出土状況

近世製鉄遺構

近世墓検出状況

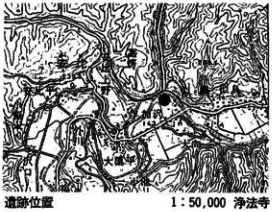
縄文早期断層

捨て場出土土製品類

大芦Ⅰ遺跡検出遺構・出土遺物

(41) 大向上平遺跡（おおむかいうわだいら）

所在地	二戸市似鳥字大向上平8番地2ほか
委託者	岩手県二戸地方振興局
事業名	一般農道整備事業
発掘調査期間	平成9年7月7日～9月1日
調査対象面積	1,500 m²
発掘調査面積	2,000 m²
遺跡番号・略号	ＪＥ18－0199・ＯＭＫ－97
調査担当者	中村直美・大森博文
協力機関	二戸市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 浄法寺

1．遺跡の立地

大向上平遺跡は東日本旅客鉄道東北本線二戸駅より北東約5.3 kmに位置し、東流する安比川の右岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約137～140 m、安比川との標高差は約20 mで、現況は畑地である。

2．調査の概要

検出した遺構は竪穴住居跡5棟、掘立柱建物跡1棟、土坑6基、畑跡と考えられる溝状遺構3群、柱穴状小ピット92基（以上平安時代）、暗渠1基（現代）である。

＜竪穴住居跡＞　調査区北側で1棟、中央部で2棟、南側で2棟の計5棟を検出した。本年度調査した5棟のうち、全体の形状を把握できたものは5号住居跡1棟のみである。検出した住居跡の平面形は、精査範囲から推定するといずれも正方形に近い形を呈する。いずれも埋土全体に十和田a降下火山灰のブロックを含む。埋土の状況や出土した遺物から、住居跡の時期は10世紀中葉～後葉であると考えられる。

＜掘立柱建物跡＞　調査区の北側で1棟を検出した。柱配置は2間×3間で、柱間隔は2.3 ～3.2 mである。平面形は長方形を呈する。柱穴の埋土全体に十和田a降下火山灰のブロックを含む。出土遺物はなく詳細は不明であるが、埋土の状況から10世紀中葉～後葉の建物跡と考えられる。

＜土坑＞　調査区北側から3基、南側から3基を検出した。埋土の上部には、いずれも十和田a降下火山灰のブロックを含む。規模は径2～2.5 m、深さ30～40 cm前後のものが多い。また、平面形が楕円形をなし、底面に焼土が形成されているものが3基ある。遺構の時期は埋土の状況、出土遺物等から10世紀中葉～後葉であると考えられる。

＜畑地跡＞　畑地跡と考えられる溝状の遺構は調査区北側～南側にかけての平坦部で検出した。検出面は表土除去後の黒色土面である。埋土に白頭山火山灰を含むもの（A群）と十和田a火山灰を含むもの（B群・C群）がある。堆積する火山灰に相違があることや重複関係が認められること、また分布の方向にもズレがあることから、A群、B・C群はそれぞれ時期を異にすると考えられる。各群内における条間の規模、距離、方向はほぼ一定しており、A群は条の幅15～40 cm、深さ6～12 cm、条間の間隔1.5 ～2.5 m、条の長さ12 m以上のものが多い。C群は条の幅20～50 cm、深さ4～8 cm、条間の間隔10～25 cm、条の長さ4～6 m

と若干違いが認められる。北側で検出されたB群は遺存状態が悪く詳細は不明であるが、埋土の様子や分布の形態などがC群のものと似ていることからこれと同時期の可能性がある。

<柱穴状小ピット> 調査区南半部から92基を検出した。検出面はいずれも中軽浮石を少量含む黒褐色土の上面である。規模は径20～45cm、深さ10～25cm前後のものが多い。埋土は黒色土を主体とし、中軽浮石を少量含むものがある。埋土中から遺物が出土しないことから時期など詳細は不明である。また、これらが全て地山直上で検出されたこと、遺跡が自然堤防上に立地することなどから、自然の起伏によるものである可能性もある。

3．出土遺物

大コンテナ5箱分の土器、石器、石製品、鉄製品が出土した。

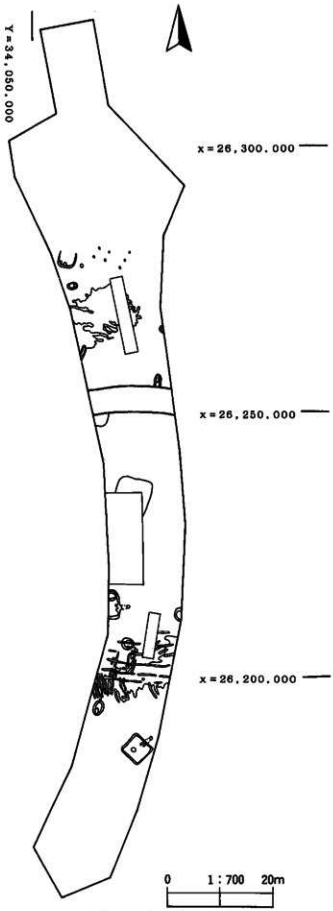
<土器> ほとんどが平安時代の土師器で、大多数は住居跡および土坑の埋土から出土した。住居内出土のものはカマドの構築材料として用いられた土師器の甕や須恵器の甕の破片が多い。遺構外からの出土はほとんどない。そのほかに縄文時代後期と弥生時代の土器片が少量出土している。

<石器・石製品> 平安時代の住居跡の床面から磨石1点、磨製石斧（？）1点、尖頭器1点が出土した。その他に遺構外から石鏃1点、垂飾品1点が出土している。

<鉄製品> 刀子1点と鏃1点、手鎌1点が平安時代の住居跡から出土した。手鎌は住居内の土坑底面からの出土である。保存の状態は良好で、装着した木質の部分が残存する。

4．まとめ

今回の調査で大向上平遺跡は平安時代（10世紀中葉～後葉）の集落を中心とする遺跡であることが分かった。とくに時期を異にする畑跡と考えられる溝状の遺構が見つかったことで、新たな資料を追加することができた。今回検出された遺構の埋土には全て十和田a降下火山灰のブロックが含まれることから、これらの遺構はほぼ同時期に営まれ、集落を構成していた可能性が高い。遺構の分布は、更に南側に広がることが予想される。



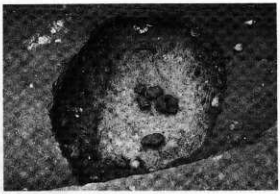
大向上平遺跡遺構配置図

調査区全景

平安時代住居跡

平安時代住居跡

住居内坏出状況



土坑内手鎚出土状況

溝状遺構完掘

溝状遺構断面

大向上平遺跡検出遺構・遺物出土状況

(42) 山口館跡

所　　在　　地　宮古市山口1丁目117－3ほか
委　　託　　者　宮古市
事　　業　　名　市道北部環状線改良工事
発掘調査期間　平成9年6月9日～8月8日
調査対象面積　2,500 m²
発掘調査面積　2,500 m²
遺跡番号・略号　LG 23－2310・YGD－97
調査担当者　鳥居進人・溜　浩二郎
協力機関　宮古市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 宮古

1．遺跡の立地

山口館跡は宮古市中心部にある東日本旅客鉄道山田線宮古駅から北西約1.5 km に位置している。調査範囲は昨年度調査区の東側2,500 m² で現況は山林である。

2．調査の概要

今年度調査区の東側に旧沢跡があり、この沢跡の埋没後に竪穴住居跡が構築されている。検出された遺構は奈良～平安時代の竪穴住居跡が5棟、他に平安時代の竪穴状遺構1基、時期不明の土坑が4基検出されている。

＜竪穴住居跡＞　今回の調査で5棟が検出された。いずれも斜面に構築されているため残存状態は悪く、斜面の上方ほど残りはよい。時期は奈良時代の竪穴住居跡が2棟、平安時代の竪穴住居跡が3棟である。奈良時代の竪穴住居跡は昨年度調査され、やはり奈良時代の遺構が検出された尾根の東側斜面から検出された。形状は方形状を呈し、規模は一辺520 cm ほどである。残存状態は斜面上方ほど良く、北半に貼り床が確認された。カマドは東側に設けられ、床面付近からは奈良時代の甕、坏の破片が出土している。また平安時代の竪穴住居跡の1棟は調査区中央部に設けられ、一辺約4 m で平面形は方形で東壁と北壁のそれぞれ中央にカマドが設けられ、埋土からは密教法具と10世紀後半頃と思われる土師器坏が出土している。

＜竪穴状遺構＞　調査区北西部で検出され、長方形状を呈し、長軸8 m14cm×短軸3 m54cm である。床面には焼土、炭化物が一面にわたって堆積し、埋土及び床面から土師器片が数点、釘が30数本、農具の鍬先が1点出土している。遺構の形態から住居跡ではなく、作業小屋など住居以外の施設として利用されたと考えられる。

＜土坑＞　4基が検出された。出土遺物はなく、時期は不明である。

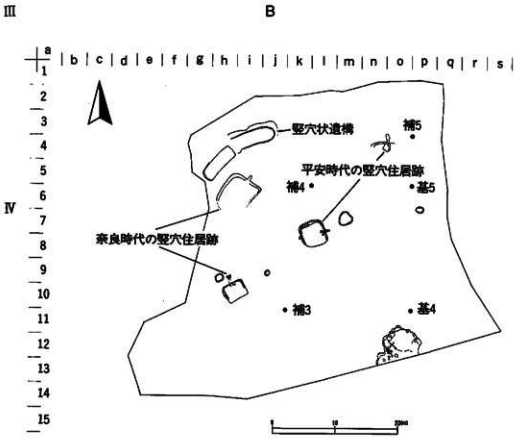
＜石垣跡＞　調査区北端、およびその下段に位置し、東西に延びる。上段が長さ約9.5 m、下段が約8.2 m、石垣の高さは高位で130～140 cm ほどである。石垣の構造は元来、緩斜面であった自然地形に段をつけ、その前端部に花崗岩を積み上げている。今回の調査で構築時期の確認が期待されたが、石垣が構築された後に堆積した層から遺物が出土していないため構築年代は判らずに終わった。

＜出土遺物＞　今回の調査で出土した遺物は縄文時代の土器片が数点、石斧が2点、奈良～平安時代の土器

が中コンテナで1箱ほどである。他に平安時代の釘が62本、紡錘車が1点、古銭（寛永通寶）1点、近世陶磁器の破片が数点出土している。また平安時代の住居跡の埋土から密教法具（錫杖頭、三鈷鐃、鐘鈴）が出土している。これらはいずれも鉄製で、錫杖頭は外輪に左右3箇の環を有し、全体の高さは24.4cmある。杖との連結部は深さ4.2cmの空洞になっており、これを製造した時期は、形態から8～9世紀前半頃と考えられる。三鈷鐃は鉄製で全体の高さは30.0cm、三鈷部の高さは10.1cm、鈴部の高さは7.1cmあるが、三鈷部の中央鈷の先端が欠損している。鐘鈴は、頂部に突起があり、高さは本体が6.6cm、突起部は約1cmである。

3．まとめ

今回の調査で昨年度同様、奈良～平安時代の集落跡であることが確認された。構築時期の確認が期待された石垣は今年度調査では残念ながら不明に終わったが、残り半分は来年度の調査範囲に含まれており、来年度以降の調査によって構築年代が解明されることを期待される。また来年度以降の調査でも今年度同様、奈良～平安時代の遺構・遺物の増加が見込まれるであろう。密教法具については、遺跡から北北西1.8kmには霊験の地として知られる黒森山があり、付近には古くから修験僧たちの修練場である黒森神社があることから、これと何らかの関連があると考えられ、錫杖頭、三鈷鐃、鐘鈴が一括して出土した状況も他に例が少なく、山岳修験に関する遺物としては極めて貴重である。



基４　X＝−38,358,000
　　Y＝　95,082,000

基５　X＝−38,338,000
　　Y＝　95,082,000

補３　X＝−38,358,000
　　Y＝　95,062,000

補４　X＝−38,338,000
　　Y＝　95,066,000

補５　X＝−38,330,000
　　Y＝　95,082,000

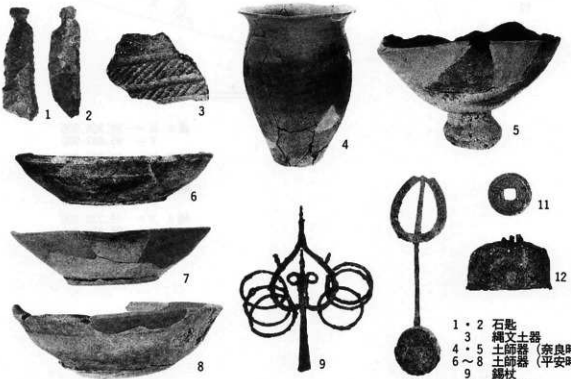
山口館跡遺構配置図

遺跡全体

奈良時代の竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡

遺物出土状況（仏具）



1・2　石匙
3　縄文土器
4・5　土師器（奈良時代）
6～8　土師器（平安時代）
9　錫杖
10　三鈷鐃
11　古銭（寛永通寶）
12　鐘鈴

山口館跡検出遺構・出土遺物

(43) 本宮熊堂B遺跡第4次調査

所在地	盛岡市本宮字熊堂49ほか
委託者	盛岡市
事業名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成9年7月1日～10月31日
調査対象面積	4,651 m²
発掘調査面積	4,181 m²
遺跡番号・略号	LE16－2118・OKO－97
調査担当者	菊地榮壽・小笠原健一郎 佐藤綾子
協力機関	盛岡市教育委員会・地域振興整備公団

遺跡位置

1．遺跡の立地

熊堂B遺跡は東日本旅客鉄道㈱仙北町駅より西約1.7 kmに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。調査区南側は平成5年度に第1次調査を実施している。現況は果樹園、畑地で、周辺地域は水田・畑地・宅地などの土地利用がみられる。調査区の標高は約124 mである。

本遺跡の周辺には、西側約2 kmの地点にある志波城跡をはじめ、本遺跡と時代的にも近いと考えられる小幅遺跡・鬼柳A遺跡・台太郎遺跡などがある。

2．調査の概要

熊堂B遺跡の調査区は本年度2カ所あり、調査の効率を図るため便宜上、熊堂B遺跡(1)、熊堂B遺跡(2)に分けて調査を進めたが、盛岡市関係は両調査区にまたがっている。

検出した遺構は、竪穴住居跡8棟、竪穴状遺構6棟、掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、溝状遺構1条、井戸状遺構1基、土坑21基、柱穴状小土坑328基である。

＜竪穴住居跡＞ 調査区(1)で1棟検出した。平面形は方形で規模が2.4×2.0 m、はっきりしたカマドや煙道、煙出しはなく、南東隅付近にカマド袖部の芯材として使用した石と焼土が認められる。出土遺物より平安時代の住居跡と思われる。調査区(2)で奈良時代の住居跡1棟、平安時代の住居跡6棟検出している。平面形は、不整方形状(1)、方形状(5)、隅丸方形状(1)に分けられる。規模は長軸で3.4～5.7 m、短軸で3.1～4.7 m、深さ15～64 cmを測る。奈良時代の住居跡のカマドは北西壁中央に付設し、カマド中より土師器の甕が出土している。平安時代の住居跡のカマドは南東壁やや北側、東壁やや北側、北東壁やや東側、北東壁隅、南東壁隅にそれぞれ付設している。埋土中からは、回転糸切り痕をもつ坏、内面黒色処理、両面黒色処理の坏が出土している。また、床面からは鉄製の紡錘車、鉄鏃、鉄鎌が出土している。

＜竪穴状遺構＞ 調査区南東端で1棟、東部で1棟、北東部で4棟検出している。平面形は、方形状、隅丸方形状を呈している。規模は、一辺が2.8～5.6 m、深さが4.7～2.8 mを測る。調査区北東部の北端にある2棟は、掘立柱建物跡の柱穴と重複関係にあり、竪穴状遺構の方が古いと思われる。

＜掘立柱建物跡＞ 調査区北西端で1棟検出している。東西桁行約14.8 m、南北梁行約7.4 m、北側に庇がつく。柱穴の掘り方は、径約0.9～1 m、深さ60～70 cmと大きく、柱痕から推定できる柱材の径は30～40

cm である。調査区北側の竪穴状遺構と重複関係にあり、掘立柱建物跡の方が新しいと思われる。埋土中からは、須恵器片、土師器片が出土している。検出面から中世以降に属すると思われる。

＜溝跡＞　調査区(1)の北東側で１条検出した。低湿地への落ち込みに沿って、南東から北東に延びる。この溝跡は公団関係の調査区に連続している。南端部の埋土下部で縄文土器片が出土しているが、流れ込みと思われる。時期は出土遺物より縄文時代晩期の可能性もあるが、遺物量が少なく特定するにはいたらないと思われる。

調査区(2)東端で１条、調査区西端～東端に延びる溝１条を検出している。東端の溝は、長さ 13 m、上端幅 1.8 m、下端幅 0.3～0.4 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形は逆台形状を呈する。時期は不明である。調査区西端～東端に延びる溝は、長さ約 68 m、上端幅約 0.8 m、下端幅約 0.5 m、深さ 12 cm を測る。断面形は逆台形状を呈し、埋土中位で十和田ａ降下火山灰を確認している。十和田ａ降下火山灰直上で内黒処理の坏が出土している。断面形は逆台形状を呈する。時期は火山灰、出土遺物より平安時代の遺構と思われる。

＜溝状遺構＞　調査区北西端で１条検出している。長さ 3.2 m、上端幅 0.4～0.7 m、下端幅 0.3～0.6 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形はＵ字状を呈する。埋土から遺物を確認できず、時代は特定できない。

＜井戸状遺構＞　調査区中央部で１基検出している。平安時代の竪穴住居跡と重複関係にあり、竪穴住居より新しいと思われる。上端 3.4 m、中端 2.7 m、底部 0.8 m、深さ 1.4 m を測る。断面形はロート状を呈する。埋土中より須恵器片、遺構周辺より洪武通寶が出土している。時期は出土遺物より中世以降と考えられる。

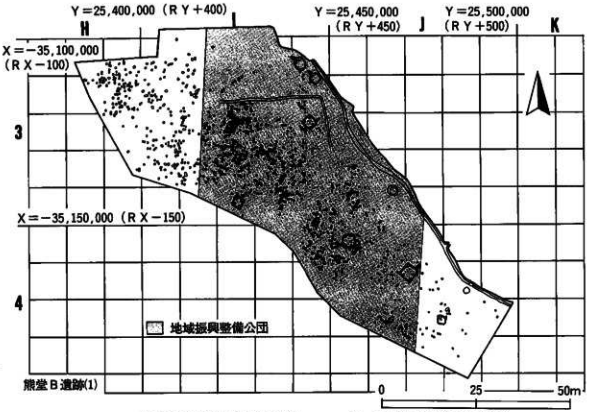
＜土坑＞　調査区(1)南部で２基検出した。いずれも遺物はなく時期は不明である。調査区(2)で 19 基検出した。調査区(2)北端で検出した土坑では、焼土中に多数の土師器片、ほぼ完形の土師器の坏、高台付坏、内面黒色処理の坏、須恵器の壺が出土している。

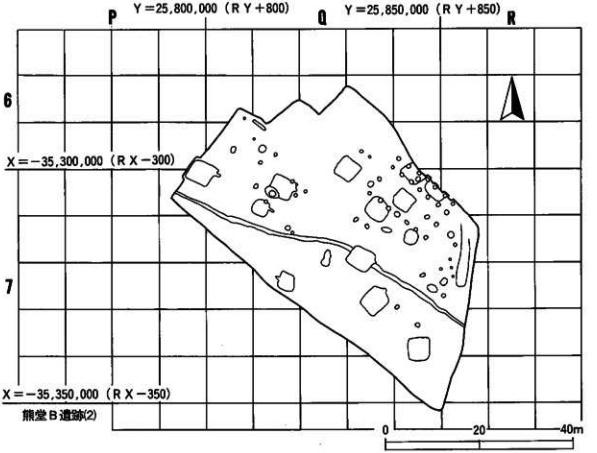
＜柱穴群＞　調査区(1)で 314 基、調査区(2)で 14 基検出した。４基の柱穴状小土坑から土師器片、須恵器片が出土している。用途は不明である。

＜出土遺物＞　今回の調査で出土した土器の総量はコンテナ(大)で約 12 箱である。縄文時代の土器片も含まれるが、時期的には奈良～平安時代の遺物が主である。土師器が大半を占め、坏、内面黒色処理の坏、両面黒色処理の坏、墨書土器、刻書土器、高台付坏、器台、甕がある。須恵器は甕、壺、坏がある。鉄製品では、紡錘車１点、鉄鏃２点、鉄鎌１点、刀子１点が竪穴住居跡の床面より出土している。また、古銭(「洪武通寶」)が出土している。

３．まとめ

今回の発掘調査により、本遺跡は隣接する第１次調査の結果を含め、河岸段丘の微高地を利用した奈良時代、平安時代の集落跡であることが明らかとなった。今後は検出した竪穴住居跡の変遷を出土した遺物と比較しながら検討していきたい。





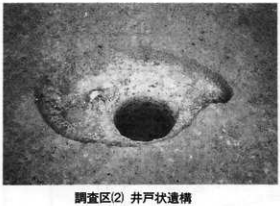
本宮熊堂Ｂ遺跡第４次調査遺構配置図

調査区(2) 全景

調査区(1) 土坑

調査区(2) 竪穴住居跡

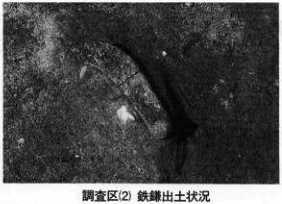
調査区(2) 掘立柱建物跡



調査区(2) 井戸状遺構

調査区(2) 溝跡断面

調査区(2) 紡錘車出土状況



調査区(2) 鉄鏃出土状況

本宮熊堂B遺跡（盛岡市）検出遺構

(44) 鬼柳（おにやなぎ）A遺跡第4次調査

所　在　地　盛岡市本宮字鬼柳49－2ほか
委　託　者　盛岡市
事　業　名　盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間　平成9年4月4日～5月30日
調査対象面積　4,089 m²
発掘調査面積　4,739 m²
遺跡番号・略号　ＬＥ 16－2120・ＯＯＡ－97
調査担当者　菊地榮壽・小笠原健一郎
佐藤綾子
協力機関　盛岡市教育委員会・地域振興整備公団

遺跡位置　1：50,000 盛岡

1．遺跡の立地

本遺跡は東日本旅客鉄道㈱東北本線仙北町駅の西約2.5 km、雫石川右岸の河岸段丘上に位置している。一帯の地目は水田、畑地、宅地、果樹園などである。調査区は用水路、道路に囲まれた水田、畑地を中心とし面積は4,739 m²、標高は約126 m に立地している。

2．調査の概要

鬼柳A遺跡の調査区は本年度2か所あり、調査の円滑化を図るため、便宜上北側調査区を鬼柳A遺跡(1)、南側調査区を鬼柳A遺跡(2)と呼称し、調査を進めた。

検出遺構は、鬼柳A遺跡(1)で奈良時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の竪穴住居跡6棟、陥し穴状遺構3基、土坑1基、柱穴状小土坑89基、鬼柳A遺跡(2)で陥し穴状遺構1基、柱穴状小土坑20基を検出した。

＜竪穴住居跡＞　竪穴住居跡は、すべて調査区(1)で検出した。平面形は方形6棟、やや台形状1棟に分けられる。規模は一辺が3～4 m で、深さは20～30 cm が2棟、40 cm 前後が1棟、50～60 cm が3棟である。奈良時代竪穴住居跡のカマドは南東側壁のやや左よりに付設している。袖部は土師器の甕を芯材に使用して構築している。平安時代竪穴住居跡の1棟は重複し、カマドは南西側壁のやや左よりに1基、北東側壁のやや左よりに1基付設している。他の平安時代竪穴住居跡のカマドの位置は、南東側、東側、北西側、西側壁のやや左よりにそれぞれ1基付設している。また、2棟の竪穴住居跡の床面で炭化物や焼土が見られ、焼失した住居と考えられる。

＜陥し穴状遺構＞　平面形が溝状をなす4基を検出した。規模は長さ3 m、幅0.5 m、深さ0.5 m と長さ4 m、幅0.86 m、深さ0.5 m である。横断面形は4つとも、V字状の形を呈している。断面形から縄文時代の遺構と考えられる。

＜土坑＞　重複している竪穴住居跡から1基検出した。平面形はほぼ円形で、規模は直径約2 m、深さ0.4 m である。埋め戻された土より竪穴住居跡とほぼ同時期と思われる。

＜柱穴群＞　調査区(1)で89基、調査区(2)で20基の柱穴状小土坑を検出した。建物の柱穴にはならず、用途は不明だが、竪穴住居跡周辺にも見られ、柵跡の可能性も考えられる。

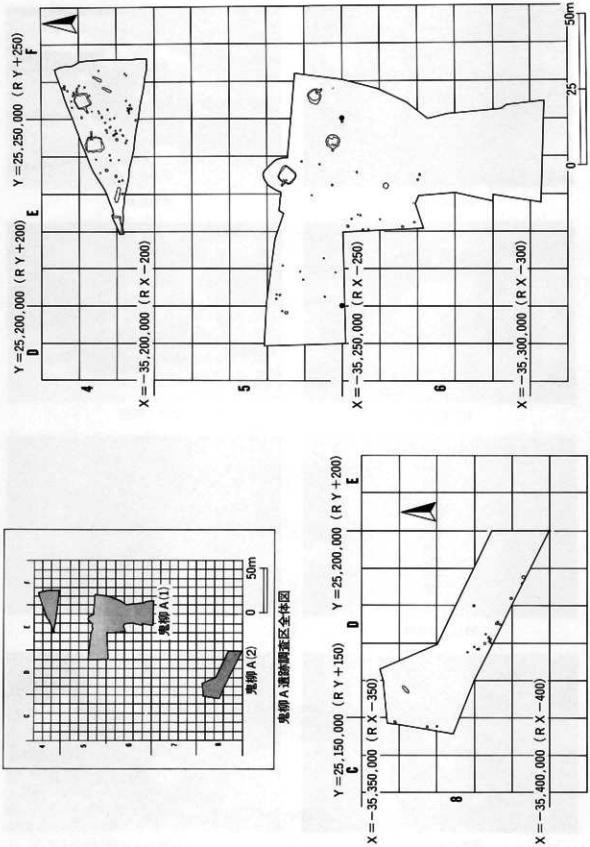
＜出土遺物＞　今回の調査で出土した土器の総量はコンテナ(中)で約1箱である。時期的には奈良・平安時

代の遺物である。土師器が大半を占め、器種は甕・坏・内黒処理の坏などがあり、ロクロ使用のものが多い。須恵器は甕・坏がある。

3．まとめ

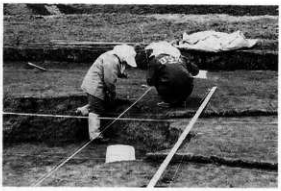
今回の調査は、盛岡市教育委員会の試掘結果から奈良・平安時代の集落を想定しながら調査を進めた。その結果、鬼柳A遺跡は、縄文時代には狩猟の場、そして、奈良・平安時代には集落の場として利用されていたことが伺える。

今後、周辺の調査が行われれば、全体の状況がより明確になってくると思われる。

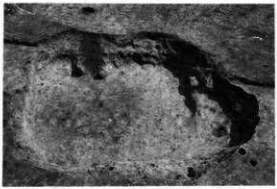


鬼柳A第4次調査遺構配置図

調査区全景

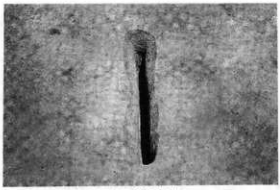


実測風景



竪穴住居跡

カマド断面



陥し穴状遺構

陥し穴状遺構断面

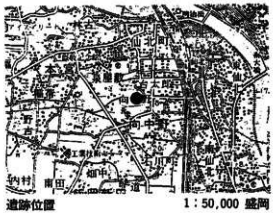
須恵器出土状況

土師器出土状況

鬼柳A遺跡検出遺構

(45) 台太郎遺跡第15次調査

所　在　地	盛岡市向中野字八日市場33－2ほか
委　託　者	盛岡市
事　業　名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成9年4月4日～11月26日
調査対象面積	12,906 m²
発掘調査面積	12,906 m²
遺跡番号・略号	ＬＥ16－2269・ＯＤＴ－97
調査担当者	高橋義介・松川由次 玉山健一・中野敦夫
協力機関	盛岡市教育委員会・地域振興整備公団



遺跡位置

1．遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の南西側約900mに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。標高は120.3～121.6mで、北緯39度40分、東経141度8分付近にあたる。調査区の現状は休耕田と畑地で占められている。遺跡の北東側50mには、昭和60年に盛岡市教育委員会によって調査が行われ奈良・平安時代の集落跡を検出した第3・4次調査区、南側には地域振興整備公団の第16次調査区が隣接する。

2．調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡65棟、掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構4棟、土坑43基、炉跡1基、焼土遺構3基、堀1条、溝跡54条、柱穴列1条、橋脚跡4基、柱穴状土坑523基等である。

＜竪穴住居跡＞　奈良時代の竪穴住居跡は10棟検出されている。規模は1辺が3.3～4.5m前後のものが多く、平面形は隅丸の方形と長方形を呈している。内1棟は1辺が8mの大型住居跡で、集落の中心的な役割を果たしたと思われる。柱穴は4本柱を基本としている。カマドの設置位置は、北壁と南壁の中央部とコーナーに寄るものとがあり、前者が多くを占めている。袖部の芯材に土師器の甕を伏せて使用するものや小型の甕を支脚に転用する例も見られる。煙道部は大部分がくり貫き式である。

平安時代の竪穴住居跡は52棟検出されている。規模は1辺が2.7～4.6mで、平面形は隅丸の方形と長方形を呈し、柱穴は確認できないものが多い。カマドの設置位置は東・西・南・北壁にあり、中央部からコーナーに寄るものが多くを占める。大部分の煙道部はくり貫き式である。

中世の竪穴住居跡は3棟検出され、規模は1辺が3～6m前後で、平面形は隅丸の方形と長方形を呈している。壁際には径10～30cm前後の柱穴が巡り、張り出し部をもつものもある。内1棟は焼失家屋で、屋根にのせていたと思われる石が中央部にまとまって出土している。

＜掘立柱建物跡＞　3棟検出している。規模は桁行8間（15.9m）×梁行1間（1.26m）・桁行7間（15m）×梁行2間（5.2m）の2面庇・桁行4間（8.8m）×梁行3間（6.45m）の3面庇である。棟方向は北北西～南南東を示しており、遺構の切り合いや間尺から時期は中世以降と推測される。

＜竪穴状遺構＞　規模は1辺が1.8～3.6mで、平面形は楕円形・隅丸長方形・不整形状である。時期は不明

であるが、埋土の状況から見て近世以降のものある。

＜土坑＞ 43基検出している。規模は1辺が36cm～3.67m前後で、平面形は円形・方形・楕円形・隅丸長方形状等がある。平安時代の2基の土坑は開口部1.46×1.44m・3.14×1.42m、平面形は方形と隅丸長方形状を呈している。底部からは須恵器の甕や刀子が出土している。内1基の壁面と底面は焼成を受けて赤褐色に変化し、人為的に多量の礫を埋めていることから見て墓壙と思われる。他の土坑は遺物の出土がなく、時期不明のものが多い。

＜炉跡＞ 亜角礫9個から構成される石組炉で、焼土の上にはロクロ成形の土師器の坏が2個伏せてその上に甕が置かれてあった。礫は焼成を受け、やや赤褐色変化を生じ脆くなっている。

＜焼土遺構＞ 3基の規模は径46～28cm、平面形は円形と不整形状を呈している。焼成の厚さは2～最大8cmを測り、いずれも現地性の焼土である。時期は出土遺物がなく不明である。

＜堀＞ L字状に西と南側の調査区域外に延びているために規模の全容は不明である。確認できた長さは南西～北東側38m、南東～北西側68m、北東側にコーナーがある。上幅は5.1m、下幅が2.5m、深さ60～80cmで巡っている。内側に掘立柱建物跡やコーナー部北西側から機脚の施設が検出されていることから、この堀が中世の環壕の一部であると思われる。

＜溝跡＞ 大小合わせ54条検出しているものの、遺物の出土がなく時期不明なものが大部分を占めている。規模は上幅3.76m～34cm×下幅2.22m～14cm、深さ80～3.7cm、長さ3～130mである。平安時代の3条の溝跡埋土には灰黄褐色の十和田a降下火山灰の堆積が見られる。

＜柱穴列＞ 2基検出されている。柱穴は径30～50cm、平面形は円形ないし楕円形を呈している。規模は4間（12.9m）で直線的に並び、間尺がまちまちで1.75～最大5.90mである。12間（9.4m）で、やや弧をえがくように並んでいる。

＜機脚跡＞ 堀（環壕）の北東コーナー付近で4基検出している。堀の法面に径23～30cm大の機脚柱を垂直に打ち込んでいる。規模は3×2.2mで、内2基の機脚柱は空洞であった。

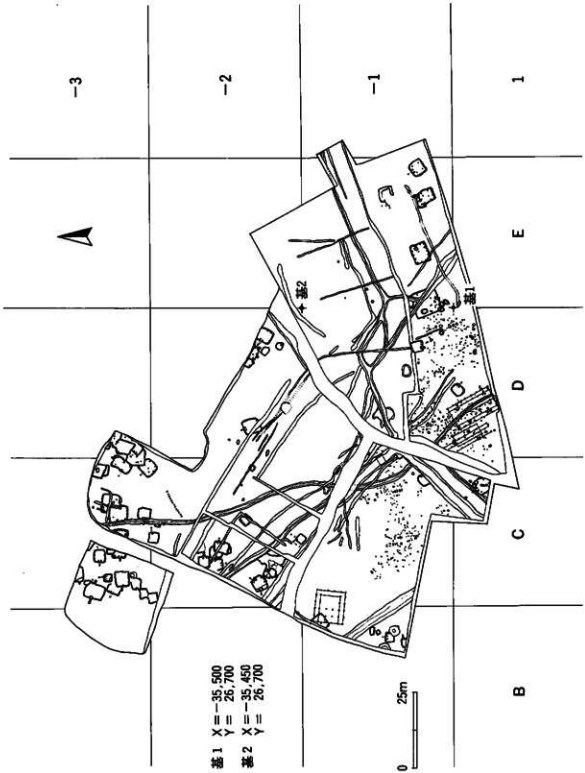
＜柱穴状土坑＞ 規模は径11～98cm前後、平面形は円形・楕円形・不整形状等を呈している。調査区の南側地区を中心に523基検出しているが、建物跡の柱穴や柵列にはならず用途および時期は不明である。

＜出土遺物＞ 縄文時代の遺物は土器と石器が数点を数えるだけで、大部分が奈良・平安時代の土師器と須恵器で占められている。器種は坏・高台坏・甕・大甕・壺・長頸壺・甑・片口等があり、中に墨書の坏や山形の文様を口縁部に施文した壺もある。一部の壺の表面には朱の痕跡が認められる。

生活用具は土製紡錘車・土錘、鉄製品は刀子・釘・鉄鏃・環状製品・鋤先・鎌・鉄滓、石製品は砥石・磨石・凹石の種類がある。装飾品は奈良時代の竪穴住居跡から管玉が出土している。他に中世の竪穴住居跡からは鉄滓、古銭は土坑から元豊通寶、江戸時代の寛永通寶が出土している。

3．まとめ

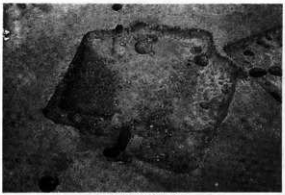
今回の調査では、段丘縁辺部寄りに奈良～平安時代を中心とする大集落が立地することが明らかになり、調査区内をL字状に巡る堀跡が中世の環濠の一部であることも確認された。また、竪穴住居跡からは多くの土師器や須恵器をはじめとし、農耕具の鋤先・鎌、武器である鉄鏃が出土しており、南東側約2kmに位置する古代城柵の志波城跡と集落構造の関連性を考える上での貴重な資料を提供している。中世以降の遺構も検出され今後周辺の遺跡調査が進むにつれて、奈良時代・平安・中世の各時期における集落変遷の様相が明らかになると思われる。



台太郎遺跡遺構配置図

奈良時代住居跡

奈良時代住居跡



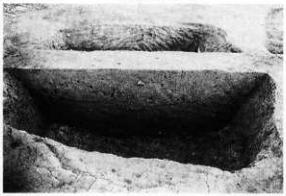
平安時代住居跡

土器出土状況

竪穴状遺構

掘立柱建物跡

溝跡



土坑断面

台太郎遺跡検出遺構

IV. 本報告

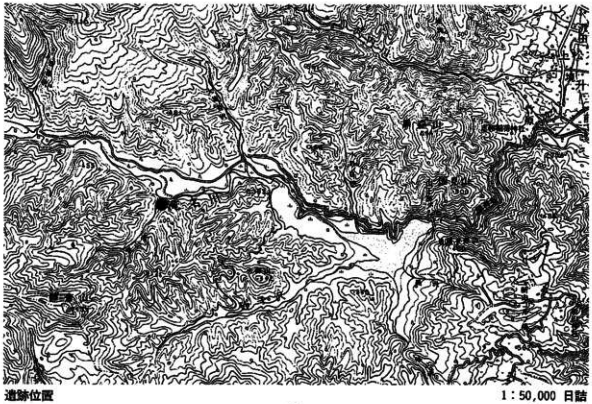
(46) 山王海館跡

所在地	紫波郡紫波町土館字釣場42－1
委託者	農林水産省東北農政局山王海鹿妻農業水利事業所
事業名	山王海ダム第4号付替道路工事
発掘調査期間	平成9年6月18日～8月15日
調査対象面積	2,000 m²
発掘調査面積	2,000 m²
遺跡番号・略号	ＬＥ64－2023・ＳＫ－97
調査担当者	金子佐知子・山口俊規
協力機関	紫波町教育委員会

Ⅰ．調査に至る経過

山王海館跡の発掘調査は、国営“山王海（二期）農業水利事業”に伴う“山王海ダム第4号付替道路工事”の実施に先立ち、その工事区域内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行いその記録保存を図ることを目的として実施したものである。

本調査の実施機関については、事業者と岩手県教育委員会との協議により、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターへの委託事業とすることとなった。



遺跡位置　　1：50,000 日詰

II．遺跡の立地と環境

1．遺跡の立地

本館跡は紫波町のＪＲ東北本線日詰駅の西方 12 km の奥羽山系中、滝名川と支流の荒山沢の合流地点に位置する。遺跡の標高は 315～317 m で、館の南方は急峻な山体であり、他の三方は滝名川、荒山沢、滝名川の支流の小さな沢へ至る急斜面である。調査開始前は杉林、雑木林であった。

2．基本土層

本遺跡の基本土層は次のとおりである。

Ⅰ　層　表土　10 YR2/3 黒褐　20～30 cm 厚　草木根が非常に多く入る。締まりなし。上面 2 ～ 5 cm は枯れ葉などが堆積する腐葉土である。土坑 2 基はこの面から観察される。

Ⅱ　層　10 YR3/2 黒褐　0 ～30 cm 厚　調査区の東よりに堆積。黄褐色土ブロックを含み、締まりなし。耕作土

Ⅲ　層　10 YR5/6～6/8 黄褐～明黄褐　0 ～1.1 m 厚　斜面上方からの基盤層の崩壊した二次堆積土。

Ⅳ　層　10 YR3/4～10YR4/4 暗褐～褐　10～25 cm 厚　斜面上方からの漸移層の崩壊した二次堆積土。

Ⅴ　層　10 YR2/3 黒褐　0 ～25 cm 厚　旧表土。淡黄色礫を含む。

Ⅵ　層　10 YR5/8 黄褐　10～20 cm 厚　漸移層。

Ⅶ　層　10 YR5/6 黄褐　拳大の礫を含む。

Ⅷ　層　10 YR5/6～5/8 黄褐　基盤層。

Ⅸ　層　10 YR7/3 淡黄　基盤層　固く締まる。

Ⅲ．検出された遺構と遺物

1．遺構

今回の調査で検出された遺構と遺物は土坑 2 基、道の跡 1 条、溝 3 条である。

1 号土坑（第 4 図、写真図版 2）

本土坑は調査区の西側の北東に傾斜する緩斜面に位置し、検出面はⅠ層である。平面形はゆがんだ楕円形である。径は 1.77×1.39 m、深さは 34 cm である。埋土は 3 層に細分され、最上層は炭粉やモサを含み草木根のはびこる黒色土が主体である。壁はⅠ層とⅧ層に形成され、凹凸をもって、ゆるやかに立ち上がる。底面はⅧ層に形成されており、平坦で、火熱を受けたためか赤化している。出土遺物はない。

本土坑は底面の赤化の状態や検出面などから、近～現代の炭窯か、火をたいた跡と考えられる。

2 号土坑（第 4 図、写真図版 2）

調査区の中央付近の平坦面に位置する。検出面はⅠ層で、表土上から窪んでおり、遺構の存在を確認できた。平面形はゆがんだ円形を呈する。径は 1.93×1.93 m、深さは 24 cm を測る。埋土は 2 層に細分されるが、ほとんどが炭粒や炭粉を多く含んだ黒色土である。斜面下方の周囲には炭が広く分布している。おそらく土坑から掻き出したか、流れたかしたものであろう。壁はゆるやかに立ち上がる。底面はやや内湾気味で、堅い。焼土の形成は見られなかった。出土遺物はない。

本土坑は性格は良くわからないが、周辺の炭の分布などから近代～現代の伏焼きの炭窯の可能性もある。

1 号溝（第 4 図、写真図版 2）

本溝は調査区中央の平坦面を等高線に直行するように穿たれている。北側は堀の壁の崩落部分につながっている。検出はⅧ層上で黒褐色土の溝状の広がりを認めたことによる。平面形は南側が細く、北側がやや広

がっていくが、南側は試掘坑を掘削したため、上面を削平したことにより細いものと思われる。底面の一部に深さ 22 cm の小ピットがあるが、これは木根によるものかもしれない。長さは検出部分で 2.52 m、幅は 18〜79 cm、深さは最深部で 73 cm を測る。埋土は 3 層に細分され、基盤層起源のにぶい黄褐色土の崩壊土が主体である。上層部は木根が多く入る。壁はⅣ層に形成され、底面から若干の凹凸をもって立ち上がる。横断面はV字状である。底面は狭く、やや内湾している。出土遺物はない。

本溝は出土遺物がないため、年代は不明であるが埋土の状況から他の溝よりも古いと考えられる。館の時期と同じ可能性もある。溝の北側が崩壊しているのは、雨水が流れ込みやすかったためと考えられる。

2号溝（第2図、写真図版1）

本溝は調査区の東半部分を縦断するように検出された。東よりの部分で 3 号溝とつながり、本遺構より新しい道の跡と何箇所かで交差し、重なっている。1 号溝とも重複しており、本溝の方が新しい。3 号溝との新旧関係は不明であるが、埋土が非常に似かよっており、同時かあるいは本溝の方が若干新しいかもしれない。検出面はⅣ層である。

規模は、幅 20〜60 cm、深さ 29〜40 cm を測る。長さは検出部分で 102 m であるが、両端とも調査区外に伸びている。埋土は 3 〜 6 層に細分され、上層〜中層は東側ではⅡ層に類似する黒褐色土、西側では黒色土が主体であるが、おしなべて下層は黄褐色の砂層と壁の崩壊土である褐色土が堆積している。底面は内湾し、壁もやや内湾して立ち上がる。底はおおむね基盤層まで掘り込んでいる。

西側の埋土から白磁の破片が出土しているが、本遺構に伴うものか明らかでない。本遺構は東側で耕作が行われていた時期に掘られたと推定され、降雨時には水が流れて、砂が堆積したと考えられる。

3号溝（第2図、写真図版1）

本溝は調査区の東半部分で検出された。2 号溝と枝分れして、再び合流する。一部を道の跡と重複しているが、本溝の方が古い。また、2 号溝との新旧関係は明らかでないが、同時か本溝の方が少し古いかもしれない。検出面はⅣ層である。

規模は幅 25〜40 cm、深さ 13〜26 cm、長さ 23 m である。埋土は 2 層に細分され、上層はⅡ層にきわめて近い黒褐色土、下層は壁の崩壊土か、砂層である。底面は内湾し、壁も内湾気味に立ち上がる。底は基盤層あるいは漸移層まで掘り込んでいる。

出土遺物はない。本溝は耕作土であるⅡ層と同様の土で埋没していることから、畑の耕作時に畑境などとして掘られた可能性があり、降雨時には水が流れて、溝底に砂が堆積したのではないかと考えられる。

道の跡（第2図）

調査区東半から調査区を縦断するように検出された。地表面から観察でき、傾斜のきつい部分では溝状に深くなっている。表面は固く締まっており、薄い褐鉄層が観察される。溝状になっている部分は掘り込みは明瞭でなく、底面は内湾し、壁もグラグラと内湾気味にたちあがっている。規模は幅 0.4〜1.7 m、ほとんどへこんでいないごく浅いものから 27 cm ほどの深さまである。長さは検出部分で 80 m を測る。東側は南側の山体に通じる谷の方へ伸びており、北側は館跡の 1 の曲輪を区切る堀に通じて滝名川と荒山沢の合流地点へ下りていく道らしい。ごく新しい時代まで使われていたと考えられる。

2．遺物（第3図、写真図版2）

今回の調査で出土した遺物は縄文土器片 1 点、陶器片 1 点、磁器片 2 点である。2 を除き遺構外出土。

縄文土器は外面が摩滅しており、内面は比較的丁寧になでられているが、小片で図化に至らなかった。1 の磁器は染付で、中国産と思われる。器形はおそらく端反りの皿で、外面には渦状の密な唐草が描かれ、内

面には文字が描かれている。15世紀中～16世紀中葉に位置づけられると思われる。2は白磁で胎土は白色である。3は瀬戸美濃産の陶器破片で、灰釉。釉色はにぶい黄色、胎土は灰色である。4点ともごく小片で、1を除き、器形は不明である。

Ⅳ．まとめ

1．遺構について

今回の調査ではテラス状の平坦面を発掘したが検出された遺構のうち、山王海館に伴う可能性のあるものは1号溝のみであった。これは平坦面を区画するためのものであった可能性が高い。そのほかは調査区東半の畑が営まれていた時期と表土中から観察できる遺構の時期（近～現代か）である。調査区は次の縄張り図で2の曲輪、3の曲輪としている平坦面であるが、少なくとも調査区内では建物や住居などが建っていた痕跡は見られなかった。

畑が営まれていた時期は具体的には不明であるが、現在山王海ダムかさ上げ工事のための土置き場となって消滅した、ふもとの小清水の集落の人々が耕作していたものと考えられる。2号溝、3号溝は新しい道の跡とほぼ位置を同じくすることから畑境を道として使っていた可能性もあり、山仕事の人々が通る山道であったかもしれない。

2．山王海館の縄張りについて

山王海館は北を滝名川、西を荒山沢、東を小さな沢に囲まれ、南側は急峻な山体であり、自然地形を利用して築いている。縄張り調査の結果、尾根の先端を二重の堀で切って区画している部分（1の曲輪）が主郭であるらしく、そのほかに南側の二つの平坦面（2の曲輪、3の曲輪）、西側の小規模な2つの平坦面（4の曲輪、5の曲輪）で構成されているらしいことがわかった。

城館内の通路は荒山沢と滝名川の合流点近くから空堀にむかって上り、5の曲輪にいったん入って、南側の浅い堀底に至る道と、2の曲輪から4の曲輪に至る道、3の曲輪から南東の斜面に至る道が認められた。1の曲輪と2の曲輪の間には現在土橋は認められないが、対面するどこかに木橋をかけて通路としていた可能性もある。

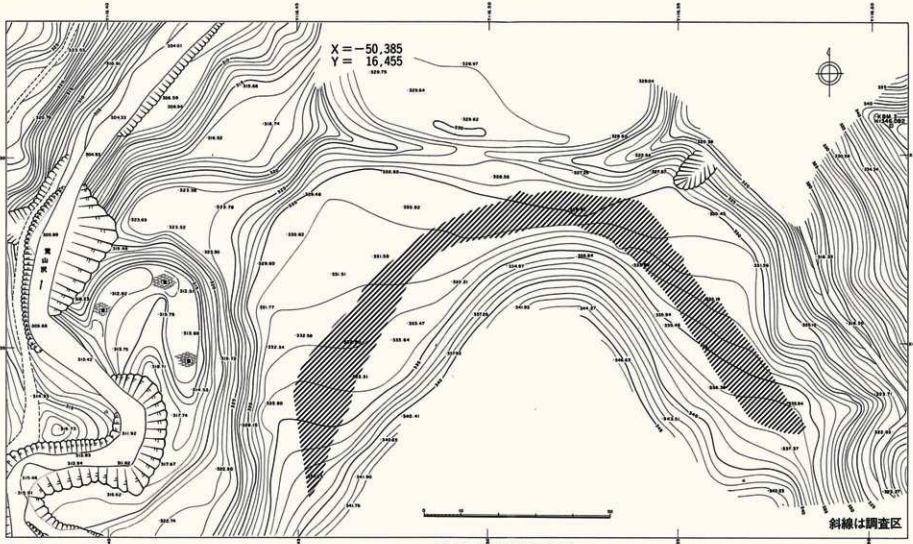
1の曲輪の面積は約2,800㎡である。南側を二重の空堀で区画され、堀に面した部分には土塁が残存している。北側や東西は自然地形を利用して作られているようである。主郭と考えられる。

今回の発掘調査では2の曲輪、3の曲輪を縦断している調査区内に1号溝以外の該期と思われる遺構は検出されていない。調査区は特に3の曲輪では山よりのほとんどの部分を占めており、ここで建物が検出されないということは谷よりの部分や堀よりの部分においても建物があった可能性は薄いのではないかと思われれる。

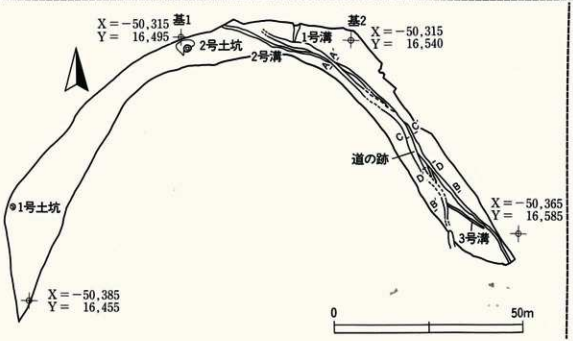
しかし、これらの二つの平坦面は1の曲輪より若干標高が高いこと、間を区画する二重の堀の上端間の距離は11.5～17mと、射掛ければ届く距離であることから、住空間としての可能性は薄く、建物は建たないまでも、1の曲輪を守るためには使用されていたと見るべきであろう。

また、3の曲輪については南東の先端から急傾斜地に沿ってさらに南下するとごく小規模な沢に至る。そこから少量ではあるが現在も水が得られるので、もし城内に井戸がなかったとすれば、水の手曲輪的な空間であったかもしれない。

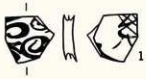
4の曲輪は沢側に土塁を持つ小規模な平坦面で、5の曲輪に対する横矢掛け的な性格を持つものと考えられる。5の曲輪は虎口にかかわる広場であり、馬出しと考えられる。



第１図　周辺の地形



第２図　山王海館跡遺構配置図



第３図　出土遺物　原寸

3．その他

山王海館は太郎館とも呼ばれ、山王海太郎の城館と目されている中世城館である。山王海太郎については、室町時代の人物との文献（南部叢書「二郡見聞私記　かさり甚八」）もあるが、同じく南部叢書、内史略などによると『もとは斯波氏の家臣であったが、斯波氏滅亡後は、南部利直の客人分としての待遇を受けていた。しかし、天正年間に南部氏の和賀攻めに加わった時に寝返り、岩崎城にたて籠って、殺された人物』との記述がある。なお、「かさり甚八」には『臺村の滝の上に稗貫の従臣山王海太郎の居館があった。永享年中に南部氏と志波氏が攻めた時、館は甚だ険阻で容易に落ちなかったが、水が乏しく夜な夜な水を汲むので、水の手を押さえたら降参した。』旨が記されている。

今回の調査の結果、該期と思われる遺構は非常に少なかったが、15～16 世紀と思われる染付の破片が出土しており、まさに館跡に関連する遺物と考えられる。また、複郭ではあるが比較的単純な構造であり、主郭以外に建物が多く立っていた可能性は少ないということが明らかになった。このことは、山王海館の隠れ城、逃げ込み城的な性格を示すものであろう。

なお、山王海館跡に関わる報告はこれをもって全てとする。

参考文献

岩手県教育委員会　1986　岩手県中世城館跡分布調査報告書

岩手縣教育會紫波郡部會　1926　紫波郡史

岩手県文化財愛護協会　1973　内史略

紫波町教育委員会　1972　紫波町史　第１巻

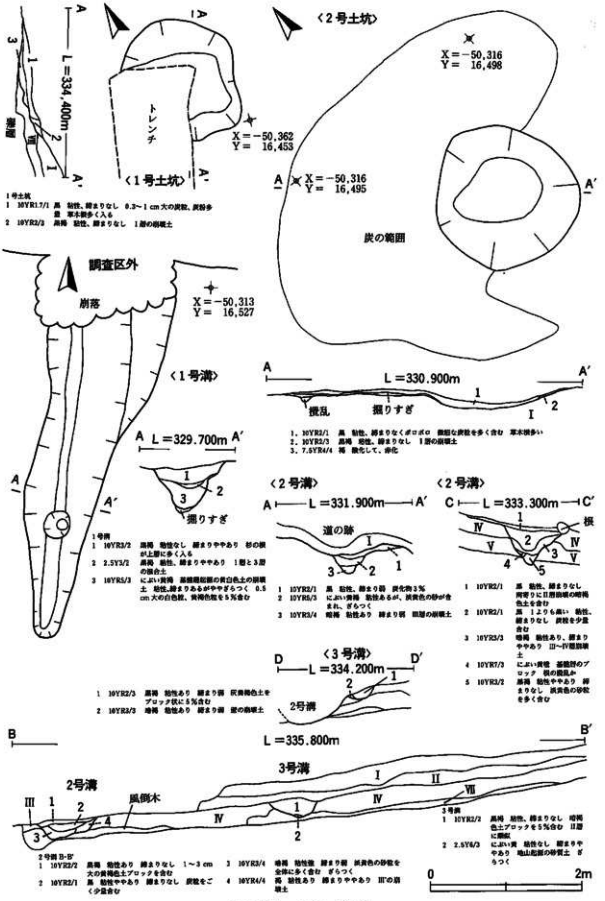
南部叢書刊行會　1928　二郡見聞私記、聞老遺事『南部叢書』

報告書抄録

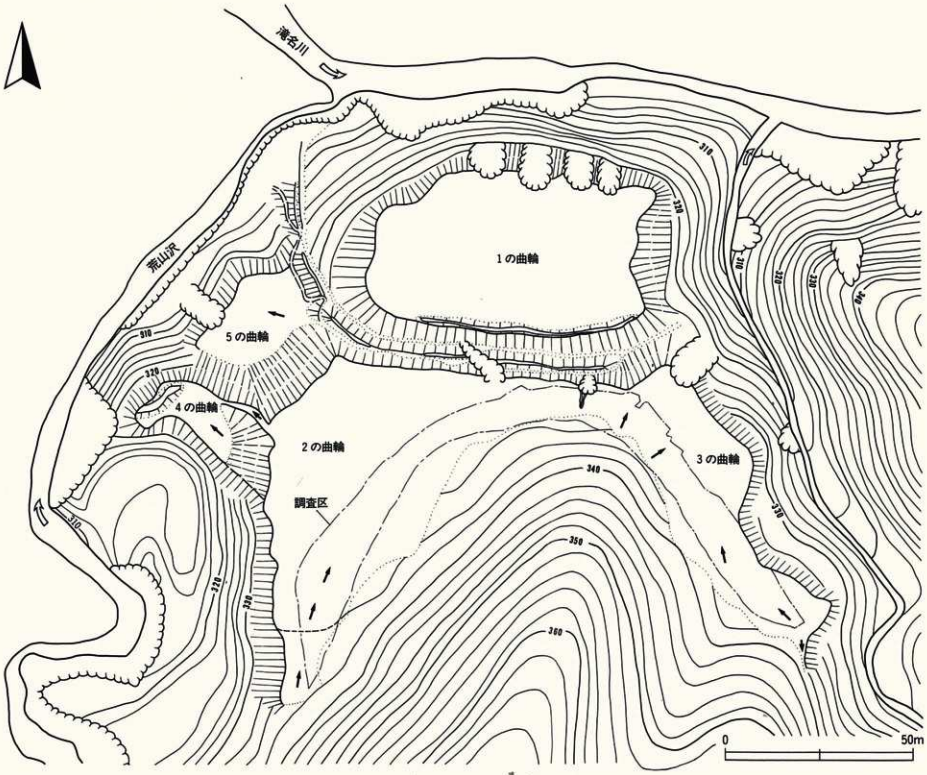
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 282 集
編著者名	金子佐知子　工藤利幸
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　盛岡市下飯岡 11-185　　TEL　(019)－638－9001・9002
発行年月日	西暦　1998 年　3 月　31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
山王海館跡（やまのうみかんのあと）	岩手県紫波郡紫波町（いわてけんしばぐんしばちょう）土館字的場（つちだてあざまと） 42－１ほか	03321	LE 64-2023	39 度 32 分 46 秒	141 度 1 分 29 秒	1997. 6.18～8.15	2,000 m²	山王海（二期）農業水利事業に伴う山王海ダム第４号付替道路工事に先立つ緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王海館跡	城館	15～16C 近現代	溝３条 土坑２基 道の跡１条	中国産染付 白磁 瀬戸美濃産陶器	


〈1号土坑〉
L=334.400m
A
A'
3
1
2
1
崩落
トレンチ
X=−50,362
Y= 16,453
1号土坑
1 10YR1.7/1 黒 粘性、締まりなし 0.3～1cm大の炭粒、炭粉多量 草本根多く入る
2 10YR2/2 黒褐 粘性、締まりなし 1層の崩壊土
〈2号土坑〉
X=−50,316
Y= 16,498
X=−50,316
Y= 16,495
炭の範囲
調査区外
崩落
X=−50,313
Y= 16,527
〈1号溝〉
A L=329.700m A'
1
2
3
掘りすぎ
1号溝
1 10YR3/2 黒褐 粘性なし 締まりややあり 砂の混ぜ上層に多く入る
2 2.5Y3/2 黒褐 粘性、締まりややあり 1層と3層の混合土
3 10YR5/3 にぶい黄褐 基盤層起源の黄白色土の崩壊土 粘性、締まりあるがややずるつく 0.5cm大の白粒、褐褐色粒を5%含む
A L=330.900m A'
1
2
I
撹乱
掘りすぎ
1. 10YR2/1 黒 粘性、締まりなく ボロボロ 微細な炭粒を多く含む 草本根多い
2. 10YR2/3 黒褐 粘性、締まりなし 1層の崩壊土
3. 7.5YR4/4 褐 焼化して、赤化
〈2号溝〉
A L=331.900m A'
道の跡
1
2
3
1 10YR2/1 黒 粘性、締まり弱 炭化物3%
2 10YR3/3 にぶい褐 粘性あるが、炭粒色の砂が含まれ、ざらつく
3 10YR3/4 暗褐 粘性あり 締まり弱 崩壊の崩壊土
〈2号溝〉
C L=333.300m C'
1
2
3
4
5
Ⅳ
Ⅴ
根
1 10YR2/1 黒 粘性、締まりなし 所望りに日焼面域の暗褐色土を含む
2 10YR2/1 黒 1よりも高い 粘性、締まりなし 炭粒を少量含む
3 10YR3/3 暗褐 粘性あり、締まりややあり Ⅲ～Ⅳ間崩壊土
4 10YR7/7 にぶい黄橙 基盤部のブロック 根の跡風あ
5 10YR3/2 黒褐 粘性ややあり 締まりなし 炭黄色の砂粒を多く含む
〈3号溝〉
D L=334.200m D'
1
2
2号溝
1 10YR3/3 黒褐 粘性あり 締まりなし 炭黄褐色土をブロック状に5%含む
2 10YR3/3 暗褐 粘性あり 締まり弱 硬の崩壊土
B
B'
L=335.800m
2号溝
3号溝
風倒木
Ⅲ
1
2
3
4
Ⅳ
1
2
I
II
Ⅶ
2号溝 B-B'
1 10YR3/2 黒褐 粘性あり 締まりなし 1～3cm大の黄褐色土ブロックを含む
2 10YR2/1 黒 粘性ややあり 締まりなし 炭粒をごく少量含む
3 10YR3/4 暗褐 粘性強 締まり弱 炭黄色の砂粒を全体に多く含む ざらつく
4 10YR4/4 褐 粘性あり 締まりややあり Ⅲの崩壊土
3号溝
1 10YR2/2 黒褐 粘性、締まりなし 暗褐色土ブロックを5%含む Ⅱ層に類似
2 2.5Y4/3 にぶい黄 粘性なし 締まりややあり 地山起源の砂質土 ざらつく
0
2m

第4図 土坑・溝跡



作図者　金子佐知子　岩清水康宏　山口俊規　平成９年７月30日作図
使用地図　東北農政局山王海唐変農業水利事業所作成の
５百分の１地形図　２千５百分の１地形図

第５図　山王海館跡縄張図

北西上空から

2号溝 3号溝

2号溝断面

3号溝断面

写真図版 1　山王海館跡検出遺構

1号溝

1号溝断面

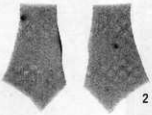
1号土坑

1号土坑断面

2号土坑

2号土坑断面

1



2

3

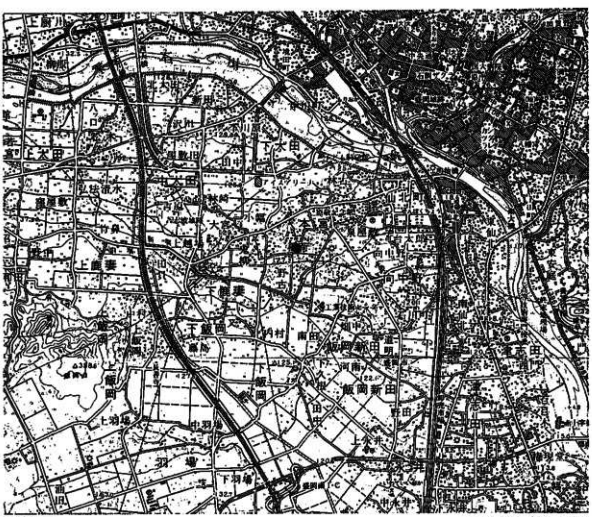
1．中国産染付
2．白磁
3．瀬戸美濃産陶器

出土遺物

写真図版２　山王海館跡検出遺構・出土遺物

(47) 野古（のつこ）A遺跡第10次調査

所在地	盛岡市本宮字野古50－4ほか
委託者	地域振興整備公団
事業名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成9年7月1日～7月31日
調査対象面積	1,700 m²
発掘調査面積	1,700 m²
遺跡番号・略号	LE 16－2155・ONK－97
調査担当者	小笠原健一郎
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 盛岡・日詰

1．調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整備事業である。

この事業は、平成3年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要求を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積320 ha を対象とした土地区画整備事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は(財)岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

ここに、地域振興整備公団分1,200 m² の調査が(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって平成9年7月1日から7月31日まで行われるに至った。

調査の結果、遺構・遺物とも少なかったことから、同年冬期間に整理をし、当埋蔵文化財センター平成9年度調査略報に本報告として掲載した。

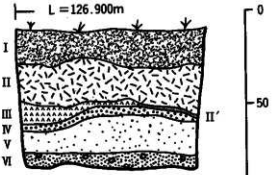
2．遺跡の立地

本遺跡は東日本旅客鉄道㈱東北本線仙北町駅の南西約2.0 km、雫石川右岸の河岸段丘上に位置している。段丘崖は、調査区の西側から北側をとおり東側にまで、調査区を取り囲むように走っている。調査区の現況及び一帯の地目は、畑地、宅地である。

本遺跡の北西約0.4 km に鬼柳A遺跡、北約0.4 km に稲荷遺跡、西約2.0 km に志波城跡がある。

3．遺跡の基本層序

本遺跡は度重なる雫石川の氾濫によって周辺から運ばれた砂礫やシルト質土で被覆された沖積面の砂礫段丘上に立地する。表土下の地層は基本的にはほぼ一致しており、以下調査区南部における深掘りの土層断面を遺跡の基本土層とした。



基本層序

第Ⅰ層：10 YR3/2 黒褐色土　粘性中　しまりややあり

第Ⅱ層：10 YR2/3 黒褐色土主体に 10 YR4/6 褐色土を含む（Ⅱ層　礫を含む）　粘性中　しまりややあり

第Ⅲ層：10 YR4/6 褐色粘土質土主体に 10 YR2/2 黒褐色土をブロック状 30 %含む　粘性中　しまりかなりあり

第Ⅳ層：10 YR4/4 褐色粘土と砂礫の混合土　粘性なし　しまりかなりあり

第Ⅴ層：10 YR4/4 褐色砂主体に礫を含む　粘性なし　しまりかなりあり

第Ⅵ層：10 YR4/4 褐色砂　粘性なし　しまりかなりあり

4．調査概要

調査区は、旧河道と思われる低地を北西に挟んで稲荷遺跡と対峙し、これより標高差2 m 程の段丘上に位置するため段丘崖付近ほど礫の堆積が著しい。また、調査区の北側は耕作による攪乱が激しく遺構が消失し

ている可能性も考えられる。

また、試掘の結果から調査区内の遺構密度が低いことが判明しており、このため本調査は、幅2 m間隔のトレンチ状に進めることとした。遺構として溝1条、土坑1基、柱穴状小土坑16基が検出された。本年度の調査では、土師器・須恵器等の遺物や住居跡等の直接生活に関わる遺構は確認できなかった。

<溝> 出土遺物はなく時代不明である。埋土の第1層から4層にかけて河川の氾濫によるものと思われる礫の顕著な堆積がみられる。また、この遺構は、盛岡市分の調査区西側で検出された溝跡に連続する。

<土坑> 全調査区で1基検出された。開口部径72 cm、深さ20 cmである。遺構からの出土遺物はなく、時代不明である。

<柱穴群> 全調査区で16基が検出された。それぞれ開口部径18～64 cm、深さ10～34 cmである。出土遺物はなく、すべての時期は不明である。

<出土遺物> 遺物は、石器が1点と縄文後期の土器片が2片、表採で少量の陶磁器が出土した。復元できるものはなかった。

5．まとめ

本遺跡は、集落跡として登録されているが、出土遺物の量や住居跡等が確認できなかったことから、調査区に関しては直接生活の場としての利用はなかったと思われる。

また、出土した縄文土器片も摩滅が激しく、旧河川の氾濫等により現地に運ばれた可能性も否定できないため、調査区が縄文時代にさかのぼって利用されていたと断定するのは、早急と思われる。検出された溝跡や土坑については不明の点も多く、周辺の発掘調査の成果も含めて今後検討していきたい。

なお、野古A遺跡（地域振興整備公団分）の調査に関わる報告は、当書をもって本報告に代える。

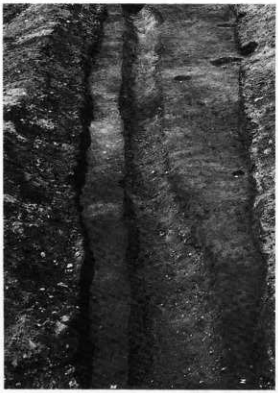
報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第282集
編著者名	小笠原健一郎
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下厨岡11-185 TEL (019)－638－9001
発行年月日	西暦 1998年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のっこえいいせき 野古A遺跡	いわてけんもりおかし もとみやあざのっこ 岩手県盛岡市本宮字野古50－4ほか	03201	LE 16-2155	39度40分47秒	141度7分47秒	1997.7.1～7.31	1,700 m²	盛岡南新都市開発整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野古A遺跡	集落跡	平安時代	溝跡1条 土坑1基 柱穴状小土坑16基	縄文土器 2片 石器 1点 陶磁器片 少量	

調査区遠景



溝跡（ＲＧ002）

溝跡断面

溝跡断面

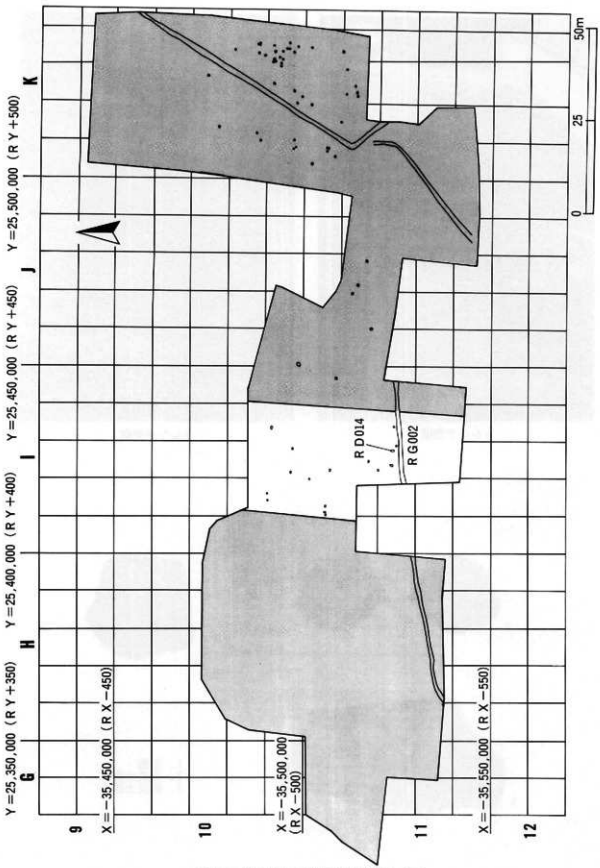
野古Ａ遺跡検出遺構

トレンチ完掘

トレンチ完掘

1．石器
2．縄文土器片
3．縄文土器片

野古遺跡検出遺構・検出遺物



野古Ａ遺跡第10次調査遺構配置図

(48) 五日市遺跡
(49) 土峰Ⅲ遺跡

＜五日市遺跡調査概要＞

所在地	岩手郡岩手町大字五日市第7地割字土峰73番2ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成9年4月11日～4月23日
調査対象面積	1,300 m²
発掘調査面積	1,300 m²
遺跡番号・略号	ＫＥ08－1184・ＩＩ－97
調査担当者	金子昭彦・平澤里香
協力機関	岩手町教育委員会

＜土峰Ⅲ遺跡調査概要＞

所在地	岩手郡岩手町大字五日市第6地割字木津沢35番2ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成9年4月23日～5月9日
調査対象面積	2,000 m²
発掘調査面積	2,000 m²
遺跡番号・略号	ＫＥ08－0155・ＴＭⅢ－97
調査担当者	金子昭彦・平澤里香
協力機関	岩手町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 沼宮内

1．調査に至る経過

本遺跡の発掘調査は、東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事に伴う緊急発掘調査である。新幹線建設に関わる発掘調査の実施については、平成5年度に日本鉄道建設公団盛岡支社と岩手県教育委員会との協議により財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

平成9年度事業の実施については、岩手県教育委員会から平成9年3月6日付「教文1010号」により通知がなされ、五日市遺跡・土峰Ⅲ遺跡の発掘調査については平成9年4月1日付委託契約に基づき野外調査を行なった。両遺跡の調査要項は別記のとおりである。

2．遺跡の立地

五日市遺跡と土峰Ⅲ遺跡は、沢を挟んで隣り合う遺跡で、東日本旅客鉄道東北本線沼宮内駅の北約2.8km、沼宮内中学校の北約400mにある。

二つの遺跡は、北上川に面する丘陵地の東向きの斜面に立地しており、現況は畑地である。

3．遺跡の基本層序

五日市遺跡と土峰Ⅲ遺跡の両遺跡とも、畑地の造成や耕作に伴う地形の改変が著しく、黒色土は全て人為層のようである。

第Ⅰ層　10YR1.7/1　黒色土　造成及び耕作土であり、全て動いた土である。

第Ⅱ層　10YR5/6　黄褐色土　地山で礫が混じる火山灰質土である。

4．調査の概要

<検出された遺構>　五日市遺跡では、調査対象面積1,300m²の30％に相当する約400m²に幅2mの試掘トレンチを入れて、遺構の有無を確認したが、リンゴの木を植え替えた跡のみで遺構は検出されなかった。

土峰Ⅲ遺跡では、調査対象面積（道路・崖の部分を除く）1,500m²の29％に相当する約430m²を調査した。風倒木等の自然現象、付け替え前の道路跡、耕作に伴う杭跡、リンゴの木を植え替えた跡が検出されたが、遺構は検出されなかった。

<検出された遺物>　五日市遺跡では、調査区中央の地表面及びⅠ層から、縄文時代後期初頭～前葉（堂沢式）の土器15片と水路から磨石1点を採取した。

土峰Ⅲ遺跡では、Ⅰ層より縄文土器片10点、磨製石斧1点、剝片3点、18世紀～19世紀の陶磁器片2点を採取した。

5．まとめ

両遺跡とも、極僅かではあるがⅠ層から遺物が出土していることから、かつてこの場所が人々の生活に関わっていた痕跡は見受けられるものの、遺構が検出されなかったこと、さらに地山直上までの土層のほとんどが造成土であったことから、今回の調査区は畑地造成によって大きく改変されていることが解かった。

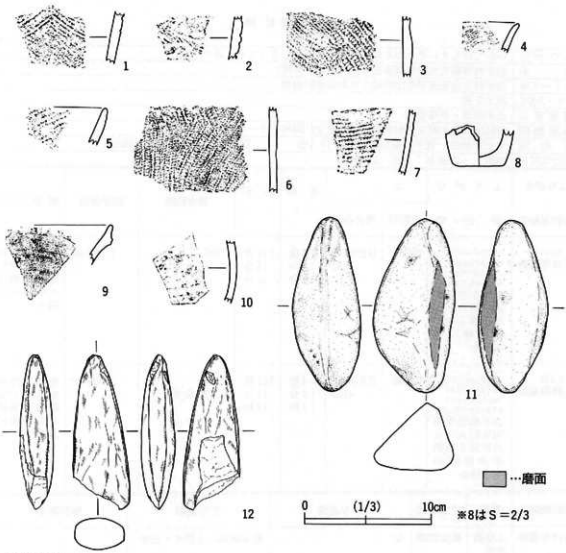
なお、五日市遺跡・土峰Ⅲ遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書　　名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成９年度）
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第282集
編著者名	金子昭彦・平澤里香
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　TEL　(019)－638－9001
発行年月日	西暦　1998年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
いつかいも 五日市遺跡	いわてけんいわてぐん いわてさちおかあざ いつかいもだいちわり あざうちみねだいばんち 岩手県岩手郡 岩手町大字五 日市第７地割 字土峠73番 ２ほか	03303	KE 08- 1184	39度 58分 56秒	141度 13分 38秒	1997. 4.11～4.23	1,300 m²	東北新幹線 盛岡・八戸間 建設工事伴 う緊急発掘 調査
つちみね 土峠Ⅲ遺跡	いわてけんいわてぐん いわてさちおかあざい つかいちだいきちわり あざきつまわ35ばんち 岩手県岩手郡 岩手町大字五 日市第６地割 字木津沢35 番２ほか	03303	KE 08- 0155	39度 58分 57秒	141度 13分 38秒	1997. 4.23～5.9	2,000 m²	東北新幹線 盛岡・八戸間 建設工事伴 う緊急発掘 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五日市遺跡	土器散布地	縄文後期	な　し	縄文後期の土器片・石器	
土峠Ⅲ遺跡	〃	〃	〃	縄文後期の土器片・石器 近世～近代の陶磁器片	



土器観察表

図版No	写真図版No	出土遺跡名	出土地点	層位	器種	部位	文様等の特徴	内面
1	1	五日市遺跡	16C区付近	表採	深鉢	口縁部	LR縦・平行沈線	ナデ
2	2	五日市遺跡	16D区	I層	深鉢	胴部	RI横・沈線・磨消	—
3	3	五日市遺跡	—	I層	深鉢	胴部	LR縦	ナデ
4	4	土峰III遺跡	11E区	I層	深鉢	口縁部	LR	ミガキ
5	5	土峰III遺跡	10F～11F区	I層	深鉢	口縁部	LR	ナデ
6	6	土峰III遺跡	10F～11F区	I層	深鉢	胴部	RL斜	ナデ
7	7	土峰III遺跡	10F～11F区	I層	深鉢	胴部	LR斜	ナデ
8	8	土峰III遺跡	11E区	I層	ミニチュア	底部	無文	ナデ

陶磁器観察表

図版No	写真図版No	出土遺跡名	出土地点	層位	器種	部位	産地
9	9	土峰III遺跡	—	表採	すりばち	片口	在地産
10	10	土峰III遺跡	—	表採	徳利？	体下	在地産

石器観察表

図版No	写真図版No	出土遺跡名	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材
11	11	五日市遺跡	調査区付近	—	磨石	13.8	6.5	5.4	607.0	硬砂岩
12	12	土峰III遺跡	11E区	I層	石斧	12.2	4.5	2.5	185.0	ひん岩
—	13	土峰III遺跡	11E区	I層	石器	1.8	1.5	0.2	0.4	チャート
—	14	土峰III遺跡	11E区	I層	石器	1.9	1.8	0.5	1.4	硬質泥岩
—	15	土峰III遺跡	10F～11F区	I層	石器	1.3	2.2	0.5	1.3	チャート

五日市遺跡・土峰III遺跡出土遺物

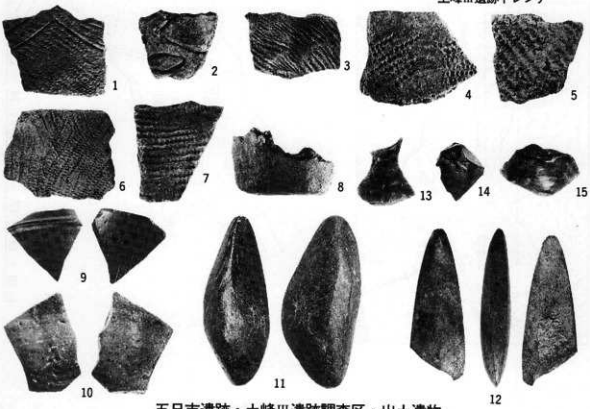
五日市遺跡遠景（南から）

五日市遺跡トレンチ

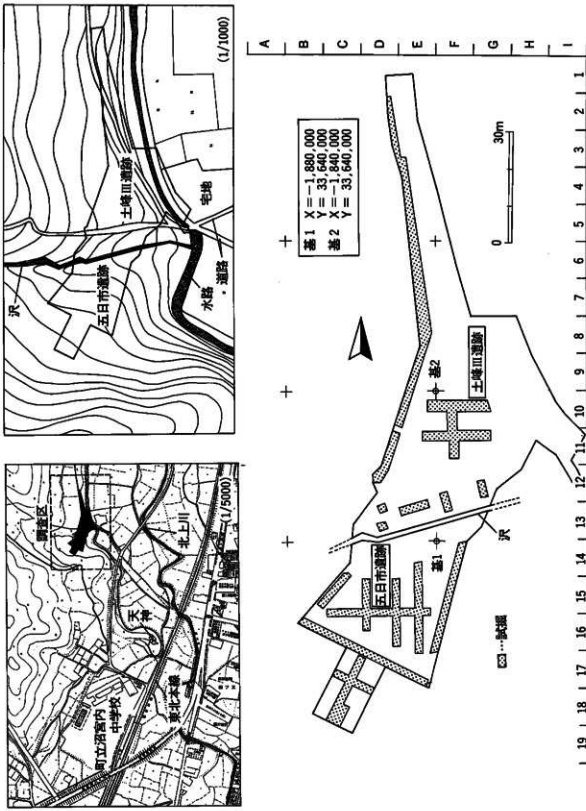
土峰Ⅲ遺跡遠景（南から）

土峰Ⅲ遺跡トレンチ

土峰Ⅲ遺跡遠景（北から）



五日市遺跡・土峰Ⅲ遺跡調査区・出土遺物

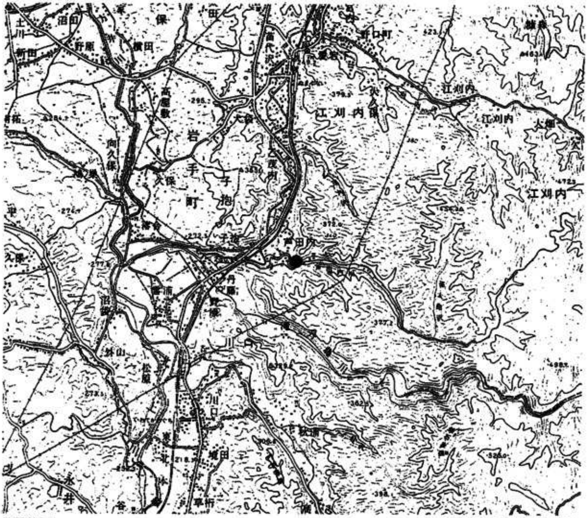


五日市遺跡・土峰Ⅲ遺跡調査範囲図

(50) 芦田内IV遺跡

あしだない

所在地	岩手郡岩手町大字川口第48地割字丹藤194ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成9年4月14日～5月9日
調査対象面積	1,100 m²
発掘調査面積	1,100 m²
遺跡番号・略号	KE 28－1125・ANIV－97
調査担当者	古舘貞身・柴田慈幸
協力機関	岩手町教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 沼宮内・薮川

1．調査に至る経過

本遺跡の発掘調査は、東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事に伴う緊急発掘調査である。新幹線建設に関わる発掘調査の実施については、平成5年度に日本鉄道建設公団盛岡支社と岩手県教育委員会との協議により財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

平成9年度事業については、岩手県教育委員会から平成9年3月6日付「教文1010号」により通知がなされ、芦田内Ⅳ遺跡の発掘調査については平成9年4月1日付委託契約に基づき野外調査を行った。本遺跡の調査要項は別記のとおりである。

2．遺跡の立地

芦田内Ⅳ遺跡は、ＪＲ東日本東北本線岩手川口駅より北東に2.7 km、また北上川沿いに北上する国道4号から東に850 mの地点に位置しており、北上山地から西流して北上川に注ぐ芦田内川沿いに立地している。

今回の調査範囲は、直線距離にして南北に約200 mの中に芦田内川を挟んで南側と北側に分かれており、標高260 mの畑地に利用されている山地斜面、及びそれに連なる段丘崖、さらに標高248 mの芦田内川流域の平坦面に造成された水田部分からなる。

なお、岩手県教育委員会発行の岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧によると、周辺には芦田内川沿いに芦田内Ⅰ～Ⅶまでの遺跡が確認されており、芦田内Ⅰ・Ⅱ・Ⅵは集落跡、他は散布地ということで登録されている。時代は縄文時代早期（芦田内Ⅴ）から弥生時代、古代までと幅広く、かつてこの地域に広く人間が生活していた跡がうかがえる。

3．遺跡の基本層序

今回の調査区は南北に細長い区間であり、その中を川、道路等で分断されるため、大きく4つの区画に分けて、それぞれを北側よりＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区とした。これらの地点は極端に地形が違うため、それぞれの地点の土層を記載する。但しＣ区は段丘崖のため急傾斜面であり、また崩落の危険性が高いため調査そのものは行えなかった。

北側山地斜面上の畑地（Ａ区）

Ⅰ層　暗褐色土（表土）畑の耕作土である。層厚20 cm前後で粘性、締まりともになし。

Ⅱ層　黒褐色土　層厚5～20 cmで斜面下位ほど厚くなっている。粘性、締まりともになし、径5 mm程度の礫を5％含んでいる。

Ⅲ層　暗褐色土　層厚20～25 cmで粘性、締まりともになし。所々に褐色土を20％程度含み、径10 cm以上の角礫を含むようになる。

Ⅳ層　褐色土　粘性ややあり、締まりややあり。遺構を検出できる面と思われる。

中央部芦田内川沿いの平坦面上の田（Ｂ区）

Ⅰ層　暗褐色土（表土）田の耕作土である。層厚15 cm前後、粘性、締まりともになし。乾燥すると締まりやや強になる。径3～5 mmの礫を5％含む。

Ⅱ層　黒褐色土　水田の床土である。層厚5～20 cm、粘性ややあり、締まりなしであるが乾燥すると非常に堅く締まる。径3～5 mmの礫を10～15％含む。

Ⅲ層　暗褐色土　砂層　粘性、締まりともになし。径1～10 cmの礫を多量に含む。

南側山地斜面及び斜面上の畑地（Ｄ区）

Ⅰ層　暗褐色土（表土）層厚20～40 cm、粘性、締まりともになし、植物根が多く混じる。

Ⅱ層　黒褐色土　層厚20～30 cm、粘性なし、締まりややあり。

Ⅲ層　にぶい黄褐色土　層厚 10～45 cm、粘性、締まりともにあり、下位に酸化鉄を含む層が部分的に入る。

Ⅳ層　黄褐色土　粘性、締まりともにあり。この層までトレンチャーによる攪乱が及んでいる。

なお、この地区の南端部は沢状を呈しており、表面から黒ボク土が厚く堆積している。

4．調査の概要

前述のとおり、調査区は南北に長く地形も違うため北端部から順にA、B、C、Dの4区画とした。それぞれについての概要は次のとおりである。

A区　南面する山地斜面を造成した畑地であり、南端部は削られて、一段低い道路になっている。

B区　芦田内川により形成された完新世高位段丘に位置し、平坦に造成された水田と農作業用道路である。

C区　B区から南側に上がる浸食段丘崖の急斜面である。

D区　北面する山地斜面及びそれに連なる畑地である。

A区は畑地であり、南端部はかなり深く削られて、現用道路になっている。狭い部分のため、トレンチを入れるまでもなく、土層観察用のベルトを残しながら掘り下げていった結果、約 60 cm で地山と思われる面に達した。この間遺構は検出されず、少量の縄文土器片がⅠ～Ⅲ層にかけて出土したのみであった。

B区は開田事業により、芦田内川により形成された完新世高位段丘上に作られた田で、4つの区画の中で唯一平坦な地形になっている。ここは表土を除去した時点で段丘の礫層となり、一部には湧水も見られた。ここでも遺構は検出されず、他からの流れ込みと思われる磨耗した石匙が1点出土している。

C区は浸食段丘崖の急斜面で、さらに斜面の上に現用道路があるため、崩落の危険性が高く、実際の調査は行うことは出来なかった。

D区は北ないし東に面した山地斜面及びそれに連なる斜面上の畑地である。ここは森林腐植土が表土となっているが、南側へ斜面を上がるほどその堆積は薄くなり、代わって黒ボク土が発達し、厚いところでは1.5 m にもなっている。ここは7カ所にトレンチを入れたが、地山と思われる面からかつて長芋を栽培した跡が等間隔に見られるため、かなり深いところまで攪乱をうけていることが分かった。

表採を含めてD区からの出土遺物は一片もなく、遺構の検出もなされなかった。

＜遺構＞　今回の調査で検出された遺構はなかった。

＜出土遺物＞　出土遺物はA区から出土した土器片少量で、ほとんどが無文であり、ほぼ同一個体の縄文土器と思われる。他にB区から出土した石匙が1点あり、石質は珪質頁岩である。

5．まとめ

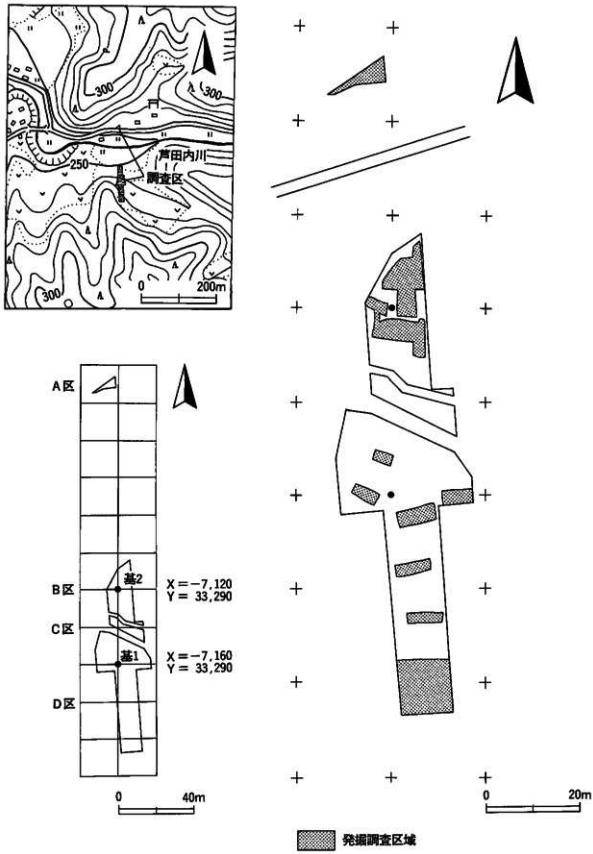
北端部のA区については若干の遺物が出土しており、周辺に遺構の存在する可能性があると思われる。

中央部のB区水田部分については、平坦地であるが、表土を除去した結果、砂及び礫層になり、この面での生活の痕跡は見あたらない。

南端部のD区については遺物、遺構とも検出されず、少なくともここからの斜面上方には遺構が存在しないことが考えられる。

以上のことから、ここは遺跡の縁辺部に該当するのではないかと考えられる。

なお、芦田内Ⅳ遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。



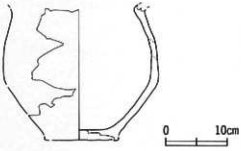
芦田内Ⅳ遺跡調査区全体図

調査区全景（北から）

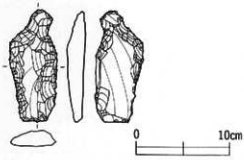
A区（東から）

B区（北から）

D区（北から）



A区出土土器



B区出土石匙

芦田内Ⅳ遺跡調査区・出土遺物

報告書抄録

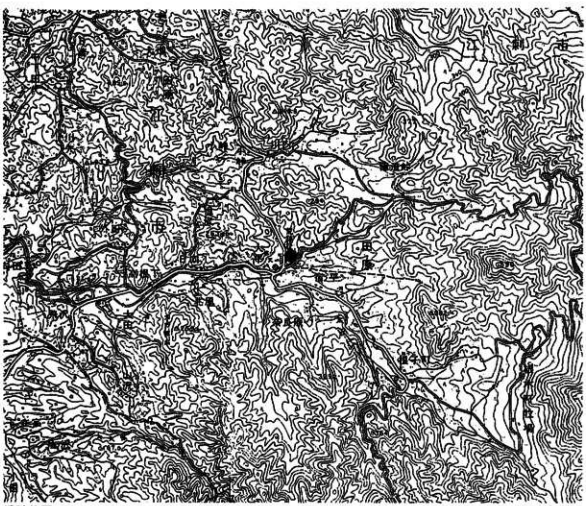
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書　　名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第282集
編著者名	古館貞身
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　TEL　(019)－638－9001
発行年月日	西暦　1998年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
芦田内IV遺跡	岩手県岩手郡岩手町大字川口第48地割字丹藤194ほか	03303	KE 28-1125	39度56分05秒	141度13分22秒	1997.4.14～5.9	1,100 m²	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芦田内IV遺跡	遺物散布地	縄文時代	なし	縄文土器 石鏃	

(51) 荒神社前遺跡

所　在　地	江刺市田原字大平 88 番地のロほか
委　託　者	岩手県水沢地方振興局
事　業　名	一般国道 456 号大平地区道路特殊改良
発掘調査期間	平成 9 年 10 月 1 日～10 月 15 日
調査対象面積	380 m²
発掘調査面積	380 m²
遺跡番号・略号	ＮＥ－1079・ＫＪＭ－97
調査担当者	鳥居達人・福浩二郎
協力機関	江刺市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 水沢・陸中大原

1．調査に至る経過

荒神社前遺跡の発掘調査は、大平古館跡と同様に「一般国道 456 号大平地区道路特殊改良一種工事」に先立ち、区域内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図ることを目的として実施した。

2．遺跡の立地と基本土層

大平古館跡から北西に約 150 m のところに三宝荒神社がある。その荒神社の周辺には集落があり、その集落に囲まれるように当遺跡がある。遺跡全体は畑として利用されており、以前はりんご畑であった。

遺跡の土層は、耕作土の暗褐色土が 10～30 cm ほど堆積している。その下には黒褐色土が 20～30 cm ほど堆積し、遺構・遺物はこの層とその下の褐色土層（5～10 cm）から検出および出土した。

3．調査の概要

調査面積 380 m² のうち東南の約 50 m² は表土の直下にわずかに褐色土が堆積するだけで、削平されており、実質中央部の 330 m² の調査となった。検出した遺構は溝を伴う集石遺構と溝状遺構 2 条である。

＜集石遺構＞ 調査区中央部で検出された。全体の長さは東西に 620 cm、幅は 30 cm で、深さ 30 cm～40cm の溝を掘りこんでそこに円礫や亜角礫を詰めており、礫の大きさは、10 cm～30cm でそろっていない。溝を伴う集石の用途は暗渠排水（水はけをよくするための地下水路）であったと思われる。

＜溝状遺構＞ ①北区。東西に 2 m。幅 30 cm・深さ 2 cm～5 cm。畑と道路の境界の溝と思われる。東側は、調査区外であるが、江刺市教育委員会の調査によりその長さは約 10 m に及ぶ。②南区。東西に約 12 m。幅 30 cm・深さ 25 cm～30cm。水路の跡と思われる。

＜遺構外遺物＞ 縄文前期の土器片が小コンテナで 0.5 箱出土した。縄文の表面は、かなり風化しているが、残りのよいものは胎土中に繊維を含み、羽状縄文が施されており、時期は縄文前期中葉のものと考えられる。石器は、石鏃 4 点、石匙 3 点、石槍 1 点、スクレーパー 6 点、磨石 1 点、破片その他 35 点出土している。また、近代の陶器片 1 点、現代の陶器片数点、そしてキセルなども出土した。

4．まとめ

畑として利用され、電柱の設置、あるいは水道管の埋設などにより、かなりの部分が攪乱を受けているが、今回の調査で期待された縄文時代の住居跡は確認できなかった。なお、並行して行われた江刺市教育委員会の遺跡北部地区の調査では、炉を伴う住居跡が確認されている。

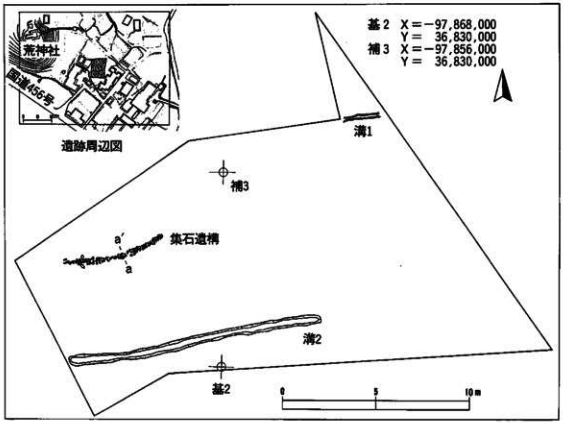
報告書抄録

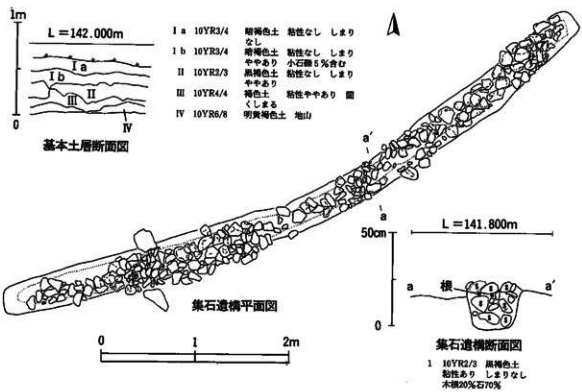
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書　名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第 282 集
編著者名	鳥居潤人
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11-185　　TEL　(019)－638－9001
発行年月日	西暦　1998 年　3 月　31 日

よりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
こうじんじゃまえ 荒神社前遺跡	いわてけんえさしし たはらあざまおたいら 岩手県江刺市 田原字大平 88 の口ほか	03212	NE 29- 1079	39 度 07 分 03 秒	141 度 15 分 33 秒	1997. 10.1～10.15	380 m²	「一般国道 4 56 号大平地 区道路特殊 改良一般工 事」に伴う緊 急発掘

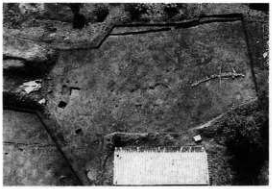
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒神社前遺跡	縄文・ 平安 土器散 布地	縄文時代	集石遺構（時代不明）溝状 遺構 2 条（不明・近代）	土器片（縄文前期） 石器（縄文時代） 陶器片（近・現代）	

なお、荒神社前遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。

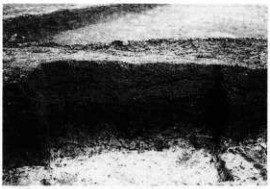




荒神社前遺跡遺構配置図



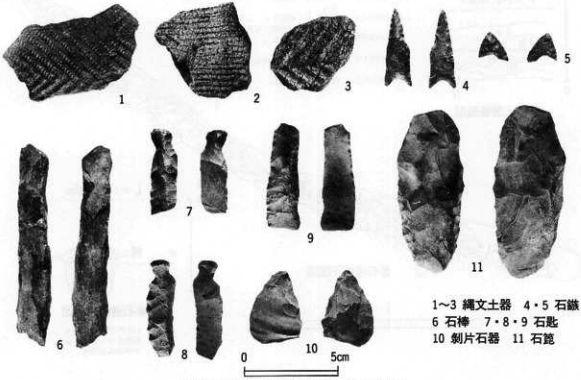
遺跡全景



基本土層

集石遺構（平面）

集石遺構（断面）

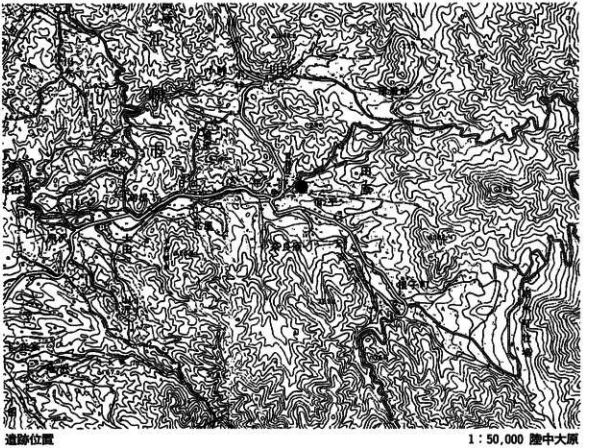


1～3 縄文土器　4・5 石鏃
6 石棒　7・8・9 石匙
10 剝片石器　11 石箆

荒神社前遺跡検出遺構・出土遺物

(52) 大平古館跡

所在地	江刺市田原字大平 237 番地のイ
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	一般国道 456 号大平地区道路特殊改良
発掘調査期間	平成 9 年 8 月 18 日～10 月 15 日
調査対象面積	2,000 m²
発掘調査面積	2,000 m²
遺跡番号・略号	ＮＥ 29－1181・ＯＴＨ－97
調査担当者	鳥居達人・溜浩二郎
協力機関	江刺市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 陸中大原

1．調査に至る経過

大平古館跡は荒神社前と同様に「一般国道 456 号大平地区道路特殊改良一種工事」の施行に伴ってその事業区域内に位置することから、発掘調査をすることとなった。平成 8 年 10 月 14 日に水沢土木事務所から岩手県教育委員会に確認調査の依頼がなされ、これを受けて岩手県教育委員会では試掘調査をし 11 月 12 日水沢土木事務所に発掘調査が必要である旨を回答した。

2．遺跡の立地

大平古館跡は、江刺市の南東約14 km の田原地区大平に位置する。この地区には北上山系の蓬莱山から流れ出る大田代川があり、また多くの支流が集まる盆地状の地形となっている。本遺跡はその中の小高い丘に立地している。頂上の標高は約172 m で、周辺よりも30 m ほど高い。北側は断崖でその下を釜の沢川が流れており、北側から頂上に上がるにはロープがない限り不可能である。しかし、南側は比較的なだらかであり、松林がひろがっている。

近くには藤原秀衡の生誕の地とされる豊田館跡遺跡、また西100 m には荒神社前遺跡がある。

3．調査の概要

遺跡全体は小高い丘に立地しており、北部と南西部の急斜面は危険が伴うことと木材搬出の仮設道路の状況などから遺構がないものと判断し協議により、調査は行わないことを確認し平坦部のみの調査となった。基本土層は、腐食土の下に5～10 cm の厚さで褐色土が堆積しているのみでその下は地山となっているが頂上部分北側には整地をし平坦にしたあとがみられる。その面積は約200 m² である。また、西側の区域（標高の低い平坦部）にも同じような痕跡が見られる。この区域では堀跡が確認されており、その土捨て場となったものと考えられる。遺物は堀跡などから磁器1片、石器2点、古銭8点が出土した。

＜堀跡＞　規模は、南北に伸びており長さ約15 m、幅250～300 m、深さ90～30 cm である。そのうち約9 m に壁を確認しているが、深さも一定せず途中で切れている。堀の埋土から16世紀の白磁器の破片と石匙1点が出土している。

＜遺構外の出土遺物＞　第1トレンチ3層から石鏃1点が出土、また堀の東部斜面から北宋銭7点・明銭1点が出土した。

4．まとめ

今回の調査で、館跡としての遺構は造成途中で放棄されたと考えられる堀跡だけであるが、出土遺物から16世紀頃この丘をなんらかに利用したことがうかがえる。また、南東10 km 内に猿沢、浚民など砂金を産した地域があり、言い伝えによるとその金にかかわる人たちが利用したのではないかというが、確証はない。

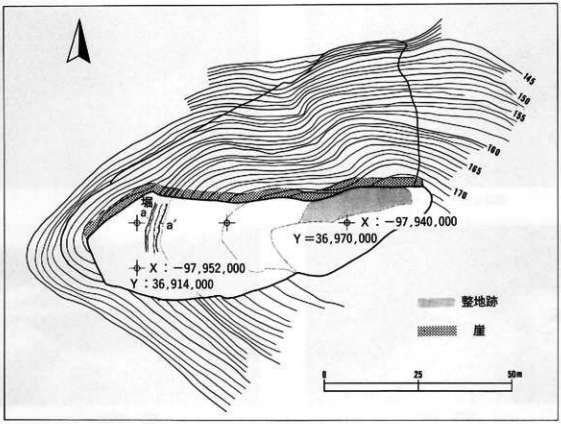
報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書　名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第282集
編著者名	鳥居達人
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　TEL　(019)－638－9001
発行年月日	西暦　1998年　3月　31日

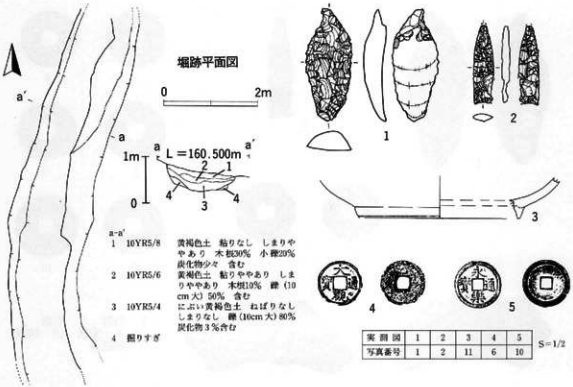
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
おおだいらふるたてあと 大平古館跡	いわてけんえさましし たはらあざおおだいら 岩手県江刺市 田原字大平 237のイほか	03212	NE 29- 1181	39度 07分 01秒	141度 15分 37秒	1997. 8.18～10.15	2,000 m²	「一般国道4 56号大平地 区道路特殊 改良一環工 事」に伴う緊 急発掘

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大平古館跡	中世城館跡	16世紀	堀跡（16世紀以前）	白磁器破片（16世紀）石器2点（縄文）古銭8点（北宋・明銭）	

なお、大平古館跡に関わる報告はこれをもって全てとする。



大平古館跡遺構配置図



実測図	1	2	3	4	5
写真番号	1	2	11	6	10

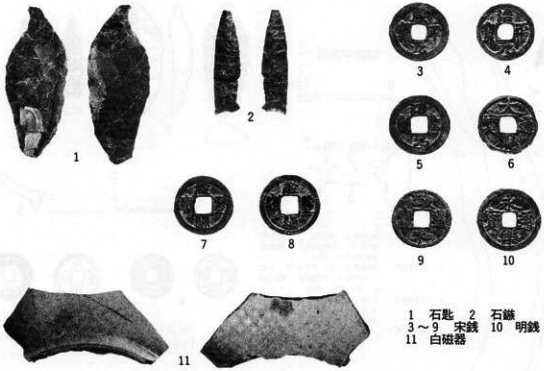
遺構・遺物実測図

遺跡全景①（北から）

遺跡全景②（東から）

堰跡（平面）

堰跡（断面）

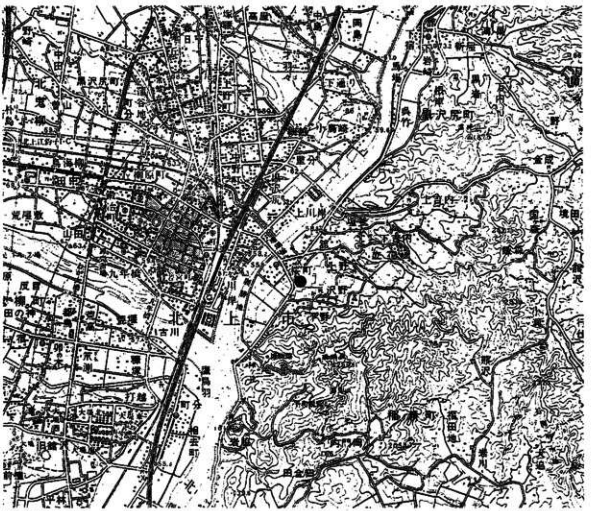


1　石匙　2　石鏃
3～9　宋銭　10　明銭
11　白磁器

大平古館跡検出遺構・出土遺物

(53) 館（たて） Ⅰ 遺 跡

所　在　地	北上市黒沢尻町字立花地内
委　託　者	岩手県北上地方振興局
事　業　名	主要地方道一関・北上線建設関連
発掘調査期間	平成９年９月４日～10月13日
調査対象面積	1,000 m²
発掘調査面積	1,000 m²
遺跡番号・略号	ＭＥ66－1284・ＴＴＩ－97
調査担当者	大森博文・中村直美
協力機関	北上市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 北上

1．調査に至る経過

館Ⅰ遺跡は「主要地方道一関北上線立花地区道路改良事業」の施工に伴って発掘調査することとなった。「主要地方道一関北上線立花地区道路改良事業」は、北上川東岸を一関～北上市までほぼ北上川と並行するが、当該地区の現路線の幅員が狭く歪曲することから、これらを補正すべく実施された道路改良工事である。

工事施工に伴って、周知の埋蔵文化財包蔵地である館Ⅰ遺跡（ME 66－1284）の存在が明かとなり、この係る取扱いについて、岩手県土木部北上土木事業所（現岩手県北上地方振興局土木部）と岩手県教育委員会事務局文化課（以下県文化課）との間で協議を重ねた。平成８年に北上土木事務所長から県文化課長あてに「主要地方道一関北上線立花地区道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査について」で試掘の依頼をしたが、依頼を受けた県文化課は平成８年11月５日に試掘調査を実施し、遺構として土坑類と溝跡、遺物として平安時代の土師器が出土したことにより、たっては事前に発掘調査が必要である旨を回答した。

回答を受けた土木事務所では、県文化課からの「平成９年度事業に係る埋蔵文化財の発掘調査について」の事業照会に対して、平成９年度事業として取り上げるよう依頼した。事業の集約をした県文化課は、土木事業所に対して平成９年度の(財)岩手県文化振興事業団の受託事業として発掘調査を実施する旨を通知し、併せて平成９年３月６日付教文第1010号で(財)岩手県文化振興事業団にも平成９年度の受託事業とした旨を通知した。通知を受けた(財)岩手県文化振興事業団は、平成９年８月29日付で岩手県北上地方振興局長と(財)岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、平成９年９月１日～同年10月13日まで調査し、10月13日に撤収した。室内整理は平成９年度の冬期に実施し、遺構・遺物とも些少のため、略報に掲載をもって本報告とした。

2．遺跡の立地

館Ⅰ遺跡は東北縦貫自動車道北上江釣子インターチェンジから南東約4.3 km に位置し、南流する北上川の東岸に形成された河岸段丘及び自然堤防上に立地する。遺跡の標高は約58～59 m、北上川との標高差は約３ m で、現況は宅地および水田である。本遺跡の北東約0.5 km には館Ⅳ遺跡、同約0.8 km には横町遺跡がある。

3．調査の概要

調査区が北上川の古期氾濫原に立地する為、基本層序は粘性の強い暗褐色土と黄褐色土の互層による水性堆積の様相を呈する。遺構検出は全て表土除去後の暗褐色土面で行った。宅地であった南西部は、造成時の削平が深くまで及び、攪乱を受けている。検出した遺構は土坑４基、陥し穴状遺構11基、溝跡１条、柱穴状小ピット54基である。

＜土坑＞　調査区全域から４基を検出した。平面形は円形のものが２基、長方形のものが１基、楕円形のものが１基ある。規模は最小のもので63×84 cm・深さ32 cm、最大のもので130×143 cm・深さ50 cm を測る。断面形は皿形、ピーカー形、逆台形を呈する。４号土坑は規模・形状から、副穴を伴わない陥し穴状遺構である可能性がある。時期を決定できるような遺物を伴わず、時期など詳細は不明である。

＜陥し穴状遺構＞　調査区全域から11基を検出した。平面形は円形のものが５基、楕円形のものが２基、隅丸長方形のものが４基ある。規模は最小のもので65×113 cm・深さ50 cm、最大のもので157×165 cm・深さ82 cm を測る。断面形はピーカー形、逆台形をなし、全て逆茂木痕と考えられる副穴を伴っている。時期を決定できるような遺物を伴わず、詳細は不明であるが繊維を混入した縄文土器小破片を出土するものが１基ある。出土遺物及び形状から縄文時代前期に比定される可能性が高い。

＜溝跡＞　調査区中央部で１条を検出した。溝の両端はそれぞれ調査区の東側と西側に伸びており、規模は

上端幅 47～63 cm、下端幅 41～58 cm、深さ 2～6.2 cm で、全長は約 27 m に渡る。埋土の上～中位から土師器坏・土師器小形甕・須恵器壺の小破片など 6 点が出土したが、時期を決定できるような遺物を伴わない為、形成された時期、及び用途など詳細は不明である。

＜柱穴状小ピット＞　調査区全域から 54 基を検出した。分布の集中域はB～C 区である。規模は 20～30 cm・深さ 10～20 cm 前後のものが最も多い。深さは最も深いもので 36.2 cm を測る。埋土は黒褐色土の単層、黒褐色土と暗褐色土の混合土で構成される。調査区中央部のＢ６ａ～ｄグリッド付近は、表土除去時の不手際により自然堤防上を一部削平してしまった為、検出数が少ないものとなっている。埋土中に遺物を伴わないことから、造られた時期、及び用途など詳細は不明である。

＜出土遺物＞　遺構外からの出土が大半で、縄文時代の土器片 2 点、平安時代の土師器片 2 点・須恵器片 8 点、近世の磁器片 1 点、石器類が 9 点出土した。

遺構内出土遺物（第 4 図 1 ～ 8　3・5～7 は写真のみ掲載）

1 は 3 号陥し穴状遺構の埋土上部から出土した深鉢土器の胴部破片である。色調は明赤褐色を呈し、胎土は砂粒・繊維を含みやや粗い。原体はＬＲである。 2 は 1 号溝跡埋土上部から出土した土師器坏の体下～底部破片である。内外面共にロクロナデ調整され、底面には糸切り痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。 3 は 1 号溝跡埋土上部から出土した土師器長胴甕の胴部破片である。内外面共にロクロナデ調整される。色調は黄褐色を呈し、胎土は粗い。 4・5 は 1 号溝跡埋土中位から出土した長頸壺（？）の肩部破片である。 4 は内面ロクロナデ・外面カキメ、 5 は内面ロクロナデ・外面カキメ調整される。 6・7 は 1 号溝跡埋土中位から出土した長頸壺（？）の胴部破片である。 6 は内面ロクロナデ・外面カキメ＋ケズリ、 7 は内面アテグ＋ロクロナデ・外面ケズリ調整される。色調はいずれも灰色を呈し、胎土は密である。 8 はＰＰ 28 埋土中から出土した長頸壺（？）の胴部下～底部破片である。内外面共にロクロナデ調整され、底面には回転糸切り痕が残る。色調は灰色を呈し、胎土は密である。

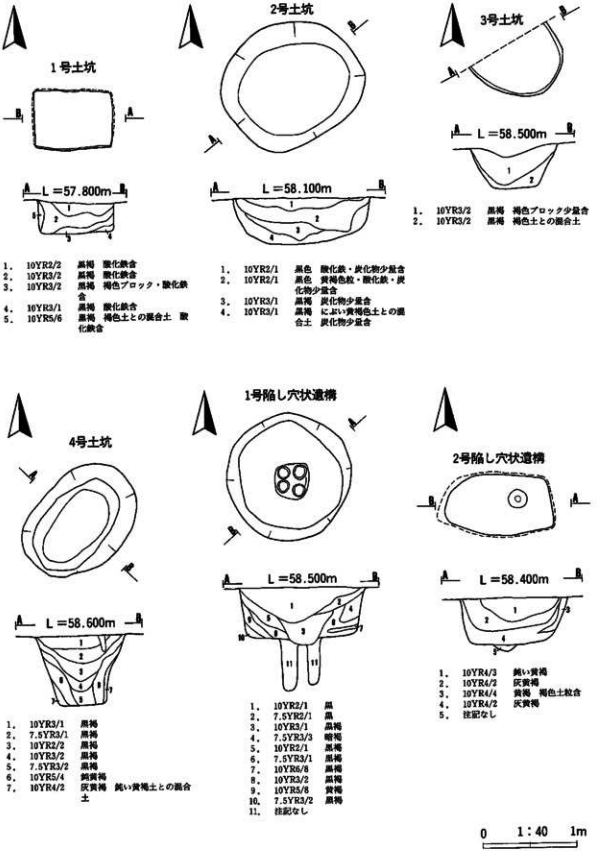
遺構外出土遺物（第 4 図 9 ～18　10・12・13 は写真のみ掲載）

9 は縄文時代の深鉢土器の胴部破片で撚糸文（Ｒ１）が施される。色調は明褐色を呈する。内面はナデ調整され、胎土はやや粗い。10・11 は須恵器大甕の胴部破片で内面アテグ痕・外面タタキ調整される。色調は灰色を呈し、胎土はやや粗である。12 は須恵器甕（？）の胴部破片である。内外面共にロクロナデ調整される。色調は灰色を呈し、胎土は密である。13 は近世（18 世紀相当）の染め付け磁器碗の破片である。

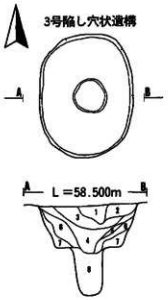
4．まとめ

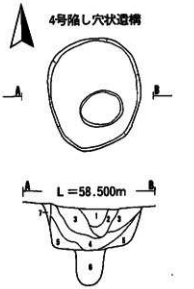
館Ｉ遺跡は、遺構の在り方・出土遺物などから北上川の河岸段丘上に形成された縄文時代の狩猟場であったと推測される。また、平安時代の土師器や須恵器片・江戸時代の磁器片が出土したことで、古代～近世にかけての人々の生活の痕跡を認めることができた。本遺跡は陥し穴状遺構が多く、居住に関わった遺構が見られないことを特徴とするが、このことはこの地における縄文時代から近代にかけての人々の活動が、集落を形成するような内容ではなかった事を示している。当時の人々の居住域は河岸段丘を外れて遺跡の東側に営まれていた可能性が高い。

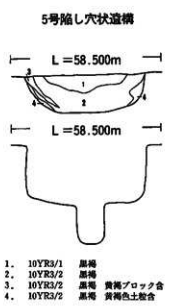
なお、館Ｉ遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。

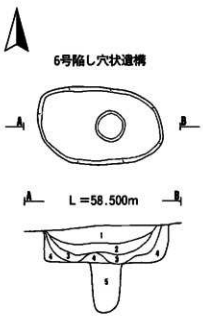


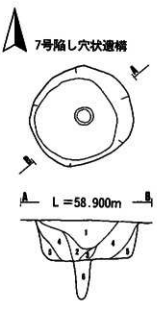
第1図　1～4号土坑・1・2号陥し穴状遺構

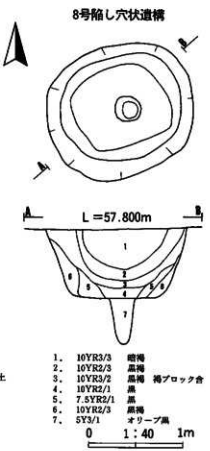




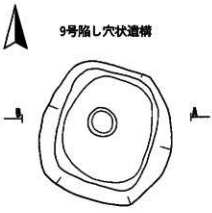


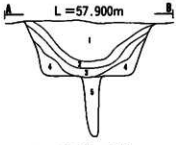




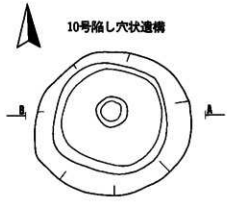


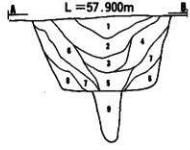
第２図　３～８号陥し穴状遺構



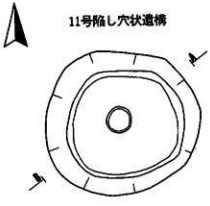


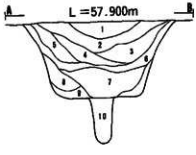
1. 10YR3/3 暗褐
2. 10YR3/1 黒褐
3. 10YR3/1 黒褐 鈍い黄褐ブロック含
4. 10YR5/6 黄褐
5. 5Y3/1 オリーブ黒





1. 10YR4/3 鈍い黄褐
2. 10YR3/3 暗褐
3. 10YR3/3 暗褐 鈍い黄褐色土粒含
4. 7.5YR3/2 黒褐
5. 10YR3/2 黒褐 暗褐色土粒含
6. 10YR3/2 黒褐
7. 10YR3/1 黒褐
8. 7.5YR3/3 暗褐
9. 10YR3/2 黒褐 鈍い黄褐色土粒含

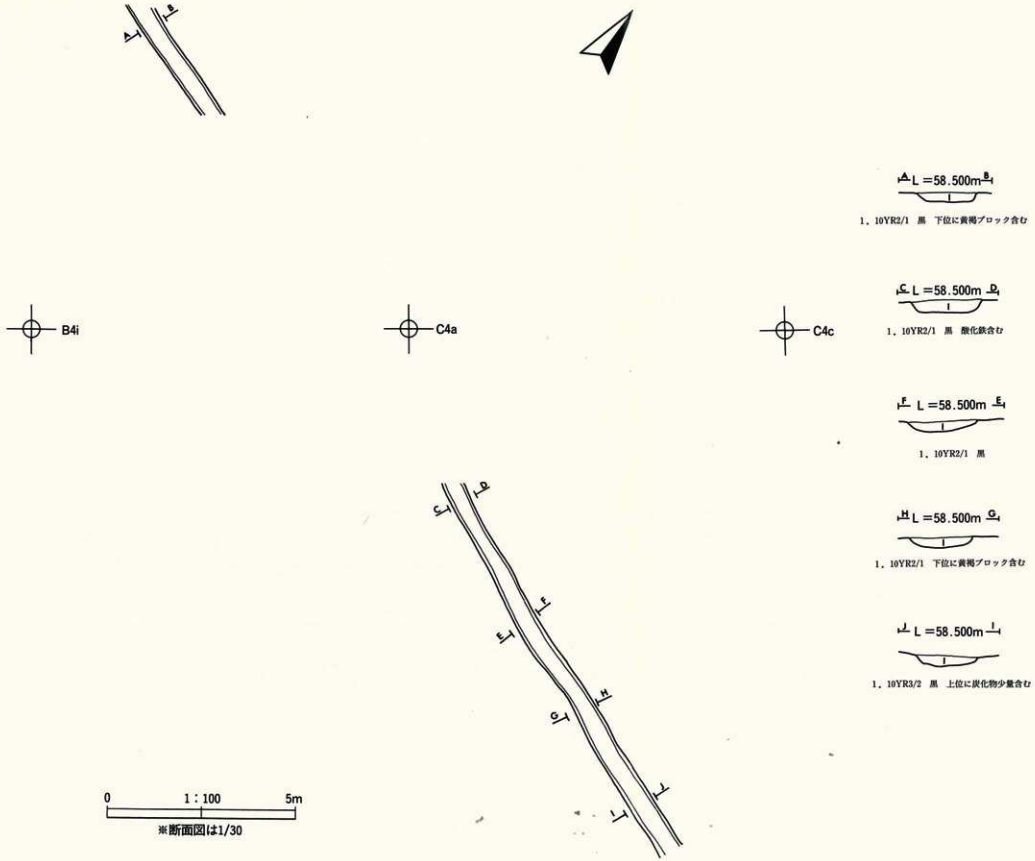




1. 10YR4/3 鈍い黄褐
2. 10YR3/3 暗褐
3. 10YR3/2 黒褐 黄褐ブロック含
4. 10YR3/3 暗褐 黄褐土粒含
5. 10YR3/2 黒褐
6. 7.5YR3/2 黒褐
7. 10YR3/1 黒褐
8. 7.5YR3/1 黒褐
9. 10YR4/4 褐 暗褐ブロック含
10. 5Y3/1 オリーブ黒

0 1:40 1m

第3図 9～11号陥し穴状遺構


A
B
B4i
C4a
C4c
A L =58.500m B
1. 10YR2/1 黒 下位に黄褐ブロック含む
C L =58.500m D
1. 10YR2/1 黒 酸化鉄含む
F L =58.500m E
1. 10YR2/1 黒
H L =58.500m G
1. 10YR2/1 下位に黄褐ブロック含む
J L =58.500m I
1. 10YR3/2 黒 上位に炭化物少量含む
C
D
E
F
G
H
I
J
0
1：100
5m
※断面図は1/30

第4図　1号溝跡

No	径cm	深さcm	備考
1	32×31	13.3	
2	25×24	5.0	
3	24×27	12.0	
4	22×22	6.0	
5	20×20	14.8	
6	20×22	2.5	
7	30×25	35.2	
8	23×20	8.3	
9	35×33	6.0	
10	30×29	9.8	

No	径cm	深さcm	備考
11	17×20	5.5	
12	19×16	10.0	
13	38×38	13.0	
14	32×29	10.1	
15	24×24	8.9	
16	21×26	25.0	
17	23×23	記録なし	
18	23×20	3.8	
19	30×28	14.4	
20	30×30	23.5	

No	径cm	深さcm	備考
21	29×29	26.4	
22	29×25	22.3	
23	26×23	7.0	
24	25×25	17.7	
25	30×28	6.0	
26	22×22	15.0	
27	27×26	18.6	
28	18×19	22.8	須恵器壺底部破片（第4図8）
29	26×25	18.2	
30	20×20	5.3	

No	径cm	深さcm	備考
31	22×21	6.8	
32	30×20	27.4	
33	20×17	8.0	
34	25×24	20.1	
35	18×16	記録なし	
36	30×25	17.4	
37	20×23	10.5	
38	25×20	記録なし	
39	25×26	36.2	
40	25×24	記録なし	

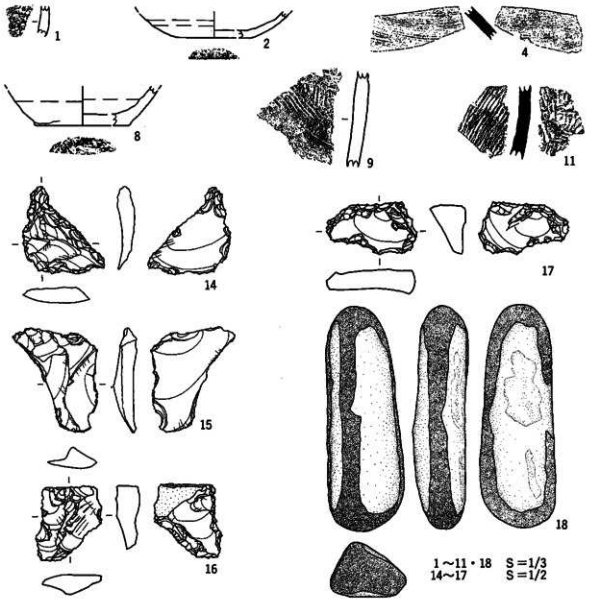
No	径cm	深さcm	備考
41	30×30	記録なし	
42	20×18	記録なし	
43	19×17	記録なし	
44	25×27	記録なし	
45	22×23	記録なし	
46	27×29	記録なし	
47	29×29	記録なし	
48	25×21	記録なし	
49	30×24	記録なし	
50	21×20	記録なし	

No	径cm	深さcm	備考
51	23×20	記録なし	
52	20×20	12.1	
53	26×29	20.5	
54	24×24	12.5	

第5図　柱穴状小ピット

土坑・陥し穴状遺構観察表

遺構名	位置・検出状況	規模・形態	埋土	出土遺物
1号土坑	A4eグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径63×84、底部径62×87、深さ32cm。平面形は長方形、断面形はビーカー形を呈する。底面は平坦で固くしまる。	5層に細分され、黒褐色土主体で構成される。下位に褐色ブロックを含む。自然堆積の様相を呈する。	なし
2号土坑	C6iグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径130×143、底部径95×114、深さ50cm。平面形は不整な円形、断面形は船形を呈する。底面はやや凹凸があり、固くしまる。	4層に細分。上位は黒色土・中位は黒褐色土主体で構成され、下位に黄褐色土含む。全体に炭化物含む。自然堆積の様相を呈する。	なし
3号土坑	B21グリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径(54)×91、底部径(51)×85、深さ40cm。北半部が調査区域外にかかる為、全体の形状は不明であるが平面形は円～楕円形を呈すると推測される。断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で固くしまる。	2層に細分。上位は褐色ブロックを含む黒褐色土、下位は黒褐色土と褐色土の混合土で構成される。自然堆積の様相を呈する。	なし
4号土坑	B6hグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径96×134、底部径48×89、深さ75cm。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で砂質。	7層に細分上位は黒褐色土主体、下位は純黄褐～灰黄褐色土主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。	なし
1号陥し穴状遺構	C6aグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径129×134、底部径105×114、深さ60cm。平面形は円形、断面形はビーカー形を呈する。中央部に逆茂木痕と考えられる跡穴を4個持ち、規模はそれぞれ径12×13・深さ49cm、13×13・深さ35cm、13×14・深さ37cm、14×16・深さ55cmを測る。底面は平坦で固くしまる。	11層に細分され、黒褐色土主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。	なし
2号陥し穴状遺構	B5dグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径65×113、底部径70×122、深さ50cm。平面形は不整な楕円形、断面形はビーカー形を呈する。中央部に径19、深さ7cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を1個持つ。底面は平坦で砂質。	5層に細分され、上位は純黄褐色土、下位は灰黄褐色土主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。	なし
3号陥し穴状遺構	B4gグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径99×132、底部径94×125、深さ51cm。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。中央部に径35、深さ45cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を1個持つ。底面は平坦で固くしまる。	8層に細分され、上位は黒褐色、下位は灰黄褐色土で構成される。自然堆積の様相を呈する。	縄文土器破片(第6図1)
4号陥し穴状遺構	B5hグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径98×118、底部径92×112、深さ44cm。平面形は楕円形、断面形はビーカー形を呈する。中央部に径38×46、深さ37cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を4個持つ。底面は平坦で固くしまる。	6層に細分され、黒褐色土主体で構成される。上位に褐色土和、下位に褐色土を含む。自然堆積の様相を呈する。	なし
5号陥し穴状遺構	B4gグリッド 表土除去後の暗褐色土	発掘時の不手際により平面の記録を欠く。断面形はビーカー形を呈する。中央部に逆茂木痕と考えられる深さ42cmの跡穴を1個持つ。	黒褐色土主体で構成される。裏層に黄褐色土を粒状～ブロック状に含む。自然堆積の様相を呈する。	なし
6号陥し穴状遺構	B4fグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径83×132、底部径73×125、深さ40cm。平面形は楕円形、断面形はビーカー形を呈する。中央部に径31×33、深さ52cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を1個持つ。底面は平坦で砂質。	5層に細分され、黒褐色土主体で構成される。上位に黒褐色土、下位に褐褐色ブロックを含む。自然堆積の様相を呈する。	なし
7号陥し穴状遺構	A6hグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径100×109、底部径82×86、深さ43cm。平面形は円形、断面形はビーカー形を呈する。中央部に径19、深さ42cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を1個持つ。底面は平坦で固くしまる。	6層に細分。黒褐色土～暗褐色土主体で構成され、自然堆積の様相を呈する。最穴は粘性の強いオリーブ黒の単層。	なし
8号陥し穴状遺構	A2iグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径140×162、底部径87×95、深さ74cm。平面形は開口部が楕円形、底部は隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。中央部に径27×29、深さ49cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を1個持つ。底面は平坦で、しまりのある粘土質土。	7層に細分。上位は暗褐色、下位は黒色～黒褐色土主体で構成され、自然堆積の様相を呈する。最穴は粘性の強いオリーブ黒の単層。	なし
9号陥し穴状遺構	B4aグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径140×143、底部径92×108、深さ59cm。平面形は開口部が隅丸方形に近い楕円形、底面は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。中央部に径30、深さ63cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を1個持つ。底面は平坦で、しまりのある粘土質土。	5層に細分。上位は暗褐土、下位は黄褐色土を含む黒褐色土主体で構成され、自然堆積の様相を呈する。最穴は粘性の強いオリーブ黒の単層。	なし
10号陥し穴状遺構	A4jグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径156×161、底部径99×103、深さ80cm。平面形は開口部が円形、底部が隅丸方形に近い円形で、断面形は逆台形を呈する。中央部に径32、深さ54cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を1個持つ。底面は平坦で、しまりのある粘土質土。	9層に細分。暗褐色土～黒褐色土主体で構成され、自然堆積の様相を呈する。最穴は粘性の強い黒褐色土の単層で、純黄褐粘土。	なし
11号陥し穴状遺構	A4iグリッド 表土除去後の暗褐色土	開口部径157×165、底部径110×115、深さ82cm。平面形は開口部が不整な円形、底部が隅丸方形に近い円形で、断面形は逆台形を呈する。中央部に径27、深さ48cmの逆茂木痕と考えられる跡穴を1個持つ。底面は平坦で、しまりのある粘土質土。	10層に細分。上位は純黄褐～暗褐土、下位は黒褐色土主体で構成され、自然堆積の様相を呈する。最穴は粘性の強いオリーブ黒の単層。	なし

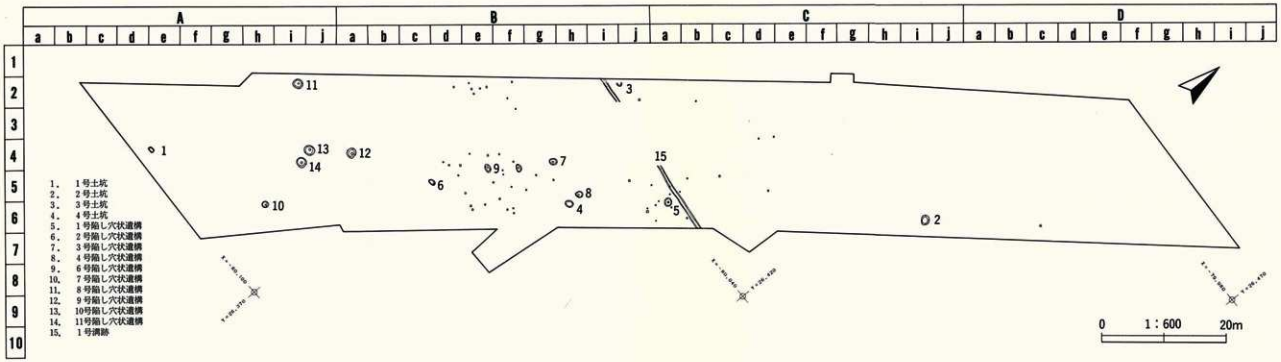


石器観察表

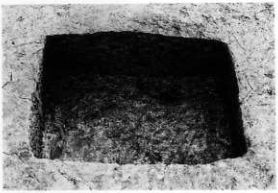
単位は（cm），（g）

No	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	備　考
14	道路西側1層	掻器	4.5	4.3	0.9	13.8	珪質頁岩	ほぼ全縁に深い調整が加えられる
15	道路西側1層	削器	5.5	4.5	1.1	17.0	頁岩	縁辺部に急斜度の浅い調整が加えられる
16	道路東側1層	削器	3.9	3.6	1.3	15.4	頁岩	縁辺部に浅い調整が加えられる
17	表採	削器	2.8	4.9	1.9	22.7	頁岩	縁辺部に急斜度の深い調整と浅い調整が加えられる
18	北端部1層	磨石	17.9	6.1	4.4	548.0	凝灰質砂岩？	両端と縁辺部が磨耗する

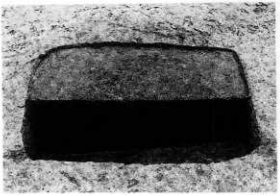
第6図　出土遺物・石器観察表



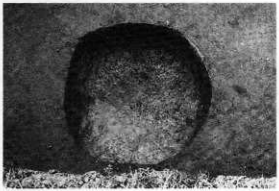
第7図　館Ⅰ遺跡遺構配置図



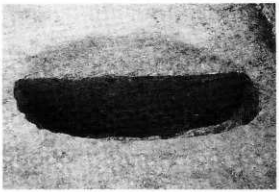
1号土坑　平面



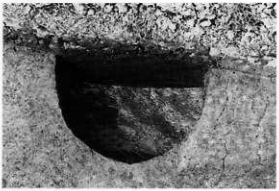
断面



2号土坑　平面

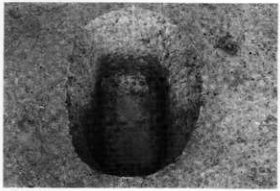


断面

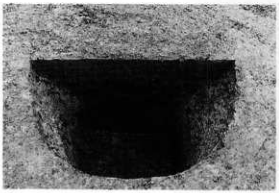


3号土坑　平面

断面



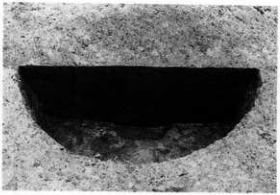
4号土坑　平面



断面

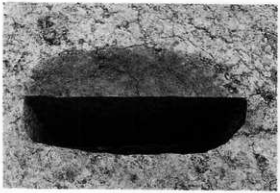
写真図版１　１～４号土坑

1号陥し穴　平面



断面

2号陥し穴　平面



断面

3号陥し穴　平面

断面

4号陥し穴　平面

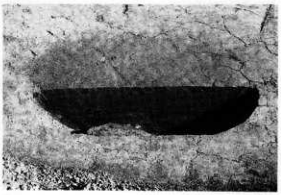
断面

写真図版２　１～４号陥し穴

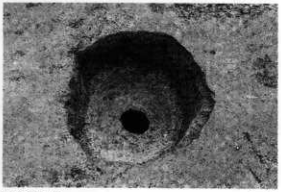
5号陥し穴　平面

断面

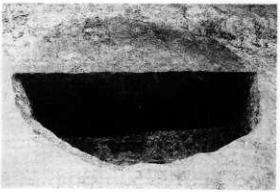
6号陥し穴　平面



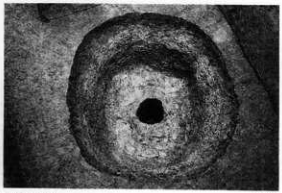
断面



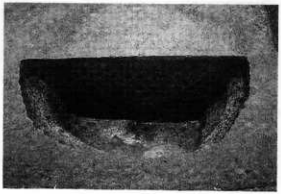
7号陥し穴　平面



断面



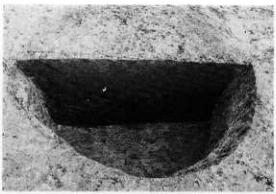
8号陥し穴　平面



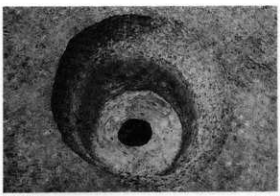
断面

写真図版３　５～８号陥し穴

9号陥し穴　平面

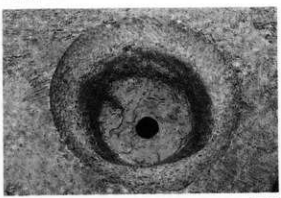


断面

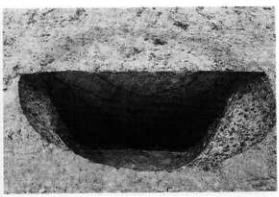


10号陥し穴　平面

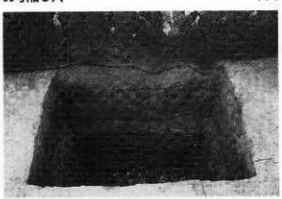
断面



11号陥し穴　平面



断面



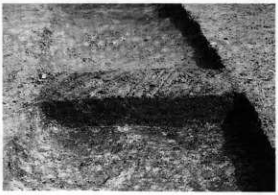
基本土層

作業風景

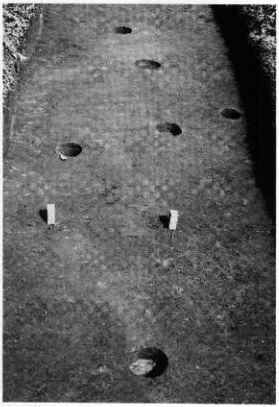
写真図版４　９～11号陥し穴・基本土層

1号溝跡　平面

断面(1)

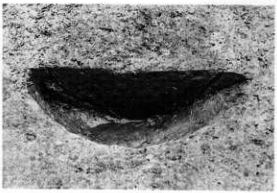


断面(2)



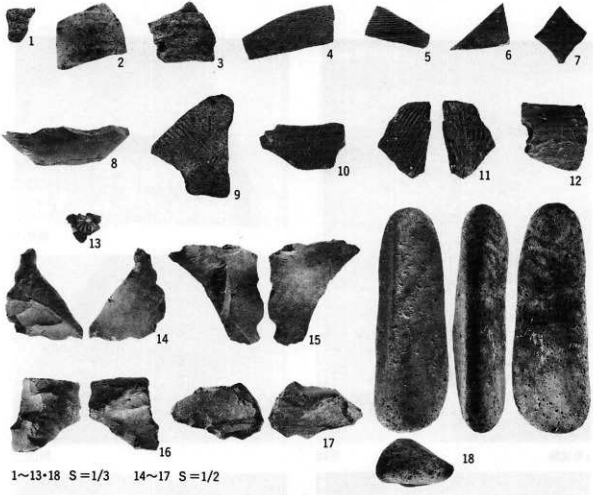
柱穴状小ピット　平面

検出



断面

写真図版5　1号溝跡・柱穴状小ピット



1～13・18　S＝1/3　　14～17　S＝1/2

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書　　名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成９年度）
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第282集
編著者名	中村直美
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　TEL　(019)－638－9001
発行年月日	西暦　1998年　3月　31日

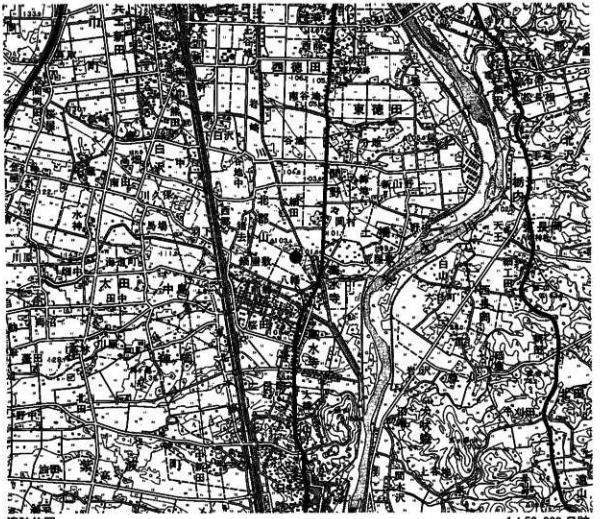
ふりがな 所集遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
館Ⅰ遺跡 たていしいせき	岩手県北上市立花 いわてけんきたかみしりつはな	03206	ME 66-1284	39度16分27秒	141度8分27秒	1997.9.4～10.13	1,000㎡	「主要地方道一関・北上線」事業に伴う緊急発掘調査

所集遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
館Ⅰ遺跡	散布地	縄文時代前期	陥し穴状遺構・土坑	縄文時代の土器片・石器。平安時代の土師器・須恵器片	

写真図版６　出土遺物

(54) 北郡山遺跡（きたこおりやま）

所在地	柴波郡矢巾町北郡山17－3ほか
委託者	岩手県盛岡地方振興局
事業名	県営ほ場整備（徳田第一地区）
発掘調査期間	平成9年10月1日～10月23日
調査対象面積	900 m²
発掘調査面積	900 m²
遺跡番号・略号	ＬＥ57－1037・ＫＫＹ－97
調査担当者	濱田　宏・平澤里香
協力機関	矢巾町教育委員会



遺跡位置

1．調査に至る経過

北郡山遺跡は、「低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業徳田第一地区」の工事施工に伴って、その事業区域内に位置することから、発掘調査することとなったものである。

「低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業徳田第一地区」は、地区内の小区画水田、幅員の狭小な農道及び排水不良が生じている用排兼用の小水路を、事業の実施により、区画の大型化、道水路網の整備を行うことで、農業生産性の向上、農業構造の改善、農村の環境整備を図るものである。

当事業所の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、県農政部農地計画課から平成4年9月21日付け農計第746号「県営土地改良事業調査計画地域における埋蔵文化財分布調査について（依頼）」の文書によって岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をしたのが最初である。依頼を受けた県教委では、平成5年4月6日～7日に分布調査を実施したが、その結果は平成5年4月12日付け教文第29号「県営土地改良事業調査計画地域における埋蔵文化財分布調査について（回答）」で農政部農地計画課へ回答し、その際工事施工範囲が北郡山遺跡の範囲であることが付記された。

その後、事業実施公所である盛岡南部土地改良事業所では、平成8年9月19日付け盛土地第753号「低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業徳田第一地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書で県教委に試掘調査の依頼をした。依頼を受けた県教委では、平成8年10月21日～22日に試掘調査を実施したが、その結果は平成8年10月30日付け教文第623号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」で、盛岡南部土地改良事業所へ回答し、その際埋蔵文化財の包蔵が確認され、現状による保存が不可能であることから、本調査が必要であることが付記された。

回答を受けた事業所は、県教委からの平成9年度の埋蔵文化財の発掘調査事業の集約に係る問い合わせに対して、平成9年度に調査してほしい旨の要請をしたが、要請を受けた県教委では(財)岩手県文化振興事業団の平成9年度受託事業として調査を実施する事を通知し、併せて事業団にもその旨通知した。

通知を受けた両者は、調査に係る事前打ち合わせをした後、平成9年9月16日付けで盛岡南部土地改良事業所長と(財)岩手県文化振興事業団理事長、平成9年9月19日付けで岩手県知事と(財)岩手県文化振興事業団理事長との間でそれぞれ契約を締結し、実際の調査は平成9年10月1日～23日の間実施した。

報告書作成に係る室内整理は冬季間に実施したが、調査によって発見された遺構・遺物とも些少であったことから、冊子による報告書は作成しないで調査略報（平成9年度）に掲載して一切の報告を終了することとした。

2．遺跡の位置と立地

北郡山遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線古館駅の東北東約1 kmの地点にあり、周辺河川によって形成された標高103 m前後の河岸段丘上に立地している。今回の調査区は、昭和30年代の水田造成時に地山まで削平後盛り土されている。調査前の状況は荒地（休耕田）である。本遺跡の北北東約2.5 kmには徳丹城跡が、東側には8世紀代の集落跡である紫波町稲村II遺跡が隣接している。

3．基本層序

周辺の河川の氾濫によって供給された砂礫やシルト質土を基盤とする。それより上位層は、前述のとおり削平を受けており、それ以降に堆積したプライマリーな層は存在しない。水田造成の際の盛り土を除去すると、その基盤層である黄褐色シルト質土が現れるが、これが遺構検出面となる。また、南南西方向に延びる調査区では、表土を除去すると全域で灰褐色のシルト質土が認められる。削平が更に下部にまで及んでいるか、あるいは最近の氾濫等によって水が淀みグライ化した層を基盤としているものと思われる。

4．調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構８基、時期不明の溝状遺構３条、旧河道１カ所である。陥し穴状遺構はそのほとんどが調査区域外に延びていたが、これらについては、県教委文化課と協議の上、その部分のみ広げ完掘した。

＜陥し穴状遺構＞　調査区中央部で８基検出された。いずれも溝状を呈するもので、うち６基は軸方向がほぼ南西方向で並列している。それぞれの規模等をＰ 233 の表１に観察表として示した。

＜溝状遺構＞　東西方向に２条と南北方向に１条が重複して検出された。後者の１条は旧河道に流れ込んでいる。いずれも昭和 30 年代以降の水田に伴う用水路跡と思われる。

＜旧河道＞　時期等不明であるが、深さ 1.5 m、幅約 10 m の河道が検出された。砂礫である底面には流木が多数確認されたが、いずれも新しいもので加工された痕跡も見られなかった。なお、ここからは遺物はいっさい出土していない。

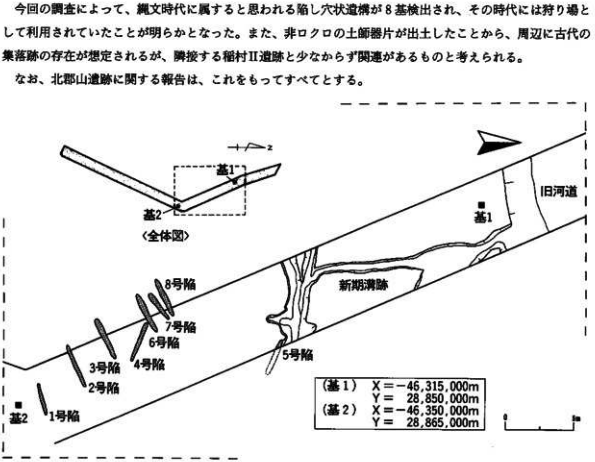
＜出土遺物＞　遺物はすべて表土攪乱層から出土したもので、土師器片が 50 点余りと石器剥片１点、陶磁器１点のみである。土師器は、ロクロが使用されない坏形土器（内黒）・甕形土器の破片で、いずれも摩滅が著しくかつ細片である。出土遺物は、そのうちの一部の一括写真のみ掲載し、実測図・観察表は割愛した。

１～７は土師器で、１・２は内黒の坏形土器、３～７は甕形土器である。いずれも器面調整は不明瞭である。８は細部加工が施される頁岩製の剥片、９は近世以降の陶磁器片である。

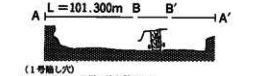
5．まとめ

今回の調査によって、縄文時代に属すると思われる陥し穴状遺構が８基検出され、その時代には狩り場として利用されていたことが明らかとなった。また、非ロクロの土師器片が出土したことから、周辺に古代の集落跡の存在が想定されるが、隣接する稲村Ⅱ遺跡と少なからず関連があるものと考えられる。

なお、北郡山遺跡に関する報告は、これをもってすべてとする。

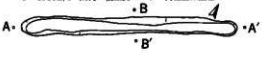


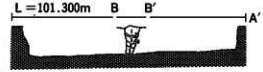
北郡山遺跡遺構配置図



（1号陥し穴）

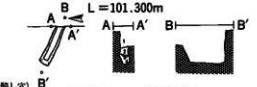
1	10YR2/2	黒褐	粘土質シルト　褐色土含む
2	10YR2/3	黒褐	粘土質シルト　黒褐と褐色土の混合土
3	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト　褐色土との混合土
4	10YR3/3	暗褐	粘土質シルト　褐色土との混合土
5	10YR4/6	褐	粘土質シルト　黒褐土少量含む
6	10YR2/3	黒褐	粘土質シルト　褐色土微量含む





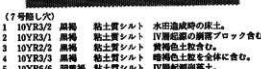
（3号陥し穴）

1	10YR2/2	黒褐	粘土質シルト　褐色土まばらに含む
2	10YR4/6	褐	粘土質シルト　黒褐色土含む
3	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト　褐色土含む
4	10YR4/4	褐	粘土質シルト　黒褐色土含む
5	10YR2/3	暗褐	粘土質シルト　褐色土含む
6	10YR4/6	褐	粘土質シルト



（5号陥し穴）

1	10YR5/4	にぶい黄褐	粘土質シルト　酸化鉄分含む。
2	10YR3/1	黒褐	粘土質シルト　酸化鉄分含む。
3	10YR4/3	にぶい黄褐	粘土質シルト　酸化鉄分含む。
4	10YR2/1	黒	粘土質シルト　IV層起源崩落極小ブロック含む。



（7号陥し穴）

1	10YR3/2	黒褐	粘土質シルト　水田造成時の床土。
2	10YR3/1	黒褐	粘土質シルト　IV層起源の崩落ブロック含む。
3	10YR2/2	黒褐	粘土質シルト　黄褐色土粒含む。
4	10YR3/3	黒褐	粘土質シルト　暗褐色土粒を全体に含む。
5	10YR6/6	明黄褐	粘土質シルト　IV層起源崩落土。
6	10YR3/2	黒褐	粘土質シルト　層下部に粗砂を含む。

（2号陥し穴）

1	10YR4/3	にぶい黄褐	粘土質シルト　酸化した土含む
2	10YR2/2	黒褐	粘土質シルト　褐色ブロックをまばらに含む
3	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト　酸化した土含む
4	10YR2/3	黒褐	粘土質シルト　褐色土微量含む

（4号陥し穴）

1	10YR5/4	にぶい黄褐	粘土質シルト　III層崩落土
2	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト　黄褐色土小ブロックとの混土
3	10YR2/3	黒褐	粘土質シルト　暗褐色土との混土
4	10YR3/3	暗褐	粘土質シルト　黄褐色土小ブロックとの混土
5	10YR4/4	褐	粘土質シルト　IV層崩落ブロック
6	10YR3/2	黒褐	粘土質シルト　黄褐色極小ブロック5～10%含む。

（6号陥し穴）

1	10YR4/3	にぶい黄褐	粘土質シルト　水田造成時の床土。
2	10YR2/2	黒褐	粘土質シルト　酸化鉄分を全体に含む。
3	10YR2/3	黒褐	粘土質シルト　III層崩落小ブロック含む。
4	10YR3/4	暗褐	粘土質シルト　黒褐色小ブロック含む。
5	10YR4/3	暗褐	粘土質シルト　酸化鉄分まばらに含む。

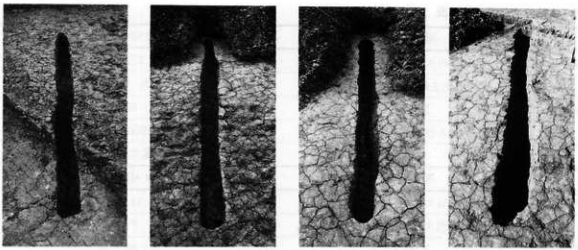
（8号陥し穴）

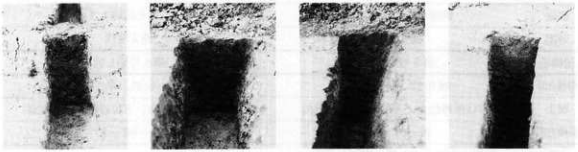
1	10YR2/1	黒	粘土質シルト　酸化鉄分を全体に含む。
2	10YR3/2	黒褐	粘土質シルト　酸化鉄分を全体に含むIV層起源の崩落土。
3	10YR4/3	にぶい黄褐	粘土　酸化鉄分をわずかに含む
4	10YR3/1	黒褐	粘土　混入物なし

北郡山遺跡検出遺構（陥し穴状遺構）

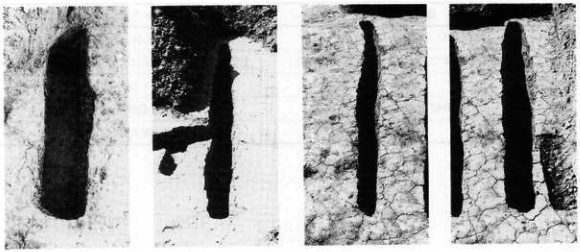
表1　陥し穴状遺構観察表

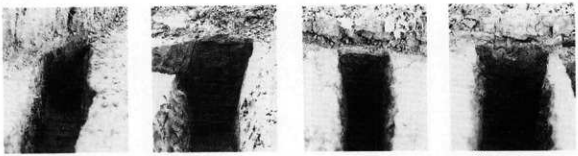
遺構名	第1号陥し穴	第2号陥し穴
規模(m)	2.40×0.23、深さ0.35	3.54×0.27、深さ0.30
埋土	黒褐色土主体で地山崩落土含む。	黒褐色土主体。酸化鉄分含む。
長軸方向	N－70°－E	N－68°－E
底面	砂層を底面として軟かい。	砂層を底面とする。
時期	縄文時代	縄文時代
遺構名	第3号陥し穴	第4号陥し穴
規模(m)	3.54×0.26、深さ0.37	3.26×0.31、深さ0.62
埋土	上位は黒褐色土、下位は暗褐色土主体。	上位は暗褐色土、下位は黒褐色土主体。
長軸方向	N－63°－E	N－63°－W
底面	砂層を底面とする。	ローム層を底面とする。
時期	縄文時代	縄文時代
遺構名	第5号陥し穴	第6号陥し穴
規模(m)	幅0.17、深さ0.60	4.00×0.35、深さ0.52
埋土	上位は黒褐色土、下位は黒色土主体。	上位は黒褐色土、下位は暗褐色土主体
長軸方向	N－68°－W	N－56°－E
底面	砂層上位のローム層を底面とする。	
時期	縄文時代	縄文時代
遺構名	第7号陥し穴	第8号陥し穴
規模(m)	3.32×0.28、深さ0.34	3.62×0.44、深さ0.42
埋土	黒褐色土主体で、地山崩落ブロック含む。	上位は黒色土、下位はにぶい黄褐色土主体。
長軸方向	N－54°－E	N－59°－E
底面	砂層を底面とする。	砂層を底面とする。
時期	縄文時代	縄文時代





第１号陥し穴　第２号陥し穴　第３号陥し穴　第４号陥し穴





第５号陥し穴　第６号陥し穴　第７号陥し穴　第８号陥し穴

※上段全景・下段埋土

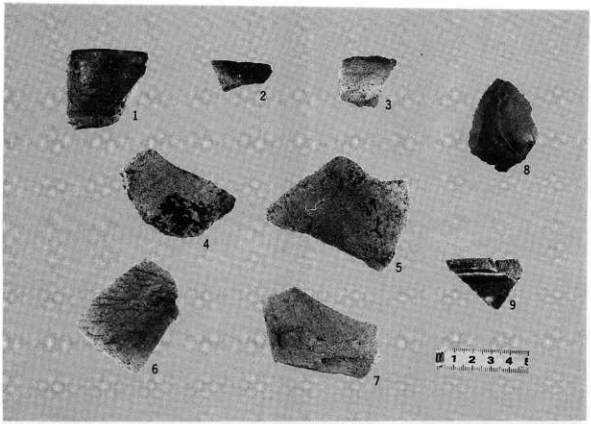
北郡山遺跡検出遺構写真（陥し穴状遺構）

遺跡全景

旧河道底面出土の流木(↑)

新しい時代の溝跡(←)

北郡山遺跡全景写真ほか



北郡山遺跡出土遺物

報告書抄録

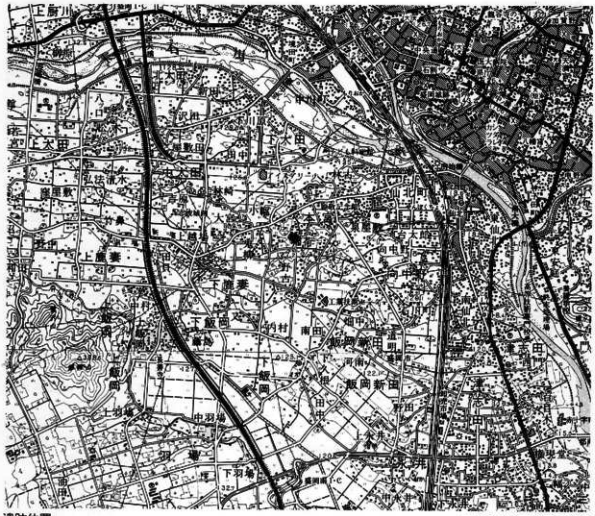
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書　名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成９年度分）
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第282集
編著者名	濱田　宏
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　TEL　(019)－638－9001
発行年月日	西暦　1998年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
北郡山遺跡（きたこおりやまいせき）	岩手県紫波郡（いわてけんしわぐん）矢巾町（やはばちょう）大字（おおあざ）北郡山（きたこおりやま）			39度 34分 55秒	141度 10分 9秒	1997. 10.1～10.23	900 m²	県営ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北郡山遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構８基 新期溝跡　３条 旧河道　１ケ所	非ロクロ土師器（坏・甕）50点余 石器剥片　１点 陶器片　１点	

(55) 稲荷(いなり)遺跡第3次調査

所在地	盛岡市本宮字稲荷26－3ほか
委託者	盛岡市
事業名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成9年5月12日～5月30日
調査対象面積	1,066 m²
発掘調査面積	1,066 m²
遺跡番号・略号	LE16－2131・OIN－97
調査担当者	小笠原健一郎
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000　盛岡・日詰

1．調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整備事業である。

この事業は、平成3年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要求を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積320 ha を対象とした土地区画整備事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は(財)岩手県文化振興事業団の受託事業とする事となった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成8年度の事業とする事が確定し、岩手県教育委員会と盛岡市と(財)岩手県文化振興事業団の両者に通知され、これを受けた両者は、平成9年4月1日に(財)岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。実際の発掘調査は平成9年5月12日に着手され、同年5月30日に終了した。

調査の結果、遺構・遺物とも少なかったことから、同年冬期間に整理をし当埋蔵文化財センター平成9年度調査略報に本報告として掲載した。

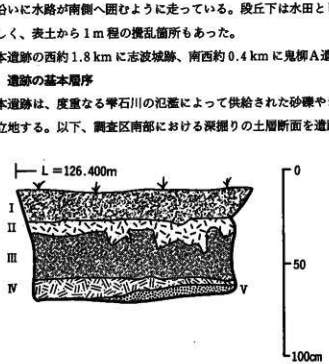
2．遺跡の立地

稲荷遺跡は、東日本旅客鉄道(株)仙北町駅から西に約1.9 km に位置し、雫石川によって形成された標高125 m 前後の河岸段丘に立地している。調査区は、住宅地に隣接する畑地で、西側の高低差約60 cm の段丘崖沿いに水路が南側へ囲むように走っている。段丘下は水田として利用されている。調査区は全体に攪乱が激しく、表土から1 m 程の攪乱箇所もあった。

本遺跡の西約1.8 km に志波城跡、南西約0.4 km に鬼柳A遺跡、南0.4 km に野古A遺跡がある。

3．遺跡の基本層序

本遺跡は、度重なる雫石川の氾濫によって供給された砂礫やシルト質土で形成された沖積面の砂礫段丘上に立地する。以下、調査区南部における深掘りの土層断面を遺跡の基本土層とした。



基本層序

第Ⅰ層　10 YR3/2　黒褐色土
第Ⅱ層　10 YR3/2　黒褐色土主体に10 YR2/2　黒褐色土ブロック状に30％混入　粘性中　しまりややあり
第Ⅲ層　10 YR4/6　褐色土　粘性中　しまりややあり
第Ⅳ層　10 YR4/3　にぶい黄褐色砂　しまりややあり
第Ⅴ層　10 YR4/6　褐色土と10 YR4/3　にぶい黄褐色砂の混合土　粘性小　しまりややあり

4．調査の概要

(1) 検出された遺構

検出された遺構は、溝跡２条である。本遺跡は、集落跡として登録をされているが調査区内からは住居跡等の直接生活に関わる遺構は検出されなかった。

＜溝跡＞　調査区の北東部で、北西から南東方向に１条、中央部で東西方向に１条検出された。中央部の溝跡からは十和田ａ降下火山灰が検出され平安時代の溝跡と考えられる。北東部の溝跡からは遺物、火山灰等は確認できず時代不明である。

(2) 出土遺物

調査区中央部の検出面から摩滅した土師器１片、須恵器１片と表採で少量の陶磁器片が出土した。復元できるものはなかった。

5．まとめ

今年度の調査では、中央部の溝跡から十和田ａ降下火山灰が検出されていることから本調査区は平安時代の遺構と考えられる。また、遺物量が少なく住居跡等も検出されなかったことから、生活の場としての直接の利用はなかったと想定されるが、稲荷遺跡全体の性格は、隣接する地域や遺跡の詳細な調査によって今後明らかになると思われる。

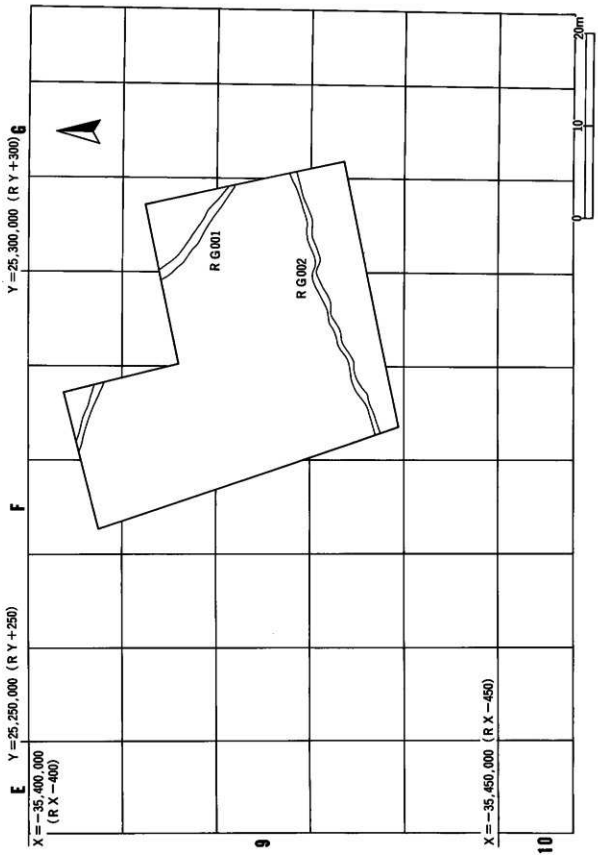
なお、稲荷遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書　　名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成９年度分）
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第282集
編著者名	小笠原健一郎
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　TEL　(019)－638－9001
発行年月日	西暦　1998年　3月　31日

ふりがな	ふ り が な	コ　ド		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
所収遺跡名	所　在　地	市町村	遺跡番号					
いなりいせき 稲荷遺跡	いわてけんもりおかし もとみやあざいなり 岩手県盛岡市 本宮字稲荷 26－３ほか	03201	LE 16- 2131	39度 40分 49秒	141度 7分 41秒	1997.5.12～5.30	1,066 m²	盛岡南新都市開発整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷遺跡	集落跡	平安時代	溝跡２条	土師器片　１片 須恵器片　１片 陶磁器片　少量	

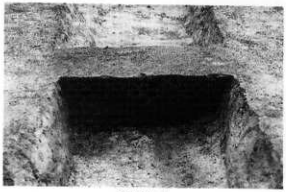


稲荷遺跡第３次調査遺構配置図

調査区全景

溝跡（ＲＧ001）

溝跡断面



溝跡断面

稲荷遺跡検出遺構

溝跡（ＲＧ002）

溝跡断面

溝跡断面

西側調査区究掘状況

東側調査区究掘状況

1

2

1．須恵器片
2．土師器片

稲荷遺跡検出遺構・出土遺物

(56) 野古A遺跡第9次調査

（のっこ）

所在地	盛岡市本宮字野古46－1ほか
委託者	盛岡市
事業名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成9年5月29日～6月30日
調査対象面積	11,087 m²
発掘調査面積	11,087 m²
遺跡番号・略号	ＬＥ16－2155・ＯＮＫ－97
調査担当者	菊地榮壽・小笠原健一郎・佐藤綾子
協力機関	盛岡市教育委員会・地域振興整備公団

遺跡位置

1：50,000 盛岡・日詰

1．調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整備事業である。

この事業は、平成3年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して

事業要求を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定機関とし、面積320haを対象とした土地区画整備事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は(財)岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成9年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市と(財)岩手県文化振興事業団の両者に通知され、これを受けた両者は、平成9年4月1日(財)岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。実際の発掘期間は平成9年5月29日に着手され7月31日に終了した。

調査の結果、遺構・遺物とも少なかったことから、同年冬期間に整理をし、当埋蔵文化財センター平成9年度調査略報に本報告として掲載した。

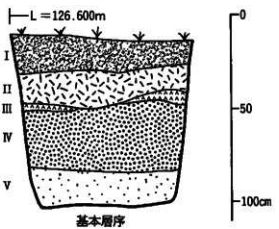
2．遺跡の立地

本遺跡は東日本旅客鉄道(株)東北本線仙北町駅の南西約2.0km、雫石川右岸の河岸段丘上に位置している。段丘崖は、調査区の西側から北側をとおり東側にまで取り囲むように走っている。調査区の現況及び一帯の地目は、畑地、宅地、果樹園である。

本遺跡の北西約0.4kmに鬼柳A遺跡、北約0.4kmに稲荷遺跡、北西約2.0kmに志波城跡がある。

3．遺跡の基本層序

本遺跡の西側は度重なる雫石川の氾濫によって周辺から運ばれた砂礫やシルト質土被覆された沖積面の砂礫段丘上に立地する。また、東側調査区はこの段丘下に立地し、段丘崖沿いの低地には第Ⅲ層以下に厚い黒色土と粘土の堆積がみられ、段丘上部との地層に違いがみられる。以下、調査区西部における深掘りの土層断面を遺跡の基本土層とした。



基本層序

第Ⅰ層：10YR3/2　黒褐色土　粘性中　しまりややあり
第Ⅱ層：10YR2/3　黒褐色土主体に10YR4/6褐色土を含む。　粘性中　しまりややあり
第Ⅲ層：10YR4/6　褐色粘土質土主体に10YR2/2黒褐色土をブロック状30％含む。粘性中　しまりかなりあり
第Ⅳ層：10YR4/4　褐色粘土と砂礫の混合土　粘性なし　しまりかなりあり
第Ⅴ層：10YR4/4　褐色砂主体に礫を含む。　粘性なし　しまりかなりあり

4．調査概要

遺構として溝3条、土坑3基、柱穴状小土坑67基が検出された。本遺跡は、集落跡として登録されているが住居等の直接生活に関わる遺構は、確認できなかった。

＜溝＞　全調査区で、3条検出された。調査区北東部の溝跡は、長さ約80m、幅46～96cm、深さ0.46～1.01mで埋土上部からは、土師器片及び十和田a降下火山灰や炭が検出され、この溝跡が平安時代初期の遺構で

あると考えられる。

また、調査区の東南部で検出された溝跡は、長さ約 40 m、幅 23～48 cm、深さ 26～54 cm で埋土中に顕著な礫層が存在する。この溝跡は、段丘上部から緩やかに段丘崖下へ落ちているが、半ば消失している。また消失地点の段丘崖下には黒色土の厚い堆積があり、この一帯での河川の氾濫跡を示すものと考えられる。遺物は検出されず、時代不明である。

調査区の西側を東西に延びる溝跡は、長さ約 40 m、幅 45～78 cm、深さ 32～51 cm で、埋土に氾濫によるものと思われる礫の堆積がある。出土遺物はなく、時代は不明である。

＜土坑＞　全調査区で 2 基検出された。いずれも段丘上部の西側調査区から検出され、開口部径 56 cm、深さ 37 cm の円形のものと、開口部の長軸 40 cm、短軸 29 cm、深さ 22 cm の楕円形の土坑である。遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。溝跡同様に、礫の堆積がみられる。

＜柱穴群＞　全調査区で 67 基の柱穴状小土坑が検出された。内 51 基が調査区東部の段丘下から検出された。それぞれ開口部径 14～54 cm、深さ 8～32 cm で、出土遺物はなく、時期は不明である。礫の堆積は、みられない。

＜出土遺物＞　出土した遺物は、幕末から明治期にかけての陶磁器片が少量。縄文中期の土器片が 1 片。平安時代初期の土師器片が 4 片、内 3 片は北東部の溝跡埋土上部から出土した。復元できるものはなかった。

5、まとめ

調査区の西側である段丘上部は、河川氾濫の痕跡が顕著で、遺構の消失も考えられる。東側に当たる段丘下の調査区から検出された溝跡の規模や埋土中の火山灰から、本調査区が平安時代初期の人々の生活の根拠地に隣接していたものと想定される。

住居跡は検出されなかったが、周辺に当時の住居等の生活の場の存在が予想される。

検出された 3 条の溝や土坑の詳細について不明の点も多く、周辺発掘調査の成果を踏まえ今後検討して行きたい。また、調査区東側の遺構の埋土からは、礫の堆積がみられず、段丘上部の遺構の埋土とは明確な差を呈しており、この検出面が西側段丘上部より新しい時代に形成された可能性が強いと思われる。

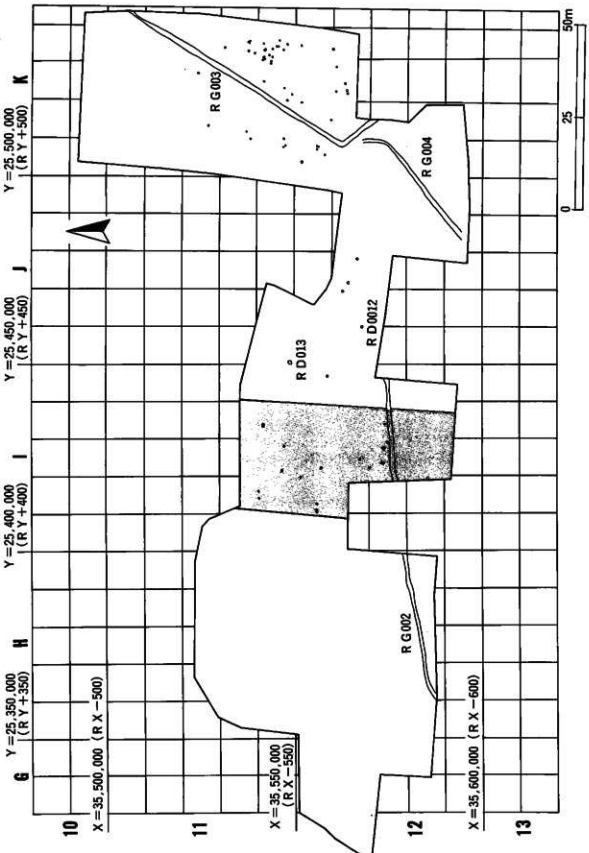
なお、野古Ａ遺跡（盛岡市分）の調査に関する報告は当書をもって本報告に代える。

報告書抄録

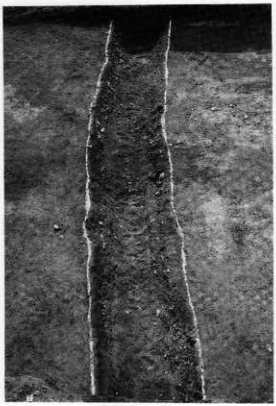
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゅくほう
書　　名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成 9 年度分）
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第 282 集
編著者名	菊地葉蕾、小笠原健一郎、佐藤綾子
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11-185　　TEL　(019)－638－9001
発行年月日	西暦　1998 年　3 月　31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
のっこえいいせき 野古Ａ遺跡	いわてけんもりおかし もとみやさぶのっこ 岩手県盛岡市 本宮字野古 46 －1 ほか	03201	LE 16- 2131	39 度 40 分 47 秒	141 度 7 分 48 秒	1997. 5.29～6.30	11,087 m²	「盛岡市南新都市計画土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野古Ａ遺跡	集落跡	平安時代	溝跡　3 条 土坑　3 基 柱穴状小土坑　67 基	縄文土器片　1 片 土師器片　4 片 陶磁器片　少量	



野古A遺跡第9次調査遺構配置図



溝跡（ＲＧ002）

溝跡断面

溝跡断面

溝跡（ＲＧ003）

溝跡断面

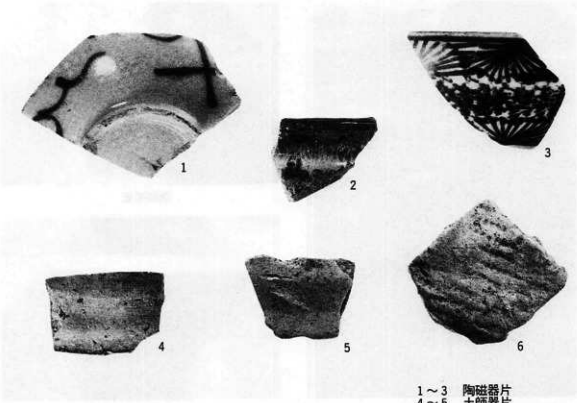
溝跡断面

野古Ａ遺跡検出遺構

溝跡（ＲＧ004）

溝跡断面

溝跡断面



1～3　陶磁器片
4～5　土師器片
6　縄文土器片

野古Ａ遺跡検出遺構・検出遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長　松尾昭明
副所長　鷹羽康造

〔管理課〕

管理課長　澤田　寛
主任　横山文彦
主事　千葉勝彦

〔調査課〕

調査課長　小田野哲憲
課長補佐　高橋興右衛門
〃　工藤利幸
主任文化財専門調査員　中川重紀
〃　佐々木清文
〃　高橋義介
〃　酒井宗孝
文化財専門調査員　古館貞身
〃　小笠原健一郎
〃　工藤徹
〃　小山内透
〃　金子佐知子
〃　岩渕計
〃　松本建速
〃　菊地榮蒔
〃　宮本節子
〃　下田隆衛
〃　早坂悟
〃　鳥居達人
〃　濱田宏
〃　金子昭彦
〃　晴山雅光
〃　木戸口俊子
〃　阿部勝則
〃　羽柴直人
〃　千葉正彦
〃　星雅之
文化財専門調査員　高木晃
〃　大森博文
〃　朝倉雄大
〃　杉沢昭太郎
〃　溜浩二郎
〃　菊池貴広
〃　村上拓
〃　中村直美
期限付職員専門職員　川向聖子
〃　佐藤良和
〃　柴田慈幸
〃　鈴木浩二
〃　鈴木聡
〃　高橋実央
〃　千葉和弘
〃　平澤里香
〃　山口俊規
〃　山下浩幸
〃　熊谷佳恵
〃　佐々木志麻
〃　佐藤綾子
〃　玉山健一
〃　中野敦夫
〃　布谷義彦
〃　松川由次
〃　七田芳直

〔資料課〕

資料課長　佐々木嘉直
文化財専門調査員　伊藤拓

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第282集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成9年度分)

印刷　平成10年3月25日

発行　平成10年3月31日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
TEL (019) 638-9001

印刷　山口北州印刷株式会社
〒020-0133 盛岡市青山4丁目10-5
TEL (019) 641-0585

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1998